

新編の多
松尾芭蕉 興の艶

編集後記

表紙・カバー・中田 芳雄

阿^あ多^だ多^た羅^ら山^ね涅槃^{はん}

—ある奇人伝—

大 和 禎 人

その一冊の「智恵子抄」はそれこそ（章編三たび絶つ）という形容がふさわしいほどよく読みこまれていた。いかに彼が愛読したかを物語っている。昭和十六年八月竜星閣という書肆から刊行された初版本だった。

四六版、一五一頁のその本こそは彼の心の奥底まで魅了し、ついにはそのために幽明の境を見失うに至る運命を導いたのであった。

「智恵子抄」はその声価ゆえに後には二十七年版特装本まで出ているが、ここではあくまでそれが初版本でなければならぬ。そして、それはあの大戦争の開戦に先だつ、わずかに四ヶ月という時期の刊本であることに注目しなければならないようである。「智恵子抄」の高村光太郎は明治二十年下谷の練堀小学校に入学した時、父光雲が切出し小刀を与え、それが彫刻の道に入る契機になった、と年譜に見える、しかし、同じ彼は一方により多くの詩作にも偉業を積み、敬仰して止まぬファンを多

くもっている。わが柳浦源吾氏はまさにその一人だ。開戦前夜の暗い時代に氏はこの「智恵子抄」の何に魅せられたものか。およそ氏の素行のありようから言えばまさに不可思議としか言いようもない一人の人物伝である。

智恵子の裸形をわたくしは恋ふ。

つつましく満ちてゐて

星宿のやうに森厳で

山脈のやうに波うって

いつでもうすいミストがかかり、

その造型の瑤瑤質に

奥の知れないつやがあった。

智恵子の裸形の背中の小さな黒子まで

わたくしは意味ふかくおぼえてゐて、

今の記憶の歳月にみがかれた

その全存在が明滅する。

わたくしの手でもう一度、
あの造形を生むことは

自然の定めた約束であり、
そのためにわたくしに肉類が与へられ、
そのためにわたくしに畑の野菜が与へられ、
米と小麦と牛酪とがゆるされる。

智恵子の裸形をこの世にのこして
わたくしはやがて天然の素中に帰らう。

右の詩編は「造型詩集」として筑摩書房版、日本文学
アルバム中の「高村光太郎アルバム」から写した。この
本の帯にはサブタイトルとして（写真に見る巨星の生涯
付・造型詩集）とあり、草野心平氏は「悲しみは光と化
す」という一文をこの本の後記に記して

「十和田湖畔に建ったモニュマンの顔は智恵子さんそ
っくりといていい。智恵子さんとはまるっきり別なモ
デルを使って出来上ったものだが、顔は智恵子さんであ
る。といてからだと貌とはばらばらではない。裸像に
は智恵子さんのエスプリがながれている。というのが間
違いならば、高村さんと智恵子さんとの一身同体的な魂
が裸像の中核であり、それが指のさきまでも溢れている
といった方がより適切であるかもしれない。」
と、言っている。

もちろん柳浦氏もそれを読まないでいるはずがない。
十和田湖はいち早く訪れている。昭和二十八年十月二十

いさぎよい非情の金属が青くさびて
地上に割れてくづれるまで
この原始林の圧力に堪へて

立つなら幾千年でも黙って立ってろ。

モニュマン除幕当日のスナップには七十一歳の老人に
してはがっしりとした光太郎の椅子にかけられる後姿が見え
る。佐藤春夫妻、台座設計者谷口吉郎、また藤島宇内
土方定一、草野心平等の列席を見、この記念像を計画し
た青森県の十和田国立公園功労者の顕彰記念碑をかねる
趣旨から大町家からは桂月の息文衛等遺族の参列もあつ
て式は盛大なものであったようだ。

（すさまじい十和田湖の円錐空間）と光太郎のいう空
間にいまは亡い智恵子の相貌に酷似した女の裸形が向き
あつて立つ。（立ってる）は（立ってゐる）と表現する
よりもなお、光太郎の心情に直接ふれるように思われる。
柳浦源吾はその場を立ち去りかね、湖面が茜染む時間ま
でたたずんでいた。大きな、それは大きな感動が胸いっ
ぱいを占めて、まるで呪縛にでもかけられたように動け
なかった。

彼はその日の中にバスで発荷峠を越え、黒沢尻へ出て
そそくさと帰京をしている。まだ独身であつたし、貧し
い懐ぐあいもあつて夜行列車を利用した旅であつた。彼
のそうしたボヘミアン的な、また思い立つと急な旅のし
かたはすでにその頃からのものであつた。もちろん旅行

一日、湖畔休屋の十和田神社の境内御前カ浜にあの同一
裸像二体向いあうブロンズ像は除幕の日を迎えているの
だが、待ちかねて式の直後のことだ。やがて雪の覆う季
節をひかえ、すでに訪なり人影もまばら、よほど用心の
厚着でなければ身も心も凍るかと思われる日のことであ
つた。

源吾は湖面をわたってくる寒風にたえながら、一つの
詩を朗唱した。感傷がつーんとこみあげほとんど落涙に
およびそうな、しかし、法悦無我の心境というのはこう
した場合を言うのであろうか、像を仰ぎながら声をかぎ
り、周囲に誰はばかる必要もない時を経験した。心酔者
の彼にもめつたなことでは二度とはこんな機会の訪れる
ことはあるまい、と思われる瞬時が流れた。

十和田湖畔の裸像に与ふ

銅とスズとの合金が立ってゐる。

どんな造型が行はれようと

無機質の図形にはちがひない。

はらわたや粘液や脂や汗や生きものの

きたならしさはここにはゐない。

すさまじい十和田湖の円錐空間にはまりこんで

天然四元の平手打をまともにうける

銅とスズとの合金で出来た

女の裸像が二人

影と形のやうに立ってゐる。

のためには旅行届が必要であるなどのことは俗事であつ
て、彼の常識の中には存在しないのであつた。

「おじさん、お米一合おくれな」

と、まだ明けやらぬ時間にきまつて戸をたたき、しっ
かりにぎりしめた小銭を突き出すようにして毎朝米を買
いに来る子供があつた。彼の生い立った家は穀物商であ
つた。富裕に育つた彼はその子のこうした日銭で米を買
う貧しさがどんなものかを思いやれなかつた。なにより、
その子のためにまだぬむい時間を起されることがたまら
なかつた。

「お前、きょうは一升袋に入れてあげるから、持って
お行き、ゼニは入らないよ、な、いい子だからわかつた
かい」

おずおずあとじさりにためらう子供の手は無理矢理袋
をにぎらせたものだ。

「ありがとう、おじさん」

それでも子供はこんな一言を残して駆けて行つた。黒
光りした紺ガサリのすそがひるがえり、針金のように細
い足が、男の子にしては意外なほど白く、源吾に奇妙な
印象を残したのだつた。（おじさん）と呼ばれたことの
ちぐはぐさかげんも、いくぶんか鼻白ませたあんばいで、
それきり二度と子供が店に現われなくなったことへの不
満に重なつたようだ。親のすねかじりの学生の身で、か

くべつ善根を施そうなぞと思つたわけではなかったが、
富めるものの施し行為を奢りとしてたしなめられたよう
な結末だった。彼が店頭近く店番でもかねるような勉
強部屋を与えられていたために起つた出来事だ。

そして彼はこんな挿話を話題にしながら、

「わからんねえ、とにかくそれで厄払いってところだ
つたんだが、わからないねえ」

と、それでもそれきり顔を見せなくなった子供のこと
は気になったようだ。彼なりに出来事に何らかのこだわ
りを持ったことはたしかだったが、そこを一步ふみこん
だ解き明かしを彼にもとめることは無理だったように思
われる。穀屋のせがれとして育つた生い立ちを物語るた
め、巧まざる一種の挿話として何気ない語りくちから意
識にないこぼれ話のように聞える、これはいわば立志編
中の話だった。

穀物商はご承知の通り、太平洋戦争の激化とともに統
制をうけ配給制度になった。源吾の家もそうした荒浪を
かぶる時が来た。

そうした際、奇跡のように彼は〇〇県師範学校合格の
通知を受ける。ここで奇跡というのは彼の中等学校での
成績から推して、無理とされていたからだ。戦時下のこ
と、面接を重視する選抜の方針から、彼の場合は持つて
生まれた頑健さが幸したもののようであった。彼よりも

成績の良いものが落されていたのだ。

師範学校というところは今日の学芸大学その他単に大
学令による学校の教員資格を付与するものとは異り、明
かに教員養成を目的とする学校であった。一部、二部の
別があり、一部生は小学校高等科二年を卒業、もしくは
旧制中等学校二年の修了を資格として五年制、二部生は
旧制中等学校卒業を資格とする二年制だった。よほど以
前は入学時の年齢に規制があり、相当年齢に達しないも
の、つまり学力次第で飛び進級が認められた時代は適齢
に達するまでの一、二年を塾通いをしたという例もあっ
たようだ。要するにそれほどの厳しさをもって生徒をす
ぐつたものであった。わが柳浦源吾氏はよほど僥倖に恵
まれたというべきであつたらう。

彼の在学中は真珠湾の戦果に酔い、またシンガポール
陥落にちようちん行列が行われるなど、合格異変からあ
と、戦争の激化、戦況の不利に傾くに従いくり上げの早
期卒業とあつて、ろくろく勉強なぞ身につかぬまま卒業
してしまつた。本来師範学校の卒業生であれば全教科担
任でなければならぬところを、間もなく学制改革で新
制中学校の体育専任という道がひらけるといなりゆき、
師範出身の短期現役兵もそこそこ、ついに召集にもあわ
ずに戦争も終つていたのだ。

「智恵子抄」との出会いはそのうした学業の中、彼なり
の、その点では意外に遅い性の目覚めともいえるもので

戦争下の抑圧された青春に何とはなく詩的抒情へのあこ
がれを抱いた、そしてそこへ宿借りのように逃げこんだ
といったような経緯だった。高村光太郎という人格を通
し、その詩作の行間に彼は激しく女体の虚像を追いもと
めたもののように思われる。といってそれはストイック
なものの変形と言ひ棄てにされるのは可哀そうで、当然
ながら彼なりに文学的な感動を詩編の中によびさまされ
たものであることも間違いない。穀屋であつた父親が意
外なことに明治人として、その多感な時代を新体詩に親
しむことのあつた人で、若干それらの蔵書もあり、もの
心つかぬ源吾の眼にもなにやらそれはハイカラで、父は
前垂れをかけていても並の商人と違ふのだ、という誇ら
しげな気持で眺められたものだった。源吾の目覚めとこ
のことは無関係ではないように思われる。

彼は配置された学校の勤務を義務年限を過ぎると、や
がて県外出向の上、僻地を希望し日島へ赴任した。なに
も好んで島嶼へ、それも島も通わぬと言われた流人の島
だ。しかし、どうかして彼はその（流人島）そのものに
魅かれての赴任であつたようだ。

「こんどは鎮西八郎為朝かい、それとも俊寛か、いや
俊寛憎都となるとはるか南の島だったな、それにしても
思いきつたものよ、いい度胸だよ」

「うん、まあな」

「で、なにか、（智恵子抄）を抱いていくのか」
「もちろんさ、聞くだけ野暮だろ、ぞっこん首つたけ
の柳浦だ、なあお前」

「うん、まあな」
同期のものが寄つて壮行会をやってくれた。送別会で
なくて壮行会であるところに彼等の間では特別な意味が
あつた。源吾の知らないことである。

（このドンキホーテは一体なにを考えているのか）
それとない揶揄が彼等の言葉じりにあつた。

「あの島にも千鳥いるだろうな」
と、急に源吾が言つた。

「バカ、いるとしても阿呆鳥じゃないかな」
ギャグとしては度ぎつすぎた。それでさすがにはつと
して源吾の顔を見やつたものだが、彼の方は一向に意に
介しないふうであつた。なにか思いを馳せるらしく、む
しろ恍惚の表情さえうかべていた。

「千鳥はちい、ちいとなくだろうな」
彼の心の中には「千鳥と遊ぶ智恵子」の詩編が、九十
九里の砂浜が想いのかぶらしい。

人っ子ひとり居ない九十九里の
砂浜の

砂にすわつて智恵子は遊ぶ。

無数の友だちが智恵子の名をよぶ
ちい、ちい、ちい、ちい、ちい、ちい――

砂に小さな趾あとをつけて
千鳥が智恵子に寄ってくる。

.....

(ここで、千鳥なく、ちいはいは五へんくりかえず、五へんめはちー、と長いのが本当だ)

本によってはそのところが(ちい)で終わっているものがある。

(趾あと、だってそうだ、跡あとなど誤植を見逃しているものさもある)

源吾は気難しくそう考える。周囲なぞ眼中にない。

(あれは昭和十二年七月の作だ)

作を成した年月まで語じていた。智恵子の精神分裂症状が悪化して九十九里浜の真亀納屋に転地させ、週に一度ずつ高村光太郎が見舞うようになったのは昭和九年、光太郎五十二歳の時だ。この年父の光雲が没している。その年譜には数年間空白の文字が見える。失意を思うべきであろう。智恵子は昭和十三年南品川のゼー・ムス坂病院で紙絵千数百点を残して十月五日亡くなっている。栗粒結核がその病名である。長い闘病生活である。光太郎より三歳若かった。大正三年の結婚いらいの終局であり光太郎の悲傷がどんなに大きかったかは自ら綴っている「智恵子の半生」ににじむようである。伴侶を失ってからの高村光太郎は限りない孤愁を胸に、またあの戦争中とくに岩手への疎開先で農耕自炊の生活をするなどの艱

では政治や文化から隔絶する世界だった。流人の歴史は古くすでに日本書記に「天武天皇の四年(六七六)三位麻績王罪有り。……一の子をばI島に流し」と見えるが賑いを見るのはもちろん近世に入って幕府直轄の法定流刑地とされてからである。現在残る流人帳を探り、これを合わせるだけでその数四千六百あまり、焼亡、散逸分を推定すれば優に五千は軽くこえるであろうといわれる。上は大名旗本の士分から僧、神官、百姓、町人、無宿者におよび、政治犯、賭博、殺人傷害、僧と神官は思想犯もしくは女犯が多く、僧は禁制の不受不施派が多数であった。また女流人も意外に多く、放火、不義、密通、博奕が罪状の順になっている。将軍交替や遠忌などで大赦や恩赦にあい、運よく赦免をうけ故郷にふたたび帰りが得たものはこのうち約四割とみられており、他の多くが異郷の土になっている。

さて、これらについてわが柳浦源吾氏はどれだけの関心をもったものか、そのへんのことに話題を変えねばならない。H島は流人の島の最果てで当時の船では黒潮を乗り切ることもおぼつかなく潮待ちをせねばならなかった。源吾が赴任した頃でも潮路はるか来てこの難所では激しいローリングを経験している。黒潮九百六十トンが暴風に会えば木の葉のように翻弄されたものだ。三日、八の日に竹芝桟橋を前夜半出航した船は昼近くに入港してくる。風向によって八重根か神湊のいずれかに決めら

難を経験する。昭和三十一年その大きな生涯を終るのだが、時に七十三歳であった。智恵子との死別から十三年を聞いている。数多い智恵子を恋うる詩作や切々追憶の文章は草野心平氏の言われる(悲しみを光と化す)までに高められ、人々の心をうたわずにはおかぬ。

「ね、きみ、あの場合、千鳥はちいーとはり裂くように鳴くんのだ」

と、だしぬけに源吾が言った。

「……」

言葉を呑んで周囲のものはあつてとられたようだった。この頃からすでに彼の眼の奥底には余人のうかがい得ぬ淵をたえ、場合によってはそこに(狂)に近い光りを宿すかに見える場合が多くなっていた。

不気味な沈黙がその場を占めた。

(阿呆鳥じゃないか)

と茶化していた人間まで口をつぐんでしまった。

彼の島を任地とした生活は二年で終わっている。思いがけない突発した事情が彼を再び本土へひき戻すことになるのだが、そのことはあとにしたい。

「島ヲ逃候者於其島死罪」

これは幕府時代、「御定書百箇条」に見える文字だ。

H島は周知の通り流人の島だ。生きている海底山脈が点々、七島。噴火の記録は古くから史書に登場する。かつ

れる。八重根の方によりやく駆逐艦を沈めて突堤が構築されかけていたが、完成にはほど遠く、いずれの入港にしても上陸ははしけに頼らねばならなかった。

その昔、遠流が裁定されると、春秋の二回、伝馬町の獄を出された科人は永代橋、万年橋、霊岸島のいずれから船に乗せられた。浦賀で番所のお検めがあり、下田網代などに停泊して島々へ向った。H島へは風待ち数日が例で、とくに秋の便となると、黒瀬川(黒潮の流れ)を越せず、年をそのまま越す場合さえあったようだ。ここでようだとするのは彼、源吾が史料をつぶさに探索して知り得たことだ。彼はしばしばHにある支庁を訪ね、役所の方であきれるほど根をつめ、調べ続けた。

「H実記」七十二巻はもちろん、島抜けに詳しい「朝日逆島日記」、流人の書いたといわれる「H寝覚草」、「H島並I七島之記」、また「流人在命帳」などにあきたらず「家数人別書上帳」などに当り島によつては流人が人口の二割に達していることも知ることができた。まだまだある。「南汎録」など、たずねれば際限がなかった。哀話の島ゆえにまた歴史のロマンがひたひた、したたかに彼をとらえ、飽かせぬ時間が流れた。

しかし、彼をとらえたより以上の興味は列島に黒耀石の遺跡のあることであった。その石からの所産であるヤジリや、抗火石で作られた石皿の発見があり、縄文土器敷石住居跡も発掘されているという謎はどう考えたら良

いものか、日島だけが辛じて川をもち、水田耕作の見られるだけである。高床式穀倉を島内に見うけ、原始農耕生活を思い描くことは日島に関する限り不自然でないが他島にモミの圧痕の明かな土器の破片が出土するのはなぜか、黒潮を乗り切った文化交流は原始の昔にさかのぼり、それはどうして可能であったのか。疑問は大きく、それだけにロマンを追うに格好の課題を投げかけてくれる。

源吾はピッケルをもって暇さえあれば島内を歩きまわった。彼のもつピッケルは右のような謎解きに少しでも役立たせるためであった。

沖でみた時や鬼が島とみたが、きてみりゃ日は情島民謡シヨメ節はこううたっている。東洋のハワイと、観光の宣伝には今日流のニュアンスが多分にこめられるただ今と違い、彼の在島中はそれほどではなかった。戦争の痛手も無縁でなく、乏しい電力事情とともに島外に大物資依存をする島民生活はいまだに耐乏を強いられているのが実情だった。踊と太鼓の榎立部落、牛角力の中之郷、末吉と島南がひらけていてもまだシヨメ的な要素として注目した開拓の手はおよんでいなかった。

彼は好んで洞輪沢か名古の眺望を楽しみ、そこから水煙の彼方にはるか青ヶ島を望める日を喜んだ。

自然は賢明である

自然は細心である

ふと、意味もなくこうした時に、「智恵子抄」のある詩編の言葉を思い出す。島の生活の俗にまみれ、忘れていたものがよみがえる。

そして、また、この場所の自然に向きあうと、

天然四元の平手打をまともにうける

この好きな一節が胸の中に脈うつ思いがする。

彼はいま島北へピッケルを抱えた足を向けることが多くなっている。一通り民俗の興味を満足させると、どうしてもこんどは自然に眼を向ける当然すぎるなりゆきであった。黒耀石の分布や縄文式文化の謎解きとなると問題が大きすぎる。考古学や地質学といった領域に踏み入らなければならぬ。ピッケルはその心構えから携えている。

(変った人)

といううわさが生れかけている。おびただしく寄宿先へ岩石やまた化石と思われるたぐいのものが持ちこまれはじめた。

「先生、石ころでなくて、早よう身をおかためになつたら、島にはいくらいいい手弱女がおりますけん、お世話しましょ」

何処の言葉なまりか宿の主がそう言ってみたが、源吾にそうした話はおよそつりあわず、また耳に届かぬ話になっていった。日富士と呼んでいる山裾を拓いて飛行場を作ろうとする作業は戦争中手をつけられたが、未完成に

終っていた。もし実現していれば島は不沈の空母となるところであった。いま空港として同じ場所が観光客に賑あう日があるうとはまだ予想もつかないことである。作業に使役中の兵士の何人かが落石にあい、圧死したという場所があった。

「先生、兵隊さんのたたりをお気をおつけ、いまだに遺骨さえ掘り出せずそのままの場所だでの」

源吾が近頃はそんな場所へ足を向けていることを主人は知っていて、たしなめた。婉曲にめいわくな彼の採集癖を止めようとするものだった。木の葉石、貝石、はまぐり石でいどにしても、すでに彼の蒐集は単なる趣味とは言えぬものになっていた。

突然、彼の運命を変える日がきた。ヘリコプターが身柄を空へ。救急の空中輸送をしたのである。その日、日刊紙の何紙かがそれを記事にしている。

離島の急患 空輸で入院

本社機救急活動に協力

無事手術に成功

見落されてもしかたのない片隅の記事だったが、彼の氏名、年齢が紹介されている。

柳浦源吾(29)教員

ここに写すA社の見出しは自社機を救援させているから、とくに目立つものであった。昭和二十七年九月十二

付夕刊の記事だ。今日でこそこうした場合のレスキュー隊の活動は消防庁自体航空隊を昭和四十一年には発足させ、五機を備えているが、当時はまだそうではなかったからトビックになり得たのだ。ヘリポートは昔も今も変わらず、江東区新木場四丁目にあり、官民の共用のポートになっている。

源吾の容態は空輸中麻酔をかけられ、じゅうぶん東京までは保てるはずであった。江東の消防署から派遣をうけた救急隊員が機内にて介護にあたっていた。

「苦しそうだな、麻酔はもつはずだが、脈搏はどうか指令室は築地のS病院という指示だ」

「うむ、大丈夫だ、心臓はしっかりしている、ようすからみて、腸の捻転かなにかだな」

うつつの耳に会話の最後の方が聞えていた。地上との無線機の交信音がたえずしている。

(おれもとうとう赤西蠣太だな、可哀そうに)

薄れがちの意識に苦笑がうかんで消えた。片岡千恵蔵がこのよごれ役を演じて好評だった志賀直哉原作の映画の主人公は奇怪なキャラクターを描いていた。彼はごく少年の日に見た覚えがある。

(ふ、ふ、こっけいだな、だがどうしようもない)

眼を閉じたまま、おれは疲れていると思った。

S病院に収容された。機上からの無線による連絡で受入れと医師による措置が適確に、機敏に行われた。救急

隊員が介護をしながら予測した通り（腸捻転）であった。源吾の（赤西彌太）はあえなく手術室に運ばれ、人手にかかって切腹した。

ビッケルをにぎりしめ、苦悶にあえぐ自分を悪夢のように思い出す。突然襲った激痛にあぶら汗を流した、あの時通りがかりの島民に助けられなかったらどうなったか。宿の主が言った（兵隊さんのあたり）であつたかも知れぬ。

手術から余後、はや一か月におよぼうとしている。

この病院の生活は快適である。総合病院のゆとりと清潔さに満ちている。カトリックの病院ということの証しのようにかなりの広さをもつ礼拝室がある。朝夕賛美歌の音が聞えてきたりする。看護婦たちがみな若く挙措もどことなく清楚なのがよい。カトリックの敬虔な奉仕の姿勢がうけとれる。しかし、これはかなり先入観にもとづく彼なりの勝手なうけとめかたかも知れない。彼女たちのすべてが入信者とは限らない。付属の養成機関の生徒という身分のものもあるようだ。若さのかがやきと新鮮さをふりまくのはそうした娘たちに違いない。

わが柳浦源吾氏ははじめてここで恋をした。病室の担当看護婦は時々交替する。体温計の目盛を読み脈を計り医長回診という日課に先立ってなにかと世話をするのは彼女たちだ。また点滴の針をうちに毎朝一番に回ってく

るのもこの人たちの仕事である。彼の忘れられないネームもその中にある。

「相良伊都子さん、いい名前だな、女優のようだ」

「あら」

と言って仕事をテキパキすすめる白衣の胸にその名札があつた。この名は彼の病状がもっとも苦しい時に認めたものだ。しばらく配置が変わっていた。

「いかがですか」

とその人の笑顔がのぞいてうたた寝をさまたれた時、

（あつ）

と思つた。

「お変わりなくて、だいぶお元氣になりましたね」

「ありがとう、もう一か月だからね、またあなたになつたの、よろしく頼むね」

不思議な心のはずみ方であつた。この人の運んで来る雰囲気にはなんとなくさわやかな母性を感じられる。あの若い娘らとは違う落着があつて、安心感を与えてくれる。この病院が定める待遇からいうなら（正看）として婦長に準ずるものらしい線入りの帽子に気づいている。あえて言うなら熟したものの色気があつた。そう、まさにそれは色気という以外にないのだが、もし品が悪いというなら、その上に好ましい（節度のある気品）という言葉形容を加えればより適切であるかもしれない。もっともこれは彼自身がこの通りに感じとっていたとは必

ずしも想定はできない。彼女の年の頃は二十六、七かと思われる。漠とした彼の想いの中に配偶者を考える人並の考えがうかんでいた。

「相良さんいますか」

ベットから看護婦室を結ぶインターホーンがある。プザーを押して呼びかけ、彼女のかけつけるのを待つ。入院の当初は個室だったが、いまは二人用の病室に移されているので、気をつかうところだが、彼にはそんな気配りをもとめる方が無理だった。

「どうなさいました、なんでしょう」

「いえ、ちょっときてくれませんか」

そして、

「悪いけど、肩をかしてくれない、トイレへ行きたいんだ、すまない、すまない」

看護婦にはそこまでの介護の責任はない。しかし、救急患者の彼にはいまのところ、付添いがいない。この風来坊の甘えを許すことになった。

「なんでしたら、しびんを用意しましょうか」

「いや、あれは嫌いだ」

手術の余後一か月だから歩行困難は考えられないのであつた。

病院には家族にかわって付添い家政婦の人手が沢山入っている。完全看護を建前とする病院でもそれは同じである。彼女たちといってふさわしくなければ小母さんた

ちと言おうか。住込みが条件となると一日三時間は黙っていても時間外がつくから、約八千円近い日当になる。病院を寝城にとぐるをまいてる。院長がその必要を認定すれば健保が補償するので患者の負担にはほとんどならない。だから、この小母さんたちの仕事は絶え間なくほとんど病院常勤のご身分である。もっとも重患となれば下の世話をし、ほとんど不眠で看とることはざらだ。徹夜手当というのがこの場合はつく。ともあれ、小母さんたちの過去はいずれ様々、社会の底辺をはいずりまわってきた人々だから、人間の機微については（これほつち）と思われることでも見逃がすことがない。硬貨を入れてコンロで湯をわかしながら、また廊下のソファで一服をくゆらしながら、情報が交換される。医局のなに先生と看護婦のだれさん、また患者で男前のだれさんとはあの彼女らしいとか、かなり詳細で信びよう性が高い。

「まさかア」

「そう、それがまさかなのよー、どうして、どうしてああ見えてもなかなか隅におけないのよ、お名指しで呼んでさ、シー、うわさをすれば薩、ほら来る来る、あれでただですむと思う、まさかと思うけどね」

「あれ、ほんとに、いっしょにトイレに入つたまま出てこない」

「怪しいものだよ、いったいどこまでの面倒をみてやっつてんだろ、まさか前のものまで仕末してもらってるん

じゃないだろうね、ふふ、ふ」

「かもね、曲ってることだってあるし、上手にね」
「バーカ、いいかげんにおしよ、それにしても、はじめて見たわ、へえー、おやしくないねえ、そうなのー」

「それがそうなのさ、でもまさかと思うけど、こればっかしはね、シー、出てくるよ、ほーら、どう」

病院というところは不思議なところであった。医師と患者と、そして若い看護婦たちと、これになにかが起らないとすれば間違っているのかもしれない。とくに患者にとつては磨ぎすまされた病心理、そして起居を余儀なくされている病院という閉鎖社会の中である。

まさかまさかでなくなつて、柳浦源吾は相原伊都子と結婚した。離島での生活はそんなわけでビリオドをうたれた。婚姻による理由だけで転任ができるはずのものではないが、校長が理解をもつて実現をとりつけてくれた。在任二年では離島の教育に何ら貢献を残せるはずがない。むしろ我尽いっぱい勤務に終っている。化石の採集に熱中しはじめて止宿の主のひんしゅくを買ったばかりでなく、それは同じように学校にも持ち込まれて彼の机上を占領、山積しはじめていた。また、着任早々の昭和二十六年六月には無理を言つて、任地を離れるだしぬけの申出をしている。

「高村智恵子の紙絵展覧会って、いったいこの高村と

いう人はどういふ人なのかね」

「智恵子抄」のなにたるかを知らない、また高村光太郎の知名度にかかわらずそれと結びつかない校長は目を白黒させたのである。

（高村智恵子紙絵展覧会）はその年六月四日から十日までのわずかな会期で銀座の資生堂ギャラリーで開催されていた。中央公論社と創元社の共催企画によるものであった。前々年山形市の美術ホールで、また前年盛岡市川徳邸で開かれ好評で反響をよんだものだった。

その缺はマニキュアに使ふ小さな、尖端の曲つた缺である。その缺一丁を手にして、暫く紙を見つめてゐてから、あとはすらすら切りぬいてゆくのだといふ事である。（略）智恵子は手あたり次第に題材にした。食膳が出ると其の皿の上のものを紙でつくらないうちは箸をとらず、そのために食事が遅れて看護婦さんを困らせた事も多かったらしい。千数百枚に及ぶ此等の紙絵はすべて智恵子の詩であり、抒情であり、機智であり、生活記録であり、此世への愛の表現である。此を私に見せる時の智恵子の恥かしそうなりぬれしような顔が忘れられない。

これは光太郎の「智恵子の切抜絵」という文章の一節である。わが源吾の愛誦してやまず、いく度か涙した部分でもある。展覧会がゆかりの地方都市に開かれている

ことは知っていたが、それがようやく東京の空の下で開かれると知ると、もう矢も楯もたまらぬ衝動にかられるのであった。

「きみ、無茶を言っちゃ困るよ、四月に着任したばかりじゃないかね」

「いえ、無茶なんぞ言つてません」
なぜこの青年が意気こんで言うのか不可解であった。

「まあ落着きなさい、きみはこどもを預る職責をどう考えているの、船便はとんぼがえりでも足かけ三日かかるのを知ってるね、今ならシケの心配はないといつても不測の事故ということだってある」

「いいです、それなら無断で出かけたことにしてくださう」

「……………」

結局道理引込む譲歩を校長の方ですするという経緯があった。

（指導に熱心であるが、信念に強いところがある。この点を助長すれば中堅幹部として期待できる。婚姻という家庭事情もあり、割愛する）

くだんの校長はその転任カードの意見欄にそう書いている。もちろん彼の知らないことだ。体よく風来坊は流人島を赦免されたのである。

おびただしくこれまでに集めた化石のたぐいを段ボール箱につめたものが重荷であった。

「先生、そんなものは置いていきなんしよ、運賃だつて馬鹿になりませんよ」

「そんなもんじゃありますばってん、これはわしの命ですたい、よかとよね、なんば言いよりますたい」

島にいて蒙をひらいた民俗のロマンスへの興味、それが古生物学への関心をよび、いまだ形象石と真の化石との区別もつかない初歩であったが、やがては標準化石を分類するところまで、また進化論を裏づけるために、学界への貢献もしたいと意欲に燃える熱い胸の中を宿の主は知っていない。

「この机や本箱はおはんにあげますばってん、残しちよきます、よろしゅうに」

よほど心はずませてゐるものとみえ、国なまりを連発して面くらわせた。

波止場にはこの宿主と彼の教え子ら、それにあの校長がお義理のよう見送つてくれた。

発船のドラが鳴った。情緒に訴える響きだ。船橋に立つた彼はどうやら土佐の高知、桂浜に立つ坂本竜馬の銅像のように胸をはり、肩をそびやかし意気さかんなるさまに見えた。彼の腰には例のピッケルが麗々しく大刀のようにさされ、その金属部分を柄頭をおさえるようなポーズだった。

（この海の向うに伊都子が待っている）

彼はあれから結婚をした。転任は病院に在る間に話が

進んで、荷物を引取るだけに島へ帰ったのだ。なにもかも順調で恐いくらいだ。救急騒ぎで島ではじめてのヘリコプターが話題をさらった。彼はその当の立役者だった。さすがの彼もその点ではかなりテレくさい。

船便はあとじ去りするように船首を外洋に向け、島から遠ざかった。島人の言うながし(東風)が快よく彼の顔をなぶった。黒潮の運んでくる春四月の暖い風であった。

転任後はじめての夏休みを利用して、彼は九十九里浜を訪れている。すでに写した「千鳥と遊ぶ智恵子」の詩句を刻んだ詩碑を見るためである。この時は伊都子を伴っている。彼女にとって彼の心酔する「智恵子抄」が一体になのかほとんど理解しがたいものであった。夫がイメージを追いもとめる智恵子と伊都子は決してダブルしても一つの像にはならない。彼女は従順な女であったが、そこまではついていけない。

「きみもこれを読め」

とすすめられたこともあったが、彼はもうそれを言わなくなっている。この旅行にしても目的が詩碑にあったことをその場に臨んではじめて知らされた。

「千鳥はちっともないねえ、渡りの鳥なのだろうかねえ」

「さあ、どうなのでしょう」

高村光太郎詩碑は磯をはなれてやや小高い丘にある。

素朴な碑石の背後にまわってみると、あの詩を読みとることが出来る。彼はこごみこむ格好でそれを読んだ。じゅうぶん熟知していながらそれを、なお口ずさまずに出来ないのであった。

高村智恵子が昭和九年五月から年末まで転地静養した真亀納屋は真亀川に添う地名である。他にも牛込納屋、五井納屋、幸治納屋などという地名が点在している。

ここでは同地、成東に生家をもつ伊藤左千夫の秀歌に正確に、高い格調をもって九十九里の自然に迫るものが多い。ひろっておきたい。

人の住む国辺を出でて白波が

大地を両分けしはてに来にけり

天雲のおほへる下に陸ひろら

海広らなる涯に立つ吾れは

砂原と空と寄合ふ九十九里の

磯行く人ら磯のごとしも

一直線を限り白波のうち寄せる海岸、遠く海水浴客のそれこそ磯のごとく群れる、なぜかただ荒涼たる風景、そんな想いが伊都子の胸の中を占めていた。

(これはあの人と、わたしの間の距離なのかもしれない)

そして、

(これでは夫のいう智恵子さんとおっしゃる方、かえって気が休まらなかったのでは：)

と思った。

かつて成東から海水浴場のある片貝までは九十九里唯一の九十九里軽便鉄道が軌道を敷いていたという牧歌的な景観は遠い昔のものだ。いまは路線バスに変っている。源吾たちの訪れた数年後は国民宿舎九十九里センターが建てられ、また、せっかくの浜辺を有料道路が縦断してすっかり海を隔てるような変容を見る。要するに自然保護の対象に値しないいたずらなロングビーチであったものだろうか。伊都子の眼に映った荒涼さはこれとあまり速くない直感だった。

「やあ、きょうはいい話を聞いた、さ、これで終りにしましよ、う、う、う、おひらき、おひらき」

並いる職員多数の研修協議会の席だった。学期に一度研究授業を行い、終ってみて参観した授業内容を素材とした研究討議があり、延々時間をついやして、講師の講評と助言指導がある。大方それは教育委員会あたりに派遣を要請して迎えた講師が多い。学校ぐるみのそうした研究姿勢はその校の評価にもかかわるので、校長は鞠躬如としてかかる場合講師を遇するのがふつうだから、突然声をあげた彼の発言は虚をつくものだった。

クスクスと笑い声が起った。

それは彼のあげた声か突拍子もないものだったから、講師に対して失礼というほどのものではなかった。実を

言えば皆退屈しているところだったから、内心で快哉をさげたいところだ。共感と常識的には軽蔑を交えた視線で彼の方を見るものもあった。

「こんないい話を聞いたことはない、ああ良かった、良かった」

よせばいいのに彼は調子にのった。

校長の苦しげに洗面をつくるのが見えた。苦笑とも思えるへの字に口辺がゆがんでいた。

「面白い先生がいますね」

小声で講師がつぶやいた。

「は、この四月の新任です、体育です」

「ほほう」

ここで、いくぶん白けかける空気を引きしめるように司会者が間髪を入れぬ呼吸で進行を計って、この場をおさめた。

「では、じゅうぶんのご討議を願ひ、また講師の先生の懇篤なご助言と講評の終りましたところで、時間の方もうつっておりますので：、校長さんのご挨拶をいただくことにいたしましよ」

手際よくとりつくりつた閉会だった。

この年昭和二十八年は十一月一日は日曜日で、三日は文化の日だから、言うところの(飛び石連休)だった。日曜日を父母のための授業参観日とすることで、二日をその代休日とし二日連休をとることができる。学校とい

う特殊性で可能な、許されている工面である。父母のため
に便宜を計るもの、とくに父親も参加できるようにと
いう大義名分があった。前の研究授業からほぼ一ヶ月後
である。学校というところは行事の多いところだ。

午前中、四時間だけの授業を組んで公開し、終了を待
って旅行に出るのだ。地方興行のハネ立ちに似ている。
学校の門前に観光バスが横付されたりする光景もある。
しかし、今日は少々事情が違って三々五々、校門を出
て、バス停へ小走り、上野へ出て列車に乗ったものであ
った。

行先は花巻温泉一泊の教職員懇親の旅行だ。こうした
場合あと始末は教頭さんがつとめ、警備員さんの出勤を
待ってあと追いをする。日曜日と月曜日の入れ替えだか
ら、これは当然である。そうした追隨の教頭さんが現地
に着くころ、宴はまさにたけなわという成り行き。

まだ国鉄の花巻から乗り替えの電気軌道があった時代
であった。

花巻の温泉街はこの時期としては珍らしい花相撲が興
行されるらしく、高砂一門が分宿していてどの旅館にも
あの独特な相撲字で書かれた力士名が掲げられていた。
ある四つ角の宿にはチラと関脇朝潮の濃い眉毛のもと米
川の姿が見えた。

(おや) と思いながら、街をそぞろ歩きして帰った連
中が湯槽にタオルを肩に下りて行くと、そこは関取衆に

占領されていた。

ぶつくさ、あぶれた何人かが廊下をもどつてくるとこ
ろを、こちらは源吾がひとり浴室へ行くらしいのに会っ
た。

「おい、だめだよ、関取さんのお時間らしい」

「ふむ、なにかまわんたい」

彼はそのまま脱衣室へおし入った。なんのことはない
意外にひっそりとしている。廊下を別の方にいままで入
っていた関取が引上げたあとらしい。

脱衣かごに一人だけ脱ぎ棄てた浴衣があるだけだ。

「こんばんは」

彼はそれでもそんなあいさつをして湯槽の縁にかがみ
湯おけに湯をくもるとすると、そこに思いがけず巨体の
男がいた。同年九月の場所で躍進して朝潮と同じ関脇に
なった松登福太郎だった。ぶちかまして相手にいなされ
ると、土俵際までつつ走りながらくるりと体をひる返え
す、なんともいえないあいさつで人気のあった(マン
ボの松ちゃん)であった。

ザブと、こちらが入っていったので松ちゃんの方が湯
槽から上った。ベタンと流し場に腰を下ろしてこれから
体を洗うらしい。

(ほほう)

と感じ入る巨体だった。付人がいて背中を流す光景な
ら絵になるだろうが、彼は一人きりだった。しかも一切

こちらは無視していた。人気稼業はそういうものかもしれ
ない。ともかく土俵で命をけずり勝負を争う男がここ
にいる。しかもその男は存外孤独を愛する性格かも知れ
ない。がやがや大勢の入ったあとのひっそりした浴槽を
楽しんでいる。

あまり人見知りすることのない源吾が圧倒されてはや
ばや入浴をそこそこに部屋にもどってきた。

「お客さん、こちらのお部屋に柳浦さんいます」

「なんだ、あんたさっきの」

宴席にはべっていた芸者の一人だった。大ぶりの性欲
を誘うタイプの妓だ。

「ああ、いるよ、いま風呂からもどったところだ、な
んだ、おやすくないねえ」

「いいえ、そんなじゃないの、入るわよ」

「おっとっと、姐さん、名前は」

「千恵、千恵子よ、やあさんと話したいの」

「ああ、そう、「智恵子抄」の、これはこれは、奇遇
でしたな」

酔っ払いは少しばかりざれ言をいうと通してくれた。

「やあ、きみ、ほんとに来たんかい」

源吾がいくぶんテレ気味の顔を出すと、千恵子という
妓はいきなり首すじをかかえるように抱きついてきた。

「よし、よし、行こ、行こ」

そのまま源吾は妓を抱えて部屋を出ていった。

柳浦源吾はそのまま姿を消して旅館へは戻って来なか
った。どうせ明けの朝は任意解散という予定だったが、
前夜、妓を抱いた一人が暗夜に消えて、行方知れずとい
う事態は稀有のことだ。幹事がうるたえてみてはしま
らない。これは大人の旅なのだ。帰りの切符はめいめい
に渡してあることだし、

「やっこさん、どこへシケこんだものか、子供じゃな
いから、まアわれわれの責任もここまでだな」
ということになった。

団体の一行がほぼ前後して旅館を出たころ、柳浦源吾
は一人北上する列車に乗っていた。まだどこかに妓の肌
のぬくもりが、安化粧のにおいとともに残っているよう
な気がする、そんなあわただしい発ちようだった。妓の
情が深く、あと追いをしかねないのをふり切ってきた。
「ぼくのこれから行くところはきみの来るところじゃ
ない」

彼はすでに妓の近よりがたい聖者のように相貌を変え
ていた。そんな彼のどこに惚れたのか醒めてみるとふし
ぎだった。彼の方もまた艶福は生得のもの、前夜の経緯
は責任の限りではないと思っている。思えば伊都子の場
合もこれと同じだった。

「先生は変わった人ね」

「そうかな、どう変っている」

「なんとも言えないなア」

「そうか、ま、良かたい」

置屋の女将が気をきかして朝湯をたててくれた。

「お前さん知らないよ、あんな男に入れ場けて」

これはそつと彼には聞えない話だった。

さぶ、と彼は湯を出ると、さらしの腹帯をした。

「やくざみたい、それでも先生かねえ」

と妓が言うのを背に、彼は身仕舞をつけると、駅へ急いだ。

「薄情だよ、先生は、いったいどこえお行きだえ」

「うむ、十和田だ」

その頃は盛岡まで行かず、いまの北上の黒沢尻から好摩を経由して十和田南へ向う列車があった。彼はあらかじめ周到に時刻表を調べていたものらしい。朝食もそこに電鉄の駅へ向っている。

十和田の湖畔休屋に彼が達したのは昼頃であった。

それから、どんな時間が流れたかはすでに書いた通りだ。

彼はその翌年にはまたも転任をしている。無断の欠勤その他、いくつかの不都合が重なって、彼自身もはや居辛くなった結果だった。

こんどの学校は北辺、前任の区はいわゆる（川向う）と相も変らずドサ回りである。いや、いやどうしてやりがいのあるのはそうした区にこそある。彼はこんどの学

「柳さん、近ごろは艦橋に立つ山本五十六というところだねえ、似あってるよ」

「うん」

「どう、白鷺の生態研究の方は、市街化の進む中の白鷺なんて、いい研究課題じゃないかな」

「うん」

こうした冷やかしの話題にはさすがあまりのってこないようだ。

「白鷺を食ってみたが、あれはあまりうまくないな」

ポツリとある日彼はそんなことを言って、周囲にいあわせたものをびっくりさせた。

彼の机上はつねに化石のたぐいが山積していた。その山は増えることはあっても決して減ることはない。うわさでは彼の家に行くと、化石を収納する特製のひきだしがあるそうである。唐紙四枚分の幅をとる大きさというから、二間、彼の妻君が敷居が下るといってこぼしているそう。そういえば妻君の伊都子の方も年をとったであろう。いまは二兄の母親である。

「こんなに変わった人とは思わなかった」
とぼやいているようだ。

彼の収集癖は化石に止まらずその後レパートリーをさらに拡げる傾向も著しい。困ったことに学校というところではそうしたものの集積場所がいくらでもある。校舎の裏手にまわれば日蔭地とはいえ、空間は豊富である。

校ではまたあの化石収集熱を再燃させることになる。

こんどばかりは多少彼にも自重の気持が芽生えたものらしく、その後十年ばかりはおとなしくしていた。マグマの計り知れない片鱗をうかがわせながらである。

学校は昔、（深んぼ）と呼んで百姓が胸まで泥沼にかかる苦勞をした湿地帯で、しばしば荒川の水が氾濫していた。六、三制の施行にともない、おいおいの人口急増に応じそんなところにも校地をもとめ新設された学校であった。さしあたり建てられた木造の校舎は築後たちまち不同沈下する地盤の上でみるみる狂いを生じ建具が開け閉めできなくなり、門扉も傾くありさまだった。

まだ周囲に多く田園風景を残しており、田の面を吹き渡る風が冬木枯らしの時分ともなるとたえがたい寒気を運んできたものだった。そんな環境に白鷺の群棲する場所があった。

源吾はその生態にいちはやく関心をまず示した。こんもり陸の孤島のようにとり残されたその一角に足繁くかよいはじめた。クヌギ林である。

「こんどは白鷺かね、あれはうるさいねえ、フン公害もいまに問題ですよ、ぼつぼつ住宅も増えてきているからね」

彼は例のビッケルを離さないばかりでなくこの頃は望遠鏡を胸にぶら下げている。

壊れた机などが積まれていたり、暖房用の貯炭場が設けられる程度で、なお余地はいくらでもある。

近ごろそこへ小型貨物自動車、バイク、まだ乗れそうな乗用車まで、どこでどうもらいうけるものか雨ざらしになっている。これらボンゴツ車はエンジンやバッテリーを取り外し、また部分的な解体をされ、残骸をさらしている。もちろんこれも彼の仕業である。

「勝手にああいいうものを持込んで困りますよ、すぐかたづけてください」

「はア、使えるものを回収したら処分しますけん、放つといつかあさい」

「きつとですよ」

「はア」

馬耳東風というのはかかるケースをいうのであろう。一向に改まるものではない。

かくするうちにさらにドラム缶が運び込まれ、そこから異臭が鼻をつく事態がおこる。それはなにか生物の腐臭と気づくものである。

またまた苦情を言うのは教頭の仕事と相場がきまっています、ともかく恐る恐るのぞきにいつてみると、はたしてドラム缶が問題で、なにやら動物の頭らしいものがたたえられた濁水を通して見えるではないか。

鼻をつまんでも吐き気をもよおしそうな、それは腐臭であった。なにを入れてあったものか、ドラム缶そのも

のから油も浮き出しているようで、中のものをはっきりとは見定めがたい。かなり大きな動物らしい。

「ああ、あれですか、牛ですよ、牛の首だけですよ」

「な、なんということを、常識では考えられない、どうするつもりですか、悪いいたずらは止めてください」

「いや、いたずらってことはない、腐らせてから頭骨が欲しいだけですな」

「……………」

言葉を継がないほどあっけにとられる出来事だった。

「ともかく、すぐ始末してください、いくらなんでも非常識な、とんでもないことだ、いますぐですよ、いいですな」

この男一体なにを考えているのか、と思った。

市街化の波及は予想よりはるかに早かった。

(いまにご覧なさい、いまでこそ田園風景を残すこのあたりが、近代高層建築の立ち並ぶベクトタウンになる、地下鉄が都心を結んで通勤の足が確保される、未来図によればこの学校の背後に地下鉄の大操車場がそのため設けられる、もちろん学校もその頃には鉄筋校舎に建て変えられる)

少々誇大に聞えるこの話は源吾に度肝をぬかれることしばしばにおよんでいるあの教頭さんの話であった。断定的なものの言いかたが特徴で憎めない。それがまた職

員間の和をかもし出す上に役立っている。

「うそじゃありませんよ、わたしはちゃんとその未来図の青写真をこの眼で見えて来たんだから」

と宣ふのであった。

ともあれ、その地下鉄工事は現実始まっていた。都営交通の六号線であった。市街電車の時代から地下鉄の時代へ、民営の営団地下鉄におくれをとっていた自治体の交通局が赤字を脱けだすためにも起死回生をかけた地下鉄工事だった。この六号線は高島平から三田まで二・五軒、三田で一号線の、つまり浅草線に接続しようとするもの。高島平―巣鴨間、巣鴨―日比谷間、日比谷―三田間と順次開通し、最後に高島平―西高島平間の完成で現状の全路線の開通を見ている。高島平―巣鴨間についていえばその開通は昭和四十三年十二月二十七日で、工区は七工区に分けられていた。

さて、ここでわが柳浦源吾氏の古生物学への探究にあって願ってもないチャンスが向うからやってきた。右の地下鉄工事は彼に無限の夢を与えてくれた。

さらに、この場合の工事の記録をたどると、高島平付近の41年10/1着工、43年1/31竣工。西台付近は二区に分かれ、41年8/1着工、43年3/31竣工と追うことができるが、それから蓮根付近、志村三丁目付近までいずれもここまでは高架で脚部の構築に掘削の場面があるが、問題はそれから先の隧道部分に入ってからである。

はかえってもって冥すべきことであつたろう。

「ねえ、やあさん、いいものを見せよう、実はこの拓本なんだがね、役所の玄関ホール、エレベーターの脇に何気なく掲げられているあれと同じものだ、ご覧よ」

そう言いながら教頭の××さんは訓読してくれた。

爾 俸 爾 禄 (なんじのほう、なんじのろくは)

民 膏 民 脂 (みんこう、みんしなり)

下 民 易 虐 (かみんしいたげやすきも)

上 天 難 欺 (じょうてんあざむきがたし)

「これ戒名石、出典は中国唐末のものここに解説があるが、福島の本松霞が城の通用門入口にある、お武家たちがここを通るとき必ずこれが眼にとまるといふのだ、公務にたずさわるものの戒めとして有名なものだ、つまりはわれわれ貴重な税金から給与をいただいている、天に恥じる行いがあってはならないという戒めだな」

「そういうむつかしいことはわからん」

「わからんかねえ、残念だねえ、これはねえ、きみの心酔する「智恵子抄」の智恵子さんの生家にも近いところにある、ほら二本松少年隊で有名な：」

「ああ、そうか、それならいつか行きたいと思っ

てい

学問的になにかの貢献ができる、そうしたことがあり得ようとは将来とも思えない。むしろ盗用にしろ、彼の収集したものの何点かが、学問の世界に活用されたこと

があるらしい、そうそう、霞が城にはね、「智恵子抄」の碑もあったっけ」

「うーん、そうかあ、その碑にはこうある、

あれが

阿多羅山

あのひかるのが

阿武隈川

これは（樹下の二人）のリフレインだ、いいねえ、大正十二年三月作だ」

彼は朗誦を交えながらそう言った。作の年月まで強記している。碑文のこの場合の分ち書きまで眼にかべているようだ。うっとりと、眼を細めるようすが別人のように見える。

「化石採集が忙しくて、しばらく智恵子さんを忘れていたんじゃないかな」

「いや、そんなことはない、忘れはしない」

どうやら戒名石などをもち出して、彼の自重をそれとなく促そうぐらいの考えが甘かった。弘法さまのおん名を唱えるように改まったようすもただごとではない。

四月二十九日は日曜で、祝日代替えの月曜日と連休になった。この天皇誕生日あたりの天候はなんとなく安定していると予想されやすい。

柳浦源吾は軽装のまま家を出た。伊都子には、

安達太良山登山による遭難という仮説もたてられた。

しかし、標高一、七〇〇はあっても、そう困難な山ではない。ときに遭難の事故が皆無というのではなく、地元の二本松高校の山岳部の生徒がリンクワンダリングで疲労遭難というケースは濃霧によるもので、濃霧が発生しやすいという条件と、尾根の縦走で鉄山、箕輪山、鬼面山とたどり土湯峠、野地温泉へ道をたどるとすれば西風をうけやすい。彼が軽装のまま登山を思い立ったとすればかなり危険が予想される。とくに雨にうたれた場合、風にさらされて疲労凍死ということも起り得る。ガイドブックによつては（気軽なハイキング気分で登ることが出来る）とあるのは大変な誤りであった。とくにまだ春先の山の気象状況、とくに気温の変化に問題があった。

霞が城に「智恵子抄」の詩碑を尋ねる。安達郡油井村漆原へ足を向けて、酒造業だった智恵子の生家長沼家のたたずまいを見る。あの軒頭にいまも下げられている酒造業を示す看板を仰ぐ、このあたりからは安達太良の連峰はなだらかな稜線を画いて人の寝姿に見える。

（あれが安達太良山）

と指呼をすれば、彼は当然そこへ登りたくなる。岳温泉から奥岳へ道をたどったに違いない。「智恵子抄」に心酔をささげるファンは志を遂げ、完結しなければならぬはずであった。

しかし、二本松の町にも、霞が城にも、また岳温泉で

「ちょっと福島まで行ってくる」

と言が残した。

この日から彼の無届の欠勤が続いた。この頃の言葉で（蒸発）というのがある。また（失跡）という言い方もある。（失踪）という言葉を使い替えた当て字だ。多少うけとるニュアンスがそれぞれによって違う。柳浦源吾についての取沙汰もそれに似てまちまちであった。（ケロリとして、そのうちに顔を見せるのじゃないかな、やっこさんのことだから）

家族の方の話で出かけた方角もわかっていた。

「奥さん、彼は「智恵子抄」をもって出かけましたかどうかでしょう、ああやっぱりね」

「なにかございましたのでしょうか」

「いや、あの人は奥さんよりも智恵子さんのほうが好きなんだ、困った人だな」

憐憫の色を顔にうかべながら、これは失礼なことを言ってしまったと思う。彼が旅行に出たきっかけになったものを教頭は心当たりとして口に出すことにはばかった。

「失礼なことを言ってごめんなさい」

「いいえ、あきらめておりますの、それよりもいつもご迷惑ばかりおかけしまして」

まだこの時点では彼の行方について悲観的な推測はなかった。搜索願がそのために遅れた。

も彼の足どりをつかめるものは何もなかった。奥岳では登山者が自主的にカードに氏名その他コースなどを記入して残す投函箱があるが、そこにも何ら手がかりはなかった。

「この学校の三奇人とは誰かと思っていたら、やっとわかった、おれの外に〇〇と、それに校長だった。」

牛久からはるばる通勤する時の校長は文理大のエリートを任じ、経営をかえりみぬ増長天であった。ある職員旅行の先でのことだった。声が大きいので当のお人にも聞えて苦笑するのが見えた。なによりも、ご当人が天晴れ奇人を任じているところが愉快といわねばなるまい。彼の遺体は六月になってから、やはり安達太良の山中で偶然、県花の石楠花と熊笹に埋もれて発見された。ナツブサックの中に「智恵子抄」のぼろぼろになった一冊があった。彼の死に顔に満足の微笑があったかどうか、もはや認めがたい状況であった。

同じ昭和四十八年十一月二十七日彼の一方にあればど執着をもった都営六号線は三田までの全線開通を見ている。

聖マリヤの亭主

古い戯作
もいふ所の作。だ

成田四郎という名のものにほし

山本儀一

三
の
脚
本
の
戯
作

中二階の食堂から幅の広いゆるやかな階段をおりかけて、手すりに手をかけたまま洋介は足をとめた。フェニックス、カボック、ゴムなどの大鉢を背にして、人待ち顔に立っている婦人がいた。アイボリーグレイのビニタイルは総ガラスの南面から光を受けて鈍く反射し、婦人の倒影を浮かべていた。睡蓮のような…… 白内障は時には思いもよらぬ幻影を見せるものだ。洋介の自嘲は不快なものではなかった。かりに加奈が連絡もなしに訪ねて来たとしても、蓮の花を床に映すことはない。階段を下り立った洋介は、静かに自分の部屋へ歩きはじめた。歩き慣れた広い平坦なロビーには何の不安もない。下り階段にかかったら素早く壁際のハンドレェルを握むことにも慣れていて。明るいトキ色のブラウスの婦人がじつと洋介の足どりを見つめているのが気になった。まさかと思いをめぐらす暇もなく、睡蓮の花は中年の女となって走りよった。

『お父さん』
洋介はわずかに口もとをゆがめた。人の音色というものは何年たっても変わらぬものだ。
『お変わりありませんか』
洋介は思いもかけず出現した娘の容姿を、撫で回すように確かめてからうなずいた。
『お前が姿を見せた現在までのところはな』
言葉の含んだ毒気を、敦子はきき流した。年寄りばかり変わらぬものだが、十余年の歳月はそれなりに父の身体を浸蝕していた。心のもちようは変わらぬつもりだが、父は父なりに自分の中の変化を読みとっているはずだ。

ソファに並んで掛けて見る娘の横顔には、その母の面影が残っていた。洋介は眼をそらして窓ごしに鈍く光っている海を見た。その面影も、も一度念を押すと霞んだ空と海の境目のように淡くさだかではなかった。隣りに

いるのは成熟した一人の女であった。和代がこの年まで生きていたとしても、やはりこういう面立ちになるだろうか。

応召前二年たらずの和代との家庭生活は洋介にとって遙か古代の物語であった。

『いくつになっただね』

いくら無沙汰にしていたって血の繋がったたった一人の娘じゃないの……

『もう四十すぎよ』

指を折って数えてみたら、といわんばかりで、洋介は苦笑した。女は四十過ぎると年を忘れるというが、『年をとると時間が停滞するのよ、ついでこの間まで小学生だったのが背広を着て現れて驚かされる。お前もいよいよ恐るべき世代に入ったわけだ。亭主の扱いも心得、子どもの世話も省け、世間のからくりも見えてきて、自分の人生に対して居直ろうという図太さが湧いてくる……』

『そんな週刊誌風な図式で何が捉えられるのかしら。あたしはあたしなりに精いっぱい生きてきたわ。それに亭主もいないし子どももない』

『相良くんとは…… 別れたのか』

『芳夫の一周忌がすぎてからね。子は鏝なんてひどく封建的な言葉にきこえるけど、やっぱり子どもというのは母親の行動を拘束するものね。その鏝がなくなっただけ

だもの。もしあたしが人生に対して居直ったとすればその時かな。居直るといふより、うんざりして逃げ出したところかもね』

『それはそれで仕方がないことだ』

『お父さんに加奈さんそれに俊行との三人がこしらえたあの暗い洞穴の中で息を潜めている日々に耐えきれず、あたしも睦子も家をとび出てしまったんだけれど、あたしって逃亡癖がついているのかしら。大人になって振り返って見ても、あれはやっぱり家庭といえるものではないか。お父さんには悪いけど。相良と結婚して家庭にプレックスは消えなかった。相良はしつけのよい家庭に育ったマザコン気味のお坊ちゃんだったし、あたし張り切って見よう見まねでやってみても、お目付け役のもとはどうしてもぎこちなくなっちゃう。自分でそう感じることから、相良やお姑さんの目にどう映っていたかよく判るの。よき主婦になろうと努めても、心と行動のバランスがとれなかった。』

嫁と姑の衝突なんかなかったのよ。お姑さんは優しく冷静な指導者だったもの。でもあたしは疲れきった。芳夫が産まれたってどうしていいか戸惑った。加奈さんがあたしたち姉妹を世話したようにには絶対したくない。加奈さんが俊行を育てたような狂気はもってない。あたしって親に似て本当に不器用なのね。芳夫は結局お祖母ち

やんの意にそったお祖母ちゃん子になり、あたしは相良家のはみ出し者だと感じつつづけていた。その限りにおいて、家庭は円満だったと思うの。結婚式にはお父さんは加奈さんといっしょに出席してくれたわね。ゆっくり話す暇はなかったけれど。五年たって芳夫の葬式には、お父さん一人お通夜の席にしょんぼり座っていた。お父さんの姿を見るあたしの心は複雑だった。子どもを交通事故で失った母親の悲しみは悲しみとして、あの人の娘であるあたしが、健全な家庭をもとうなどと願うのは大それた望みなんじゃないかしら、なんて考えもしたわ。自分で何の意味も感じないせまい秩序の中で、もう一度子どもを産んでまた同じ途を辿るのかと思うと耐えられない。それから、そんな恐れがつきまとい離れなくなつたの。

家庭の幸福は諸悪のもと。そんな太宰の言葉は少女時代のあたしを慰めてくれたわ。でも不幸な家庭から何が生まれるのかしら。愛する人と結婚してよい家庭を作り、子どもをりっぱに育てることが、女の幸福だと信じてる女の子がほとんどだけれど」

『それは、自然の法則に従うのが一番気楽なことだろうさ。ただし、^{ムリ}渝らぬ愛だと幸福だとかいうのは、退屈な生活に飾りつけた幻想だろう。苦勞に耐えるためには役立つこともあるが、それがまた新たな悶着の種にもなるう。お前が相良と別れたのも、退屈な現実よりも実

体のない幻想を善しとしたからだ。それは人それぞれの好みの問題だ』

『お父さんらしい哲学だわ。とにかく今、あたしはさばさばした気分でのう』

『どんな仕事やってるんだ』

『小さなグラフィック誌の編集を担当してるの。忙しいけど結構楽しい。憶えてるかな。お父さんが高校の入学祝にカメラを買ってくれたの。それがあたしのスタートだった。今思うと、あたしお父さんの暗黙の意思を守りつつけて来たみたい』

『きっかけというものは恐ろしいものだな。ところで、いまは付き合っている人いないのか』

『ええ何人かは……』

『わたしは再婚を考えているのかときいてるのだが』

『それは考えてないの。ふしだらな女だと思わないで。そう思われても構わないけど。あたしが複数の男と付き合っているのは、一人の男にのめりこまないための安全策なの。男の方もそうよ。家庭をもってる人もいるけど、その生活を壊して自分が割りこむ気はしない。また狭い枠に閉じこめられたくはないもの。あら、何か言いたそうな顔ね。待つて、あたしは何人かの男性と友情を保っているだけなの。家庭の女のように、愛情を投資してはいないわ。やがて男たちも寄って来なくなる時が来るでしょうが、自分から男を求めてさまよい歩きたくはない。

そんな閑人になりたくないわ』

『それはそれで、わたしには何も言うことはない。ところで睦子は どうしてるかな』

『渋谷でブティックのお店委されて、結構まともにやっている。一時はグレてただけれど、明代伯母さんにお世話になって落ちついたわ。まだ結婚してないの。怖いんだって。昔しばらくいっしょにいたけど、今でもあたしたち時々逢ってるわ。たった一人の妹なもの。どう、親のない子に会ってみたい』

『いや、元気にやっててくれればいい。わざわざ会っても話すことはあるまい。わたしはお前たち二人を何の差別もなく育てたつもりだ。そのことだけはいつもわたしの頭にあった』

『お父さんが血を分けた子にも不義の子にも、ひとしなみに薄い愛をかけてくれたことは認めるわ。睦子だって同じよ』

『睦子は自分の出生の秘密を知ってたのかな。まさか』
『伯母さんだって加奈さんだって、口は固かったと思うわ。世間の噂はしらないけれど。でも、疎外感をもった思春期の娘が、そんな空想にふける時もあるということ。を、幸せな父親は考えてもみなかったのね。先に疑惑をもったのはあたしだった。その気になれば簡単な引き算で判ることだもの』

『なかなか手きびしいね。お前の家庭コンプレックスに

ついては済まないと思ってる。お前のいわゆるほの暗い洞穴も、お前たち姉妹がいて辛うじて家庭といえるものだった。二人に見捨てられた父親の哀れさは、今のお前なら想像できるんじゃないか』
『お父さんに辛い思いをさせたことは申し訳なかったけれど、あの時はどうにも仕方なかったの』
『詫びてもらおうとは思っていない。豊かすぎる時間をもてあます若者の特権だものな。ただ、今のお前を見てみると、りっぱに成長したなと思うと同時になぜか寂しくもなる』

『四十過ぎの離婚歴のある女がいくら気張って高笑いしてみせても、その裏が見えてしまうといたいんでしょ』

『そんなことは考えてないよ』

広いガラス窓の外にはテラスが続き、あちこちに植木鉢が集められている。その向うには、視界を左右の山塊に区切られた崖下の谷の風景が展開していた。森や丘の緑をぬって車のうごめく道路や街並が見え、その背後はかすんだ静かな海である。右手の山は岬となって海に突き出し、左手の山腹は近く迫って、トンネルの開口部を不潔な感じでいくつか見せていた。往復の列車がやみ間なしに視野をかすめた。

父と娘はソファに掛けたまま、大きな箱庭を黙って眺めていた。

『りっぱなホテルみたい。快適でしょう』

『個室は杉並の家のように広くはないがね。ライフケアを謳っているだけあって、設備は細かく気を遣っているよ。看護婦は常時待機しているし、毎月定期検診もある。食事も上等だ。少なくとも加奈の料理よりはよい。金のかかるだけのことはある。どうだ、部屋へ行ってみようか』

『いいえ、ここでお話ししようよ、あまり人けもないし。あたしお父さんの私生活の中に踏みこみたくないの。机の上にどんな本がのってるか、花瓶にどんな花が活けてあるか、枕許に誰の写真が飾ってあるか……』

敦子は表情を固くして、本当は怖い、という言葉をもみこんだ。密室の中で父親の対面は、自分を愚かしい感傷の淵に引きずりこむかもしれない。しかし、物分りよげにうなずく洋介を見ると、この人はもともと自分から状況を変えていこうとする気力のない人だったのだと、敦子はあらためて思い返すのである。文句言わずに来い、と言われれば、逆らえないはずだった。

『よく意味が判らないが、お前の気持ちを尊重しよう。ところで、十数年も音信不通でいた娘が老父を訪れる動機は何だろうと、わたしはさっきから考えているところだ。睦子のように無関心とか拘りがあるとすれば訪ねてはこまい。それはそれでいいのだ。子どもはいつか親を棄てるものだ。なんらかの形でな。訪ねてくる以上は、

親に与えるか親から奪うか……あるいは単なる好奇心か』

『そんなふうにはしか割り切れない父親に、あたしは育てられたのね』

『お前は親子の情愛だとか倫理だとか、そんな事を心に浮かべているのかもしれない。だが、わたしにはそんな事を考える資格はない。そう自分を極めつけでもしなければ、この長い歳月を生きては来られなかったらう。しかし、お前の動機が何であれ、わたしは決して拒みはしない』

『いいわ、お父さんがどう分類しようと自由だけど、あたしは、この敦子という女を確認するために来たの。なぜあのような家庭に育てられたのかを知りたいの。今お父さんがどんな生活をしていようと、元気で生きていてくれさえすれば、あたしはそれでいいのよ』

『つまり、こうして生きている父親には関わりたくはないが、自分のこれからの人生のために、父親の過去を取材に来たということだな。明快だ』

『どうとっても構わないことよ。あたし、お父さんの僅かばかりの遺産などに関心ないし、今のこの水準以上の生活にあたりから付け加えるものは何もなさそうね。では取材に答えていただきます。まず、明代伯母さんを憶えていらっしゃいますか』

明代は戦争未亡人でお前の母の姉だ。和代が亡くなったあと、加奈と結婚するまでの間、二年ばかり母親代わりにお前たち姉妹の面倒を見てもらった。とても親切な人だった。そんな事まで説明しなけりゃならぬとは情ない』

『もっと詰まらない事を伺うわ。あなたは明代伯母さんを愛していませんか』

『……………』

『お答えがありませんね。正直に答えて頂きたいのです』

『たいへん世話になったし、好意はもっていた。しかし、死んだばかりの妻の姉なんだよ』

『お父さんは意気地がないのね。伯母さんははっきり言いましたよ。お父さんを愛していたって。洋介さんと過ちを犯しましたと告白したわ』

『伯母さんにいつ会ったんだね』

『あたし明代伯母さんを片時も忘れたことはないわ。伯母さんを母親だと思っていたの。実の母の記憶は消えてしまったけれど、あたしたち姉妹に母の愛情をかけてくれたのは伯母さんだけだったもの。十九年の夏休みに家出を決行してまず訪ねたのは伯母さんの家。あたしの話をきいて伯母さんは考え直すように何度も勧めたけれど、決意が固いを知ると強いて止めようとはしなかった。しばらくここにいなさい、と言ってくれたけど、そ

れも断ったわ。元の木阿弥になると困るから。それでも一週間泊めてもらって、お父さんと懇意の不動産屋に探してもらったアパートへ移った。困ったことがあったらいつでも相談に来なさいと言われたのは嬉しかったが、泣き言をいいに行ったことはないわ。もちろんそれ以来なんども会ってるし、伯母さんがアパートへ来てくれたこともあるわよ』

洋介は眼を閉じて、娘の昂った口調を身体全体できいていた。明代から電話を受けてひとまずホッとしたが、結局は敦子の意思を通すほかはないと諦めたのだ。よい相談相手になってやってくれ、と明代に頼んだのである。子ども部屋から姉を失った睦子は、高校も卒業せずに翌年家を出た。いずれは姉と同じことかと覚悟は決めていたが、早すぎるので狼狽した。この時も明代からの電話で、敦子といっしょに暮らしていると知らされて安堵した。経済的な理由で軽はずみなことを仕出かさないようにという父親の配慮も明代には伝わっていた。洋介は隠れていたが、明代は二人の娘の情報の中継点だった。ゆるやかな管理保護下にあったとはいえ、洋介は娘たちの奔放な生活力を寂しさも忘れて讃えた気さえたのである。敦子の結婚も、顔を見たこともない初孫の葬式も、明代からの連絡で知り、娘たちと顔をあわせる機会となった。しかし、明代が晩い結婚をし、娘たちがそれぞれ自立して生活しはじめると、明代からの情報も跡絶

えがちとなった。便りがないのが無事のしるしと観念するしかなかった。それにしても、父親の気遣いが明代から娘たちに通じているはずなのに、明代を憶えているかとの質問はあまりに無礼というより無念であった。だが洋介は敦子の気負った畏に足を捕られまいと、平静をとり戻した。

『去年の秋だったな、ずいぶん長らくご無沙汰していただけど、吉祥寺のサンロードでばったり伯母さんに出会ったの。杉並の家を偲ばせる窓辺に蔦が茂ってるコーヒショップで、久しぶりにお喋りしたわ。伯母さんは中央線沿線に洋装店を三軒も持ってるんだって。ちょっとした実業家なのよ。その日は三鷹のお店に来たついでと書いていたけど。お喋りのあと伯母さんはすこし改まって、あなたはもう立派な社会人なのだからしっかり受けとめてくれると思うし、あたしも事実は事実として話しておかなければならない責任を感じるからといって、昔のことをいろいろ話してくれたの。子ども心にうすうす感じていたこともあったけれど、ショックだったのは母の死が自殺だったと聞かされたこと……』

『それをわたしの口から確かめようというのか。お前もずいぶん冷たい女になったものだな』

『お父さんの血を享けた娘だもの、仕方ないでしょう』

『明代からいろいろ聞いたと思うが、お前のお母さんを殺したのは、このわたしだとも言えば満足するか。』

きたらうなどと考えたこともあった。しかし、和代は睦子の父親に当たる人を心底愛してしまったのだ。和代は不義不貞をはたらいた訳ではない。ただ、その死によって、わたしへの愛の終わりを告げたのだ。

明代はわたしを愛し過ちを犯したといったそうだが、敗北感にうちひしがれていたわたしの側からすれば、どす黒く卑しい想いがこめられていたはずだ。それをお互いの愛と感じていくくれたのなら、わたしの罪も薄められるだろう。妻に捨てられた男が、妻の姉とやすやす再婚できるものだろうか。明代だってそれは知っていた。世間体なんてものじゃない。自尊心……いや恐怖かもしれない』

『でも加奈さんみたいな人となぜ結婚する気になったものか、あらまじは伯母さんから聞いたけれど、お父さんの気持ちがいま一つはっきりしなかったの』

『自分ではっきりしないところはある。いろいろ後講釈はできるだろうが。些末な事をひどく念入りにする人が、人生の大事を無造作に決めてしまう事がよくあるものだ。お前も思い当たらぬかね、その好例かもしれない。もとの職場に復帰できたわたしは、子どもたちの面倒を見てくれる人がほしかった。明代をいつまでも頼ってはられないし、妻のイメージと重なっているその姉と中途半端な関係をつづけていたくもなかった。わたしは明代に適当な人を見つけてくれるように頼んだ。これは和

わたしが生きていたことが和代に死を選ばせたのだ。わたしは死んでいなければいけなかったのだ。そうすればお前も和代も、睦子やその父親と安穩に暮らしていたことだろう』

『そんなこと思ってもみないわ。ただお父さんが明代伯母さんと結婚していたらなって、伯母さんの告白をきいてから夢想したことはあるけれど』

『復員船の甲板で船倉で、わたしの頭の中を占領していたのは、お前には悪いが和代のことだけだった。博多港に停泊中、狂喜する和代の表情を思い浮かべながら、わたしは思いのたけを綴って投函した。和代の心の中ではとうにわたしの葬式が済んでいたことなど知る由もない。わたしの手紙を読んで和代は自殺したのだ。真間の手古奈のようにな。睦子という別の愛の形見を残したことにわたしは和代の運命に対する抗議を感じた。明代は自分の仕事を投げ出してよく世話してくれた。睦子は誕生日を迎えただけだったし、お前はまだ四歳になるかならぬかだった。放心の時期が過ぎると、わたしは明代の心づくしが妹の罪亡ぼしではなかるうか、と考えるようになった。若いわたしにはそれがひどく僭越なことに思われた。誰もとがめるべき者はいないし、愛の代用品もないのだ。欲の深い妄想だが、寡婦となったと思いいんだ和代が幼児を抱えて戦後の苦しい日々を支えるために、春をひさいでいたとしても、わたしは許すことがで

代明代姉妹に対する三下り半でもあったわけだ。幼い者たちをよく世話してくれる人なら誰でもよかった。伯母さんはまことにわたしに相応しい女性を探し出してくれた。女が余っているといわれた時代だったが、生涯独身で通すつもりという人を口説き落とすとして連れて来てくれた。愛に幻滅を感じた男には、明代のひそやかな悪意を感じさせるほどうつつつけの人だった』

『子どもの世話をしてくれさえすれば誰でもいい、そんなにいい加減な態度が自分だけでなく周囲の人たちを不幸にしてしまったのよ』

『そう言われても仕方がないが、わたしは愛すべき妻よりも誠実な家政婦がほしかったのだ。病身の父親を細腕で養ってきたという身の上をきいて、わたしは係累のないこの娘との結婚をきめた。昔の農家のように嫁を一家の労働力として迎えたって、穏やかな愛情で結ばれた平々な家庭をつくることはできたのだ』

『たしかに加奈さんは家事も育児もよくやってくれたに違いないわね。継母に苛められたという記憶はないもの。加奈さんはたしかに誠実な家政婦でありつづけ、それ以上でもそれ以下でもなかったわ。優しい言葉をかけ笑顔をみせてくれて、それから一歩近付くのを拒むような冷やかさが子ども心に感じられたの。明代伯母さんとの生活と落差があったとしても。それにね、子どもって親が考えるほど無神経ではないのよ。とくに両親の愛情

関係については。ずっと後のことよ、家を出てから睦子と二人でしばらく暮らしていたんだけれど、あの人たちがいつセックスしてたんだろうね、と笑いあったことがある。俊行が産まれたんだから、しないはずはないんだけど、やっぱり愛想笑いを浮かべてお辞儀しあって……ごめんなさい。その頃は二人とも好きな人ができて大人になったような生意気な気分だったものだから」

洋介は敦子のあけすけな言葉を苦笑してきき流した。『時代が違ったせいかな、わたしは両親のセックスなんかに思いが及ばなかったな。お前はわたしと加奈との夫婦生活に異常をかんじていたのだろう。子どもにそんな惨めな想像をさせたことは、親として恥ずかしいことだった。』

お前が小学二三年の頃だったろう。ある夜加奈がわたしの部屋にきた。本を読んでいたらわたしは階段のきしむ音に気づいて首をかしげた。夜は誰もわたしの部屋を訪れることはなかったのだ。ごめん下さい、お邪魔してよろしいでしょうか、と加奈の声がした。部屋に入ると正座して両手つき、お願いがございませう、と言う。異例の事なのでちょっと胸騒ぎがしたが用件をきくと、あたくし自分の子どもが欲しくなりました、と言う。わたしはびっくりして言葉もすぐに出なかった。それまでの事を知らなければわたしの驚きは理解できないが、やがてわたしは、小学校や幼稚園に通うお前たち姉妹の可愛い

ある日曜日の午後、子どもたちが庭へ出てあそんでいる時をみはからって、わたしは加奈を応接間へ呼び、期待された通りの野獣となって押し倒した。殺されるような叫びを挙げて加奈は抵抗した。これがかりにも夫と妻と呼ぶべき男女の姿なのかと気づくと、身も心も萎えてしまった。腹が立つより自分が情なかった。

そんな女となぜ離婚しなかったのか、とお前は言いたいだろう。わたしだって何度か考えた。なりゆき委せの意気地のない性格もあったろうが、セックス以外では加奈は期待通りに家事をまかなっていたのだ。わたしは自分の得手勝手を恥じたりもした。わたしは妻を強姦してまで思いを遂げたいというほどサディストではなかった。加奈が望むなら一生女中奉公させてやろうか。こんな想いが復讐じみた快感をもたらしたこともあるが、それこそ加奈の望むところだったのだ。女はどこにでもいたがわたしは情の絡んだ付き合いを二度とする気はなかった。わたしは寒空に立ち小便したあとの身震いにも似た虚しさを求めて夜の街をうろついたものだ。帰宅すると、お帰りのさい、と加奈はにこやかに迎える。

こんな生活を何年かつづけて、突然加奈はわたしの部屋を訪れたのだ。横面を張り倒して、自分の部屋へ帰れと怒鳴ることもできたはずだ。それなのにわたしは、まるで優しい婦人科医のように、微笑さえ浮かべて言ったものだ。子どもが欲しいなら、お前さんがもっとも厭わ

姿を見て、石のような女もそんな気分になったのか、と思い返したのだ。

加奈との結婚はほんの内祝ですました。加奈は家に来たその日から甲斐甲斐しく働いた。片付けが済むと自分に宛てがわれた部屋に早々と引込んでしまった。わたしには華やいだ気分もなかったが、初夜に同衾するのは男の務めだろう。訪れてみると、布団にかくれたまま、今日はたいへん疲れましたのでお先に休まして頂きたい、どうぞお許しください、と言う。わたしは労りの気持ちで引きあげた。そのうち何とか挨拶があるだろうと思っていた。ところがこの住み込みの家政婦さんは、昼も夜も精出して働くが、一日の勤めが終わると、さっさと自分の部屋に閉じこもってしまうのだ。何日かたつて部屋へ行ってみると、釘をさしたか心張棒をかったか、襖が開かない仕掛けがしてあった。その時わたしの頭にトサカがついていたら、ゴム風船みたいにパンクしたところだろう。もちろん襖を蹴破ることはできた。しかし、わたしはしばらく呼吸を整えてから、静かに加奈を呼んだのだ。すると、身体具合が悪いので早く休ませて頂きました、ごめん下さい、と声が返ってきた。わたしの忌ま忌ましさに分かるかな。惚れて一緒にあったわけでもなし、なんでこの女にひざまづいて愛を乞わなければならぬのか。たとえ生理の日だったとしても、襖に錠をかけるほど夫を信頼できないのか。

しいと思っっている行為をしなければならぬのだよ。承知しております、と加奈は言った。確実を期するためにはその行為を再三行わなければならないとおもうが、と言うと、加奈は声を高めた。いいえ、あたくし本を読んで調べて参りましたから今夜なら確実だと思います。わたしは気圧されて絶句した。加奈は手術を受ける患者の表情でわたしのベッドに横たわった。はじめて見たその裸身は三十過ぎとは思えぬ若々しい肌をしていた。前戯も愛撫も不要だった。わたしが興奮したのは憎しみのためだったかもしれない。わたしが抱いたのは妻でもなく家政婦でもなかった。こうして自分の運命を抱きとってしまったのだ。加奈はわたしの動きに応えながら、愉悦をあらわにする罪を犯すまいと、顔を背け唇をかみしめて、シーツの端を千切れるほど握りしめていた。

一言も口をきかずに身仕舞いすると、加奈はわたしにお辞儀して急ぎ足で部屋を去った。こんな言葉を遣うと笑われそうだが、加奈は生娘ではなかった。それだけの事ならわたしもこだわる気はないがね。とにかく、三十何年かの結婚生活で、妻と呼ぶべき女と行なったセックスは、これが最初で最後だった。加奈の下調べは正確だった。人工受精の施術を受けた加奈の計画通りに、俊行はこの世に生を享けたのだ』

敦子は母ゆずりの長いまつ毛を伏せたまま、しなやかに揃えた指に見入っていたが、

『感動的と言おうかバカバカしいと言おうか、うまい言葉が見当たらないの』

『好きなように受けとめるがいい。若い姉妹が想像していた両親の性生活の実態をきかせたまでのことだ』

『愛する妻に見捨てられて錯乱した夫が選んだ二度目の妻は、修道尼みたいに貞節な女だったけれど、その代償もひどいものだった、ということかしら。三十年間精神的オナニーを続けてきた負け犬的エゴイスト。愚かで惨めなナルシスト。どう言ってみても少しずれてるな。でも、これだけは言える。子どもの面倒さえみてくれればとアリバイを作りながら、自分の頭には子どものことなど存在しなかったということ。子どもをどういう環境で育てるべきかなんて考えてもみななかったのね。子どもたちがみんな飛び立ってしまった後に何が残ったというの』

洋介は微睡む表情で黙然としている。少しきつい事を言いすぎたかな、敦子は首をかしげたが、こういう姿勢を取らなければ、心のバランスが崩れる脅えがあった。洋介は顔をあげて敦子を見やった。父と娘の視線は交差した奥で微笑みあっていた。その視線は言葉を超えて、はじめて見た父の姿とはじめて見た娘の姿を、互いに認め合い許し合っていた。

明るい窓をかすめて鳥影が飛びさった。杉並の家で、窓ガラスに映る緑に感じ突き当たって命を落とす巢立ち鳥が、毎年何羽かいたことを敦子は思い出した。

『下宿屋なみね。家計費をチビった報いよ』

『いや、給料袋はそっくり渡していた。ボーナスは半分に分けた。ずっとそうやってきたのだ。家賃はいらないから、安月給でもそう苦しいことはないはず。加奈はその中からヘソクリを貯めていた。わたしの小遣いは古アパートの上がりだったが、それは給料を上まわっていた。加奈に酒代を請求されても仕方ないさ。やがて、不時の出費はみんなわたしの負担となったから、遊び歩いてばかりいられない。古アパートの維持費、やはりはじめた電化製品、医療費や入園入学の費用、すべてこちに掛かってきたから、用意しておかないと加奈からの借金ということになる。加奈は自分のものをねだることはなかったし、わたしも買い与えたことはない。しかし、子どもの式日の服装や外出着などは、ちゃんと調べていた。加奈はハウスキーパーとして恵まれてはいたが有能であった。わたしは経済面ではいつの間にか、加奈の言いなりになっていたが、べつに窮屈ではなかった』

『お父さんが納得してそうしつめたんだから、それはそれでいいけれど、俊行が生まれてから事態は少しずつ変わっていったわね』

『俊行は生物学的にはわたしと加奈との間に生まれた子どもだが、あれは聖母マリヤの処女生誕と同じなのだ。加奈は粗衣粗食に堪えて、ひたすらキリスト生誕のための経済的条件が整うのを待っていたのだ。見通しがつい

『あたしたち家族は揃って食卓を囲んだ団欒の記憶はなかったわね。夕方あたしたちは早々と食事を終えて子ども部屋へ追い込まれたものだった』

『あの頃は普通のサラリーマンの家ではみんな似たり寄ったりだったろう。相良の家でのお前の戸惑いも分かるが、それも時代の流れだろう。加奈はお前たちを寝かせると、どんなに遅くなくてもわたしの帰るまで食事をせずつに待っていた。給仕しながら一日の事を報告し幼いお前たちのこともあれこれ楽しそうに話してきかせたものだ。そしてわたしの食事が終わってから残りものなど集めて最後に食事を済ませた。そういう形はずっとつづいたのだ。古い格式ばったしつけの名残りと思われ、わたしは好きではなかったが強いて改めさせもしなかった。献立や調理の好みを言うのと、素直に注文に従おうとつとめていた。加奈のそういう姿をみると、なぜか、この女をこれ以上不幸にしてはならないという責任さえ感じたものだ』

『お父さんの話をきいてると、焦れつたくなるな。雌の役割を果たせない妻なんだもの、そのくらいの事あたり前でしょ』

『若い時は晩酌はやらなかったが、たまにはビールでも飲みたいこともある。酒屋が近いからすぐ買ってくるが、ビールとお撮みでいくらくらい払いましたよ、と請求するのだ。最初は度肝を抜かれたがやがて馴れてしまった』

てからわたしのところへ人口受精を受けにきた。あの子が加奈だけの子どもであることを立証するために、出産育児に関する費用は一切自分でまかかった。玩具でさえ自分で選んだもののしか受けつけなかった。わたしは奇妙な実験に呆れながら、加奈の意思に従った。もちろん将来の教育費については考えていたが、ついぞ加奈から請求がないまま済んでしまった。そんなわけだから父親のわたしだって、自由に抱かせてもらえなかったし、歩くようになって一人息子の手を引いて誇らかに散歩に出かけることもなかった』

『あたしも可愛い弟の子守なぞしたことないもの。俊行は加奈さんだけの子なんだと諦めてしまった。奇妙な実験だなんて、たった一人の跡とり息子の教育を、そんなふうに言っているお父さんも異常としか思えないわ。加奈さんの呪術に金縛りになっていたみたい。』

中学高校ぐらいになれば少しは世間のことも判ってくるから、あたしたちは俊行の特別待遇についてずいぶんヒソコウガイもしたわ。例えばあの親子の部屋には電蓄があつて、ポリ・ウムは抑えてあつたけれど、前を通ると静かな音楽がよく流れていたわ。童謡からクラシックまで雑多だったけれど。あたしたち何べんも語りあつたあげく、あの意気地のない親父と風変わりな母子は、同じ屋根の下に住んでいるというだけの、愛情も抑圧も感じない他人であるという結論に達したの』

『わたしには子女の教育について定見はなかった。年齢相応の配慮は必要だが、子どもは自然に成長するものだという考え方だったのかな。その必要な配慮も怠っていたのかもしれない。』

加奈は妊娠する前から育児書や教育書を読みあさって、方針を固めていったようだ。つまり俊行は加奈のしつらえた試験管の中で培養されたようなものだった。家庭でも母親以外とはほとんど会話がなかったし、幼稚園でも小学校でも、誰とも口をきかず誰とも遊ばなかったらしい。父母会や家庭訪問で先生からその事を告げられても加奈は困った様子は見せなかったな。それでも成績は上の部だった。

お前たちが出ていってからは、一家の中心は俊行となった。わたしは加奈にとってはただ給料を家へ運ぶ奉仕者に過ぎなかったろう。幸か不幸か、凡庸なわたしも年功のせいで出先の責任者として転々と回ることが多くなった。加奈は俊行と二人で家に残り、方針通り気兼ねなく教育できたはずだが、あの子をコントロールできたのはせいぜい高校までだったろう。大学へ入ったら、だんだん家によりつかなくなってしまうた』

『でも、あんな子がどうして、季節外れの学生運動になんか飛びこんでいったのかしら』

『わたしにもよく判らない。両親に対する反発が形をかって爆発したものか。現代の救世主には激しい憎悪が情

マキリのように食い殺されなかった幸せを喜びたい気分になさえたものだ』

『現にお父さんは食い殺されたと同じじゃないの。杉並の家から追い出されて、ここに隔離されてるんだから。家を出てしまったあたしが、いまさら大きな口は叩けないけれど、訳の判らないことが多すぎるわ』

『追い出されたんじゃない。自分から出たのさ』

『それにしてもお父さんはあの樫の木立に囲まれた家であたしの知らないお祖父ちゃんやお祖母ちゃんに育てられ、結婚し出征し復員し、それからそこで生涯のほとんどをずっと暮らしてきたのよ。あたしも睦子もお父さんといっしょに少女時代をすごしたんだわ。早春の空に咲いた辛夷の白い花はいつまでも忘れられない。あそこはあたしたちみんなの故里なのよ。何度かあの近くを通りかかったことがあるの。でも、加奈さんと俊行が奇妙な生活をくりひろげ、お父さんが端っこで小さくなっている姿を思い浮かべると、懐かしいけれど足が向かなかったわ。去年伯母さんからあの家には加奈さんが一人で住んでいるときいて、力抜けしちゃうた』

『わたしの親父は大震災で大儲けし、さかんに家作を建てたが戦災ではとんど失った。あの成り上がり趣味の古い西洋館がその形見だが、もう耐用年数は過ぎている。懐かしいけれど執着はない。莫大な補修費をかけて誰が住むというのだ。わたしが死ねば、俊行はあんな家屋敷

熱のエネルギーとなるらしい。父親の精子の中にもついていた憎しみがまだ生きているのかもしれない。目標を決め戒律を設けたら一途に進んで行くという母親の気性も受けついでいるのだろう。とにかく、地方の出張所長を最後に停年退職して落ち着いてみると、広い家にわたしと加奈の二人が残っていた』

『もう三十五六になるんじゃないかしら。今どうしているの』

『加奈は知っているだろうが、話しもしないし聞きもしない。彼には彼の使命があるのだろう。一度母親を尋ねてきたことがあったが、わたしには会釈して通りすぎただけだ。加奈はあの子に時々送金してるんじゃないかと思うが、これは想像にすぎない』

『加奈さんガツクリ来たでしようね。多少いい気味だって気もしないではないけれど』

『ああいう気性だから態度には見せない。俊行が飛び出した頃から、加奈は書道をやりはじめたのだ。もともと下地はあったようだが、わたしと二人きりになった時分はかなり熱を上げていた。やれ講習会だ展覧会だ、やれ大先生の個別指導だと、自宅研修以外にけっこう時間も金もかかるものらしい。ただ、素人のわたしの目からの評価だが、風格のあるりっぱな書だと思ったよ。なぜかしらわたしは、加奈をそら恐ろしくさえ感じたことだ。一匹の雄としての役割を果たしてしまつたわたしが、カ

は売り払うはずだ。加奈にも異存はなからう。家は壊され木立は切り倒され、さてその敷地に何が建つか。マンションかそれともラブホテルか』

『そんな事させないわ』

『消えるものは消え、絶えるものは絶える。それが自然のなりゆきというものだ。』

加奈はわたしの年金をそっくり受け取っているし渡した退職金の半分もうまく運用しているようだ。それに近所の娘さんや奥さんを集めて書道塾を開いているから、経済的にはゆとりがあるはず、足手まといがいなくなれば楽がでしよう。わたしの方はアパートの土地を売った金でこのマンションの一室を買い、あと僅かな老後の生活設計はできている。これは親父の余慶であって誰にでもできる事ではないのだから有難いことと思っている。ここでもう三年になるが不満はない』

『きちっと仕上がつているんだから、あたしが口をさしはさむことはないけれど、お父さんと加奈さんという二人は一体何だったのかしら。加奈さんて人は素敵な一生の職業にありついたものだと感心するけど、愛のない生活を三十年も共にしたあげく、自分の収入ばかりか親から受け継いだものまで奪われてしまうなんて、ただ呆れるしかないわ』

『愛のない三十年か。愛という言葉は人の心に魅惑的にひびくものだが、これはどあいまいでいいかげんな言葉

はないんじゃないか。そう思いつつ心に浮かべ口にしてしまう。これは神が人間に問いかけた謎かもしれない。加奈と結婚する前後はそんなもの糞くらえという心境だったろうな。耳あたりのよい単なる言葉だと割り切っていたつもりでも、やっぱりその謎に囚われていたんだろう。その言葉を忘れていた時が、心をもっとも安らかに保てる時だということを知りながら、その謎を心の隙間から叩き出してしまうほどには人間は強くないらしい。精神分析という学問をまともに勉強したことはないが、男女の愛についてのわたしの体験的独断をひとつ聞いてみてくれ。わたしは荒んだ気分でも遊びをした時期もあるし、地方回りをしていた時には、一人の女とやや長くつきあっていたこともあった。わたしと女を結び付けるものはしゅせん金だった。愛というものはこんなチャチなものかと自嘲する思いが心の片隅に常にありながら、束の間の情事はほとんど愛と紛うばかりの安らぎを与えてくれた。わたしはそれに気づくと狼狽して、その虚しさを心に強いた。そして再び、加奈との間には得られない束の間の安らぎを求めずにはいられなくなるのだ。これは決して浮気ではなかった。冒険もスリルもなかった。それだけに自分の惨めさが身にしみるのだ。

ところで妙な話だが、男女交合の姿態というものが、恐ろしいほど無防備であることに気づいたことは無かったかな。それは生物にとっては生涯に一度の死をも恐れ

ぬ行事だった。人間はそれを遊戯化したがる、それが死をも招きかねない冒険であることを原始の潜在意識は知っている。裸身で肌を接する男女は相互の信頼関係に賭けているのだ。意識に上らないその充足が愛情の土台となるものだ。そのような信頼関係はセックスの上だけに成り立つものとは思われない。

わたしと加奈とはたしかに不完全な夫婦だった。好き嫌いという点からいえば、わたしはああいうタイプの女は苦手な好きにはなれない。しかし信頼はおけた。わたしは衣食住すべてについて、好みはともかく、常に加奈から心くばりや気づかいを受けていることを感じていた。もし愛もなく男と女が生涯の大半を共に暮らせるはずがないものならば、わたしは加奈の思いやりを愛とうけとるより他に救いがない。加奈の愛に対してわたしは経済面で応えた。これ以外にわたしには手段がなかった。これがわたしの愛であった」

『議論してきたわけじゃないから、お説はお説として承っておきます。妻も家政婦も商売女も、ひょっとしたら娘だって、お父さんにとっては一人の女として等距離にあるみたい。そこに在る信頼関係の上に陽炎のような愛の幻影を見ることができるの。ちょっと哀しいけれど非難することはできないわ。お坊ちゃん育ちのお父さんの胸のロケットに何が入っているのか知らないけれど、期限切れの昔の免許証ではどんな車にも乗れやしないのよ。

愛の幻影をすっかり握まえて、加奈さんと暮らしていればよかったのよ』

『セックスが無意味になっても、男と女は扶け合って情性的に生きていくというのが世間の一般らしい。わたしも加奈との間に昆虫のように一度の生殖行為を行なったし、燃えあがる愛の思い出はないが、老後を番いですぐ資格がないわけではないと思っていたのだ。

そんな考えが甘い勘違いだったと思ひ知らされる機会がやって来たのだ。早く言えば、わたしが家政婦より看護婦が必要な年頃になったということ、そして家政婦と看護婦とは職能が違うということを知ったことなのだ。

杉並の家から石神井のアパートまで歩いて三十分ばかりだが、退職してからは運動がてらに毎日のように通った。わたしの唯一の収入源だったから、住人たちとは前から親しい間柄になろうと努めていた。奥さんたちの苦情もきき小修理は自分でやったりした。もう一棟建てるゆとりはあったが、増え始めた車の置場を潰す気はなかった。アパートにつくと、あちこちに声をかけ、手すきの家で奥さんと茶飲み話をしたり草むしりなどして帰るのだ。管理はずっとあの不動産屋に委せてあって、加奈は関与していない。

梅雨明けの強い日差しの中で草むしりしていて、突然倒れたのだ。気がついたら病室だった。昔ふうにいえば軽い卒中だったのだな。病院はわりと近かったからアパ

ートの奥さん連中は代わる代わる見舞いに来てくれたし、不動産屋は車で加奈を迎えにいつてくれた。精密検査が終わって後遺症が残らなければ、一週間で退院できるという医師の言葉をきいて、加奈は一応安心したらしく、付添婦の手配をして帰った。退院の日まで顔を見せなかった加奈は家に戻ると、あたしくあなたの看病はできませんから付添看護婦を雇ってください、と言った。そんな大袈裟にしくなくても暫く休めば元通りになるから、と抑えたが、住込みの看護婦をすでに一月契約してしまっただという。加奈の言葉には断固たる響があった。年配の看護婦は中々行き届いた人だったが、病状は大したことではない。二週間もすると付添られて庭を散歩できるようになった。加奈は朝晩、お加減はどうですか、と顔をのぞかせたが、食事、排泄、肌着の取替や洗濯などすべて看護婦任せであった。その間、週二回の書道塾は休まず行われ、終わってから挨拶を交わして別れていく女たちの若々しい声が枕べにとどく時もあった。幸い一月もたずにわたしは平常の身体に戻った。しかし、入院費用から看護婦の料金など、わたしの負担する医療費はかなり額になった。加奈はわたしのために大事をとってくれたらしいが、自分の日常計画には何の支障もなく少しの犠牲も払ってはいないのだ。こんな愚痴はお前には甘えにきこえるかもしれないな。

お前がさっき言った言葉、お父さんと加奈さんの二人

は一体何だったのか、それと同じことをわたしは一月の病床生活の中で考えはじめていたのだ。加奈がわたしのために計ってくれる日常の気づかい、今となってはそれだけがわたしの縫いつく一本の蜘蛛の糸だったのだが、その裏に言いようのない冷たさを感じるようになったのだ。愚かな邪推とも我ままな高望みとも思い返してもみたが、加奈が古い病んだわたしの身体に触れるどころか近付くことさえ厭っていることは疑えなかった。病室の想念は孤独感を糧として蠶のように拡がるものらしい。お前たちが去り俊行が去り、今や自分が余計者になっていたことを悟らないわけにはいかなかった。いつまでも生をむさぼる気はないが、せめて死ぬ時は周囲の人々の親切に感謝して、安らかに死にたいと思うようになった。どこか適当な老人ホームがあったら入りたいと加奈に話すと、哀しげな顔をして引き止めたが、わたしの決意は変わらなかった。

それからここへ入居するまでに一年かかった。都道の拡幅のため補償金をもらって立ち退く人たちの替地として目をつけられたのが幸いした。この話は早くまとまったが、長年付き合ってきたアパートの住人の処置がたいへんだった。例の不動産屋はもう息子の代になっていたが、引き続きよくやってくれた。折よく新築アパートが近くに出来かかっていて、その入居管理を引き受けていたので、完成をまってほとんどの家族が優先的に入居で

きた。家賃が少々高くなったので、引越料や権利金には充分な上積みを支払った。こういう時には長い間の気心知れた付き合いが役に立つものだ。

入居するまでの間、加奈は常と変わらずこまやかに世話してくれ、わたしの身を案じて何度かいっしょに不動産屋へも足を運んだ。傍目には羨ましいほどの老夫婦に見えたことだろうが、たまにどこかに寄って食事などするとあいかわらず割勘だった。わたしは入手した資金から一円たりとも加奈に与えなかった。加奈もその件には触れなかった。売買価格は億に近かったが、税金や諸経費を差し引くと三分の一になっていた。これでマンションを買った残金がわたしの老後の生活費となる。他に収入はないのだよ。ここへ来てからもう三年になるが、まだしばらくは保つだろう。

『加奈さんはたまにはお見舞にくるの』

『入居する時はついて来てくれた。それ以来顔は見せない。忙しいのだろう。電話は年に何回か時候見舞いのような事言っ掛けてくるよ。去年の春だったか、遺言書について話したので伺いたいと電話があったが、必要ないと断った。僅かばかりの遺産をめぐって遺言書など認める気はなかった。加奈はすでにわたし名義でかなり高額な生命保険を契約してあるから、心配はないのだ。加奈と会って、やっと得た平安を乱したくはなかったからな』

『なんだか恐ろしい人ね』

『時々不気味な感じはしたが、恐ろしいとは思わない。憎んでもいい。ただ、自分とは無縁な女と思うようにはなった。よく判らないんだ。お前はさっきわたしに痛烈なレッテルを貼りつけて小首をかしげていたね。周囲の人にレッテルを貼るのは、実生活の便宜上どうしても必要なことだが、その人に貼られたレッテルをもう一度見直してみることも大切じゃないかな。わたしは加奈という女になんべんレッテルを貼りなんべんそれを剥がしたとか。そのうち加奈を自分なんか及びぶもつかない格上の人間かもしれないと考えるようにさえた。幼い俊行を抱いて立った加奈の姿は、まるで愛と威厳に溢れた聖母像だった。そんなふうに昔の情景を思い起こすことがあった。もとは由緒ある家柄の出だそうだが、貧しい父子家庭に育って孤児となった加奈は、朽ちかけた樹木に寄生して着実に成長していった。その生命力の逞しさ戒律の厳しさには脱帽せざるを得ない。勢いに負けた者は逃れて他に活路を求める他ないのかもしれない。お前の祖父が建てたあの木立の中の白壁の館を夜更けてひそかにのぞいて見れば、古びた神々しいマリヤ像が薄明の内に浮かんでいるかもしれない』

『そんな寝言をいってないで、現実に戻りなさいな。どうしても納得いかないのは、あの人の頑強なセックス拒否だわ。それにどういうレッテルを貼ったの』

『中年過ぎて小さな役職を与えられれば、仕事第一というのがサラリーマンの常だ。加奈のセックス拒否は当初からのことで、その補いはつけていたから、わたしにとってそれは大した意味はもたなくなつた。しかし心が遊んでいる折には、ふとその謎が浮かぶことはあった。加奈の願いに応じたとき、わたしは加奈がすでに男を知っていることに気づいた。それは世間知らずの小娘がたつた一度の過ちを犯したなどというのとは違うんだ。この事実とセックス拒否をどう結びつけたらよいものか。無縁の女の謎ときは実生活と関わりのない遊びに過ぎないから、わたしは妄想の限りをつくして、たくさんの物語を作りあげたものだ。恐怖感とも罪障感ともとれるその秘密をさぐることは、多少サディスティックな楽しみでもあった』

『例えば、堅く将来を約束した人がいたとか、レイプされてずるずると脅迫に應じていたとか……』

『テレビドラマに出て来るような話はレパトリイの最初にある。ここへ来てから、その謎に加奈のわたしに対する看護拒否という要素を付け加えた。わたしは加奈の不気味な冷やかさの意味をもう一度考えてみたのだ。加奈は長いこと父親の療養生活に奉仕して、その死を看とってから嫁いだのだ。この事実からわたしはまたいくつかの物語を作った。時には加奈が上衣の下に重い錘を日夜ぶら下げているロシヤの聖人のように思えることもあ

り、時には飢えた虎に身を投げた高僧のように思えることもあった。離れて住むということはいよいことだ。心になんやとりが生まれるからな。いずれにせよ、加奈にとってわたしは単なる道具でしかなかったのだろう。わたしも自分の死の足音がきこえてくる年頃だと気づくと、そんな謎とき遊びはどうでもよくなってきた。ただ、わたしは加奈にそれほど酷いことはして来なかったつもりだ。それが慰めだ』

『……………あたし、お父さんという人も判らなくなってきたわ』

『喋りすぎて少し疲れたようだ。あそこの受付の横にスタンドがあるだろう。ジュースでも買ってきてくれ』

オレンジジュースの缶の一つを洋介に渡すと、敦子はサドルームの窓際に歩みよった。鉛色の静かな海を小さな汽船が這っている。右手の山の尾根には眼をこらすと小さな白い塔がみえた。眼下に支線の駅があった。芳夫が喜んだNゲージの列車が発車したところだ。人けないプラットフォームは羊かんの空き箱となった。とまった蠅の影が擦れる。明るい午後がいつしか青い隈どりを増していた。

母についての知識は明代伯母からききとただけしか、敦子の心にはなかった。母のことをききたくて尋ねてきたような気もした。背丈恰好はあたしとどうかしら、伯母さんから察して面長な和風美人かな、肌の色は健康な

いからすぐ忘れちゃうんだけど、ドイツの詩人だったかしら、明日世界が滅びることを知っていても今日このバラに水をやることは怠れない、そんな意味の詩の一節を若い時読んだことがあるの。あたし感動したけれど、今思い返すと当然のことと思えてくるわ。一人の人間にはそうする以外に途はなかったのよ。夜が明けたその日を充実して送ることが亡びに対する抵抗だと思うわ』

敦子は自分に言いかけせるように言った。この父を悩みの聞き手にしないでよかったと思う。まだあたしには明日を信じる力があるのだ。

『お前も年の功か、うまいことを言ってくれるな。私もお前の言うように、死が美しい光を放って訪れるまで、一日一日を大切に生きていこうと思うよ。どうだね、老けこんで醜くはなつたろうが、わたしの顔はそれなりに活き活きして見えないかね。無理強いかね』

洋介は茶目っぽく笑った。

『そうねえ…………』

敦子も口もとで皮肉げに笑って、こめかみのあたりに肝斑の浮いた父親の横顔を見つめた。これが出る年寄り活き活きするときにいるが、敦子はただ老残の色を見た。

『加奈さんよりは長生きしてね』

『それは無理だ。あれはスパーウマンだし、こっちは時限爆弾を抱えた病人だもの。もしわたしが活き活きと

小麦色がいい。表情や言葉の癖、似合う衣服、好きな作家、趣味、そして父との出会い、母のことなら何でも知りたいと焦がれた時期があった。今敦子は若かった母の母親ほどの年齢になって、あの厳しい時代に愛の灯を燃やし尽くして命を絶った和代という一人の女を、冷静に見つめることはできそうだが、愚かな、と言いきる勇氣はない。羨ましい気さえする。それは若さへの羨望であろう。この愚直な父は生涯をずっと母の亡霊と過ごしてきたのではなかったろうか。いまだ母について問い質せば、父はまた呂律の回らぬ論理で母を庇うことだろう。敦子は父に辛い思いをさせまいと思った。

敦子は洋介の隣りに戻って笑いかけた。

『十年ぶりに親不幸な娘が会いにきて、いろいろ厭味を言ったけど、すこしは気ばらしになったかしら。あたし、お父さん、て言葉をこんなにたくさん口にしたことなかったわ』

『こういう下らぬお喋りを飽きずにきいてくれるのも、実の娘だからだろうな。血の繋がりにんて、人間の小賢しい打算のこもった言葉だろうが、共に過ごした日々の記憶というものは大切だ。睦子に対してもわたしの思いは同じだよ。たった二人きりの姉妹なんだから、お前が力になってやってほしい。お願いするよ』

『当たり前じゃないの、そんなこと。そんな湿っぽい口調にならないでよ。もう昔のことはきかないわ。頭が悪

見えるならば、それはこの年になって恋をしているからさ』

『まあ、そんな若やいだ気分になれるのなら安心だわ。それにまだ七十そこそこなんだもの』

『いや、恋とは冗談だ。好きな女友だちと言い直そう。聞いてくれるか。昨年入居したその人とは、園芸クラブで知り合ったのだ。このグループの中には、盆栽や菊作りなどに一廉の権威らしいことを言う先生もいるが、ベ

ゴニヤやゼラニウムなどの鉢を並べてやとゆっくり花作りができるようになったと喜んでいる人もいる。ここは東京あたりより土地も高いし空気もきれいだから、念願の山草作りに熱を上げていたところだった。その人も花が好きというだけの初心者だったが、平地ではなかなか見られないヨウラクツツジやイワシャジンなどの美しさに魅せられて、わたしと言葉を交わすようになったのだ。

どんな経歴の人か知らないが、年恰好はわたしと同じだが若々しく、まだここで老けこんでしまうほどの年寄りとは思われぬ。何か事情でもあるのだろう。ともかくその人との会話が楽しいのだ。過去にあってなかったものだ。わたしが一歩先んじているのは草花のことぐらいで、話の合間に万葉の一節など口ずさまると恐縮してしまう。と言って決して厭味な銜いはなく、ユーモアを解しジョークを飛ばすことのできる人だ。付き合いたいって、ふだん出会えば会釈して通るか、季節向きの手入れ

などちょっと立ち話するくらいのことだ』

『それがお父さんの、恋、なのね』

敦子は子どもをあやすように笑った。

『いや、戯れに、恋、といったのは、自分の心にかすかに動く感情に気づいたからのことだ。missという単語があるな。不在感とでも言おうか、別に意識してはいないんだが、一度も顔を合わせなかった日の空しさ。明るい人当たりのよい人だから誰とでも立ち話するんだが、話し終えてそのまま立ち去る後ろ姿を見る寂しさ。ずっと昔、そういう微かな感情の動きを悟ったことを憶えている。それが恋の芽生えだったのだ。今はまさか。多くの人に悦びを与えることができる人に幸いあれだ。わたしは月一回の園芸クラブの例会でのお喋りや、朝ベランダへ出て鉢の手入れをする時の出会いを待っただけだ。それだけで生きる張り合いがあるというものだ。たまには食事のあとロビーでお喋りできる時もある。その人の表情や言葉は、わたしの渴いた心に清水のように染み込む。それがわたしの、恋、なのだ』

『文殊菩薩みたいな方ね。あたしも一度拝んでみたい』

敦子は哀れむように父を見やった。この人は母についてもたくさんの物語を書いたことだろう。ふと母を憎いと思った。それはほとんどジェラシーに似ていた。

『その方の名を当ててみましょうか。お父さんの妄想物語のヒロインの名は、和代』

うすみどり色の林檎 (その一)

息子や娘たちへの書簡

山根 三枝子

これから私が喋り始めることは昭和二五年春頃からのことで、場所はといえば国分寺にあった国鉄公舎界隈である。中央線国分寺駅から十数分歩いた所に私達一家が住んでいる宿舎があった。当時は現在のように駅に南口という改札口は未だなくて、北口にだけ小さな駅舎があった。駅の南側は雑木林になっていて、更にその向うには国分寺第一小学校があった。駅の北口から外に出ると正面に真直ぐ中央線に対して直角に商店街が通っていた。色々なお店は以前から出来ていたようで、昔ながらの古ぼけた家並であった。商店街のつつき廻り、つまり駅を出てすぐの所で左折すると、木立やまばらな住宅のあゝるいくらか淋しい感じのする道になっていた。そこを二百米程行くかいかないうちにT字路につきあたる。そこで左折するとすぐに中央線の上にかゝった陸橋がある。それを渡って行くのが本道の道なのであったが、そちらに進むと大変遠回りになる。それで陸橋を渡らないで手

広いロビーに敦子の甲高い笑い声がとびかった。

嘘よ。弱小なグラフィック誌は大手の進出で潰れかかっているの。そろそろ身の振り方を決めなきゃならないわ。あたしの周りの男なんてロクな奴はいなかった。一度ご褒美に許してやると、手錠を掛けた刑事みたいに横柄になったり何とか穩便に食い逃げしようとしてわしをわたり、たまに惚れてやれば別れたはずの女房がまだいた。りして。それにしても、五十過ぎてから再婚した明代伯母さんて、大したものね。

頬に伝うものをぬぐわず敦子は笑いを作っていた。侘しすぎる、そんなこと考えるなんて。まだあたしには仕事があるんだぞ。もうすこしで、渴いた父と娘が嘘を吐き合う惨めな場面になるところ。でもこの人は母を許している。この人の愛したのは母の幻影だけだった。大正村ができたから飾っておきたいような人。

不意に洋介がよろめいて敦子の肩にもたれてきた。

『敦子、お前が来てくれてうれしいよ……』

言葉がもつれていた。敦子は父親の肩をしっかりと抱えた。洋介は乳を吸う赤児のように口をもぐもぐさせているが、意味は聞き取れない。敦子は腋深く腕をのぼしてだきとめ、顔を寄せて、お父さん、と呼んだ。繰り返すし呼んだ。受付に助けを求めて頭を回すと、もう二人の慌ただしい足音が近^{つい}づいていた。

前の所で右折する。この狭い道は便宜上の仮の道であったが、利用者はかなりいたようだった。左側はなだらかな青草の生茂る崖になっていて、六・七米下を中央線の電車が走っていた。右側はすぐ手でも触れることが出来る近さの所にコンクリート板で出来た塀が続いていた。そして塀の内側はこもりとした木立になっていて、日立研究所があると言われていたが、それらしい建物など全然姿を見せぬ位森閑とした繁みであった。しばらく進むと階段があつて下に降りていくようになっていた。階段といつても鉄道の枕木の古材を無雑作に少しばかり並べただけであつて、雨などの折に滑り落ちていかないうにしかただけのものであつた。下まで降りると道は中央線のレールと同じ平面になる。線路を左手にみて進むのだが、今度は右手がなだらかな崖になっており、灌木や雑草が茂り、ぐっと下方の奥まった所にさっきの日立のコンクリート製の塀のつつきが見えていた。そしてその

堀のあたりか或いは研究所の中に湧き水があるといわれていた。その湧き水は中央線の下をくぐって線路の南側に広がっている低地の真中を、小川となって南の方に流れていた。その辺りには田圃なども残っていて田園の風情があり、春にはレンゲ草の花などをハッとするような珍らしさで見ることが出来た。この線路脇の小道を進んでいくと三十度位の角度で右手の斜め前方から西武国分寺線のレールが中央線に平行に並ぶように山かけから進入して来ていた。丁度この辺りで数本あるレールを横断するのであった。当時はダイヤも今日程混んだものではなく一時間にせいぜい上・下とも三本位が往き来していたのではないかと思う。だから線路を横断するのも、そんなに危険とも考えず、主に通勤者や買物の主婦達が利用していたようだった。私なども「危くないな、大丈夫だな」なんてつぶやきながら、左右を確かめて巾広の線路を横切ったものだ。子供達にも勿論よく注意してあった。線路を渡ると、又さき程のと同じような枕木の階段があり、上に登る。すると二、三軒位住宅があつてすぐに千坪位のくぬぎ林になっていた。武蔵野の面影を多分に残した林で、その中を人間が歩いて自然に出来た道がうねうねと横切っていた。夜になると、冬ならば月が無くても枯枝を通す星明かりがあつたが、木立の繁る夏には真の闇となつてしまふ道であつた。林をぬけ出た所から始めて百数十軒ばかりの同じように建てられた国鉄の

戦前の鉄道省時代に建てられた官舎は、そこに住む人が工場長か課長か職場長であるかというようなことで、家の広さや設備が異なっていた。しかし鉄道省から国鉄公社へと国鉄自体が変っていく経過の中で、そして労働組合の力がだんだん強くなっていくという社会的な変化の中で宿舍自体も平等にという方向に進んでいったようだった。

国分寺の宿舍はたしかに粗末でせまかった。色々な種類の人達が住んでいた。しかしまわりの自然は、古い街大宮とは比べものにならない位美しかった。新しく切り開いた土地であつたせいであろう。宿舍附近の舗装なしの道路や庭の土のようなものでさえ、何か新鮮な匂いを漂わせていた。殆んど家が幾分か差はあつても道路より高くなつていて、庭の側面の道路側の土手には夏には茅やすすきが背丈以上にも生い茂り、秋にはあちこちの家々の庭には、手入れもしないのにコスモスが咲きみだれて美しかった。すすきの銀色の穂の間からピンクのかわいらしい萩の花がこぼれるように咲いたりした。空気が澄んでいるせいか、すべての物が、特に木々の緑がキラキラと輝いているような環境であつた。戦争も済み、どうやら闇のお米やパンなども自由に買うことが出来るようになり、衣類もお金さえ用意すれば何んとか買えるようになって来た。そういった世の中の落付きを取戻した中で、主婦達がイソイソと家族達の洗濯ものや布団な

宿舍があつた。それらは終戦後に建てられた大へん粗末なものであつた。窓ガラスが無くて半透明の丈夫な油紙様のものがガラスの役を果たしていた。これは間もなく順番にガラスに替えられては行つたが、量もふちのないあらい目の畳表で、一部屋は板の間にして、畳の費用を省いていたようだった。四月に何人ともなく新鮮な希望のような気持も持つて引越して来た時に、この狭くて粗製の家を見て私は「ヘエツ！」という様な驚いた顔をした。そしてそれを見た武郎は一寸でれくさいような済まないような笑いを浮かべた表情をした。

終戦後武郎の勤務先が逋信省から鉄道省に変わり大宮の官舎に住むようになった時、戦中戦後の手入れをしない期間を過ごしたあとの家ではあつたが、一応堀に囲まれて引戸のついた門もあり、庭には小さなお池や一寸した築山もある家が貸与された。勿論古ぼけて台所なども何となく汚らしい家ではあつたが。大宮には鉄道省の工場の中では一番大きくて工機部とよばれていた鉄道工場があり、二千八人の従業員が働いていた。そしてその工場に勤務する人達の為の官舎があつたわけだが、工場長の一号官舎から始めて、機関車課長・客貨車課長・設備課長・又診療所長や技能者養成所長などの比較的ゆつたりした広さのある官舎が一群となつて建っていた。更に奥の方には工場以外の鉄道員の官舎も沢山あつたようだった。他の省より一段と封建色の濃かつたといわれる

どを大事そうに竿に干す姿なども眺められた。

引越して来た当時は小学校の二年と三年になつたばかりの長男・次男、そして学令前の長女達は広々とした原っぱや中央線のレールの下を流れる小川のほとりの田圃などで遊んでいたようだ。冬になって雪など降ろうものなら、大喜びで高台から田圃の方へ櫓で滑り降りたりした。その櫓は青竹を二つ割りにしたもの二本、密柑箱の底に打ちつけた簡単なものであつた。その青竹も附近の三角山という所から子供達が採つて来たもので、上級生・下級生で大騒ぎして金槌のトントンという音や鋸の音をさせながら作つたものだった。そして順番とか公平さを充分わきまえて滑り遊びしていることを私は確かめて知っていた。兎角テレビなど無い時代であつたので、学校から帰るとすぐ外に飛び出してしまい、自然の中で遊び呆けていたようだ。

夏など一寸日照りが続くと関東ローム層といわれる土の為か、いくらかカーキ色を帯びた土がまるで砂のようにボカボカになり、子供達のズック靴といわず足も上の方まで泥と埃にまみれ靴の中などは足の油っ気と泥で黒光りしていた。勿論余程寒くないと靴下などはなかった。何かの用事で鼠のような素足しっこで家の中に入つて又出ていったりしたあとは、縁側には足跡がはっきり分かるようになっていた。

そんな頃のことであつた。当時横浜に父母が住んでい

て、確か母が風邪引いて寝込んでしまっていたので私は援けに出かけた。帰りがつい遅くなって八時頃になってしまった。そんな時は晩御飯は温めればすぐ食べられるように豚汁などを用意して、父親が帰宅してから食べる手筈にしていた。しかしその夕方は父親が何かの都合で帰宅が何時もよりずっと晚くなってしまっていた。私が駅からとぶような速さで帰宅してみると、電灯も点けないまま、開けっ放した家の中はひっそりしている。どうしたのかしらと家の中に入る。あの家の板の間の六畳の部屋の押入れは二段ベッドとしても使用出来るように作られてあり、下段は床より三、四十センチ位高く、ふすまの代わりに木製の棧になっている引戸がついていた。上段から転りげ落ちることのないようにする為で、勿論はしごも付けてあった。丁度頭の部分がくる東側の壁には、上下段とも小さな窓がついていた。うちでは勿論二人の息子達の為にベッドとして使っていた。マットレス等ない板の上に布団を敷いていたが体重の重い大人だったらさぞ痛いことだっただろうと今にしては考える。その晩は月夜で冷えびえとしてきた武蔵野の空気を透して昇りはじめたばかりの月の光が差し込んで来ていた。三人の子供達はそのベッドの下段に一枚だけ敷きのべであった布団の上で何も掛けなくてぐっすり眠っていた。丁度子猫か仔犬のように体を折りまげ三人が重なり合って暖め合うような恰好をして、汚れた手足のまゝ眠っている。

た。晩御飯は食わずに寝たらしかった。秋も肌寒さを覚える頃であったが、庭に面したガラス戸も開けたままで、その庭先の四ツ目垣の先はうつつと原っぱになっていた。すすきの穂をさわさわ動かす風ばかりか、泥棒であろうとも、又天使でも悪魔でも何だかって自由に出入りするものが出来たことであろう。あの時の子供達は未だ憎しみを知らなかった。愛と平安のうちにあった。又こんなこともあった。引越して間もなくのことであつたと思う。外出した私は遅くなったことを気にしながら国分寺駅から出ると小雨が降り出していた。風呂敷か何かをかぶって、足早に歩いて駅から三、四分も来た頃、うす暗く街灯が照らしている道で長男にバッタリ出会った。大きな黒い傘をさして脇に私の傘をかゝえている。子供にお迎えに来て貰うなんてはじめてのことだった。アッ民夫だわ。

「まあよく迎えに来てくれたのね。暗いのには怖かったでしょう」

私は家から少しの所にある真暗な雑木林の中の道のことを思った。その道は大人の私でも夜になると暗くて何となくおそろしくて通り抜けるといつもホッとしたものだった。それは今時のように痴漢とか強盗とかいったものに対するこわさではなくて、お化けとかさういった何か架空のものに対する漠然とした恐怖心であつたようだ。息子は母親に会えてホッとしたような、とても嬉し

そうな顔をして、今までどんなに必死の気持で歩いて来たかが分かるような気がした。

「あの林の中の道、こわかったでしょう？」

「うん、なんだか熊みたいなのが動いていていたのでとっても怖かったよ。でもね、熊なんか絶対いる筈ないしねー、と思ったの。それに帰りはゼッタイお母ちゃんと一緒だから——と思ってね——」
「お母ちゃんと一緒」を特に強い語調で言った。殆んど行き違ひになる心配のない道であつたが、一ヶ所だけ二通りの道順があり、運悪くすればすれ違ひになることもあつたであろうに、息子を可哀そうな目に会わせることもなくて私も嬉しかった。

そんな思い出こんな思い出のある国分寺の宿舍はなつかしい。そしてその思い出のバックにはきまって爽やかな風にそよぐ緑色に輝く木々の葉っぱがある。

其の頃近所に山本さんという人が住んでいた。御主人が一寸飲んべえさんで、碁をやるのが好きだったので、うちの武郎時々碁をやっていた。彼の奥さんは誠に氣立の優しい人であつた。腎臓を片方刳出しているとかで、子供が出来なくて、自分の姉の所の七人目の子供を貰って養女として育てていた。私は浅はかな氣持から、彼女は貰い子なんだから、山本夫人は本当の親の氣持で育てていないかもなんて勝手に思ったりしたこともあつた。しかし折にふれ見たり感じたりしていると、私が実の子

供達にしてあげているよりもっと丁寧に愛情一杯に育てていることが分つた。彼女は何時だったか眼をひどく悪くしている野良猫の目やにだらけの顔をホーサン水をつけた布でよく拭いてやっていて、私は彼女の心根にいたく感心したことがあつた。彼女の養女はすゞ子ちゃんといつてうちの長男と同じクラスだった。素直で自我の強くない、いつも隅を好んで自分の居場所とするような性質の娘で、名前通り目元の涼し気な美しい少女だった。すゞ子ちゃんのお母さんの富土絹のワンピースや、小さくなったゴム長靴などうちの娘が貰ったこともあつた。

あれは昭和二十七年の夏休み中のことだと思ふ。長女が一年生にあがつた年だったから。不思議なことに随分細かな時日のことまで覚えていて。七月廿一日にやつと晴れ上つた真夏日は、八月十一日の夕方まで一滴の雨も落さなかつた。毎日のようにカンカン輝く太陽が朝早くから雲一つない空を横切りはじめ、木や草は思いのまま繁り、近辺のローム層の赤茶けた道はバサバサに乾き切り海浜の砂地のようになつた。夏休みも丁度半分を過ぎた頃だのに子供達を未だ何所にも連れていっていないなかつた。来る日も来る日も汗と埃にまみれるやるせないような日が続いていた。

八月十一日の朝のことだった。急に思いついて私は山本夫人に言った。

「きょう相模湖に子供達連れて行ってみない？」

相模湖は昭和の始めにダムを作って出来た山あいの湖だ。私は国分寺からそんなに遠くではない所にある相模湖に行ってみたくて思ったり、山の中の湖って素適だろうなあ等と思ひ、子供達にも湖というものを見せてやりたかった。急に私が誘ったのに山本夫人は二つ返事で

「ええ、行って見ましよう。パパのお休みの日を待ってても、丁度お天気でなかったり、何んやかやと意外に出かけられないものね。」

「そおよー、今日いきましよう。先になるとお給料前でお金なくなってきたらうもの」と私。嬉しくてはり切っている時に仕事は何んと早く出来ることだろう。私はたちまちのうちに弁当を作った。台所の設備は薪で御飯を炊くかまどと七輪と石油コンロしかなかった。今考えると不思議な気がする。どんなお弁当が出来たのかは思ひ出せない。

湖に行けるということで子供達も大喜び。国分寺駅から中央線に乗り与瀬駅(今のさがみ湖駅)で下車するのであった。私は国分寺駅で皆と一寸離れて果物屋に立寄った。何を買おうかと思ひて見ていると、うすみどり色の林檎があつてとても美味しそうに見えた。四ケで百円と書いてあつた。その頃の月給は一万円位だったような気がする。だから百円の林檎は今の感で言うところ、三千元位ではないかと思う。私は四ケ買った。その時フツと山本夫人の分もという思ひが頭をかすめたが、貧乏暮らしの

くせがついていて、それ以上買うことをしなかった。何時もなんでも買いたいと思うより少な目少な目に買物をしなければ、次の給料日までお金がもたなかったからだ。戦後の苦しい生活からそういうことが癖になっていたのだ。

切符を買って電車に乗り、はしゃぐ子供達の横で、山本夫人と私も楽しくお喋りしたり、だんだん青々とした山あいに進んでいく電車の窓外の景色に、日常生活からしばし離れた解放感のようなものを味わうのであつた。

与瀬駅で下車して少し歩いていくとすぐ湖に出た。近くには茶屋のようなバラック建の家があつたり、その近くに縁台がおいてあつたりしたが、夏休みの真最中だといふのに辺りには殆んど人影などなく、異様といつてもよい位にひっそりとしていた。湖は周囲の山々にかまされて真夏の濃い緑の葉影を映してどんよりと静まっていた。

皆でベンチに腰掛けてお弁当を食べた後に、さっきのうすみどり色の林檎を出して食べたが、とても美味しく林檎であつた。どうしたわけか、その時その林檎を山本さん親娘に分けてあげなかったのだ。私がたしか「一つあげましよう」と言ったのは覚えてる。しかし遠慮したのか、本当に欲しくなかったのか、或いは他に何か果物を持て来ていたのかは今思ひ出せない。とにかく美味しいおいしいと私達親子は一つづつ食べたの

「アラ、雨模様だわ。もう帰りましよう」「アラアラ、いやね、早く帰りましよう」

「うちに帰るまでお天気もつかしら」
うす墨色の不安がサツと心をよぎった。

それいけとはかり、私達は皆大急ぎで駅に戻り電車に乗って帰途に着いた。電車の中でもしきりに気を揉んだ。空は暗くなる程曇って来ていた。国分寺駅に着いた頃には、雷鳴の先ぶれのような不気味なコロコロというような音さえ聞え出す仕末。皆で小走りして急ぎ帰った。

家に着いてものの三、四分と経つか経たぬかのうちにバシッ、バシッというあられの音からはじまって、盆を覆すような雨が真黒な空から落ちてきた。そしてふるえ上がるような稲妻と雷鳴に、私達は降らぬうちに帰ることを出来たのをほんとによかったと思つた。このすべてをよみがえらせたような夕立は昭和二十七年八月十一日の午後のことであつた。

二時か三時頃かはっきりした時間は覚えていないし又何をしてその頃までの時間を過ごしたのかも覚えていない。ふと気づくと駅の方の山の向うからモクモクと凄しい形相の濃い灰色の夕立雲が出て来た。あんなに晴れていた空が何時の間にか青空の部分が無くなっている。

それから間もなく山本家は転任で郡山に引越して行ってしまった。そして翌年賀状が来ないので変に思つていた所、間もなく山本夫人の死を知らせる便りがあつた。あんなにいい方が、と心から残念で淋しく思つたことだつた。山本氏は其の後に再婚したとかいうニュースがはいった。一年に一度だけ交わす年賀状には後妻さん

の名前もみられるようになり、一通の賀状といえども何んとなくよそよそしさを感じさせるものを持っていた。

あの頃から十年以上も経過した。そして当時一年生だ末娘が高校をボツボツ卒業する頃だった。大学に進むとしても大人らしいよそ行きの服が要る。伊勢丹でイージー・オーダーの服を注文した。出来上ったので私が娘の代わりに取りに出かけた。服を渡して貰う時に女店員が言った。

「あ、山根様ですね、私、出来上がり品御手渡しの係のものです、山根様がお見えになりましたしたら知らせて欲しいと申しております人がおりますので一寸お待ち下さい」

しばらく待っていた。するとそこに現われてきたのは、十年以上も前に別れそれっきりだったすず子ちゃんだった。

「まあ！、すず子ちゃんじゃないの。こんなに立派な娘さんになって」と私。

「私、今ここで仕立上がり品の検査をする係なんです。洋服箱の上の紙に書いてある山根邦子様という名前をみて、子供の頃にクニちゃんクニちゃんといっていたのを覚えていて、きつとあのクニちゃんに違いないと思ったんです」

と言う。彼女は私の顔も覚えていてくれた。そして眼には涙さえ浮んでいる。それをみて私も涙ぐんでしまっ

た。

「お母さんね、あなたのお母さん、あなたをとっても可愛がってらったお母さんは亡くなったのでしたねーほんとに何時も親切にして載っていたので、あの時はほんとに残念でしたよ。……あれからずっとどんなにいらったの？」

「あたし高校卒業してから洋裁学校にいました。出てからずっとここで働いているんです。父が結婚してからは私は邪魔者扱いにされたんです。それで又自分が生れた家に戻ったのですが、本当の親とも兄妹ともうまくいかなかったんです。いつも家の片隅で小さくなって暮してきました」

「そんなものかしらねえ。本当の御両親なんだから、あなたをもっと暖く喜んで迎えて下さりそんなものなのねー」

「……………」

などと話は暫く盡きなかったが、彼女も勤務中のことで長話はしていられないということで、その時はそれで別れた。

山本夫人とは二年そこそこの短期間のつき合いであつたし、特別親しい友人でもなかった。しかし相模湖のずっと沖合のボートの中から見た縁台に掛けた小さな姿の山本夫人、そしてボートがひっくり返りはせぬかと一生懸命見張っていてくれたような山本夫人の姿は、何故か

しらうすみどり色の林檎としっかり結びついている。そして咲き乱れたコスモスの野性的な美しさや、萌えたつような春のくぬぎ林のわかみどり、元気にすくすく育っていた子供達、そして若かった私達のことなど、すべてが何故だか分からないのだが、うすみどり色の林檎に結びついている。恐らく、それは物質的には乏しかった戦後の生活から抽出され詩になって、私の記憶の中に生き続けているのかも知れない。



社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

杖

池中庫次は、庭に面した廊下の方を頭にして病床にいた。障子をあげさせれば、十坪程の庭がある。年中日蔭がちのため、土はひたひたと一面に苔をはびこらせる湿りかたである。左右両隣りの家や門の前に、無遠慮に黒くそびえている、世間に名のきこえた名倉という彫刻家の家の石塀が陽をさえぎっている。その日陰が気に入ったのか、ひと群れの紫陽花がたわなに花をつけ、その花が日によってかすかに色づきを変えてゆくのが、今のかれにとっては唯一の目をなぐさめるものであり、かれの七十五年のいのちの跡をたどらせるきっかけを与えていた。その七十五年は決して平坦なものではなかった。あの時期は歯を食いしばって夢中で過した奮闘の生活の色にぬりつぶされていたし、ある時期は金をつくるために他人の迷惑をふみつけた黒い思い出に綴られていた。そういう場面に出くわすと、かれは声を出して思いを打消して眠りの中にのめりこもうとした。生れつきの異相の

を洗って、三流のRプラスティック食器製造会社の顧問として捨て扶持をもらってひっそりしてしまうまでに経験した数少ない勝訴の証しとして、依頼人の象牙師の手から殆んど強奪同然に手に入れたものであった。象牙師の老人は弁護士への謝礼も払えない窮状にあったし、かれもまた勝訴敗訴の見通しをつけて依頼を選別するなどという余裕はなかった。世間では、弁護士というところ、何か社会正義を実現する高級な職業であるかのように漠然とした尊敬の気分がゆきわたっているが、かれは謝礼を払えない依頼人からは、高利貸しもどきの冷酷さで謝礼に相当するモノを取り上げた。かれは別荘と称するものを持つていると人に語ったが、それは塩原の奥の温泉宿の兄弟間の土地建物の争いの代償として依頼人から召し上げた宿の離れの建物で、夏の間、避暑する特権を合法的に手にいれたものであった。又、全く取り上げるモノを持たなかった根本の久吉の兄が、博打で警察につながれた時には、口をきいて身柄の送検を食い止めてやった謝礼に、久吉の兄が持っていた功七級のココウ勲章を召し上げた程であった。

だが、十年前、ゆくゆく海軍の将官になることを、そして自動車のボンネットの先たんに小旗をつけて往来することを期待していた独り息子に、ガダルカナルの海戦で死なれてからは、かれは、そのような生き方から全身の力が虚脱して、弁護士稼業から足を洗って、寺と職人の

左 老 庵

ため、生あたたかい女とのことは頭に浮んで来ない。医師が打っていった痛み止めの注射のききめは薄く、痛みは間歇的に左胸から下腹部まで、そしてやせ細った腕を走って、指の先まで痺れさせた。医師は「昔の病気が年の加減で出てきたんですよ」と言うだけで、かれに病名を告げていない。「ふん、昔の病気が」かれには思い当る病名は思い出せない。子供の頃は線病質気味で、ひ弱であつたらしいが青年時代から壮年時代へと、これといった病気にかかずらわっている余裕はなかった。痛みが激しくおそって来ると、かれは両手で握った一本の象牙の杖を布団の上で上下にしがいていた。象牙は高価なものという思いがすぎるにふさわしい支えになって、又その冷やりとしてすべすべとした触感が、しごととそこに神経が集中して法悦にも似たしばしの支えとなって痛みをやわらげてくれるようであつた。その杖は、かれが弁護士という職業を始めてから、そのあくどい家業から足

の町の建てこんだ小路の中に引きこもってしまったのだ。それから三年後には妻女カツにも死なれた。独り息子の戦死、日本の敗戦、妻女の死と数年の間に、かれにのしかかった不しあわせは重かった。娘の高子はそのかれの傷心の救いになるかと思われる偶然にみちびかれて、倉田イソ吉と一緒に庫次と同じ屋根の下に住んだ。

この二人の結びつきは、全くゆきづりの縁であつた。

池中庫次は、その身体つきの割合いを越えて酒を呑むようになっていた。それは一種の自殺の予備行動とも思われる深さで、その酔余の足を上野の山に運んだ。上野駅は、浮浪者、浮浪児と買い出し人と、焼け跡になだれこんで来る東京への復帰者のつくるすさまじい混乱と、必死の喧噪の渦の中にあつた。独り息子に死なれたかれの心は、自分より更に不幸なものたちの姿を目の前にすることによって少しはなぐさめられるのか、その足どりは踵跟として定まらなかった。ある夜、暗闇の人ごみの中にもまれて、かれは自分と同年ぐらいの頑丈な恰幅の男の足をふんだ。

「何しやがる！このすつとこどっこい」

その男は威勢よく吠えた。暗闇に群がり流れる人むれの中で、両方とも威勢がよければ野獣の闘争がそこに起り、どちらかが相手を倒すことになる。法治などと云う働きは全くないも同然であつた。庫次は闇の中に自分と同じくらしい背丈の男を見たが、到底腕力で対抗出来る

相手ではないとふんだ。その男が忍術家藤田西湖であった。西湖は戦争末期、中野学校教官であったため、二級戦犯として米軍に行方を追われている身分であった。だから二人はそれ以上ふみこんだ争いにはならず、かえって敗戦のあわれさを一ツにするお互いの身分を告白し合い、奇妙な晩年の交友が始まったのである。敗戦の混乱の中では、このような行きずりの縁が人間を結び合わせる力をもたらし、至る所で発揮した。焼けさびれた東京の巷での人間の生るエネルギーの衝突であり、燃焼であった。忍術家藤田西湖は追われる身を池中庫次の住むまちの焼け残った寺の離れにひそめて、所謂地下にもぐる生活であった。

「俺んところに年頃の娘がいるんだ」

「そうか俺の近くに恰好の青年がいる」

こんな科白が更に二人を近づけ、倉田イソ吉と高子は池中の家で形ばかりの酒宴をして結婚ということになったのであった。

イソ吉はW大学を出て司法官の試験をうけつつづけているというふれ込みであった。

池中庫次の枕頭には、三名の見舞い客が長まつていた。庫次が毎夕コップ酒を呑みに来る酒屋、さいたま屋の若主人と、コップ酒連の代表者刺しゅう屋の若月と、東京

は、その仲間じゃないか」と蔑んでいる風であり、夫の倉田イソ吉も、今夜の客人とは親しい交わりはない。イソ吉は、既に判官検事になる登用試験を受験出来る年齢制限を超えていたので、義父庫次の口ききで庫次の顧問先のプラスチック食器製造会社に入っていたが、秘かに庫次、高子の目を盗んで、別の酒屋でコップ酒をやり、さいたま屋へは出入をはばかっていたのだ。はばかりイソ吉の方に弱味がある。

それでもイソ吉は、三人の見舞い客が腰を浮かし始めた所で隣室から出て来て病床に近より、「オトオさん痛みますか」と言った。それは女性的なやさしげな口調ではあったが、ほんの形だけのいたわりであると三人には聞えた。この二人はうまくないな、そういえばいつぞや酒の上でガダルカナルで死んだ悴のことにツイ話が及んだ老人の眼に涙がにじんで来たッけ、鬼の目に涙というやつか。山本は冷やかに二人を眺めていた。

庫次は声をかけてきた娘むこにくるりと背をむけて寝返りをうち、三人の見舞客に、激しく象牙の杖をしごきながら言った。

「もう帰るんかい、もう少しいたらどうだ」

「でも……」と若月が口ごもり、山本はもう立ち上っていた。

「せんせい、又来ますよ」

かれらは池中庫次の家の中にたちこめる空気に耐えら

都内一区の教員であるという山本の三名であった。庫次は世間の常識通りにこの酒屋のコップ酒仲間では、七十五才という年齢も物をいって「せんせい」とたてまつられ、時には簡単な法律の相談にも、面倒なことにも立入らない限り相手になってやったりした。山本は未だ三十代の終りか四十代の初めぐらいの年頃であったが、妙に法律のあらましを知っていたし、庫次が老いのすさびごとにしていた俳句まがいのものにばつを合わせたり、殊に今の人が忘れてしまった明治・大正の詩人、文人、例えば薄田泣菫とか蒲原有明、上田敏、正岡子規、与謝野晶子、若山牧水、高村光太郎、萩原朔太郎、三木露風、百田宗二、児玉花外などについて庫次と話を合せることが出来たので、殊のほか老人と気が合う風であった。

「もう失礼しようか」

若月が腰をはずも動かしながら言った。

「うん、せんせい、それじゃ大事にして下さい」山本が言った。かれは老人を見て「こりゃ長くなさそうだ、それにしても殺風景な家だな」と教員という職業柄、普段かなりの数の生徒の家庭に足を運んでいる感じで庫次の家庭を感じとっていた。娘高子はイソ吉と隣の部屋にいた筈だし、小学校へ行っている二人の孫は二階にいた様子であるが、一杯の茶の接待も、家族の者の挨拶にも出合わない。高子は多分父親庫次が毎夜酒屋でコップ酒をやることを下等なことと思いきめ、今夜の見舞い客

れなくなっていた。そして「もう帰るんかい」とうらみがまし、庫次は顔をしかめながら激しく杖を下下にしごいた。山本は老人のゆがんだ顔に、かれが過して来た七十五年の険しい人生と、かれのむすめむこに対するやる方ない不満をよみとっていた。「これじゃ、おやじと婿でコップ酒をのみ合う仲になれないのは当たり前だ。どちらが悪いっていうんじゃなかるうが、性が合わないんだな、おやじにしてみりゃ、娘高子がおやじの面倒見るという口実はあっても、実際はおやじの家に姓を別にしながら同居しているのは態のいい居候なんだろ」

若い時に、田舎から出て来て、苦学しながらC大学の夜学を出て司法試験をうけ、検事になったが先き行きの出世に見切りをつけて弁護士に転じたこの老人から見たら、W大学を正規に出たと称しながら九回十回と司法試験にはずれて年齢制限を超過してしまった倉田イソ吉は、かれが娘高子を女房として大切にすればする程感にさわる存在であった。妻女カツが死んでからは、かれの不満の緩衝物もなくなっているわけだ。山本は、そんな観察に頭を占領されながら連れの二人の先頭になって玄關に出た。イソ吉だけが、あとを追って来て見舞の礼を言った。

「何だか冷たいな、見舞の酒は、もうあのせんせいの喉は通らんね」

若月は代表で見舞った自分をあきたらなく、門を出た

ところで連れの二人にささやいた。

池中庫次が病床に倒れてから、婿の倉田イソ吉がさいたま屋酒店にコップ酒をやりこめられるようになっていた。コップ酒連の消長は激しく、三年以上つづく何となく古顔になる。働き場所が変わること、酒を呑むことに對する本人の心構えの変動・病氣・死亡などが主な原因になる。「あの警察署長上りはこのごろ来ないな」とみなが思う頃にかれは死亡している。赤ら顔で、でっぷり腹がつき出していたのは脳溢血系統の死に方であつただろう。「あのチヨコチヨコしたお喋りはこのごろ来ないな」とみなが思うころ、かれは腹を手術して酒を止めた。そういう中で、若月や山本は、三十年を超える常連であつた。家がさいたま屋酒店に近いこと、職業に変化のないこと、五臓六腑が酒に強いことなどが、かれらの酒屋との長いつき合いを支えていた。倉田イソ吉も家が近い。義父の庫次が病床についてからは公然と昂然とさいたま屋で古い呑み助を尻眼にかけた。だれ言うことなくかれが池中庫次の娘婿だという話も行きわたつた。

コップ酒は安く上るから、毎日酒を呑む者には重宝なものだが、大概の酒屋では、手ばかりかかって儲けのうすいこの種の酒の売り方を止めたり、駅の切符売口のよくな窓を作り、客との人間同志の接触を節約して手を省

いた。教員である山本の口を借りると店の入り口でコップの酒をグット一口で、或いは数口でその味と匂いを楽しんでチャリリンと金を置いて立ち去る客が「コップ酒優等生」であり、あたりの客と世間話をしながら尻の長い客は「劣等生」になる。いわんや酔って管を巻く者などは、まさに「落ちこぼれのツッパリ生徒」ということになる。さいたま屋では、明治から大正、昭和にかけての静かな寺と職人のまちの一隅にコップ酒の伝統を何となく受けついで守つて来た。これという主義、主張があつてのことではない、慣性ともいうのであろうか、客は駅夫の見送る列車のように次々にあらわれ、消えていった。昭和二十年の後半の頃は池中庫次が首領格で、呑み仲間連中が年に何回か、家庭の都合の許す家に、食い物など持ち寄り集り、普段店では披露出来ない歌や余興を出して敗戦後の生活の憂さをはらして来た。山本も若月もその中にいた。だが池中庫次の家をそのような寄り合いの場にすることはなかった。庫次の妻女カツや娘高子の反対が無言のうちにあつた。その庫次が病に倒れ、娘婿、倉田イソ吉が呑みに来るようになってからは、その種の集りは、千住あたりの安手の赤灯提などに場所をきめてやるという安排にまで進化していた。いわゆる神武景氣、高まが原景氣、天の岩戸景氣の余波が、この寺と職人の町にもさざ波となって、ただよつて来たのであつた。

その頃、酒屋の組合で会議用に建てた酒販会館と称する座敷でコップ酒連中の顔合せ会が行われた。集る者は、寺の法事の仕出屋鎌屋の番頭、さいたま屋の若主人、刺しゅう屋の若月、孔版屋の齊藤、室内装飾屋の小野、証券会社の用務員吉田、ペンキ屋の黒井、傘屋の番頭勝屋、仕事師の大場、元ブリキ職人で現博突打の根本、風呂釜屋の新川、保険屋の倉橋、教員の山本、多士済々という言葉は当てはまらないが、種々雑多なコップ酒連の会合であつた。新参ながら池中庫次の代理格で倉田イソ吉は、上座にいた。さいたま屋ではお互いに「社長」せんばい。「旦那」などの呼称で呼び合つていて苗字さえ知らない仲もあつたから、「ひとつ自己紹介から始めよう」という提案があつて、上座らしい所から始まつた。倉田イソ吉からということになった。かれは少し固くなりながら姓を名乗り「職業はペンゴシです」とうしろめたさのためか小さい声で言った。さいたま屋の若主人は世話人であるところから末座にさがつていたが、一寸変な顔をした。かれはイソ吉が義父庫次の口ききで、司法試験に落ちつづけた挙句、Rプラスチック製造会社に入つたことを知つていた。山本もそのことを知つていたので横目でイソ吉の方を冷たくながめた。「ハハン、この男は弁護士試験に落ちたシコリがあるな、それに弁護士の方が会社員よりエライと思つてゐるな」

立てる程のものではない。普段、コップ酒のルールの中で呑んでいる一種の貧乏たらしきをはねのけて、二千元もの会費を出し合つて選ばれ集つたという意識が皆を陽気にさせ、歌い踊り、五十畳はある会場もせいぜい程であつた。でもそんな空氣の中でも、各人各様の商売の上での掛け引き交渉は、其処此処に進められていたのである。ブリキ屋職を随分前に返上していた博突打の根本久吉が上座にすましている倉田イソ吉に目をつけていた。かれは此の席の会費と明日からのパチンコ代をイソ吉から召上げようと考えていた。それはかれの兄から金鵝勲章を召上げた池中庫次に対する仇討ちになるという大義名分もあつた。

「センセイ、弁護士のセンセイ」

弁護士だと自己紹介はしたが、この久吉の呼びかけにイソ吉は虚をつかれて、素早く対応出来ずに一瞬キョトンとしていた。それで勝負はついた。

「センセイ、俺に金少し貸してくれないか」

池中庫次の家の庭の紫陽花の花がみなしぼんで、穢らしい形骸だけを残す頃、三年越し軒端につるしっぱなしの風鈴が、その汚れにも似ない涼やかな音を台風の中で立てる頃、庫次は死んだ。医師の見立ては老衰というところになつていた。通夜にも葬式にも、さいたま屋の若主

人とコップ酒連代表の若月と、山本の三名がなにがしかの弔慰を包んで列席した。娘婿の倉田イソ吉があととりになるので、そのあととり振りを拝見しようという大人のいたずら心が山本にはあった。その上、かれの家はイソ吉の家と通りひとつへだてた近さでもあった。東京第二弁護士会とかプラスチック食器製造会社からの花輪も四五基、小路の石塀に立てかけられ、七十五年の生涯を閉じた故人の葬儀はまずまずの参列者で、僧侶の読経の声も十坪の庭を通して門外にまであふれる様に拡声器で拡大されていた。残暑の焼けついた通りには、人々は激しく扇子を使いながら柩の運び出されるのを待った。

「焼き場まで行きますか」

「いや私は都合があるんで、此処で失礼しますよ」

山本の立っている隣りで故人の弁護士仲間らしい二人の会話が耳に入ってきた。

「池中さんも仲々強引な人だったからな」

その会話には故人の死を悼む情は感じられなかった。

「もうわかった。山本は素然として柩の運び去られるまで立ちつくすことを止めた。二十分程して、自家の台所でおそい屋めしを自炊している山本に、あけっぱなしの玄關に人があわただしく立って言った。

「山本さん、焼き場まで行ってくれませんか、人数がそろわんです」

倉田イソ吉であった。

山本の脳裏に、義父の病いを機会にさいたまのコップ酒仲間に加わり、いつの間にか弁護士センセイになり済んでいるイソ吉を小面憎しとする気持が走っていた。

「いやあ、ぼく一寸都合あってね、行かれません。悪いね」

イソ吉はあたふたと走り去った。山本にはイソ吉を小面憎しとするばかりでなく、あらかじめ焼場まで行ってくれと依頼があるのが当たり前じゃないかと思ひ、走り去ったイソ吉の方では、あれ程故人と親しくしていたんだから、焼き場まで行ってくれと頼まれたら二ツ返事で承知してくれるのが当然だという思いがあった。又かれにしてみれば、誰かを探して、貸しバスの空席を満さなければ、高子に対し夫たる者の顔が立たぬ。それにしても貸しバスの席が半分にも満たないのはどうしたことだろうか。義父庫次の死を悼む気持など、かれの胸中どこにもなかった。ただ焼場まで行ってくれる人を今当って歩くのは、部屋住み同然のかれには重荷であり、妻の高子の指揮をうけなければどうにもならぬことであった。それから数日して、さいたま屋酒店の土間に、池中庫次が病床でしごいていた杖がたてかけられていた。

「はん、根本がいつぞやイソ吉に金貸してくれないかと申入れていたが、とうとう兄貴の金鶏勲章のかわりにあの杖を召取ったな。山本は感ずいていた。

「おい久ちゃん、あれ、ほらあの杖、倉田からだろ」

「へえ、一寸借りるんで……」

イソ吉は根本に金貸してくれと詰めよられて、女房の高子には無断で故人の遺品を持ち出したのであろう。それにしても、まだ死んでから数日、金のかわりに貸したとしても、行く先はわかり切っている。最後までしごき続けていた杖に対するイソ吉の取扱いは、故人に対するイソ吉の憎しみがそこにあるように山本には思われるのであった。

「クラさん、おめえ、この杖きらいなんだな」山本はイソ吉に声をかけた。

「まあね……」イソ吉は山本が先日焼き場ゆきを素気なく断つたのを思い出して、「お前の知ったことか……」と腹の中でつぶやきながら山本の方に振りむきもせず、あたりのコップ酒連中と談笑していた。

杖を持って外へ出て行った根本の久吉が、喚声をあげて帰ってきた。かれの手にはもう杖はなかった。

「俺の腕はいいな、番頭のやつどうしても三千元以上は出せねえっていうのを四千元出させたぞ」

「つまらんことを自慢するな、どうせ流しちゃうんだろ。山本は故人がどんな気持であの杖をしごき続けていたのかよくわからないながら、象牙師が自分用に丹念に仕上げたであろうと思われる杖の価値を惜しんでいた。案の定、それから三ヶ月すると根本の久吉が、山本に

近づいて来て言った。

「せんせい、あの杖出せねえ、もう少しで流れだ」
「おめえ初めっから出すあてなかったんだろ」山本は一寸意地悪い目付きはなっていた。
「そうでもねえすよ。馬でもうけてと思ったんだがうまくいかなかったのよ。たしかにあの杖四千元で流しちゃ惜しいよ、買えば三万円からもつとするぜ」
山本は根本が杖を質屋から出して貰って、イソ吉に返すと見せて又別の質屋に入れるという土地ころがしならぬ杖ころがしをする魂胆を見ていた。
「あれ首だけ象牙で、握りから下の方は牛骨か何んかだぞ、あの長さだけの象牙だったら大したものだ」
山本は値おみする質屋の番頭の目付きで言った。
「ベンゴシのせんせい、でかいこと言ってるが、あれ女房に財布の口金おさえられてるんだな、出せそうもねえもん」

「そりゃ惜しいな、俺出してみるか、そのかわり品物は俺があずかるぜ」山本は言った。かれの心中に、イソ吉に痛い目みせて、臨終の床でもあれをしごきつづけたであろう庫次に応えてやろうかという気が動いていた。

二十年の時間が経っていた。

「このごろクラ来ますかね、何だか随分会わないが

……」

山本は手製のステッキに痛む顎をのせて、焼酎をトマトジュースで割った赤ちゃけた液体をストローでちゅうと吸うと、あわててぬるま湯で口の中のアルコール分を消すための嗽をしながら言った。

「え、入院してますよ、手術成功したっていう話ですよ」

「ガン研でしたね、あそこまで行けば大がい死ぬんだがな……シンの強い男だな」

「……ですね」

山本はしみり過ぎ去った時間を想う目付で、さいたま屋の主人に話しかけていた。かれも、もう九年前に教員を止めていたから七十歳はすぐそこにあった。その上一寸したおしゃれ気を出して、巷の歯医者に作って貰った義歯がさわって、舌の根に腫瘍が出来、大学病院という所でコバルト六十の放射線治療を受けたのがもとで、下顎部放射線性骨髄炎という名前のある病気になるに類に穴があき、痛みにいじめられて五年になっていた。それでも病院を出るとさいたま屋で焼酎をすするのを止めないのは、いつか俄かに死というものがかれを見舞うのを待ちのぞんでいるかのようであった。

博奕打の根本の久吉も十年前にS病院の施療病棟でさっさと死んでいた。だから二十年前の象牙の杖の行方について物を言う者は絶えていた。実はその杖は二十年、山本の家のかれの部屋の押し入れに眠っていたのである。

勢には二十年前のイソ吉に対する山本の感情が生きかえって来ていた。俺はお前などとき合いはないぞ、おれはお前の義父と呑み友達だっただけだ。俺と知り合いづらするのは十年早いぞ」

だが、あたりに筆談する昔なじみを見出せなかったイソ吉は紙の束を握って立ち上り、人垣を分けて山本に近づいた。「何だ、何が言いたいんだ」山本は、背骨をこたとさら真直ぐにして威厳をつけた。その目は聾啞者になって、よろけているイソ吉を哀れむ色と、何が言いたいんだという警戒心とが交錯していた。イソ吉は、山本のそばに立つと、ふるえる手で、考え考え文字をかけた。

「杖を返して下さい。死ぬ前に根本からきいた所ではあなたが杖のことを知っているとことです。返して下さい」

山本のあたまいにいい様もない怒りがつき上って来た。「この男、二十年も、しかも何度も生死の境をうろつく手術をしながらずっとあの杖のことを考えていたのか、返えしてくれと何故二十年前に言わなかった。せめて十年前に根本の久吉が生きている間に言わなかったのだ。それ程大事なもの何故根本にあたえたのだ。根本の久吉が施療病棟で割頭の手術をうけて死の床に横になっている時に、その枕頭で杖の行方をたずねるとは、何という執念だろう」

山本はイソ吉が書いた紙のうらに殴る勢で返事を書い

倉田イソ吉にとってもこの二十年は不しあわせなものであった。十年前に、部長だとさいたま屋で豪語していたRプラスチック食器製造会社は倒産して、かれは互助会と名乗る葬式専門の会社にいる様子であったが、その頃は、かれを弁護士センセイと呼ぶ者も絶えてなかった。酒も深くなくて殆んど転びそうな足どりで山本とすれちがうこともあった。かれが自家へよろけながら帰る途中、道路で倒れたことがあった。近所の者がこのことを高子に知らせた。馳けつけた高子が「あんたこんな所で何してるのよ」とイソ吉の頭を足蹴にしたという噂がさいたま屋の話題になった。かれの不しあわせの絶頂ともいう頃であった。その頃からかれは病院を構まわしになり、久しくさいたま屋へは現われなかったのだ。

その夜、さいたま屋の入口までふさいだ客や立呑み連をかき分ける勢いでステッキをついた倉田イソ吉がよろけ込んだ。かれは自分の席ときめているらしいダンボール箱の方へすすんだ。かれは喉頭を手術したためか言葉もなくし耳もまたきこえない聾啞者になっていた。

かれは焼酎を大形のコップについてもらうとズボンのポケットから紙の束と鉛筆をとり出しあたりの客を物色していた。その目は自然に店の一番奥の、かつて、かれの義父池中庫次が毎夜腰かけて酒を呑んでいた椅子にかけて、焼酎を吸っている山本を捕えた。青味走った目が白く光った。山本はかれを無視して胸を張った。その姿

た。それは意地の悪い返事になっていた。

「キミは法律を勉強したそうだが、二十年という時間をどうする。一度でも時効を中断する法律行為があったか。俺はたしかに杖の行方を知っているよ。だが今の持ち主だって多分二十年分の質屋の利子を加算しなけりゃ俺に杖を返してはくれまい。計算してごらん」

山本の頭に息を引き取るまでの杖を握って離さなかったであろう池中庫治の姿があった。

その夜自家に帰った山本は、押入れの隅から二十年そこに眠っていた杖をとり出してじっと見た。

それは二十年前の象牙の艶をなくし、太さはひと回り瘠せて見えた。その上老人の背のように少し曲り、点々と黒い染みさえ吹き出していた。山本の背に冷たい気配が走った。「俺の口の中の痛みはこの杖を埃の中に眠らせていたからかな」

「返えしてやろう、何も言はずに返してやろう」山本は声に出して独り言していた。モノにこだわって過した三十数年の月日が、味気なくかれの周囲に渦巻いて思い返されていた。

さういふ一瞬間。おかし

絢爛のあわれ

三戸岡 道夫

〔一〕

闇のなかに
ヒーン

鋭く絹を裂く音がしたかと思うと、次に華麗な色彩が宙に舞った。

つづいて

「ほ、ほ、ほ……」

不気味な笑い声。

老女が次々に小袖を裂いては投げ捨てているのであった。宙に舞う色彩はその小袖の絵模様である。

箆の抽出を残らず開けては、小袖をとり出す。両手でひろげて、しばらく眺めているのだが、つぎの瞬間

キラリ

手に持った鉄で小袖は無惨に切り裂かれ、その傷口に老女の指先がかかったかと思うと

ヒーン

小袖は悲鳴をあげて二つに裂かれ、衣裳部屋の暗がり

に投げ捨てられるのだった。

老女の狂気めいたこの作業は、鬼女のような影を壁に映して、もう三時間ばかりもつづいていた。一枚の小袖が終るともう一枚、箆の一端が終ると次の一端と、老女は飽くことなく衣裳を裂きつづけ、すでに十竿以上もある箆はほとんど空になって、溢れ出た衣裳の色彩が広い衣裳部屋を落花のように埋めつくしていた。

衣裳部屋の箆が空になると、老女は手燭を持ち、渡り廊下を次の衣裳蔵へと移っていった。

衣裳蔵には衣裳部屋のさらに何倍かにのぼる衣裳がしまわれていた。老女が宮中に入内して以来、六十年に近い年月をかけて作りつづけた気の遠くなるような量の衣裳が、花卉の堆積のように死蔵されているのであった。そこでも老女はふたたび同じ奇怪な行動に挑むのであ

ったが、しかし小袖をとり出す瞳はすでに虚ろで、その姿はこの世のものではなかった。徳川二代將軍秀忠の末娘として生れ、後水尾天皇の中宮という表面は華麗で最高の地位にありながら、本当は不幸な人生を送った老女東福門院は、その女の一生に復讐するかのように小袖を裂きつづけてやまなかったのである。

仙洞御所の闇に夜鳥のけたましい鳴声が聞えた。風が庭木の枝をさわがせている。

「風が強いな……」

老女は思ったが、それも遠い別世界の音のようにしか聞えなかった。

そのとき、絹を裂く老女の手が触れて

バタリ

手燭が小袖の上に倒れた。

炎は風圧で消えそうになり、衣裳蔵は一瞬間にとざされたが、しかし炎はすぐ勢いを取りもどすと、もとの明るさに戻った。

老女はしばらく手を休めて、とぼとぼとした赤い炎を見つめていた。

音もたてずに燃える蠟燭の炎……。

それは透明で、もの悲しく、うつろな色だった。

その炎が一度ぱっと生きもののように躍りあがったかと思うと、あっという間に散乱した小袖の上を静かに這い出したのである。だがその拡っていく炎の意味を考え

る力を老女はすでに失っているようで、音もなく衣裳蔵に拡る炎の海を、ただ絵に描いた花園でも眺めるように見つめているきりであった。

深夜の火事は発見がおくれ

「火事だ！」

人々が騒ぎ出したころには、折りしもの強風にあふられて女院御殿はすっかり炎につつまれ、すでに手の施しようがなかったのである。

こうして東福門院は生涯をかけて蓄積したおびただしい衣裳とともに、炎の中でその生涯を閉じたのであった。

京の夜空を明々と染める火事が東福門院の御殿だと聞いたとき、二十才になる尾形光琳は深夜の御所にかけてけたが、火勢がすさまじくて近づくことが出来なかった。ただ群衆にまじって闇に燃えあがる炎を見上げるばかりで

「ああ、おれの描いた小袖が燃える」

と光琳の魂は泣いていた。

東福門院晩年の衣裳の絵のほとんどは、このお気に入り

一つをはっきりと光琳には復元することが出来た。とりわけその中でも

「あれだけは焼きたくない」
そう思う小袖が一枚あった。

「あれだけは助けたい……」

光琳は人垣をかきわけ

「あの小袖を……」

炎にむかって走り出したが

「危い！ 焼け死ぬぜ」

たちまち群衆の手によって押し戻されてしまった。だがあの小袖といっしょなら焼け死んでもいいと、その時の光琳は**事變後**そう思っていた。

翌朝。

焼け跡は、嘘のように澄みきった青空の下で、その奇怪な姿を黒々と横たえていた。

焼け落ちた女院御殿の周囲には鬱蒼とした椿の森があった。椿は東福門院がことさら好んだ花で、長年かかって集めた椿がいつのまにか森のように茂っていた。

その椿が火事のためにいっせいに落花して、黒い焼け跡の周囲を、真紅の血の海のように彩っているのだった。

それは生前東福門院に可愛がられた椿の花が、いっせいに殉死して、散り落ちたのにちがいない。不気味な落

花であった。

(二)

おびただしい衣裳とともに炎の中で果てた東福門院には、七十二年という不幸な女の一生があった。

徳川二代將軍秀忠の末娘として生れた東福門院和子は、十四才のとき後水尾天皇の女御として入内した。入内を計画したのは、父の秀忠よりも、むしろ祖父の家康の方で

「かわいいい孫娘を入内させて、朝廷と徳川との縁を深めたい」

老獪な家康らしい考えであった。

家康は一応天下を握ったというものの、まだ充分基礎が固ったとは言いがたい時期であった。その最後の仕上げとして朝廷に女を送り、外戚となることによって朝廷への支配を強め、徳川幕府の基礎を不動にしようとしたのである。

だが問題は当の後水尾天皇がこれに反対だったことである。天皇の女御は五摂家から選ばれるという古くからの不文律があって、武家から入った例は殆んどないというこのほかに、徳川幕府の高圧的なやり方に天皇は好感を持っていなかったからである。

その上工合の悪いことに、天皇にはすでに深く寵愛している女性があった。四辻大納言の娘で、およつの局と

そこで二つの処置が急遽とられた。まず加茂宮は天皇の第一皇子ではあるけれども、決して皇太子には立てないと、固く誓約させられたのが第一。

そして第二番目の措置としては、およつの局と梅宮とが事もあろうに御所から追放されたのである。それのみならず、およつの局の兄に当る四辻中納言李継までもが、なんの罪もないのに流罪処刑されるという驚くべき措置が行われたのであった。

もちろん和子自身はこのことを知らない。

一方、生れつき気性の激しい後水尾天皇がこの屈辱に耐えうるはずがないのは言うまでもなかった。

さて、歴史上でこの時の婚礼ほど豪華だったものは他に例がないと言われているが、まず入内に先だって京都御所内には和子のために金色燦然たる女御御殿が新築された。そして興入れの当日には、今に残る「東福門院入内図屏風」さながらの華麗盛大な行列が、二条城から京都御所へと続いたのである。金に糸目をつけずに調達された道具類は三百七十八荷に及び、運搬の人数だけでも数千人、その費用は実に七十万石に及んだといわれる。だがこの豪華絢爛たる婚儀も、もちろん和子への愛情からではなく、將軍家の威信を全国大名へ誇示するデモストレーションにすぎなかったことは言うまでもない。こうしたいきさつの婚礼であったから、和子を受け入れる天皇の心が最初から冷えきっていたとしても、それ

どいいう

いい、ほとんど溺愛に近かった。行く行くは皇后にと内心で思っていたくらいであったから、他の女性を女御になどとは思ってもよらない。そこへ無理やりに家康からの話であったから、反対するのも無理はなかった。
しかし朝廷には拒否できない弱みがあった。朝廷は一万石の賄料を幕府から受けてやっと生活を保っているという、朝廷の財政を徳川幕府が握っていたからである。
一萬石な**幕府**ものは幕府からみれば棄て扶持程度にすぎないが、朝廷としてはそれがなければ経済が成り立たない。だから幕府の意向に逆うことはできなかった。幕府の態度にも明らかにそうした弱点をついて、無理を押しつけてきているところがある。
天皇は最後まで返事をしぶったのであるが、しかしついに抗しきれず、元和六年六月に和子の入内は実現した。天皇二十五才、和子十四才のときであった。
だが入内に先だって一つの問題が起きた。それは天皇とおよつの局の間にはすでにこの時、梅宮という皇女と加茂宮という皇子と、二人の子供が生れていたのであるが、それを徳川家が問題にしたからである。
「女御入内の決っている天皇が、他の女性に子供を産ませているというのを許しておくわけにはいかない」
和子の出産より先に他の女性の腹から皇子や皇女が生れていたのでは、外戚としての地位を狙う徳川家の目的が損われるからであろう。

は止むをえないことだった。入内して最初に和子が突き当たったのは、氷のような天皇の心であった。天皇の気持もあわれであるが、そうしたことを何も知らずに興入れしてきた和子の方も、さらにあわれと言わねばなるまい。だがこうなってくると万事にわたって天皇と和子との間の歯車が、喰い違ってくるのも仕方のないことであつた。

たとえば女御御殿がそれである。禁裏の建物がすべて清楚な白木造りなのに、和子の女御御殿ばかりが金色燦然とした江戸風武家建築なのが天皇には気に入らなかつた。おまけに徳川の財力を背景にして、天皇の御所をしのぐ規模と善美に飾りたてた内部装飾が、天皇の心をいっそう逆撫ぜにする。だから不愉快な顔をしたまま、女御御殿の方は見ようとしなかつた。

また和子が入内に際して持ってきた一万石の化粧料というのも、大いに気にさわつた。天皇が幕府から受けている賄料が一万石であるのに、それと同じ一万石が和子のお化粧料とあつては

「どちらが天皇なのかわからない」

と天皇は皮肉を言い、天皇といつても実力のない、位だけにすぎないことを、いやでも知らされる諸現象が腹立たしいのであつた。

しかし万が一天皇が愚痴を言おうものなら、これまた和子といっしょに江戸から来た間者たちが至る所にひそ

んでいて、直ちに江戸へ筒抜けになるから、うっかりしたことは喋れない。これもまた天皇にしてみれば腸の煮えくり返る思いなのである。

入内した和子の結婚生活が幸福である筈はなかつた。

(三)

和子の入内はこうして悲劇性をはらんだものであつたが、それでも和子は天皇との間に七人の子供を産んだ。しかしこれは必ずしも天皇と和子との間に愛情があつたからだとは考えにくい。

後水尾天皇はその生涯に三十八人^トもの子女をもうけた事実が示すように、女性関係については自由に行動する性格であつたから、その側近にはいつも多数の典侍たちが夜毎の勤めに控えており、和子に対する関心もそうした女性の中の一人という程度のもではなかつたかと想像されるからである。

最初に産れたのは皇女で、興子内親王と名づけられた男子誕生を願っていた徳川家としては失望したが、しかしたとえ女子とはいえ朝廷と徳川家とを結ぶ子供がとにかく誕生したのであるから、まずは大慶事であつた。この皇女が後に後水尾天皇の後をついで、明正天皇として女帝の地位につくのであるが、しかしこのめでたい皇女誕生には、ある不吉な怪事件がまつわりついていた。それは加茂宮の毒殺事件である。

ないね」

和子はたちまち殺人犯にされてしまい、周囲から白い眼で刺すように見られるのであつた。

加茂宮毒殺の噂は噂を呼んで、ますますエスカレートしていった。禁裏の中には天皇と交渉のある典侍たちが多かつたが、しかし彼女たちには一人として子供が産れないのであつた。これも蔭で徳川幕府の黒い手が、生れてくる生命を闇から闇へと消し去っているからであつたが、しかしそれにも噂が飛火して

「和子女御の指示で流産させたり、また生れてきても殺してしまう」

すべてが和子のせいにされてしまうのであつた。和子は次第に鬼女のように仕立てあげられてしまい、このような噂の中で和子の出産が近づいてくると

「加茂宮の祟りはきつとあるよ」

「幼い宮を毒殺するような女だから、いくら望んだって男子が生れるはずはない」

和子に対する呪詛の言葉はあつても、出産を祝い、安産を祈ってくれる言葉はどこからも聞えてこないものであつた。

そうしたなかで和子は最初の皇女を産んだのである。心細い。噂を裏書きするかのように、まれにみる難産であつた。徳川家が熱望した男子でなく、生れたのが皇女であつたのも、加茂宮の怨霊のせいだと人々は眉をひそめ

加茂宮はさきに述べたように、天皇とおよぶの局の間に生れた第一皇子であるが、和子入内の支障になるというので、「決して皇太子にはしない」と誓約させられ、徳川の手によってあらかじめ天皇への道を閉ざされてしまった皇子である。徳川家に睨まれたばかりにこの皇子は、天皇を父として持ちながらも、父の名も母の名も知らずに、禁裏の片隅にある門院御殿の一部屋で、乳人と女房、女童にかしずかれて、ひっそりと育てられていた。だがその加茂宮もすでに五才になり、近頃は御殿のなかを元気にかけまわっていた。

それがある日突然の病気で死んでしまったのである。

「こんなに急に、どうして……?」

「不仕合せな若君!」

あまりの突然の死に驚いた人々が死顔をよく見ると、いちめんに毒薬による反応が出ていたというのであつた。折りしも和子は第一子を懐胎していた。和子の出産が近づく、いくら誓約書があるとはいへ、加茂宮の存在が邪魔になってくる。禍の種は早目に消すにかぎると、何の罪もない幼い生命を本当は政治の暗黒の魔手がこの世から消してしまつたのに違いないのだが、

「和子女御が幼い加茂宮を毒殺した」

噂が御所内に広まるのに時間はかからなかつた。

「江戸からきた女は恐ろしい」

「でも徳川の手先だから、そのくらいの事はやりかね

た。

不
月日は流れて寛永元年になると、和子は中宮に立てられた。事実上の皇后冊立である。十四才で入内して、十八才になっていた。

そして間もなく和子は待望の皇子を出産した。高仁親王と名づけられ、待ちに待った男子誕生なので、徳川家では欣喜雀躍した。和子入内の目的はこれで達成したのである。

だがしばらくすると禁裏に奇怪な噂が再び風のように流れ出した。

『日が暮れると門院御殿の前に加茂宮の亡霊が出る……』

そしてその亡霊の崇りのように、高仁親王は病弱で、三才の春を迎えたばかりだというのに、あえなく死んでしまったのであった。

「いい気味だ。加茂宮の崇りのせいだ」

だが寛永五年になると、和子はまたもや皇子を出産することができた。しかしこの皇子も生れると間もなく死んでしまったのであった。

「加茂宮の怨霊で、中宮の腹から生れてくる皇子は絶対に育たない」

噂の確信度はますます高まっていた。

子供を失った母親の悲しみをわかってくれる者は誰も

愛顧を厚く受けていたから、和子入内の前後がその全盛期と違ってよかった。婚儀のおびたしい衣裳や夜具の新調を一手に引き受けたり、その後も引つづき和子の厩大な呉服御用を独占的につとめたりして、禁裏御用達としての誇りを高めていた。

その雁金屋があらん限りの技術と意匠とを結集し、金欄、錦、縞子、紵、倫子、縮緬などの高級材料を使って作った、小袖、打掛け、帯などが、衣裳部屋に数えきれないくらい蔵われているのである。まだ一度も手を通してないものや、見たことさえ無いものもたくさんある。

禁裏の中で孤立化した淋しさ、苦しさにおそわれるとき

「なぜ、こんな遠い京都まで来てしまったのだろう」ふと和子は小袖に顔をうずめて、ため息をもらすことがあった。和子はいつしか、悲しいとき、淋しいとき、苦しいとき、簞笥から衣裳をとり出しては眺めるのが習慣のようになっていった。それ以外に和子の心をいたわってくれるものがない。

暇にまかせては小袖を一枚一枚、簞笥の抽出しから出しては部屋にひろげ、肩にかけて眺めていると、華麗に輝く絵模様は絢爛と咲いた花園のようで、夢幻の中にあるような気がする。だがその美しい小袖の色彩の上にも、すぐ悲しい思い出が水のように追いかけて流れていく。

いなかった。いくら公武合体の犠牲で人形のように送られてこまれ、天皇との間に愛のない子供を何人も産んだとはいえ、母親としての悲しみもあれば、女としての苦しみもある。だが誰もそれに同情してくれる者はない。わずかに和子の傷ついた心をなぐさめてくれる者といえば、江戸からついてきた側近の女房たちだけであった。

そんなとき、打ちひしがれた和子の気持をなぐさめてくれたのが、美しい衣裳であった。

〔四〕

入内のとき和子はおびたしい衣裳を江戸から運んできていた。徳川家の威力を天下に示すために七十万石の費用を注ぎこみ、三百七十八荷の荷物を運びこんだのであるから、その衣裳の量のすさまじさも推定がつこう。

和子の衣裳部屋につまっている衣裳は、幼い頃に愛用したもの、入内のときに新調したもの、あるいは京都に来てから調達したものときまざまざであったが、いずれも納品したのは京の呉服商の雁金屋であった。雁金屋といえば尾形光琳の生家である。もっともこの時点ではまだ光琳は生れてはいない。

当時の雁金屋は、淀君、京極高次夫人、あるいは和子の母である秀忠夫人などの引き立てを中心に、豊臣、徳川両家の呉服御用をつとめる、京都第一級の高級呉服商であった。とくに徳川が天下を取ってから秀忠夫人の

そんな時の感傷が、いつも和子に昔をふり返らせるのであった。

少女期をすごした江戸が無性になつかしかった。和子は衣裳の中から少女時代の小袖を選り出すと、頬にあててみた。好きな椿の花模様の桃山小袖には、甘ったるい少女時代の匂いがのこっている。その小袖を抱いていると、幼い時代に戻っていくようで、涙が出た。

だが、そうした感傷にひたる心のもう一方の片隅に、自分の一生を踏みにじってしまった父秀忠や祖父家康への恨みの気持が、芽生えているのに気づくのである。やるせない気持で、胸の中をかきむしりたくなる。

そんな時いつも和子は火のついたように雁金屋を呼びつけた。そうする以外に心のいらだちを治める方法がないからだ。雁金屋はただちに目にもまばゆい反物や生地見本を持ちこんでくる。それを広げたり、品定めをしていると、その一時だけ、麻薬を飲んだように心の苦しみから解放されるのであった。

しかし和子の注文の仕方には、たんなる心のなぐさめというよりも、まるでなにかに憑かれたような狂気があるのだった。反物生地を選ぶだけでは物足らず、図案帳や写生帳を取り寄せては絵柄に空想の翼をのびし、絵模様を指示して描かせたり、あるいは染めさせたりするのに、その注文の頻度が加速度的に増加していく。

とくに二人の皇子を死なせてからはその傾向が強くな

った。

一度に、一枚や二枚ではない。何枚も何枚もひっきりなしに注文をしつづけ、小袖を新調しつづけることによって、二人の皇子の死の悲しみから脱れようとしているかのようなであった。高仁親王の時もそうであり、第二の皇子の死産の場合もそうであった。

衣裳はまるで幼い皇子の死の記念碑のように思われた。

[五]

後水尾天皇が明正天皇に位を譲って上皇となったのは寛永六年の十一月であった。

新たに即位した明正天皇は、後水尾天皇と和子との間に生れた第一皇女興子内親王であるが、年はもいかぬ七才の女帝である。

後水尾天皇の在位期間は十八年間であった。まだまだこれからという男盛りの三十三才で、幼い女帝に譲位したのは、たえず徳川幕府から圧迫を受け、何事も自由にならない形だけの天皇の地位に、これ以上とどまっている気がしなかったからであった。

歴代天皇のなかでも後水尾天皇はことさら気性がげしく、これほど徳川幕府に反抗した天皇はないといわれるが

芦原よ茂らば茂れおのがまま

とても道ある世とは思えず

という歌はこの時の幕府横暴への憤りをうたったものであるという。また後水尾天皇関係の寺には、いろいろ天皇直筆の色紙がのこっているが、そのことごとくに「怨」という字が残っているといわれ、その憤りのすさまじさが目に見えるようである。

家康、秀忠が和子を入内させた目的は、徳川家が皇室の外戚としての地位を得んがためであったが、明正天皇の即位によってその目的は見事達せられたのであるから、後水尾天皇の退位を強いて止める必要はまったくなかったわけである。

天皇の退位にしたがって、和子も中宮の立場を退いたのはもちろんである。そしてこの時から正式に和子は東福門院と名称が変わった。まだ二十三才の若さであった。十四才で入内してから、十年の月日が流れたにすぎなかった。

内裏の空地へは仙洞御所が建てられ、上皇となった後水尾天皇はそこへ移った。

それと同時に和子の壮麗な女院御殿も仙洞御所の一部に加えられ、両者は美しい渡殿で結合された。しかし渡殿が出来ても、それを渡って上皇が女院を訪れてきてくれたわけではなかった。というのは退位を境にして、上皇と女院の心の溝はますますひろがりを見せたからである。

それまで徳川幕府は上皇の女性関係を見るに堪えない

干渉を加えてきたが、退位してからはそれを自由にまかせるようになった。したがって追放されていたご寵愛のおよつの局との間もいつのまにか昔に戻ってしまい、また並行して藤原隆子や京極局光子などからも皇子皇女が産れるなど、女性関係は一段と積極性を増した。それは上皇になってからの子女誕生が三十名を越すという数字が、如実にこれを物語っているが、同時に女院との関係がますます遠くなったことを示すものである。

こうして二十三才という若さで、夫である上皇からも見放され、また生家である徳川家からも見捨てられて、それからの長い人生を生きなければならなかったということは残酷である。女院御殿における表面上の生活はかりに平穏だったとしても、心は闇に荒んでいたにちがいない。

上皇も女院もこの時代においては稀にみる長命で、上皇は八十五才、女院は七十二才まで生きたのであるが、上皇は酒と女性に人生のなぐさめを見出し、女院は狂気のような衣裳作りにはかない生き甲斐を求めながら、同じ仙洞御所の中で没交渉に別々の人生を生きたのである。

寛永九年の正月は大雪だった。

その白い雪にとけこむように、女院の父の秀忠が死んだ。葬儀は芝の増上寺で行われたが、しかし女院は江戸に帰らなかった。遠い京からでは葬儀に間にあわなかつ

たという事情もさることながら、女院の気持の中には、彼女の一生を踏みつぶしてしまった父への愛情がすでに残っていなかったというのが本当の理由ではなかったろうか。女院はさして悲しみの様子もみせず、平然としていたという。

それからしばらくして上皇がひどい病気になり、長い間起きあがれないことがあった。そんな時にも女院は上皇の看護をおよつの局に任せっきりで、いっさい手出しをしなかった。そののみか毎日のように雁金屋を呼んでは、花見の小袖、紅葉狩りの小袖と、上皇の発熱をよそに衣裳作りに血道をあげる始末であった。たとえ上皇が病気のときでも、女院の方からも渡殿を渡ろうとはしなかったのである。

そんな女院を見るにつけ、最近の女院は人が変わったと禁裏の人々は噂しあった。しかし女院の方にしてみれば、入内して以来、たえざる疑惑と中傷の渦の中に生き、あまつさえ政治的に利用価値がなくなればさっさと見捨てられてしまうのである。人が変らなくて、どうしてこの孤独地獄を生きていけようか、と思っている。

「噂のとおり鬼女として生きてやる」

少しぐらいの衣裳道楽が何であろうか。非難したければ、するがよい。

やがて、上皇の心を独占していたおよつの局が五十二

才で死んだ。女院の心をたえず苦しめていたこの女がやっとこの世から居なくなつたかと思うと、女院は気分がすつとした。長年の心の重荷が外れたようで、女院はすこし浮き浮きした気持ちになり、その気持ちを形に現わしてみたいと雁金屋を呼んで晴れやかな小袖を数枚作つてみた。すると

「女院はおよつの局の死を祝つて小袖を作つた」

という蔭口がたちまち周囲に流れる始末であつた。しかし女院はもはやそんな噂を意に介さなくなつていた。

しかしおよつの局が死んでも、上皇の心が女院のところに帰ってくるわけではなかつた。そのみか、かえつてますます女院から遠ざかり、上皇はその後のもっぱら愁嘆の心を修学院離宮の造宮へと傾けていたのである。新調した小袖はかえつて、うそ寒くしらじらとしたものを女院の心に残す結果に終つた。するとその心の空白を埋めようと、女院はさらに次の衣裳の新調へと狂気のようにのめりこんでいくのであつた。

〔六〕

こうして七十二才の天壽を全うするまで女院はひたすらに衣裳を作りつづけたのであるが、衣裳狂いは老女の生き甲斐を通りこして、それに縋りついていなければ生きられない、命綱になつてしまつた観があつた。

だから衣裳の注文は老後になればなるほどその量がふ

えていった。

ちなみに女院は延宝六年六月二十日に死亡したのだが、その死んだ年の半年間だけをとつてみても、雁金屋に三百四十点もの衣裳を注文していた。それも御地倫子御染縫、振袖御地りうもん、倫子御染縫などの極上品ばかりで、その金額を現在の貨幣に換算すれば、一億五千万円にものぼろうという膨大な金額である。いくら徳川家という後楯をもち、女院という地位にあつたとしても、七十二才の老女が死を眼の前にした六カ月間に注文する衣裳の量としては異常である。異常というよりは狂気に近く、狂気を通りこして鬼気迫まる思いがする。

こうして女院がその生涯に作つた衣裳の量は気の遠くなるようなおびただしさであつたが、その衣裳を始終一手に引受けて作つたのももちろん雁金屋であつた。とりわけ女院の晩年の衣裳に絵筆をふるつたのは雁金屋の息子の市之丞、後の尾形光琳であつた。

市之丞は雁金屋の次男として生れたが、幼い頃からその周囲にはたえず美しい小袖や裾襦が乱舞し、おびただしい衣裳図案帳や文様集、絵柄雛型などが山と積まれていた。大勢の下絵師や染屋たちが、龍の地紋の白倫子に極彩色の絵柄を描いたり、鮮やかに染めあげたり、そして縫屋が色とりどりの糸で縫うなどして、忙しくたち働いていた。

そうした環境に育つた市之丞がやがて衣裳デザインに

関心を持ち、次第に絵筆を持つ習慣を身につけていったのは、自然のなりゆきといつてよかつた。そのうえ市之丞は天稟に恵まれていた。めきめきと腕前は上達した。女院は毎年、御用呉服書上帳を作らせては雁金屋に発注するのだが、市之丞の技術が進むにつれて、その書上帳の図案の一部を市之丞が担当するようになったのも、したがって当然であつた。

その市之丞がはじめて女院の小袖に絵を描いたのは十六才のときであつた。

しかし女院に逢つたのは、その時が始めてではなかつた。父が注文の呉服を女院御殿に届けるときに、幼い市之丞を一、二度、連れていつてくれたことがあつたからである。だがその時の市之丞にはまだ女院なる女性がどういう人なのかもちろん知るはずもなく、ただ父の横にちょこんと坐っていただけで、その可愛らしさに

「まあ、お人形さんのよう……」

女院が笑顔で差し出してくれた菓子を夢中で受取つたぐらいしか記憶に残っていない。

だが十六才になつた今日の訪問はそうはいかなかつた。仕事である。自分の描いた小袖を果して女院が気に入るであろうかと思うと、御所の門をくぐる市之丞の心はつよく緊張した。

幸い市之丞の小袖は合格した。

それは絵模様が女院の好みの椿の花であつたことにも

原因があるろうが、それだけではない、女院はその絵のなかに若い市之丞の才能を見たからであつた。その日市之丞が持つていったのは紗綾倫子の小袖で、背面右肩あたりに華やかな紅椿の大柄模様を配し、それが左肩と裾にむかつて扇面と流水に転化していく、寛文模様としてはとくに際立つたものではなかつたが、しかし絵筆のあとには職人化した下絵師には見られない新鮮なものが、キラリと光っているのを見逃さなかつたのである。これは只者ではない。そこには衣裳デザインの新しい可能性が若い獣のようにひそんでいた。

女院は十六才という若い市之丞に強くひかれた。いま目の前に坐っているのは、いつか菓子を与えた目玉のくりつとした童ではなかつた。色の白いは幼い頃そのままだったが、背丈はすっかり大人にのび、切り落したばかりの前髪のアとが痛々しいように青い。それが椿の花弁のような赤い唇を引きしめて

『小袖の出来工合はいかがでしょうか』

と一途な表情をこちらに向けているのを見ると、女院の心の中に久しぶりに人恋しさの感情が首をもたげてきたのである。

そのとき女院はこの若い市之丞の上に、若衆歌舞伎の扇之助の面影を見出していたのであつた。

〔七〕

女院は

「あれからもう三十年にもなる……」

遠い昔を思い出していた。

中村扇之助というのはその頃四条河原に小屋をかけていた若衆歌舞伎の役者で、美しい上に芸も上手であったので、非常な評判であった。

「あの時の扇之助も市之丞と同じ十六才であった」

両眼を閉じれば、鼻筋の通った人気が衆の顔が瞼の裏にありありと浮かんでくる。

その人気があまりに高いので、噂は禁裏の奥深く、女院の耳まで聞えてきたのであって

「もし、おのぞみでございましたら、ご案内いたしますよう……」

と側近に仕える肥後局が女院にそうさやいたのだった。肥後局は江戸から女院に付きそってきた信頼のおける唯一の女房で、何でも打ちあけて相談ができる人であった。

「でも、歌舞伎見物はご禁制ではないかえ……？」

「いえ、それは表面だけ……。誰もが隠れて見にいっております」

そう言えば上皇さえもがしばしば侍従の案内で、身を隠して見物に行っているようであった。

女院もすめられるままに、ある夜肥後局の案内で歌舞伎芝居を見物にいった。人に知られてはまずいので二

人とも頭布で顔をかくし、町方風の衣裳に着がえて出掛けたので、誰にも怪しまれずにすんだ。

宮中の歌舞伎見物は「公家諸法度」の禁止事項である。二代將軍秀忠の作ったその法度に、娘の女院がそむいて芝居小屋に足を運んでいるのだと思うと、父に復讐の刃をむけているようで、女院は軽い興奮にかられていた。

若衆歌舞伎は寛永六年に禁止された女歌舞伎に代わって流行したものであるが、ちょうどこの頃が最盛期で、どこでも花のような少年が主演していた。とりわけ中村扇之助は評判が高いだけあって、その美しさは眼のさめるようで、すっかり女院は心を奪われてしまった。江戸城や禁裏などの閉鎖された社会しか知らない女院には、三味線や太鼓の音曲で彩られた舞台や棧敷の華やかな雰囲気は心が浮きたつようで、姫君や若侍に扮した扇之助が舞台に現われると

「美しいのう……」

「かわゆいのう……」

嘆声の連発で

「ほんとうに芝居小屋に来てよかった」

舞台が終って楽屋へ行くと、扇之助が挨拶にやってきて、酒肴が出された。舞台化粧を落した素顔の扇之助はまた別の違ったういういしい美しさであった。ほんのりと酒に酔った女院はまるで夢の中にいるよう。だが同時に、これまでに上皇が隠れてこんな美しい役者を寵愛し

ていたのかと思うと、自分のことはさておいて、心の隅に憤りが走った。

河原から帰ると、女院はさっそく雁金屋を呼んだ。もちろん扇之助へ贈る小袖の注文である。

出来あがった小袖を届ける。

扇之助から折り返しお礼の手紙が届く。

女院は手紙を読み終ると、胸に抱いた。乳房が熱く盛り上ってくるようだった。この年になって、こんな情感におそわれるなんて、どういうことだろう……。だが、その情感を捨てる気にはなれないのだった。

扇之助の舞台をもう一度見たいと思う。しかし禁裏の奥深くに住む女院には、そうたびたび河原に出ていく機会がなかった。

気持が高ぶってくると、女院はふたたび雁金屋を呼んで小袖の注文をするのだった。今度は同じ絵柄の小袖が二枚で、一枚を芝居小屋に届けるとともに、一枚は手許において扇之助を偲ぶがとしたのである。女院は扇之助が恋しくなると、その派手な小袖を肩にかけてはしゃいでみせたが、しかしその作られた陽気さの裏にひそむ哀れさは、見る人の心を慄然とさせた。こうして扇之助への衣裳といえば金に糸目をつけずに注文しては届けさせたが、それは惚れた男に捨てられまいとする巷の女の心理とまったく同じものであった。

こうした衣裳狂いは、扇之助が若くして死んだ後まで

フ

もずっと続いた。その美しい面影はいつまでも女院のなかに鮮烈に生きていて、死んだと知りつつも扇之助好みの小袖を何枚も注文するのであった。だが出来あがってみても、それを届ける人はもうこの世には居ない。仕方なく小袖は女院の衣裳部屋にそのまま積み重ねられたままで、葛にいつぱいになった衣裳は、やがて盛りこぼれて外にあふれ、その上にさらに新しい小袖が次々と積みあがっていくさまは、まるで衣裳部屋に扇之助の墓があるって、その幻の墓石を華麗な衣裳の堆積で供養しているかのようであった。

[八]

尾形市之丞は最初の小袖で見事女院の心を射とめ、女院晩年の小袖のほとんどを一手に引受けるようになったのであるが、その絵柄には椿の図案化が非常に多かった。女院が椿の花をことさら好んだからである。

女院の椿への好みには父秀忠からの影響が多分にあった。椿は散るとき花の原形で落下するので、それが首の落ちるのに連想され、武士には嫌われたが、秀忠はそんなことに頓着なく椿を愛好した。徳川二代將軍という地位を利用して日本全国から椿の原木、珍種を江戸城内に集めたので、広い吹上御苑の一角には目もあやな椿の森がひろがっていた。

幼い女院は椿の森でよく遊んだ。

幾重にも重なりあつた濃緑の葉は日につややかに照り輝き、だが下蔭の濃密な葉群は鬱蒼と暗く、明暗のみどりがしたたる中に真紅の花がびっしりと咲いていた。

山椿、乙女椿、ゆき椿、黒椿、呼子鳥、都鳥、白玉椿、源氏車、崑崙黒、太神樂、羽衣、釣簪、沖の浪、初嵐、縹子重……、数えればきりのない、名前さえ知らないさまざまな椿が、つややかな色彩と形を競いあって、森のなかの友禅流しのように咲いていた。

各地大名が將軍という威令になびいて献木しただけあつて、珍品奇木のおびただしさもさることながら、古木巨木もまた多く、中には年を経た幹が巨龍のように天を摩して、小山のような梢に、何千、何萬という椿が盛りこばれるほど咲きただれている花の堆積には、圧倒されるような恐ろしささえあつた。

さらに花の密集の下蔭には、どこにも、かしこにも、おびただしい落椿が散り敷いて、これも恐ろしいまっ赤な血の海であつた。

幼い女院はその花ざかりの森を無邪気に奥まで歩いていった。可愛い指先で、血の落椿を恐れげもなくひろつた。そうした幼時のたのしい体験がいつのまにか女院を椿好きにしまったのにちがいない。

だから女院も入内のときに椿の木を大量に京都に運ばせて、女院御殿のまわりに植えたのであつた。女院が椿好きなのを知つた大名のなかには、秀忠へしたのと同様

に椿を献木する者も続出して、いつのまにか女院御殿のまわりにも椿の森が出来上つていた。

なかでも女院が最も寵愛している一本に、黒椿があつた。それは江戸からわざわざ持ってきたもので、花卉は一重の中輪咲き、濃紅色につやのある花卉は黒と感ずるほどであつた。

もともと女院は椿でも、あまりに華麗な大輪や、花卉が複雑に重なつたものよりも、一重で単純な山椿を好んだ。五弁の椿が花として一番純粹で、紅の色も一番あざやかに思われるからである。とりわけ紅の色は濃ければ濃いほど女院の好みにあい、紅が黒になるほどに深まつた黒椿を女院は最上としていた。だから黒いといっても、本当の黒ではない。赤が濃度を極限まで増して暗赤色になるのである。

しかし黒椿を咲かすのは難事である。その黒人の肌のような花を咲かすには、死体を根元に埋めるのが一番いいと古来からの言い伝えがある。死体からたつぷりと血を吸いとつて、椿は暗赤色になまめいて咲くのである。そのため女院はひそかに死体を椿の森に埋めているという噂が一時ひろがり、毒殺された加茂宮もその犠牲になつたのだという中傷が、まことしやかに拡つたこともあつた。その真偽をたしかめるかのように、椿の根元が深夜ひそかに何者かの手によって掘り返されるといふ事件さえも起きたことがあつた。もちろん地中から何も出

てこなかったのは当然である。

いつの頃からか女院はこの黒椿に『腹切丸』という名前をつけていた。女院だけの秘密である。花の名前に奇怪な『腹切丸』とはおだやかでないが、これには少々わけがあつた。

幼い女院が椿の森で遊んでいた時のことである。ある日、森の奥に迷いこんだ。すると椿の木蔭と石垣の間に腹切丸を見たのである。腹切丸とは名のごとく切腹する場所である。建物といつても小さな小屋にすぎない。小屋はひっそりと建っていた。見ると床板の中央に、黒く流れ出た痕跡があるのである。切腹した血の跡にちがいない。幼い女院は一瞬ぎくりとしたが、しかし不思議にそれ以上こわいとは感じなかった。

思いがけないこの光景は、後々までもあざやかな印象となつて女院のなかに残つた。京都に移ってきてから後、ときどき甦えってくる。

そしてことさら腹切丸の印象をあざやかにしていたのは、床の血痕の上に散っていた落椿であつた。落椿の色は切腹した武士の生ま生ましい血の色に見えた。

それは異様に妖しい美しさだった。

女院の幻想の中で、打ち首になつた若い武士の蒼白な顔や、切腹した侍の白い腹がなまめかしく動き、血は流れて赤い椿の花弁へと変身していくのであつた。

やがて切腹した若い武士は女院の中でゆっくりと若衆

歌舞伎の扇之助の上に重なつていき、黒椿は扇之助の化身になつた。

こうして女院は黒椿に『腹切丸』と自分だけにわかる名前をつけていたのであつた。

(九)

こうして市之丞のところへは女院から衣裳の注文が殺到するようになったが、注文がふえれば雁金屋の売り上げもあがるわけで、雁金屋の当主もこれには大よろこびであつた。その頃の京都では町女房の衣裳に奢侈禁止の法度が出ていて、どの呉服商にも高級な小袖の注文などなかったが、雁金屋だけは女院御用のおかげでこの制約を受けることなく、華麗な衣裳作りが出来たのは幸いと云わねばならなかつた。

若い市之丞は女院の小袖の絵の想を練るために、画題を求めてよく写生に出かけた。

小袖の絵は画布としての紙や絵絹に描くのとちがひ、立体的な装飾である。だから画帳に草花や風景を写すときにも、頭のなかにはたえず女院の姿を浮かべながら、立体的な筆使いを進めていかねばならなかつた。しかし市之丞にはたんなる絵師としてだけでない、物体を画布として自在にこなし切る、装飾家としての天分があつたのである。だから写生した絵を小袖に仕立てあげた場合でも、絵は小袖という不整形な形の上に巧みに展開され

て、びったりと納った。

もちろん市之丞が描いたのは、椿の花ばかりではなかった。松や竹や白梅紅梅もあり、また目のさめるようなかきつばたの花や嫋嫋とした流水流紋もあって、考えてみると後の光琳様式の原型は、これら女院の小袖の上にすでに芽生えていたといつてよかつた。

出来上った小袖を持っていくと、女院は娘のようにはいでそれを着た。色つやのいい若やいだ顔をなごませながら時間をかけて絵模様を眺め、両肩にかけると鏡の前に立ってみたりした。ときには若い市之丞の目の前で、突然下着姿になって新しい小袖に着がえたりして、若い市之丞をどきとさせることもあった。

しかし市之丞はしばらくして、女院がうれしそうにするのは小袖を受取ったほんのひと時だけにすぎないことに気がついた。

新調の小袖に手を通して、次の瞬間、小袖への関心は淡雪のように消えていて、もとの水のような表情にもどっているのであった。着るために作るのではない、ただ作るためのだけに小袖を作る女院のむなしさが、次第に市之丞にもわかってくるようになった。新調された衣裳は朽ち埋れる落葉のように、ただ衣裳蔵に積み重ねられていただけであった。精魂こめて作った小袖の数々が、ただそうして捨てられていくのは、若い市之丞には耐えがたいことであつた。しかしいくら小袖を作つて

も女院の心は幸せではないのだとわかってくると、七十年という闇の世界を生きてきた老女の荒廃しつくした心象風景を寒々と見る思いがして、市之丞にもそれなりの得心がいくようになっていった。

だがそうした女院の心は、時として市之丞の上に歪んだ形で投影されることがあった。大量の注文が来るのはありがたいことだけれども、時にはとても短期間に作るのが不可能な無理な注文を一度によこして、市之丞が困る姿を見てよろこんでいるようなこともあった。

また小袖の絵柄を選んでいる最中に突然

「市之丞は他の女性にもこのような小袖の絵を描いているのでしょうか」

と意地悪な質問をしてきたりする。

「いいえ、そんなこと……、女院さまのほかには決して……」

だが、いくら言い訳をしても許してくれない。困りはてた市之丞がほとほと涙を浮かべていると、女院がつと寄ってきて、両眼を唇で拭ってくれたことがあった。思いがけない女院の行動に、市之丞はどきとなり、早鐘のように胸が鳴ったことを憶えている。

またある時は注文の内容が男女秘戯図の長襦袴というようなこともあった。若い市之丞は正直言つて困つた。しかし品物を納めないわけにはいかない。仕方なく師宣などの秘画を参考に描いて持つていったが、女院は扇面

散らしのあられもない男女痴態の長襦袴をひろげながら、顔をまっ赤にしている市之丞を見てうれしがつていた。そんなみだらな長襦袴を女院はどんな時に着ようというのであろうか、市之丞には想像もできなかった。

さて、女院がこのように衣裳に狂つていた寛永の頃の日本全国を眺めてみると、それは百姓たちが飢饉で飢え、苦しみ、食を求めては離村し、年貢諸役の負担にたえかねて、百姓一撥が頻発していた時であつた。女院の小袖一枚で、何十人、いや何百人の人間が救える。だが女院はそんな百姓たちの飢餓などは少しも知らない。ただひたすらに衣裳に大金を投入しつづけたのであつた。

[十]

落椿の盛んな頃であつた。

かねがね女院御殿の森の落椿のおびただしさを、小袖の絵模様にしたと思つていた市之丞は、それを写生にいつた。

市之丞は二十才になつていた。女院の衣裳作りに手を染めてから五年になる。

鬱蒼と茂つた椿の下蔭には繊細な苔がみどり色にひろがり、その上に椿の紅色が間断なく散つていたが、それは森の奥へと遠のくにつれて紅一色の、血の池のように濃くなつていた。とりわけ女院の好む黒椿の下蔭は紅の色も黒すんで見える。

その花卉の海を小袖の裾模様様に嵌めこんでみると、日頃狙つていた構図が新鮮に決つた。

市之丞は時のたつのも忘れて写生に熱中した。やがて椿の肉厚の群葉ごしにきらめく日の光が消え、森の下蔭がとつぷり暮れる頃になると、長い間庭石に腰掛けていたので、下半身がすっかり冷えきつてしまつていた。

写生が終ると、女院は市之丞のこごえた身体をいたわるように、座敷で酒をすすめてくれた。もちろん女院もいっしょに飲んだ。というよりも、女院の酒の相伴を市之丞がおおせつかつたといつた方がいいのかもしれない。老いても女院は酒が強かつた。若い市之丞に負けないくらい盃を重ねて平気である。

そうした女院の髪は黒々と豊かで、ふくよかな頬には皺もなく、胸もとも豊かで、とても七十二才とは思えなかつた。市之丞は水を吸い上げたようにみずみずしい女院をまぶしげに見上げた。市之丞の母などはとくにしなびて梅干のようになっていくというのに、こうした世界に住む人は年をとらないのだろうか。

その艶のいい顔を酒の酔いでますます輝やかせているのを見ると、枯木のように生涯を終りたくないという女の執念が埋み火のようにはてっているのを感じて、市之丞はどきりとした。

その時であつた。

女院の手がつと伸びた。そして市之丞の手を握むと、

残った手で胸もとを押し開き、市之丞の手に豊かな乳房を握らせたのであった。

あまりの突然さに、起っていることの意味が市之丞には充分理解できなかった。だが、市之丞の手の中では、柔らかく、みずみずしい、熱い乳房が波うっている。

市之丞の顔がまっ赤になった。

うろたえた。

……………

その夜、市之丞は女院御殿を深々と更けてから退出した。

しかし門のところで闇に落椿の花を踏むと、市之丞の心はにわかにおびえたようになって、脱兎のように逃げ帰った。

その翌日から市之丞は落椿の小袖に精魂を傾けた。他の仕事はいっさい断ち、その小袖一枚にかかりきりになって、仕上げるのに二十日以上もかかってしまった。

出来上った小袖は、目のさめるような落椿の赤を裾に散らした斬新なデザインで、これまでの椿の小袖のなかで最も女院の満足いくものだった。

銀泥地の小袖には、裾にだけ赤い落椿が横にひろがって、裾模様以外には絵柄はない。女院がそれを肩に掛けて立ちあがると、まるで血の海のなかに立ったように見えた。裾まわりにだけ描かれた椿の紅色は、さながら裾

から小袖の胴を這いあがっていく血のようであったのである。

その立姿を鏡に映しながら

「どう、似合うかえ？」

女院は鏡の中で市之丞を誘いこむかのように笑った。

〔十〕

夜になると女院御殿はひっそりと闇の底に沈んでしまふ。とくに女院の部屋のあたりには人影が絶え、その華麗な闇の中で、老女が二人だけ肩を寄せあって生きている。女院と、これも女院と同じように長生きをしている側近女房の肥後局である。

その肥後局がある夜ふと目覚めると、同じ部屋に寝ている女院の姿が見えないのである。肥後局は不吉な胸さわぎをおぼえて

「この夜更けに、どこへ？」

しばらく息をつめて待っていたが、戻ってこなかった。肥後局は起きあがって隣の部屋をのぞいた。だが居ない。あわてて廊下に出てあたりをうかがうと、遠くの衣裳部屋の方がぼんやりと明るい。肥後局は不安で胸が押しつぶされる思いで、すり足で近ずき

「……………」

中をのぞいてみると、なんとこの夜更けに女院は簞笥から衣裳を取り出して、肩にかけてはその姿を鏡に映し

ているのであった。

廊下の暗がりでは肥後局が見ているとは知らず、女院は夢中で気に入った裾襦をはおっては鏡の前でしなを作っていた。そうかと思うと、その昔若衆歌舞伎の扇之助のために作った小袖に両手を通して蝶のように羽ばたき、その蝙蝠のような影が壁の上で黒く歪んでゆれているのである。

その鬼気迫るような光景にさすがの肥後局も息をのみ、声もかけられずに立ちどまっていると、突然

ヒュー

女院は一枚の小袖に両手をかけて二つに引き裂いてしまった。

「ほ、ほ、ほ……」

つづいて女院は声高に笑った。

肥後局は背筋が寒くなった。これまで長い間肥後局はぴったりと女院に寄りそうようにして世話をしつつづけてきたが、このような狂態を見たのはこれが始めてだった。老いた女院が闇に泣いている。泣いてなにかを訴えている。怨んでいる。肥後局はそう思った。だが女院の不幸な人生とともに生きてきた肥後局には、充分わかる気持だった。

突然、肥後局に、老いた女院の魂の悲鳴が突きささってくるように思えた。

翌日、肥後局は衣裳部屋へ入っていった。散乱した衣裳を片付けるためである。

すると一枚のうす気味の悪い小袖が手にふれた。それは血で描いた小袖であった。

白紗綾倫子に椿の花が血で描かれている。

まさかと思って肥後局は眼をこらしたが、血で描いた小袖にちがいがなかった。椿の花は裾に五輪と肩のあたりに蒼が二つで、赤というより、くすんだ焦茶色に見えた。わざと絵具をその色に調合したのかとも思ったが、しかしその色工合はどう見ても、乾くにしたがって次第に鮮やかさの失せていく、血糊の色にまちがいがなかった。そうと解ると、肥後局の背筋を冷いものが走った。

花卉は血で赤く描いてあるが、枝と葉は墨一色の黒だった。それは女院の好む黒椿の花を髣髴とさせた。

だがそれが血であるとなると、それはいったい何の血か。人間の血なのか、犬、それとも猫の血。もしも人間であるならば、誰の血か。疑問は雲のように湧いてくる。

だがそんな血の詮索よりも、そもそもこんな気味の悪い小袖を持ちこんだのはいったい誰なのか、その方が問題であった。女院の小袖の注文状況からすれば、それは市之丞以外には考えられない。だがあの真面目一筋の若者がなぜこんな小袖を描いたのか、それは肥後局の想像を絶した。

女院御殿が炎上したのは、そんなことがあって間もない頃であった。

その夜は風が強かった。

女院御殿の椿の森は六月の闇に鳴っていた。

その夜も御殿の奥深くでは、女院が衣裳を引き裂いていた。簞笥から引き出された小袖は衣裳部屋に散乱し、廊下に流れ出し、さらに衣裳蔵、はては大広間へと、御殿の隅々にあふれて、深夜の女院御殿は華麗な衣裳の花盛りであった。

小袖を引き裂く女院の手が、勢いで燭台にふれて、倒れた。散乱した衣裳に炎が燃え移ったのは、その時であった。

最初に燃えたのは血の椿の小袖であった。炎は血の花弁から花弁へと人魂のように伝わって燃え、花弁が燃えつきると、他の小袖に魔手をのばしていった。

女院は気が抜けたようにぼんやりとその炎を見つめていたが、それはものの悲しく、うつろな色だった。だがその透明な火勢のなかに、女院は青白く湧きあがるように揺れているものを見た。

それは加茂宮の怨霊だった。

女院は恐ろしさで身動きも、叫ぶことも出来ず、ただ凝然とゆれる亡霊を眺めている間に、炎は音もなく衣裳

の海にひろがり、やがて部屋のすみずみに充滿して、肥後局が

「火事ですす!!」

絶叫したときはすでに手おくれだった。

女院御殿は全焼し、その中で女院も肥後局も絶命した。

京の夜空に燃えあがる炎が御所の方角だと聞いたとき、市之丞はとりもなおさず女院御殿までかけつけた。しかし到着した時はすでにおそく、女院御殿は華麗な炎の柱を闇の空に吹きあげていた。

市之丞はむらがる野次馬にもまれて、それを見上げながら

「ああ、おれの描いた小袖が燃えている」
市之丞の心は泣いた。

市之丞が女院のために精魂こめて描いた小袖は何百点になろうか。それがこの一瞬の炎で燃えてしまうのかと思うと、市之丞の全身からは力が抜けた。

だがどうしても一枚だけ救いたい小袖があった。市之丞が自分の血をしほって描いた椿の小袖である。衣裳部屋で肥後局が発見した気味の悪い小袖は、想像した通り市之丞が描いたものであった。

血の小袖を描いたのは、市之丞が女院の乳房を握った、その夜のことであった。

自分でもわからないほどの異常な興奮に突き上げられ

るようにして家に帰ると、家の者が寝静まるのを待って、もろ肌ぬいだ。左腕に剃刀を当てると、まっすぐに引いた。血が白い肌に糸のように浮かび、次の瞬間、波の背のように盛りあがったかと思うと、どっと溢れた。

絵の具皿に受けとめることもせず、そのまま絵筆にたっぷりを含ませると、市之丞は憑かれたように白紗綾倫子に椿の花弁を描いたのである。

次から次へと溢れてくる血の赤さが、そのまま花弁の赤になる。

だが乾いた血糊はやがて布の上で赤黒く、くすんでくる。その対比から枝や葉は墨一色にと工夫をこらしたのである。

この一枚だけはどうしても救い出さなければならないと思います

「その小袖を返してくれ!!」

炎にむかって走り出したが

「危い!!」

たちまち群衆によって押し戻されて、その場に倒れた。こうして市之丞の描いた小袖は一枚も救い出されずに、巨大な炎となって、京の夜空に燃えつきってしまったのであった。



松尾芭蕉

瓢の艶

八十島 元

一
貞享元年八月に大老堀田正俊が若年寄稲葉正休に江戸城殿中で刺殺されると、柳沢吉保の権勢はそれまで眠っていた土壌を破って少しづつ抬頭してきた。

五代將軍綱吉は、その諫止者の死によって手綱の引き手を失ってしまうと、翌二年『殺生禁断令』なるものを世間に触れた。いわゆる生類憐みの令である。

去る年、愛妾お伝の方のあいだの徳松という一男に死なれ、僧亮賢らに「前生において殺生をした報いである。子が欲しかったら生類を憐れむがよい」と進言されたのが発端であった。だからもっと早く布令をしたかったが、堀田正俊の強硬な反対に遭って、これを押し切ることが出来ずにいたのである。

隅田川畔、深川は海辺に近く湿地帯が多い。堀割や川が西に東に流れて、みんな隅田川にそそぎ込んでいる。その大川に平行して六間堀、南に小名木川が、それぞれ

見渡すかぎり繁茂した葭を岸にともなうて流れており、野っ原に点在する土着の農家はいちょうに貧しげであるが、近頃は大名や旗本の下屋敷もちらちら建ち始め、それにまじって富裕な町人達の寮なども、黒塗りの塀をめぐらせて、大名、旗本にするものぞ、とその富を誇っている。

ときたま風にのってながれてくる、ものを叩く音は、小名木川端の船造場か船蔵や石揚場からであらう。

西は富士山、北は筑波山が見える。

この広びろとした葭と森と水の大地、深川の西元町とよばれる江戸の郊外にも、ようやく豊かそうな春がおとずれはじめたかのように感じられる。

大川ひとつ隔てた江戸市内の繁栄は、良きにつけ悪きにつけこの大地を強靱にしてゆく。三年前の大火にしてもそうだ。飛火は大川を越えて葭を焼いた。いくつかの農家を、森を。

今、貞享三年の春、葭原を開墾する百姓のふるう鍬音

ものびやかである。

小名木川が大川へ出るあたりに船番所がある。江戸から下総は行徳などへ往来する船を改めるための粗末なものだが、その番所からあまり離れていない、といっても田畑も留池もあったりする野原に萱葺の一軒家がある。

――芭蕉庵である――

大川の向側の広大な倉屋敷のあたりどこからか、かすかな犬の鳴き声がする。それを見返りみかえり従いてくる異様な大坊主には無関心なようすで、芭蕉庵へ近づいてきたのは商家の大旦那の杉山杉風である。

だが芭蕉庵の軒下のよほど手前までくると、忍びやかな足取りにかわった。

彼は師に気づかれないように、ゆっくりした動作で、台所の土間を横切り、竈のわきの柱に手を伸ばした。

芭蕉は背中を見せて庭を眺めていた。文台に片肘をのせ、あぐらをかいた太股に片方の掌を置いているが、ときたま人差し指が跳くように着物の上から膝のあたりへ動いて二三度掻き搔るようになる。文台というものが低いので猫背になってしまう。(見るからにお年を召されたもの)と杉風は思ったが(師は自分より三歳年上、してみれば初老とはいえまだ四十三。それがどうかすると六十ぐらいの老人に映ることがある。こうして物思いに耽けられる後姿の瘦形は六十を余程越えられて見える。か

と思えば、われわれに俳諧を語られる時の師の体貌は若々しく、殊に長い眉毛をともなった眼を、いくぶん細められ、薄髭の下唇が品よく開かれてじっと見詰められると、相手は思わずたじたとする。篤厚質実の温容、怡然自得した状貌が全身に横溢し、すこぶる潑刺、若さが瞳にあふれてくるのに……。あの人差し指で太股を掻くのも、考えごとの時のお癖だが、ご持病がおもわしくないのであらうか)

杉風も師と同じ痔疾を病み、胃腸が弱いので、こうして訪ねてくるときは必ず漢方医に薬を調合して貰ってたづさえるのだった。

竈のそばの柱に長さ三尺(九十糎)胴まわり四尺ほどもある大瓢がぶらさがっている。杉風はその底に手をあてて持ちあげてみた。

――軽い――杉風は戸の外で背に荷を負っている先刻の坊主を黙ってさしまねいた。坊主は心得顔に戸外に立ちどまっており、杉風の手招きでまたも心得顔に敷居を跨ぐとうとしたが、それが慣れた調子でいささかも危げないとみえたのに爪先をひっかけた拍子に顔から土間へ突込んでいってしまった。

杉風は思わず両手を打ち合せて師匠を振り向いた。

「やっ、これはこれは杉風どの。これ、浄求、大事ないか」と芭蕉は気づいて立上った。

浄求とよばれた坊主は、あわてて起きあがったが無意

識か鼻面を避けたので頬から耳にかけて泥にまみれている。芭蕉も杉風も顔を見合せて怪我のないのを見てとると、同時に笑いだした。

浄水というのは、芭蕉の郷里伊賀上野の母方の遠縁に当る者で、昨年の暮、母の死にさいして（へくれぐれもこの者頼みまいらす）という伝言をたづさえて芭蕉を頼ってきた。知恵遅れとは聞いていたが、性格は素直。すでに二十歳を過ぎていたけれど、しかしときどききらめきのような才も見せたりするので、芭蕉は自分の禅の師とはいってもほとんど無名の禅僧である仏頂にあづけて剃髪させた。仏頂が寺と称するものは臨川寺というが、庵といった方がふさわしく、主に住居にしていたのが近くの長慶寺だった。けれど仏頂自身が居候みたいなものだった。浄求も弟子入りはしたものの、彼の精神生活ではとうてい追い随いてゆける相手ではなく、好んで朝夕芭蕉の炊飯の手助けにきたり、たまに仏頂の身のまわりの世話に帰ったり、ときには芭蕉の使いで、日本橋の杉風の本宅や、さ程離れていない小名木川上流の別宅などへ走ったりしていた。

今朝も早いうちに芭蕉はいささかの金銭の無心に、書状を持たせて別宅へ駆けさせたのであった。だが一刻半以上も帰ってこないで、別宅にいない杉風を求めて日本橋まで行ったものと想像していたが、それは当たったようだ。

米のなき時は瓢に女郎花
ものひとつ瓢はかろき我よかな

などと芭蕉も詠んでいる。どれだけこの瓢のお蔭で慰められてきたか。

「見事なもの……まことにそうよ。おのれで云うのもおかしいが、無造作で、手軽で簡素。この庵に調度といえるものは一物もなきに等しいがただひとつ大瓢あるのみと。じゃが、それとても軽いことが生涯の軽きに似ている。粗食を食らい水を呑み、肱を曲げて枕とするぞ、これが世かな……じゃははははッ」

杉風は米を瓢に入れ終ると床へあがってきて坐った。浄求は竈に薪をくべて火を点けると渋団扇で煙を戸外へ追い始める。

庵とはいっても六帖一間、便所、壁を丸く掘り抜いて砂利を敷き、釈迦像を安置してある。鴨居に、甲斐の知人におくられたものだが檜笠と芭蕉が竹を削り紙を張って渋を塗り日に干した苦心手製の笠が掛けてあり（世にふるはさらに宗祇のやどりかな）と句がしたためてある。庭といってもどこからどこまでがそうなのかわからない。沓脱の苔むした石、というより、そこに石があったから庵の位置やら濡縁を造ったといったふうに見える。

軒に触れんばかりに芭蕉の木が二三本生い茂り、ときたまの風でかさこそと音をたてる。

「たび重なる無心であいすまぬこと、委細書状のごときじゃ」

「そのことより」と杉風は柱から瓢を外し、浄求に手伝わせ、土間に投げだされた袋から米をそそぎながら、

「四五日まえから、いささかこみいった事情が起り本宅に寝泊りしておりましたので遅くなりました。」

「なんの、なんの、無心事に恐れ多いことじゃ」

「それにしても、いつ見てもこの瓢の見事なことでございますなあ」

「そのこと、そのこと。不思議なこともあるものじゃ。いつの間にかよい光沢を放つようになりました」

瓢は米がなくなると花活にもなる。芭蕉はこの沈みこんだ光沢にふさわしい花を、とよく野を歩くようになった。が、いつのまにか杉風や文鱗、曾良、あるいは他の弟子の誰かがいれてゆく米で充たされていた。その他、味噌、醤油、酒、野菜など人知れず置いてゆく者もあった。近くに住む河合曾良などもなく顔を見せれば世話をしてくれる。

それでも米が一粒もなくなることがあると、芭蕉はてくてくとひとり、彼の好きな茶の紬の八徳（十徳に似て俳人や画工などが着た胴着）の袖をゆらしながら出ていったりした。

瓢は石川北鯤という弟子が贈ってくれたものであり、（四山瓢）という、山口素堂の朱漆りの銘があった。

もともとこの庵の地は杉風の別荘であった。杉風は日本橋小田原町に魚問屋を営んでいて、屋号を鯉屋といい、代々幕府の御用川魚商として、主に武家屋敷に出入を許されていた。かつてはもう二棟ばかりあったし、今はすでに使われなくなっている鯉の生州があったのだが、もう見る影もなく、古池同然の姿で残っている。そしてその頃は坐興庵と称していた。朽ちて別荘の役に立たなくなっていた坐興庵を伊賀上野から江戸へ出てきた芭蕉のために打ち毀して建てた最初の芭蕉庵は、天和二年十二月二十八日、三年と少し前、駒込の大円寺が火元でおきた大火で類焼してしまった。本郷から下谷、神田をそうなめにし、火は日本橋の一部、本所深川まで延びて、江戸の大半を一日のうちに焦土としてしまった。杉風の本宅は類焼をまぬかれたが、深川は、芦やら林やら焼えるものは互いは焼きはらいあい、風を起し、火は地に伏し天に昇った。

——その時のことを芭蕉はよく人に語った。そして語るごとに彼の中で炎は更に大きくなり、火によって動かされた自分の行動は次第に筋だてされて、聞く人々を感動させた。彼は大川の水を掌で汲み、浴びながら熱気を払っていたが、ついに川に飛び込んだところ、炎は川面を這って吹きつけてくるので、流れよった古藁らしいものを頭からかぶり火の子を避けていたが、そのうち藁にも火がついたのでうち捨てて、水中にもぐったり顔を出

したり夢中で泳いでいるうち下火になった。浅い所でおも体を漬けていると、家財や死体が流れてくる。大きい櫃らしいものが流されてきたのでそれに掴って浮き流されているうち誰かが助けあげてくれた。というものであった——芭蕉はこうして一命をとりとめた自分の姿を人に物語るとき、まるで芝居の筋を組み立てでもいのように満足気であった。

けれどもまた、人の世の儚さの思いにも深く囚われた。芭蕉はもと青桃と号していたが、焼ける前の最初の庵に弟子の季下が記念に一株の芭蕉を贈って植えたのが、地味に叶い繁茂し、いつとはなしに芭蕉庵と呼ばれだし、芭蕉庵の青桃がしだいに芭蕉と自他ともに号されていったのである。

大火後一時、甲州に難を逃がれていたが、翌年江戸に帰り、暫く江戸市内、日本橋橘町の長屋に仮住いをしていたが、弟子たちの好意で同年の暮に再建されたので、ふたたび芭蕉庵のあるじとなった。その名にふさわしく芭蕉も植えられた。つまり第二次芭蕉庵というべきであった。

「杉風どの聞いておくれ……蛙の句をつくろうとて苦吟いたしておる……」

杉風は体が弱く耳も病んで、若い時分、坐興庵といった頃のこの庵の地でのんびりと静養したこともある。彼

は耳が遠い。だからじっと相手を見詰める癖がある。理解しようとし、そしてその視線で相手に誠意を示そうとする努力でもあった。

「中七だけは出来たがどうにもならぬ……」

「してそれは……」

「……蛙飛んだる……じゃ。だが（飛んだる）は談林風で氣に喰わぬ」

と芭蕉はことさら大きな声をだす。

「蛙飛んだる……ですか」

杉風はふと庭に眼をやった。

心なしか眼頭が曇ったようだ。

かつて数百匹もの鯉を放っていた生州が、いまは水草におおわれている。当時は蛙もよそからはくるが、生州にはその卵すら育たなかったもの。整理もゆきとどき、近くの小川から引き込んだ水で底まで透いて見えた。それが今では背丈ほどもある雑木の葉が重なりあって庭をせばめているが、この無秩序な自然を師はこよなく愛されておられるのだ。

芭蕉は杉風の一瞬の沈黙を見逃さなかった。

「やっ、自分のことばかり云わんとしていた。杉風どの……ところどころこのたびの生殺禁断令はいかいご商売にさし障りがござろうと案じておりましたが」

「あっ、いやそのことにつきましてはご心配下されますな……確かにお上の台所は鳥獣魚介類いっさい用い

ることを禁ぜられました。が、とくに厳しいのは犬に限られてござります……いまのところ」

「さようですか。それなればよいが、世間の噂では、魚釣りに役人の眼が光っていると」

「先生、蛙の句、ご苦吟なされていること、其角からも洩れうけたまわっております」

「今も杉風どののお出になるまで池の気配に心を奪われておりました」

「ではお心を乱しましたようで」

「なんの。いやお待ちあれ……」

芭蕉は庭の方へ眼を移すと「気配」と呟く。

「そうじゃ気配じゃ」

杉風も誘われて庭の茂みの向うをうかがった。

「蛙の飛んだのを見たわけではない。音のみを聞くばかりじゃ。音は蛙なるべき理を申したいと苦吟いたしていたのじゃ、われは」

「音は蛙なるべき……と」

「そうじゃ。形ではない。考えてみるがよい。水音の動池の静かさに刹那の音。ここに永遠の閑寂の余響を把みたいもの……おおそうじゃ、まさにこれじゃ。飾らず、喋らずほんと投げだす……蛙飛び込む水の音……と。」

「おお、おお、響きまする」

「これ以外に言葉の贅肉はいらぬ。蛙、を詠むに声、と

云い、鳴くときのおかしみを云うはすでに古い。談林風は饒舌すぎるのじゃ。……蛙飛び込む水の音……あとは上五のみぢゃ」

「おお、匂いまする。言葉が匂いまする」

「やっ、ほんとうに匂うぞ。台所から匂ってくる」見ると釜が沸湯してぼこ吹きだしている。

杉風も芭蕉も「あっ」と云って爆笑してしまった。

「お師匠さま、そろそろ飯が炊けます」と浄求が恐るおそる声をかけた。

二

芭蕉は杉風から袱紗包みを受けとると、さも尊いもののように押し載いて、仏壇の釈迦像の足元に置いた。

「国元から便りがありましての……病みがちで兄も老いもうした。生活も細々と頼みかけの……また、われも日頃、人の訪いも多くなにかと物入。あいすまぬこととでござる」

杉風ばかりでなく弟子の誰もが、芭蕉自身が生活的欲望の少ないことを知っていてくれる。だからこそ無心も出来るのであった。

「ただ近ごろは憂きこともあり、親しき者はうれしくも人に会いとうなきときが多うござる。人も招かじとは思

（明日も禪師の仏頂どのが、僧四五人引連れて訪い下さる、との伝言が昨日あったばかり）と芭蕉は云いそうになつて口をつぐんだ。もっと米をよこせ、と物言いになりそうだったからだ。いや、あの瓢に一杯は持つてきてくれたようだから当分は充分なのだが、と、芭蕉はあわてて首を二三度振つた。

芭蕉自身にまったく現金収入がなかった訳ではなかった。俳席での謝礼や短冊の揮毫料もあったが、すでに宗匠としての生活から身を引き、己れだけの俳諧の求道をこころざして庵に籠っている今、弟子たち、とりわけ杉風に、そして其角や嵐雪や曾良達を頼るよりほかになかった。金銭ばかりでなく、衣服、調度に至るまで無心しておきながら、やれ着物を洗ってくれ、糊を少しつけてくれ、とか、人がきて無駄紙を使ったから紙を届けてくれ、ついでに酒を頼む、旅をしたいから金を借して欲しい、しかし返せないかも知れないので承知してくれ、などと随分勝手放題を云っている。絵も画きたくば書く、字も習う。やれ蒟蒻だ刺身だ黒豆が欲しい、納豆が喰い

「やれやれ、わたしは途方もない贅沢な乞食じゃ。分を
わきまえぬ風狂の乞食じゃ。だがこの乞食は雪月花の楽
しみも仕放題。ははっははっ」

「おおそうよな……さつ浄求も食べなされ」

「わが齡もすでに四十を越えた……：……かつて若き頃——ひとたびは仕官懸命の地を羨んだこともあり、武家としての世間的な欲望にゆらめいたこともあった」

「今はただ、俳諧一途だが、（俳諧に古人なし）とようやく思い至り、俳諧も今のままでは文芸の味を失ひ亡ぶと憂うる心が定まりかけてきた」

一そうじゃ、松永貞徳に端を発する貞門風、西山宗因などの江戸談林風、目新しいように感じてどちらも大した味の違いもなく、あいかわらず言葉や縁語を弄し、知的な興味を主としたもの……：駄洒落の遊びと評されてもいた

浄水は箸を指に差したまま下を向いて気づかれないようにとめどもなくぼろと泣いている。

「遠くは富士の雪をのぞめ、ちかくは萬里の船が泛かぶ
 暁などは漕行船の水尾の白浪も美しく、芦にも夢をふ
 く風を感じ、月に坐しては空しき樽をかちたり、枕に
 よって薄きふすまを愁う。これを幸せといわずなんであ
 ろう——簾の声波を打て腸氷る夜や涙——じゃ」

芭蕉の口調は次第に漢詩でも詠むように高揚してきたが、ふっと調子を落とす

「風もなく雨もない夜半、ふと櫓のきしむ音を聞くような気がして枕から耳をあげて聞き澄ますこともある……」
 ……こうしてこの庵に住む喜びを噛みしめている、この頃じゃ……新しい庵となつてはやふたとせ余、削りなされた柱もいまだ清げであるし、竹の枝折戸の無造作なものもまたよいもの。贈られて植えた芭蕉も年ごとの名月の

移し

「北鯤が贈ってくれたあの瓢に、どれほど心の安らぎを得てきたことであろう。ところが不思議なことに以前にもまして光沢がましました。二年前は、風格こそあれ、もっと沈んだ鈍い彩であった」

「さようでござりましたな……あれを北鯨が持ち込んだとき、飾り物には大きすぎるゆえ、さし当り米櫃代りにでもお使い遊ばしたら、と申しあげたのは手前でございしました。それを面白がって、私ども弟子が、米の剥き出しも非礼と案じておりましたので、これさいわいといふの間に、か暗黙のうちにそれぞれ了解しあってしまひました」

「ははははは、わたしも、そなたたちの厚意がうれしく、ときには発句思案の最中でも、背中で忍びやかに瓢に米を入れてはそっと帰ってゆく、わたしに気づかれまいとする皆の仕草が感じられて、有難くもありおかしくもありました」

芭蕉は、大商人の杉風はともかくとして、他の弟子たちが、そう豊かな生活でないのをよく知っている。杉風ならいいというのではないが、郷里から名のある宗匠となるべく江戸へ下ったとき最初に草鞋をぬいだ家も杉風家だし、すでに十二年余の親交とともに、彼の筆頭の弟子でもあり、物心両面にこころおきなく頼れるのも杉風であった。

大火後の庵再建のときも、芭蕉の俳友、山口素堂老人が、芭蕉再建勸化簿なるものを作って、芭蕉の弟子のこころをくまなく廻し、寄付を募ったのであった。しかし素堂の勸化文にはこうあった。

（芭蕉庵裂けて芭蕉庵をもとむ、力を二三生にたのま
んや、めぐみを十数生に待たんや、広く求むるはかえつ
て其のおもいやすからんとなり、甲をこのまず乙を恥る
ことなかれ。各志のある所に任すしかい……）云々
と。

皆、精いっぱい寄進をしてくれた。

簀一、破れ扇一本、という弟子もいた。芭蕉はこれ
を押し載いて泣いた。

芭蕉はいう。ただただ貧なり、貧のまたひん、雨をさ
さえ風をふせぐ備なくば、鳥にだも及ばず……と。た
だただ貧でよい、たとえ雨漏りしてもよい、風さえ防い
でくれれば。最初の芭蕉庵のように、

一瓢重簾山 自笑称箕山

莫習首陽山 這中飯顚山

そして（四山瓢）と命題されていた。

「このとき、素堂翁とふたり腹をかかえて笑ったものじ
ゃが、それ以来あの大瓢を四山瓢とよぶようになった」
「先生、これは漢学に素養がなければ、凡その理解を越
えられませぬな」

「ふむ、ご存知のように、簾山、箕山、首陽山、飯顚山
ともに中国の李白、杜甫なども関わる伝説をともなった
著名な山じゃ。ゆえに四山という。おおかたの意は、こ
の瓢は、たと米の入っている（飯顚山）だから心配な
いが、首陽山で餓死した伯夷叔齊の兄弟のようにならな
いで欲しい、というのじゃが、箕山の箕は穀物のごみを
ふるう農具でもあるからおかしいし、許由という武將が
箕山に隠れて、世上の汚れに耳が濡れる、と云った古事
もあるし、また飯顚山は支那の老詩人杜甫が住んでいた
ところ、ともいう……貧に清く、虚しきときはちりの
器となれ、得るときは一壺も千金をいただいて簾山もか
ろきこと然り……とな。素堂翁よりのこの一詩、よい
記念にと、あの瓢にも朱筆で四山瓢と揮毫していただい
た……杉風どの、今朝の一瓢はお蔭で米に満ち、重き
こと簾山よりも、じゃ、あっぱははは」

杉風もつられて笑いながら、同時に台所を振り返って、
ようやく浄求の様子にきづいた

芭蕉野分けして盥に雨を聞く夜かな

であることを望み、杉風にもせつに、そのような佗しさ
のうちに自分の俳諧の根本のあることを訴えた。だから
以前にもまして

草の戸や芭蕉を富士にあづけおく

花の雲鐘は上野か浅草か

の心の逍遙を欲したのであった。

杉風はその師の志をよく理解して、財をつくすことを
しなかった。

瓢も庵再建のときの寄付のひとつである。

浄求が台所の隅へ降りていて蹲っている。その背中が
奇妙にゆれていた。

芭蕉も杉風もそれを知ってか知らずか、浄求の存在す
ら意識の裡にないもののように、ふたりはすでに食事を
すませて庭に向ってしんみりと話を続けている。

池のほとりに風にそよいでいる雑木や芭蕉の葉擦れを
聞きながら、芭蕉は山口素堂から与えられた一詩を杉風
の膝のまえに拡げて見せていた。

二年前の正月、素堂が新年の挨拶におとずれたとき、
見事な瓢が無名なのを惜んで芭蕉が命名を無心したもの
であった。

「浄求。これ浄求。いかがいたしたのじゃ」

「は、……はい」

と浄求は狼狽して立上ったが、顔をそむけて「少々お
待ちを……」と云って外へ出てしまった。芭蕉も杉風も
思わず眼を見合せた。そのまま浄求はいつまでたっても
戻らない。

急に風が強くなったようだ。いままでこころよい葉擦
れと思っていたのに、芭蕉の葉が軒を叩いて音をたて始
めた。

芭蕉はときどき気になるように戸口の方をのぞいた。

杉風には、浄求の様子が理解できない。（おかしい男
と思うていたが、いよいよ珍奇な男）としか映らない。

「……蛙飛び込む水の音……」

ああ、先生は上五をどのようになさるおつもりか。そ
ういえば五日後は句会であった。多分そのとき聞けるこ
とであろう。ああ楽しみなものだ。

杉風は生類憐の令で受けつつある商売上の打撃を考え
ると晴やかでない日々であったが、その気分の安まる思
いであった。

「ああ、浄求や、どうしましたのじゃ」

芭蕉の声に杉風は我に返ってその方を見た。彼はここ
にこと笑顔を泛べていたが、明らかに泣き腫らした臉を
していた。

杉風は不思議なものを見るように、しげしげとその眼

を見ていた。

浄求は口数の少ない男だが、多感な性情をもっている、と芭蕉は、ここ二年ばかりの間の彼の行動や表情との触れあいを感じてきたが、このようにあからさまな感情の表出は初めて見る。

浄求は、芭蕉の母方の遠縁に当る武家の貧しい小者の三男だが、実はこの江戸へ芭蕉を頼って出てくるまで会ったこともなく、指折り数えてみると、浄求が生れたのは芭蕉が甚七郎といわれた二十年昔、伊賀上野で藤堂家縁戚の侍大将藤堂新七郎家の若殿良忠を主君にもち、小姓であった頃、その主君の死に遭い、侍としての前途に希望を失って国を出奔した歳である。芭蕉はもともと長男でもなく士分の扱いも受けていなかったが、死んだ主君からは特別なくらい目を掛けられていたものだった。浄求は藤堂内匠家に仕える者の三男だというが、内匠家自身が食祿二千石であるからその貧しさも知れる。生れるとすぐに近くの農家へ貰われていったという。田畑に出て鋤を振っていたかと思うと農具を捨てて幾日も姿を晦まし、だがいつの間にかある時畑を耕している、といった具合で、どこでなにを食べ、どこで雨露を凌いだのか、養家でも働き手として用をなさない彼を邪魔者にしていたらしい。

芭蕉を頼って江戸へ出てきたとき芭蕉の母の死に際に「くれぐれもこの者頼みまいらす」という言伝をもっ

浄求はこれを背中で聞いていた。べこりと頭をさげたが、あわてていて水桶から突き出ていた柄杓の柄に、いやという程に額をぶっつけていた。

三

春の野は、思えば静かでやさしい。鳥の鳴いて過ぎるのもなぜか艶やかである。隅田川の流れか、小名木川の流れか、その両方であろう、幽かな響も嬌やかである。速くから人も家も見える。

近づくかと思えば歩く者の姿は右に折れ左に折れ、道が曲っているかとみれば、もう意外と近くへきている。

芭蕉は夕焼を浴びながら帰ってきた。小名木川へそぐ小川の土橋を渡る。

もうそこから道とも云えず、草原でもなく、じめじめした湿地に、自然とつくられた、水を避けての道のようなものがついている。すぐそこに芭蕉庵の軒が夕陽に照らされて黄金色に彩づいていた。

芭蕉は杉風と連れだって曾良を訪ね、ついで、杉風と別れたあとに山口素堂宅へおもむいた。やや小名木川の下流、田圃の中の小さな林の脇に住んでいた。刻のたつのも忘れて俳諧を語りあってきた。

芭蕉はもう薄暗くなりかけている土間へ片足を入れよ

てきたが、芭蕉の兄の半左衛門に問い合せても要領は得ず、本当のことは分らなかった。

だがよく仕えてくれる。貞享元年の八月、芭蕉が弟子の千里をとまなつて四カ月ほど伊勢へ旅している間もよく留守をまもってくれた。

芭蕉も、他の出入の門人たちも「正直一遍」と彼を評した。ただ文字も読めず寡黙、云いつけられるまま動くという姿しか見せないが、高下駄を好んで踊るように歩くので、(浄求法師)といささか揶揄をこめて呼ぶ者もあり、あの時宗の聖僧一遍正人になぞらえたりするとき、悪意はないが少からず露骨さもあつたりする。

その浄求が泣いたのを見て、芭蕉は、はっと胸を衝かれた表情をしたが、杉風はどう理解したか、とにかくさりげない顔で、「それでは先生、わたくしはこれでお暇をいたします」と立上った。「五日後の句会を楽しみにいたしております」

「おお、これは相すまぬことでござった……実はわたしも曾良に急用を思いつきましたので尋ねてみたい。一緒にこれにそちらまで」

とこれも続いて土間へ降りた。
「浄求や、四刻ほど曾良を訪ねます。暮るるまえに戻るゆえ、仏頂師もしばらくお見えになっておられないので、もうそろそろお出ましの頃、無駄足をおさせしないよう、急いでお使いしておいてくれ」

うとして、ふっと止めた。

中から声が聞えるのである。

「も……う……ひ、や、く、も……み、が、き、て……ね、ば、や……はる、の、よ、い……も、う、ひ、や、く、も……はてな……はてな」

芭蕉は、ふむ、と思案気に眼を家の中へ凝らした。浄求のだみ声である。

庭の濡縁に横向きに腰をおろし、膝に抱えこんだものを、肩を前後に揺らしながら撫で廻わしているのである。そして撫でながら「……も、う、ひ、や、く、も……」とやっている。よくよく見ると、抱きかかえているものは、あの大瓢である。

芭蕉は急に胸が熱くなった。

道理で……瓢がみごとに艶を帯びだしてきているのに合点がいった。こうして自分の留守のとき、知られぬように磨いていたのである。

たぶん呟いているのは、「もう百も磨きて寝ばや春の宵」であろう。はてな、というのは(もう百も)というのが字余りだともいう訳か。事情を知る者には句意は明かだが、句作の幼さはいたしかたない。

「うとい、うといと思うていたが、三年近くの江戸住いも無駄ではなかったようじゃ」

そっと芭蕉は軒下を離れて、十五六歩もときた方へ戻ると、大声で浄求を呼ばわった。

「浄求……浄求……夕焼が綺麗じゃ。これ浄求や、佃島の森がみごとにもえてあるぞ」

若い頃、伊賀上野で主君良忠の死に遇い、俳諧手解きの師でもあったそのお方の四十九日の忌も明け、屋敷からの宿下りの日、田圃道をとぼと歩いていたときの夕焼を思い出した。(わたしのはじめての俳諧というものは——犬と猿の世の中よかれ酉の年——であった)

それにしても、師に知られぬように気を使い、米や味噌を運ぶ弟子達もあり、そしてここにも人知れず年月をかけて瓢を磨いていた男があったのだ。

芭蕉は、浄求の足音があわただしく近づくのを背中で感じていた。

それから五日後、朝から門人達が詰めかけてきていた。北鯢、文鱗、嵐蘭、仙化、破笠、孤屋、山店、蛟足、ちり、それに曾良、杉風や季下。素堂翁の顔も見えるが、わけてもにぎやかなのは嵐雪に其角である。

集るそうそうから其角が日頃の鬱憤を晴らしにかかって嵐雪と声高にやりとりしている。芭蕉も素堂翁もここにこしながら黙って聞いている。

其角は二十六才の江戸生れ、医業の父をもって放蕩無頼、酒と女に明け暮れて粹で伊達で気風のよさが売り物。芭蕉門に入ったのが十四才のとき。

一方嵐雪も江戸生れの三十三才の分別盛り、武家の血筋をひいているが穏和な性格。しかしこれも其角程ではないにしても、いやある面ではそれ以上といえるかも知れないが、だら生活に耽ったことがある。彼は、主君井上相模守が、幕命で越後高田城に御番としておもむいたとき供をして江戸を離れたが、一年たって主君と一緒に帰って来た。実は芭蕉は嵐雪の帰国を待ってこの句会を開いたのである。

神田の上水で産湯をつかったと、なにかという生粋の江戸っ子を誇る其角は、喋る口調も伊達風で、きかぬ気で俠客じみている。

「まったく、うちの師匠ときたひにや、世間の噂にや馬耳東風ってやつでいらいらする。貞門や談林派のやつらが、芭蕉は新しがるが宗因宗匠に砂をかけて出た、ぼっと出の田舎者じゃねえか、とか、幽玄体の風雅の、というが、漢語調の妖怪趣味じゃねえかとか、いう……：こいつらの中に殴り込んで、貞徳、宗因の駄洒落遊びがどんなに低俗かわからせてやらにゃ気がすまねえ……」

と其角が息巻くのに、
「宗因が世に出なければ、いまだに貞徳の誕をねぶっていたろう、と師匠がいつか仰言ったこともあるから、確かに談林派は少しは新風らしいものもあるでしょう。しかし——俳諧に古人なし——という師匠の言葉をわれわれが聞いたとき感激で身がふるえましたよ。談林派も

すでに、俳諧は日に新に、日々新に、の意味で過去の俳諧の姿であることを知らしむべきです」

「そうだ、そうだ」と其角は調子に乗っていい募る。

はじめは笑っていた芭蕉の顔も次第に苦々しくなってきた。

「よいではないか。俳諧に文芸の味を求める心に目覚めれば、おのづから談林の風にも、貞門の風にも飽きる。

飽きねばそれはその人々の器じゃ。そうした器に物云うはむなし。人の短を云うことなけれ、己が長を説くことなけれ、ひろめ屋の真似をすることもないではないか。それよりわれ等の俳諧も過去のものとならぬよう精進すること第一義じゃ」

「しかし師匠、やつらはただ、芭蕉のいうことは分らぬ分らぬ、というだけで、理屈にもならなき批評にもなっていないえ……：なあ嵐雪、そうだろう、この辺で一泡吹かせにや、われわれ弟子達の立つ瀬もねえ」

「これ、其角や、口を慎しみなされ……：とにかくわたし自身も、昨日のわたしであってはず、苦悩の日々じゃ。他風の難を衝いている暇はない……：そんな暇があったら発句のひとつも考えるがよい」

其角はぶいとそっぽを向いたが、もとより彼だって芭蕉の言葉が解らない訳ではなく、身に泌みて教訓と感ずる方である。

「そんなことより、其角や、杉風にも語ったが……：蛙

飛びこむ水の音……：としたがどうじゃ……：素堂翁もどうかお聞き下され」

一座にはっとした空気が流れて、杉風も膝を正した。

素堂翁も年配者らしく大様に領いた。

今朝は素堂翁が誰よりも早く芭蕉庵に顔をだした。芭蕉が誘い、ふたりつれだって池のほとりを歩いた。浄求は、これから集ってくる人々への接待のため煮炊に追われて大きい図体に似ずこまごまと動いている。

ときどき素堂翁は、芭蕉の話聞きながらそんな浄求を見返ったりして、ほほう、といった表情を見せたりしていた。

その素堂翁が一座を見渡して

「上五に苦心なされておられる」と口をきった。

「これは音が主眼でござろう。たとえば……：春雨の雫の乾ききらない静かな夕暮であろうと、あるいは月光朦朧たる春の夜でござろうとあまり関係はござるまい。ただ、飛込む。ぽちゃんと水の音がした後、しんと静まり返る方へ芭蕉翁が見やって、じっと思いに耽けられる……：幽玄、静寂、しかも平凡ですらあるが、これはたんなる叙景でなく、まさに気分の象徴でござろう……：それを思われてそれぞれ高論を述べられるがよからうと存ずる……」

「仙化や、本日の書記役をしてください」と芭蕉が云う。仙化の名がでて、土間の隅にかしこまっていた浄求が

伸びあがってその方を見た。羨しいという顔つきがあつて、暇がまたいた。

弟子達は一様に首をひねっている。しばらく沈黙があつて、いちばん先に嵐蘭が云った。

「淋しさに、と案ずるが如何でございましょう……淋しさに蛙飛び込む水の音……では」

「それは感心いたしませぬ」と文鱗がすぐ応じた「句の説明になりすぎて、人の心を蛙になぞらえるに無理があります」

「それでは……宵闇や……とは」と杉風が一膝すすめた耳が悪いので、いつも芭蕉のそばに坐を占める。それだけでなくとも芭蕉門の筆頭と黙認されているから誰も不思議と思わない。

「宵闇や蛙飛び込む水の音……こいつは悪くねえ……しかし、あまりにも作者の意図が出すぎに感じられ面白くねえ。そうじゃありませんか杉風どの」と其角が難を唱えた。

すると素堂がその言葉を捉えて、

「芭蕉どのは、余情を尊ばれる。発句はくまぐままで云いつくすものではない、と仰せられているではござりませぬか。宵闇や、では中七以下の余情を形容してあまりにも一句を言い終せてござる……（云い終せてなにかある）とは師の教えでござりましょうぞ。ただこの言葉含蓄あり、他に解釈のしようもあるが……」と云った。

芭蕉の声にみなはっとして居住いを正して浄求に視線を集めた。

「い、け、の、も、や……ええ池の露」

一瞬、しいんとした。みな芭蕉の眼の方へ注目した。師がなにを云うか。

ややあって芭蕉が「浄求よ」と静かに云い

「万物一に帰す。一は空なり、空に寂々たる水の音なり……其角の山吹やの五文字は、風流にて華やかであるが、仮に藤の花にもせよ、風にそよぐ風情の叙景にすぎず、形を吟ずるにとどまってしまう。わびだのさびだのというが細々とした叙に過ぎない。この句はただ音を聞くの吟であり、音のするは蛙である、という理を云わんとするのみで、形ではない。蛙飛び込むとは云っても蛙を見たわけではないし、音の理を云いたいじゃ。水もまた同じで、だからこそ音という字のみで音というときは、すでに第二義となってしまう。（音淋し）などとした場合は句が弱く、理が浅くなってしまう。水の音の、刹那の中で無限に拡がりゆく閑寂の相と余響。これが波立ちて騒がしくならんとするのを抑えて、心の響に合せるに、ほんと事実をひとつ投げだして、あとは云わぬ語として……わたしは……古池や……とする」

「古池や……ああ……古池や」

其角も杉風も同時に云って顔を見合せた。他の門人達もいっせいにざわめいた。

「するってえと（物はただ中心の事情が描かれてあれば、あとは連想に待って味わえばよい）というのも師匠の言葉だ。……そこでずっと考えてきたんだが、（山吹や）、とはどうでござんしょうね」

其角が自信ありげに云い切った。

誰もなにも云わない。それぞれ噛みしめているように沈黙していた。

すると「あの……」と部屋の隅からおつおつ声を発した者がいる。門人達は、かつて聞いたこともない音声を聞いたようにざわざわとその方を見た。

ぽっと上気したように、土間の影にいた浄求が、この時ばかりは部屋の上り框に片膝のせて立上っていた。眼元をうるませて、

「あの……」と再び云って絶句し、きょときょと黒目を動した。

「おお、浄求法師じゃねえか。門前の小僧習わぬ経を読むというが、なにか仰せあるか」

と其角がからかい気味に自分の胸をたたくと、俄かに部屋の緊張が解けて、笑い声がいつせいに起き、文鱗や仙化などは腹をさすりながら笑いこけた。するとよけい浄求はおどおどし、右手を高くあげ指をあわただしく折り曲げながら唇をふるわせた。

「これみな衆……聞くものじゃ、浄求とて物を感じて心はあるものぞ、これ黙らっしゃれ」

芭蕉は硯に墨を磨りおろすと筆にしみこませて一気に短冊へ書きおろす。

素堂翁がそれへ手をのべて受け取ると、大きな声で読みあげた。

「古池や蛙飛び込む水の音」

するとみないっせいに感歎の囁きを交した。

仙化が、すかさず「句合せをつかまりますれば暫く刻を給わりませ」と神妙に立上って庭へおりて芭蕉の葉蔭へ消えていった。

句合せ、というのは、歌合せに習って、発句に対し、同じ材料の発句を別人がして、左右につがえ優劣を競うもので、みなで勝負を制定し、批評を加えたり、作者同士で論議する。それを他の者達がまた優劣を決めたりする衆議判というものである。

だが今日の場合は、書記役ということで選ばれた慣いなので仮に仙化が発句するのだが優劣は火を見るより明かなので、

「衆議判はなしがようござろう、ただ軽くご評詞あれ」と素堂がおだやかに云う。

しばらくすると仙化が戻ってきた。これも短冊にしたためると、神妙な顔で

「いたいけに蝦つくばふ浮葉かな」

と唱えた。

すると其角が、「僭越なれど師匠の句に脇句つかまつ

ろう」と、これも先程からの思案を発表した。
「蘆の若葉にかかる如の果」とやった。

て寝た。

二年余も寝食を共にして、浄求を観る眼の不明はどうしたことであろう。それらしきものは感じていたが、感じるに止まっていた。

薄暗くなりかけた縁先で、瓢をかかえて磨いていた浄求の姿が、じいんと芭蕉に甦えてくる。

ところと眠りが襲いかけた。

今日の句会の首尾も思いだしていた。

幾つか己れ自身の目論んだ通りに刻がすすんで終わった。そのことの効果に、芭蕉はほぼ満足していた。

（これからの俳諧に、今日の事柄はなんらかの影響をあたえてくれるだろう）この思いが芭蕉にゆたかな眠りに誘い込んでゆくようだ。

「だが、浄求の心には敗ける」

彼は自分にはっきり云い聞かせるために唇を動かして呟いた。いや呟いたつもりだ。

（それに蛙の句、思えばあまりよい出来ではなかった）

（杉風の商売も障りがなければよい……が）

芭蕉もいつしか浄求の寝息を追うように眠入っていた。夢の中で、どこかわからない海辺を旅している。彼を労るように一緒に歩いているのは曾良か、其角か、杉風か誰だかわからない。もしかすると嵯峨野にいる向井去来かも知れない。

昭和五十九年十一月二十日

んでおくれ」

芭蕉は、もう五日も前から、こうした場面のあること

ノート抜粋

——浄求法師と称する人物は実在であるが、芭蕉との関係についてはフィクションである。

——深川の地名は、家康が遊獵の際、深川八郎右衛門という者（摂津から下ってこの地に住みついた）に地名をたづねたが、定った地名がないので、以後その者の苗字をもって村名にしたという。

——天和二年の江戸大火については、明暦三年のいわゆる振袖火事と混同している研究書もあったりしているが、武江年表によるとこの火事後、本所の土民は多く家を払わせられ、元の田圃となる、とあるから、深川は火事によってずいぶん発展が遅れたことと思われる。

——芭蕉という俳人は稀代の演出家であつたと思う。野ざらし紀行、奥の細道において然り。（旅に病んで夢は枯野をかげめぐる）と臨終の床にあって、どつと喝采をうける名句を吐いた。演出者であり舞台上の名役者でもあった（と書けば芭蕉研究者に叱責されるかも知れないが）その芭蕉の死後、主を失ったビエロのように諸国を風狂しまわったのは広瀬惺然坊である。

昭和五十九年十一月二十日発行

非売

印刷

（補）

加藤 薫 耕 社

発行

作家群

編集部

東京・千代田区神田駿河台二一九

〇三（一九三）〇〇九四 柴田方

郵便振替口座 東京二一九〇八一五

まんじ十五号

追悼 常石三郎

さいたま屋曼陀羅 山口 健 二 : 1
寝 酒 柴田 富佐子 : 9
男たちの藩(一) 三戸岡 道夫 : 14

追悼 常石三郎

常石さんの批評 前島 白 貞 : 30
常石三郎への挽歌 弓削 悟 : 38
「生」と「死」と 永原 博 人 : 39
常石さんを悼む 佐藤 庄 造 : 40
常石三郎兄を悼む 小久保 勝 義 : 41
息 子 柴田 富佐子 : 42
常石三郎さんを悼む 井上 二三男 : 43
お逢いになれましたか 八十島 元 : 44

午前堂恒石居左文氏還浄図

編集後記

表紙

岸田 幸雄

大和 禎 人 : 48
82

さいたま屋曼陀羅

山口 健 二

大吉・中吉・小吉と、何かオミクジの分類のように見えるが、これはダイキチ・チュウキチ・ショウキチではなくて、三人共吉田さんだからその身長によってオオヨシ・チュウヨシ・コヨシとさいたま屋に来る呑み助達が区別したのである。

大吉は、身の丈五尺九寸もあって、二月の寒風小雪の中、鼻の先を赤くして、外套の襟に首をすくめて歩く恰好が似合った。中吉は並な背丈で、ソフト帽を深めにかぶるから少し陰気なたちに見えた。小吉は、五尺を下まわる背丈で、目尻が優しさがあって、ものを言う時に首を小さく振るので霊能者が神がかりにかかっている風情があった。

大吉は、ツイ一ヶ月前まで女房と二人で仲よく立ち呑みしていた。二人そろって建築現場からの帰り途である。かれは身の丈に似つかわしくない細く甲高いやさし気な声なのであたりの人を威圧することはないで、返って優

し過ぎるのじゃないかと他の連中が気の毒がる程の声で女房に言った。

「もうこのぐらいいにしとこうよ」

「何んでサ、あたしゃ未だ酔つとらんとよ」

亭主大吉の腰ぐらいまでしかない女房が、三杯目の焼酎のコップをぐつとつき出して、主人に催促する姿勢で言った。その腕はがっちり骨太であった。女一人で呑める場合、三杯目になるとさいたま屋の主人の目つきが用心深くなる。女の酔っぱらいは男より手がつけれないという経験がある。男の酔っぱらいは喧嘩早くなるのが精々で、店の中の品物や、器具をこわす心配がない限りはつておくが、女の場合はいろいろ複雑な結果になる。男同志の喧嘩を誘発することもあり危険である。

「大丈夫かね、オクサン。あしたも現場あるんだろ」
「現場が何んでえ、アタシヤね、この人と同じぐらい働いてるんだ、それでお金八掛けだぜ、そんな馬鹿なこ

とあるかつてんだ」

「ご主人、大丈夫だからついでやって下さい」大吉は言った。

そのようにして、結局大吉は、女房の肩を抱いてすっかり暮れ切った七面坂をおりて行くのであった。かれの職業は、手つとり早く言えば鳶と云うことになるうか。女房と共稼ぎであった。大会社の下請けの孫請けのその又下請け会社の作業員で、口こみで仲間をふやしたり、その日の作業員の員数をそろえたりすることもやる。鳶にはかれのような大型の人間は不向きで高い所は危険だから、かれは地上のセメントこねとか穴掘りとか片付け仕事の方をえらぶ。女房はどうやら高い所に登ることを平気でやるらしい。それで金は八掛けだとかの女は不平をぶつのである。暮らしは不安定ではあったが、今かれには、国家的大事業に参加していると云う誇りと興奮があった。東京オリンピックをその年のうちに抱えた突貫工事に参加しているからである。先進諸国家の都市でのオリンピックをしのごとく日本国と申すより東京都の面目をかける趣きがあり、街なみの看板にみられる和製英語を本物の米人にチェックして貰うという細かい気の使いようでさえあった。だから大吉が意気込むのも尤で、かれはさいたま屋で、他の立ち呑み連に、その月の工事の進み具合を報告し、かたわら、かれが如何にその建設工事で苦勞しているか誇らしく語るのであった。だが聞

「まあ元氣出しなよ、しよせんせつないことばかりの世の中だ」

中吉がなぐさめを言った。深くかぶったソフトの中で中吉の顔は、余り腕のよくない刑事のように陰気に黒づんでいたので、かれのせつないことばかりだと云うなぐさめはかれの暮らしの実感であろう。さいたま屋の呑み助の中で珍らしく背広一着しているかれは、単身赴任の会社員の風俗であったが、女房子供やかれの身分や仕事について語ることはなかった。そのかわり酒がきいてくると、さいたま屋の主人が「此処で歌っちゃ困るよ」と注意する迄、澄んだ声を張りあげて民謡のひとくさりや古い演歌風の流行歌をうたった。若い時にさぞかし金をつぎこんだらうと推察される節まわしであった。「流すッッ涙がアアお芝居イイならばアアアこんなアア苦勞はアアあるまいにイイ」

一寸目には単身赴任の憂さを毎夕酒で晴らしている風であったがその話題は何時もシンミリしていて、かれは余りひどく呑みすぎてくずれるということはなかった。少なくとも五十年は酒を呑みつづけた熟練者の痕跡をただよわせていた。それが風の吹き去るようにさいたま屋へ来なくなった。毎晩立ち呑みしていた客が消えるようになって来なくなると、その客のすまいが余り速くない場合、さいたま屋の主人は配達途中などに一種のお見舞風に

かせられる呑み助の中には、「大吉はもとチヨウセンだらう」と陰げ口をささやく者もいた。自慢話は兎角酒を呑む場所では冷たく取りあつかわれる。それは皆が皆、酒の勢で自慢をし度いからである。

だが大吉の興奮も意気込みも生き甲斐も、かれの女房の突然の死によつてくじかれた。

その夜、女房はかれに肩を抱かれてさいたま屋を出て行ったのだが、七面坂の途中の石段ですつぱりと大吉の手の中からぬけて、すべつて、あおむけにころんで後頭部をまともに打った。大吉はかの女を背負ってアパートに帰りついたが、かれが寝込んでいるうちに、明け方女房は息を引きとっていた。

「ボクはもうなんにもわからなくなったよ」大吉は次の日さいたま屋で手放しで子供ののように泣いた。泣き上戸と云う按配であった。

かれは女房の胴巻きから出て来た郵便貯金通帖で全額十五万円をおろして、さいたま屋の墓地のある万福寺にコネをつけて貰つて、女房の墓を建てた。

「この頃、ヤツ毎晩、此処で呑んでから万福寺の墓へ行くんだぜ」

「墓地へ行つて何してるんだ」

「墓に焼酎かけて・・・それから泣くのよ、墓石の前に坐つてサ」

客のすまいに寄ることがあった。

「驚きましたよ。あの人のアパートと云うのに寄つてみたんですよ。エッ・・・別にあの人が借りで呑んだ分があるってことじゃないんで・・・そしたら十二、三の子供が暗い廊下に出て来て「トオさん死んじゃった」ツて言うんですよ。他に家族らしい人影もなくて・・・一体どうなってるんでしょうかね。あたしや幽霊みたときみたいに背筋寒くなりました・・・」

主人は中吉の死をそんな風に伝えた。

さいたま屋の立ち呑み連の死に方は大い風吹き去る趣きがある。突然なのである。その突然のうらにはちゃんと必然があるのであるがそれはなかなか人間の想像力の及ばないところである。大吉の女房の死について大吉をなぐさめた中吉はするように大吉より一足お先したのである。

それから一月とたたないある夜、大吉は跛を引きながらさいたま屋に現われた。かれの右足の甲は厚く包帯でおさえられてはいたが包帯のおもてにどす黒くにじんでいる血の色から察すると足の甲は可成り裂けている風であった。

「イヤ・・・ボクが悪かつたんだ、ツイうつかりしていたのよ」かれは言った。

「会社に面倒みて貰えよ。労働キジュン法ッてのがあつて会社はキミの労働災害の治療を負担する仕組になつ

てるんだぜ。キミがいつぞや女房に賃金が八掛けだつて
噛みつかれたけど、労働キジュン法は、ちゃんと男女同
一賃金の原則うたつてゐるんだぜ」物知りの岩さんが言つ
た。岩さんも、大吉と似たりよつたりの仕事をやってい
るのであるが、現場で仕事着にきがえるらしくさいた
ま屋へはお洒落をして来るから正体不明であるが、百科
全書を愛読していることは確かである。百科全書の巻・
頁までそらんじている程である。これは多分かれは知識
慾というものが旺盛なせいもあるが、立ち呑み連の中
で断然物知り第一位であり度いと云う派手好みのせいでも
ある。だがかれの努力は不評判である。人の話に割つ
て入つて「そうじゃないよ」といよいよ波風を立てるか
たむきがあるので、さいたま屋の主人も内心「どうも好
かん」と云う気分であった。それは主人の女房のせに子
がお産で入院していた時、見舞いに行つたということも原
因であつた。

「お産したすぐあとでしよ、見舞いなんて・・・いや
あな気持した」

ぜに子は當時のことをこんな風に感想をのべた。多分
主人も「いやあーな感じ」だつたのだろう。岩さんは研
究心が盛んであると云うよりはむしろぜに子に関心が深
かつたにちがいない。かれが百科全書の知識をふりまわ
すのもぜに子に自分の知識を誇示しようとしている節々
もある。商店の主人が店へ来る客の陰口を云うことはこ

法度であるが主人はある日岩さんの悪口を次のように開
陳したことがあつた。

「いやああれでね、自分の家へ一步入るとから意気地
ないんですよ。こないだ酒の配達たのまれて岩さんの家
へ行つたんですがね、かれオクサンに手ついて「只今帰
りました」ッて挨拶するんですよ。オクサンはシンふ
みながら岩さんの方ふりむきもしないんですよ。あの分
だと岩さん稼いだ金みんな呑んじゃうんじやないですか
ね。オクサンの内職で食わして貰つてゐるんですよ・・・
百科全書？ありましたよ、本箱があつてね、全部百科全
書めいた本でした」

岩さんはずい分昔の二枚目映画俳優鈴木伝明を赤銅色
に陽焼け酒やけさせた顔立ちで、鼻筋が通っている。だ
から、かれのオクサンはかれの顔にだまされていつしよ
になつたのだろうか、あるいはかれの百科全書受け売りの
知識に惚れたのだろうか、かれは大吉の右足の甲の怪
我について、労働キジュン法を披露したあと更につけ加
えた。

「キミたちは知つてゐるか、今から千年も前からこの谷
中はヤナカッて言つたんだぞ、その時分から本郷・神田
・市ヶ谷・駒込・牛込・根津・田端・根岸・堀留・日比
谷・三田なんて地名もあつたんだぞ、荒川・隅田川なん
てえのも海に流れこんでいたし、不忍ノ池なんて海水だ
つたんだぞ」

かれの話題は労働キジュン法から江戸の考古学に飛躍
した。多分この考古学も百科全書から最近仕入れたので
あらう。大方の呑み客はかれの考古学を無視したが、小
吉が小さき首をふりながら岩さんに合榎うつた。

小吉は自分が山岡鉄舟の曾孫だといつも主張してい
るし、愛蔵している大正七年発行の「全生庵記録抜粋」と
云う本でそんな地図を見たことがあつたのだ。かれが山
岡鉄舟の曾孫だと云う主張に大方の立ち呑み連は冷淡で
ある。冷淡と云うより山岡鉄舟なんてどう云う人だろと
思う向きが多い。中には意地の悪いきき方をするものも
ある。

「あの全生庵の門の左わきの二軒長屋、片一方は吉田
さんちだろ、その隣に山岡つて門標出てるが、あれが山
岡鉄舟の流れじゃない？吉田さんと山岡とどうつながる
の？」

こう云う時に小吉はキツとなつて言うのである。

「ありや何でもありませんよ、山岡鉄舟の長男の妾の
子孫でばくはつき合つていませんよ。この長男と云う人
も朝鮮から満州にわたつたとか、アメリカへ行つたとか、
兎に角行方不明なんです。ホラ東京裁判のときに、ジ
ョーシ山岡ッて言う人がマッカーサーの本部に来ていま
したが、あれが鉄舟の子孫じゃないかって云うんでばく
全生庵の住職と会いに行つたこともあるんですが、結局
はわからずじまいでね、ばくは鉄舟の長女が嫁に行つた

吉田家の筋ですよ。尤もばくの親父も放蕩者でばくを学
校へやることさえ出来ない終り方でしたがね、ばくは祖
母が死んだ時、宮中差し回しの馬車がばくらの住んでい
た長屋の前に横づけになつたのを覚えていますよ」

かれのやさしくたれさがつた目尻は六十年の余も前の
ことを回想してうつとりしていた。

かれが初めてさいたま屋へ現われた時は、背中に三才
程の女の子をくくりつけていた。子供はかれがさいたま
屋へ立ち寄る頃は太い後ろへのけぞつて眠っていた。
負ぶさつて肩にしがみつくかたちで眠る子は神経質で、
甘つたれだ。うしろへのけぞつて眠る子は大胆で、その
ちがいは、小犬の眠り方とライオンの子の眠り方のちが
いだと小吉は満足であつた。かれは背中の女の子にのぞ
みをかけている。「必ず鉄舟の様なえらい人になるぞ」
と。

かれは、子供を背負つて川崎の東芝工場の釜たきの仕
事に行つての帰り途である。東芝全体が労働運動の練習
場であり、若い者は「改造」や「中央公論」で勉強した
程度で労働運動の先頭に立つた。労働運動が得意でない
若い社員は、アメリカへ行き度いという希望をもつて街
の英語学校に通つたりした。要するに明日がどうなるか
も分らない敗戦の混乱の中であつた。小吉は勿論労働運
動は不得意で、共産主義となえる若い者たちが「釜の
火を落せ」とかれにせまつた時、かれは言つた。

「会社つぶしてどうなる。戦争敗けたからって会社つぶすこと俺には出来ない」

共產主義を称する者たちは「溶鉱炉の火は消えた」と云うストライキの団結をほめたたえた名文句で小吉をばげましたが、小吉は頑として言ったのである。

「俺一人になってもこの火はたやさないぞ」

かれの頭の中に、清川八郎、益満休之助ら、諸藩の浪人をあつめて尊皇攘夷党をつくって血判と云うものを押した曾祖父のことがあつた。又、文久三年四月十三日清川八郎が赤羽根橋で殺された時、八郎の持っていた連判状が役人の手に渡らぬ様に義弟石坂周造に命じて八郎の身体から連判状と八郎の首を役人をだまして奪い取らした鉄舟の勇姿が、又尊皇攘夷党をつくって「朝幕一ツ」という考え方を主張して何度も暗殺されそうになった鉄舟のことが、映画の時代劇のような活劇を背景にしてゾクゾクとする興奮を感じるのであつた。

大吉の足の甲の怪我は、オリンピック水泳競技場の工事で、上から落ちて来たコンクリートの固りにやられたのであつた。かれによると

「ボクが目を離していると、コンクリーつめる隙間にジャリのかわりに木の端っぺらや紙までつめて手を省くんだな。そう云うヤツが乾くと弱いとこが出来る。ボク

の足に落ちて来たヤツもそういうコンクリーの固りなんだ」

「それじゃキミが悪くないんだろ」

「いや、ボクが充分カントクしていなかったからなんだ」

大吉は監督をゆるめた自分の責任を強調した。かれは現場での自分の働きはカントクだと言いたいのである。その夜もかれは七面坂の方へくぐらずに、万福寺の方角へ跛を引きながら出て行つた。女房の墓に焼酎かけてその日の出来事を報告して泣くのである。墓場の囲いも朽ちたままの木立の中をくぐって入る墓地で一人の男が夜のとぼりの中で墓石の前に坐つて泣く。それは悲痛と云つた趣きである。

ところがこのかれの行事はそれから十日もたたないうちに終りを告げた。と言うのは、かれは足の甲の傷から、破傷風にやられたのである。墓場のしめつた土は菌の住みかたいい。

「破傷風なんてくだらないよ。注射で予防出来るんだ。だからばくがあつた時、会社に面倒みて貰えって言つたんだ」

物知りの岩さんが言つた。

「でかい身体に自信があり過ぎたんだな。運の悪いものはどこまでも運が悪いもんだ」

小吉が霊媒のように小きさみに首をふりながら言つた。

かれは自分の運の悪さを回想していたのである。

「おれは悪いことした覚えはないが、今思うとおれには学問がなく運も悪かつた。俺が最初に一緒になつた女はお皿だつた。うん、親切な人が世話してくれた女だが・・・お皿なんて手術すりゃ簡単になおるんだから俺は何度も手術しろつて言つたんだが・・・とうとう出て行つてしまつてねえ。はずかしかつたんだろな、今どうしているか・・・」

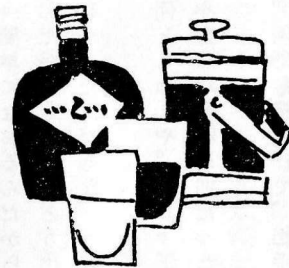
「お皿なんて珍らしくも何ともねえや。そりゃ正式にヤ子宮後屈つてえヤツだ。小野の小町はお皿だつたんだぞ、キミら知つてるか」

岩さんは断定的に言つた。何でも断定して、相手の言い分きく耳持たぬ頑丈な岩さんが現場で倒れたと云う情報がどこからともなくさいたま屋にとどいた。多分普段岩さんが現場の仲間にさいたま屋のぜに子が「俺に惚れてるんだ」と断定的に仲間に吹聴していたので仲間うちの一人が興味をもつて立ちのみに現れ、情報を伝えたのであろう。破傷風菌にやられた大吉と、現場で倒れた岩さんと、どちらが先に死んだか、そこらは曖昧模糊としているが、大吉の方は、確かに身元引きうけるものもななく、死体はかつぎこまれた病院の霊安室に三日も放置されていて、その間に、かれの会社というものを通して引きとり人が探されたのだが、かれは姓名も本物かどうかともわからず、本籍地もわからぬまま、町会の代表者に引

きとられたのであつた。それはかれの部屋から百万円の保険証書がみつかつてからであつた。何のために自分の出身身元や名前まで隠し通し、天涯のひとりぼっちをきめこんでいたのか、それは分らずじまいであつた。町会ではかれの死体を引きとつて骨にし、万福寺のかれの女房の墓石の下におさめた。その保険金のうけ取り人である女房は先に万福寺に眠つたのだから、もし岩さんが生きていたら、その金はどうなるのが筋合か、百科全書の法律の巻によつてかれは断定したのであろう。町会の代表者が大吉を病院に運び、焼場で骨にするまでにかかつた費用、寺に収めた供養料など差引いても残高はある筈だが、それがどうなつたか曖昧模糊としたまま大吉のことを噂する者もなくなつた。丁度、海辺の砂に掘られた小さな穴が打よせる波で何時の間にか平になつてしまふ按配であつた。

小吉はもう八十才になる。全生庵の門のわきの長屋住いも、寺の何代目かの住職の寺経営方針ということになにがしかの金を貰つて埼玉県ぎわの田舎に引越していた。だから、さいたま屋に現われることは盆暮と彼岸の日に限られていた。かれは子供を背にくくりつけてさいたま屋に寄つた頃、金がなくともツケでいいと吞ましてくれたこの酒屋に恩義を感じているのである。だからこの三十

年の間になくなったさいたま屋の先代や長女の霊に線香をあげに来るのである。足腰は未だしっかりしている。只山岡鉄舟のことはもう口にしなくなっていた。必らずこの子は、いつか鉄舟のようにえらい人になるんだと云う夢も、かれの胸から消えていた。娘も息子もよく働く若者にはなったが、えらい人にはならずじまいであった。



寝 酒

高木さん家の階段は狭い。その上、急だ。

階下を印刷屋に貸し、二階を住居としているから、階段下の畳半帖ほどの三和土が玄関ということになる。たださえ狭いその三和土は、子供達の脱ぎ散らかした運動靴やらサンダルやらで、外来者が両足を揃えて立つ余地はない。仕方がないから片足だけを入れドアを半開きのまま、

「高木さん」と上に向って呼ぶ。呼びながらよく見ると、階段の左側に大人の靴、子供の靴、おばあちゃんの草履、奥さんのサンダルなどが、まるで履物の展示会のように一段に一足ずつ納っている。一瞬、階段がエスカレーターのように見えた。

外出の時は下りながら自分の履物を右手で取上げればいいし、帰って来たら脱いだ履物を左手に持って上りながら空いた階段におけばいい、成程考えたもんだ、と感心した。

社 告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円の拠出をしておりま

す。雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じて経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

柴 田 富 佐 子

「高木さん、ジュース持って来ました」

もう一度上を向いて大声を出す。と、子供の馳ける足音がして母親に似て眉の太い女の子が顔をのぞかせた。

「ジュース、ここへ置いとくわね」

私は持っていた箱を下そうとしたが、置く場所がない。上りがまとも階段も奥行きが狭すぎて箱が載らないのだ。しばらく考えてから、私は脱ぎ散らしてある靴の上に箱を置き、中のジュースを二本ずつ取出して階段に並べた。左側の履物と対称的に右側に二本ずつ二本ずつ六段並べた。並べ終って帰ろうとした頃になつて

「済いませんが、空ビン持って下さい」
とおばあさんが出て来た。

「ここにもあった」という声と共に、又子供の馳ける足音がし、

「まりちゃん、まりちゃんたら、余計な事しなくていいのよ」

おばあさんの声が追っかけたと思う間もなく、ビンのごつかり合う音がして転げたビンの一本が激しい音をたてて降って来た。ピンは私の足をかすめて三和土に落ちた。

「まあ、すみませんね。だから余計な事しないでいいって言ったのに」

女の子を叱りながらおばあさんは五、六本の空ビンを前掛けの裾にくるんで下りて来た。

「この階段は全く危くて、上りはまだいいんですけどね、下りはそりゃ怖いんですよ」

受取った空ビンを入れたから私は手でつまみとれる大きな破片だけを拾い集めた。

ビールだってジュースだって、ビン引きの値段で納めている以上、砕けたビンの代金はまるまるこちらの負担になる。まさかアキビン一本分十円と伝票にも書けないし、せめて余分な負担をかけて悪かったわね、位の一言はあってもいいと心では思っても口には出せず、

「箒がありませんから、細かい破片は後で掃いて下さい」

と言うのが精一杯の抗議であった。

長年の経験で、私は空ビンの出し方でその家の主婦の家事能力が推察できる。一打なら一打、一函なら一函、買う本数をきっちり揃えて出してくれる家、又は今ある空ビンの数を算え、例えその数が半端な数であっても、

「これ？」とジャンパーの裾をひらひらさせた。

「確か野球部の……」

「そうなの、フェローズのユニホーム、こないだ片付けてたら出て来たんで、一寸着てみたらとっても暖かいのよ。勿体ないから着ちゃったんだけど、可笑しい？」

「ううん、よくお似合いよ」

「いやだ、似合う訳ないけど、勿体ないから、何でもいいのよ、もう」

髪をボーイッシュジュカットにした小柄な高木さんには、小学生のユニホームがよく似合っていた。

「いつものジュースとお醤油と、後でお願いします」

語尾を長く引いて出て行きかけて、

「ああ、それから、これ」

棚からウイスキーの角瓶を一本とって私の方に振って見せた。

高木さんの自転車が行き去るのを待っていたように、おばあさんが入って来た。

「又、ウイスキー買ったのね」

おばあさんは真直ぐ私の方へ歩いて来て言った。

「今月はこれで五本目だ」

「そうでしたかしら」

「だんだん増えるよ、あの大酒飲みが……」

何年も前に亡くなったこの人の夫は、歌舞伎座にも出ていた清元の三味線弾きだった。いつも和服に角帯を涼

きつちり同じ数だけを注文する家、こういう家の台所は常にきちんと片付いているに違いない。高木さんのように、品物が届いてから慌ててその辺に置いてあるアキビンを掻き集め、ひどい時は関係のない牛乳ビンや化粧ビンまでごちゃまぜで、その上牛乳ビンには煙草の吸い殻がつまっていたり、ゴキブリの死骸が入っていたりする。こういう家の台所は、いつも汚れた皿や茶碗が積まれたままになっているに違いない。

高木さんの奥さんはパートに出ている。毎朝私が店を開け、外廻りを掃いている頃、

「おはようございます」と元気のいい声を残して自転車で通り過ぎていく。その声は、さあ今日も一日元気で働きましよう、と言っているように私には聞こえ、高木さんに逢った日は何か、いい事がありそうな気がしてくる。

しかしその日は期待した程のいい事もなく、三時近く自転車の買物籠に野菜や肉やらの包みを一杯に詰めて、高木さんが店へ来た。

入って来た高木さんのジャンパーの胸の図案化されたFのイニシャルに私は見覚えがあった。袖のつけ根に白い合皮革が挟みこまれた紺のジャンパーは、家の息子も小学校の時に着ていた。そんなに長い間見つめていた訳ではないが、私の視線に気付いて高木さんは、

しげに着て、ひたひたという形容詞がびつたり歩き方で店の前を通った。顔が合って私が頭を下げると、両手を膝の前にきちんと揃え、腰をかがめて挨拶を返してくれる。舞台の役者がするような、なまめいた動作であった。おばあさんはその夫ほど浮世離れた雰囲気はもっていないが、それでも世帯ずれした並のおばあさん達とは違っていた。いつも薄化粧し、衿を抜いて着物を着ている。手を汚すのが嫌いで、家事一切から逃がっているという噂であった。

「何にもする事がなくて退屈で困ってるんじゃないかと思つて、老人会に入るように奨めに行ったら、剣もほろろに断られたよ。わたしや、老人会に入るほど年をとっちゃいません、だとさ。六十五過ぎりや、みんな年金貰つて老人バス貰つて老人なのに、一人で若い積りしてるんだから、可愛気のない婆さんだ」

町会の老人会の世話役をしてる得意先のおじいさんが笑つて言った事がある。

「立派な老人福祉センターができたんだからね、変に力まずに年寄り同僚、お風呂に入ったり、習い事したり、おしゃべりしたりしに行きやすいんだよ。そうすりゃ嫁さんの悪口言つて睨み合わなくなつて済むんだ。

年とつたら、若い者に可愛がられなきゃ、自分が損だつて事が、あの婆さんには解ないんだから、可哀想な

もんだ」

私は知らなかったが、高木さん家の嫁姑の確執は近所では有名らしかった。この人ではねえ、と目の前のおばあさんを見て私も思った。

「あんなね、あのウイスキー、誰れが飲むんだと思います？」

「御主人でしょ」

私は父親に似て華奢な体つきのこの人の息子を思い浮べた。

「とんでもない。息子はアルコールなんか全然飲めませんよ。お父さんもそうでしたが、ビールをコップ半分飲んだだけで息がハーハーしちゃうんですから」

「あら、じゃ、どなた？」

「嫁ですよ。あの人が飲むんですよ。眠れないとか言つて、毎晩寝る前に飲んでるんです。私には隠していますが、狭い家ですから何でも筒抜け、飲みたいから働いてるんだ、なんて息子に言ってますよ」

「まあ、そうですか。ちつとも知りませんでした」

「女がね、あんな強い酒を毎日飲んでいいんでしょうかね。息子がおとなしいのをいい事に、勝手な事ばかりしてますわ」

「でも、明るくて、元気がよくて、いい奥さんじゃありませんか」

「なに、あの人は外面ばかりいいんです」

み中に引越す事になったという。

「少し遠いけど、今度の家は広いのよ。ちゃんとした玄関はあるし、庭もあるし、応接間もあるし、子供部屋もあるの。陽当りもよくつて、まるで天国みたいよ」洗濯物を一杯干した物干しを私は思い浮べた。

「おばあちゃんね、そんな田舎へ行くの嫌だって、お姉さんのとこへ行く事になったの。立退料の残りでおねえさんとこに一間建てて貰つて住むんだから、そう肩身の狭い想いをしなくても済むでしょう」

「そう、それはよかったですね」

「ほんと、あたし嬉しくつて、嬉しくつて」

高木さんの手離しの嬉しがりようは、私の気持ちまで軽くした。

「もうウイスキーを飲まなくても、眠れますね」

肩を叩いて私が言う

「やだ、知つてたの」

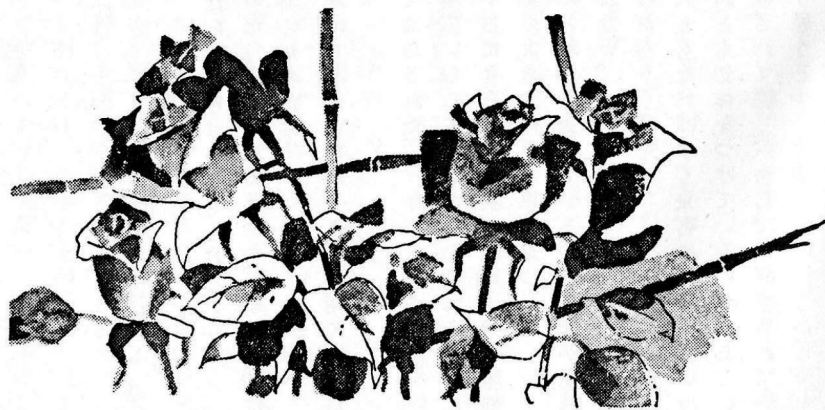
高木さんは一寸私を睨む真似をしてから笑い出した。

「おばあさんもね」

「まあ、それも知つてたの」

「あら奥さんこそ、知つてらしたんですか」

「いくら隠したつて、一緒に暮してりゃ、わかるわよ。それにしても、お互いに知らない振りして、せつせとお宅の売上げ増大に協力してたなんて、可笑しいわね」底抜けに明るい声で高木さんは笑い続けた。



おばあさんの吐く息に、私は余り強くはないがアルコールの匂いをかいでいた。

「小さいの一本貰つていきましょかね。眠り薬に」おばあさんは棚から二級酒の二合瓶をとって袂に入れた。伝票でいいんですよ、という私を押えて、おばあさんは千円札を出し、

「あの人には内緒ですよ」と言つた。

今年に入つて、高木さん家の周辺一帯を持つた地主が、大手の不動産会社に纏めて土地を売つたという話が伝つて来た。代替地を希望する家には、それぞれの商売に適した代替地を探してくれ、その地価によつては新しい家も建ててくれるのだという。

高木さん家の隣りは、古くからある大きな製本工場だったが、板橋の奥の方に広い代替地を貰い、近代設備の工場を新築中だという。製本屋も機械がどんどん大型化し、従来の工場では収納しきれなくなっているらしい。都心では工場を拡張しようにも土地がなく、勢い郊外へ分散していく傾向なのだという。五、六日通らない中に、その古い製本工場は姿を消し、板囲いの平地になっていた。周辺の家も追い追い引越す事に話が決つているという。高木さんも例外ではなかった。

夏休みを真近に控えた或る日、奥さんが菓子折を持つて挨拶に来た。八王子の方に代りの家が見つかり、夏休

男たちの藩

三戸岡 道夫

第一章 江戸屋敷

〔一〕

早春の晴れた日である。

江戸は駿河町、両替商米島屋を訪れる一人の男があつた。米島屋は主人善右衛門が一代で築いた店であるが、江戸で五指に入る本両替商であり、大名貸などにも手をひろげ、資力信用とも絶大なるものがあつた。

男は店の正面には向わずに、軒下にさがった分銅形の両替屋看板を横目に見ながら、脇の内玄関から入った。店を通さず、直接主人の善右衛門へ逢うためである。

案内を乞うと、手入れの行き届いた内庭に、梅の花が雪のように咲いているのが見えた。

磨きのかかった女中が出てきて男を案内し、その後について廊下を歩いていくと、

仕方がないと臍を固めているところへ、音もなく襖が開いて

「やあ、お待たせしました」

善右衛門が男の前にびたりと隙のない坐り方で坐り、

「笠倉彦五郎と言われましたな」

正面からじつくりと男の風態を見て、どことなく謎めいたところがある男だなと、鋭い商賣上の直観をす早く動かした。

「手紙は読んでいただけましたか」

「読みました。だからこうしてお逢いしている。手紙にはただ、商賣上の重大な用件、とだけありましたが、商賣とはあなたの商賣、それともわたしの商賣……？」

彦五郎はちよつと考えるふうをしていたが

「両方ですね」

と短かく答えた。

彦五郎と名乗るこの男は自分から訪ねてきたくせに、善右衛門の間に短かく答えるだけで、自分の方からあまり積極的の口をきかなかつた。本当は能弁なのだが、わざと善右衛門の前では寡黙にしているところがある。その方が善右衛門から信用されると計算しているらしい。

彦五郎の年令は四十才前後か。物腰も落着いて、立派に見えた。最初逢うまでは、いやがらせの用件か、それともよく持ちこまれるインチキ話かとも思ったのだが、必ずしもそうではなさそうである。だが、武士らしくも

『もしかしたら断わられるかもしれない』
そう思っていた危惧が消えていった。事前に届けてある手紙が効を奏したのだ。

通された部屋はさっきの梅が見える、南に面した部屋だった。

男はしばらく待たされた。

内庭はいぶ広いらしく、かなりの奥まで抜ついていて白梅と紅梅とが日にきらめいて咲き乱れ、米島屋の資産の龐大さを内庭の大きさに見る思いだった。

家の中はしんと静まり返っている。なかなか主人の善右衛門は現われない。

「どうしたのだろう……？」

米島屋の主人ともなればすぐ来客には逢えないほど忙しいのか、それとも勿体をつけているのか、あるいは始めての客は警戒されて隠し穴からでも観察されているのだろうか。そう思うと少し落着かない。しかし今をときめく米島屋に直接逢おうというのだから、このくらしいは

見えるし、儒学者のようにも見え、あるいは医者のようにもあるし、ひょつとしたら町人かもしれないと、その職業のはつきりしない点が善右衛門には心配といえ言えた。それで、

「おてまえは、いずれの……？」

と探りを入れようとすると、その問を封ずるような間一髪のタイミングで

「実は米島屋さんに関係の深い、美春藩についてお願いにまいりました」

押し切るようにそう言った。口調には交渉事に慣れた巧みさがある。

「ほう……美春藩にでございますか。あの貧乏の美春藩をどうするおつもりか……？」

「美春藩への紹介状をいただきましたのです」

「紹介しろとおっしゃれば紹介しないこともありませんが、なぜ美春藩への紹介を手前どものような商人風情のところへ……」

善右衛門はそう答えながら、さらに男の正体を見きわめようと、動かない眼で細かく観察をつづけた。これは職業上からきた善右衛門のくせである。善右衛門のように金を扱っている商売には、相手の信用が第一である。一回逢ったきりで信用のおける人間かどうかをたしかめる眼力が、両替商人には備わっていないければならない。善右衛門はまだこの男に心を許してはいない。

「ご冗談をおっしゃってはいけません」

彦五郎は出された渋茶を一口ぐつと飲むと

「米島屋さんが美春藩の第一の金主であることを知らない者は世間におりません。美春藩はこの数年来、いや数十年といってもいいでしょう、財政に困窮し、龐大な借金をつづけておりますが、そのお金の大半は江戸随一の両替商、米島屋、あなたのところから出ております」

「よくご存じで……」

「だから美春藩は米島屋さんにその首根っこを押えられていても同然、米島屋さんをおいて外に美春藩への手蔓をお願いするところはございません」

この辺りから彦五郎は能弁に変った。米島屋を江戸随一の両替商などと持ち上げながら話をすすめていく巧みさは、とても素人筋のものではない。

「なるほど」

善右衛門は聞けるところまで聞いてやろうという気になつていた。

「すると、あなたはその美春藩へ仕官でもしたい、それとも商売のお出入りがしたい、あるいは、まさかとは思いますが、お金でも貸すおつもりか……」

善右衛門の方からさそい出すようにそう言った。早くこの男の真意を知りたいという欲求が、急に善右衛門のなかに湧きあがってきたのである。

「実は、その、まさか……という奴でございます」

意外な返事に善右衛門は驚いた。お金でも貸すつもりかと言ったのは、つけ足しの座興にすぎないのが、それが本当になった。

「本気で金を貸す……?」

「いえ、わたしのような貧乏人にそんな金のある筈はありません。だが、金を貸すことの出来る人を知っているのです」

善右衛門はその真偽をたしかめるように、彦五郎の顔の中心を見つめた。

「大金、ですか……?」

「大金、と言え、大金です」

「それは誰が……?」

「……」

彦五郎は即答を避けた。しばらくは相手の心をためすように、今度は彦五郎の方が善右衛門の顔の中心を見つめていたが

「秘密をお守りくださいますか」

濡れ手拭を口に押しつけてくるような言い方で言った。

「秘密の金なのですね」

「そうです」

「秘密は必ず守りましょう」

彦五郎は膝で二、三步、善右衛門の方にいざり寄ると、声をひくめて

「大きな声では言えませんが、ここだけの話です。大

閤資金という金があるのです。誰も知りません。知つて

いるのはほんの、ひと握りの人。大閤秀吉の巨大な隠し金が徳川幕府の眼をのがれて閤のなかに眠っている。それが最近動き出したのです」

「大閤資金……? はじめて聞きますね。金額は……?」

「六千万両といわれています」(金一両を今日の通貨で五万円として試算してみると三兆円)

「六千万両……!」

「よく今まで徳川幕府に見つからなかったものだ」

「豊臣方の残党が代々、閤から閤へと生命をかけて護り抜いてきたのです」

「いったい誰が……」

「まだその名前をお知らせするわけにはまいりません。事が進めばいずれ申し上げる時期がまいりますよう」

「その太閤資金を美春藩に斡旋したいんだね」

「まあ、そういうことです。そのために、ぜひ米島屋さんのお力が必要なのです。米島屋さんの紹介があればこの話を美春藩へ持つていく手蔓ができます」

財政が困窮している美春藩が金をはしがっているというニュースを彦五郎はどこから嗅ぎつけてきて、大閤資金をはめこむ先として狙ったのである。しかし美春藩へのつてがない。そこで狙いをつけたのが米島屋だったのである。

「しかし話を持つていっても相手が借りるかどうか……」

善右衛門は思わず声を高めた。

「大きな声をたててはいけません」

彦五郎は口に入さし指を立てて

「ぜったいの秘密です」

「六千万両……、ちよつと考えられない金額だ」

「でも、金の茶釜や金の茶室を作り、日本全国の富を一身に集めた大閤秀吉です。そのぐらゐの金が残つていたらとしても決して不思議ではありません」

「……?」

「借りない筈がありません。この金には魅力があります。返済期限がないのです。ということは返済できるときに返せば、それでいい」

「催促はないのか」

「ありません」

「無期限で、無催促。それでは、もらったも同然ではないか、話がうますぎる」

「でも、本当なのです。もし嘘だと思ふなら、信用しなくても結構です。金を借りるのはあなたでなくて、美春藩なのだから……」

話し半分にしてもうまい話だと善右衛門は思った。美春藩が飛びつかない筈はないだろう。

実を言えば米島屋にとって美春藩は、そろそろ重荷になりはじめていたのであった。

米島屋から美春藩への貸付金は、すでに十三万両(六

十億円)を超える巨額に達していた。この金額は美春藩の財政の規模からみて明らかに限界を超えていた。その上、毎年増えるばかりで、減ることはない。また米島屋にしても一つの藩への貸付金としては過大にすぎた。明らかに米島屋の貸付金は美春藩に集中しすぎている。美春藩には財政危機の噂がある。危険である。万が一回収不能になれば、江戸で五指に入る米島屋といえども生命とりになる。

したがって善右衛門は前々から美春藩への貸し過ぎをなんとか回収して、他の安全な貸出先へ切替える、いわゆる危険分散を考えていたのであった。だが米島屋と美春藩の間柄は、それが簡単にできるほど生やさしいものではない。美春藩は米島屋から金を借りることによって藩の財政を維持し、米島屋は美春藩に金を貸すことによつて莫大な利益を得、そうした長年の相互依存によつて今日の関係を築いてきたのである。少しばかり危険になつたからといって善右衛門が身を引こうとするのは勝手にすぎた。

そこでこれまで善右衛門はひそかに美春藩への貸付負担を軽くする方法として、他の両替商や地方の豪商などを美春藩に紹介して、極力そちらから借りるようにさせていたのであったが、それも善右衛門が期待したほどにはうまく進まず、せいぜい米島屋の貸出の増加が止つた程度で、減るところまでにはいつていなかった。

ときそんな話があるものか。無期限で、無利子、それじゃ、もらつたも同然じゃないか」

善右衛門は「もらつたも同然」というところを感嘆詞を叫ぶように言つた。

「結果的にはそういうことになるかもしれませんが。大間資金は商売として金を貸すものではありませんから。豊大間の意思を継いで、世の中の救済に役立てばそれでいいのです」

だが彦五郎の説明など、もはや善右衛門は聞いていなかった。無利子でかりに六千万両の金が使えたとすれば、それを法定の年一割五分で廻しても九百万両の利息が稼げる、と善右衛門の胸算用は働きます。

「そんな金があれば、この米島屋が借りたいくらいだ」思わず出た善右衛門の本音に、すばやく彦五郎は喰いついてきた。

「いくらお金にご不自由のない米島屋さんでも、六千万両といえど、あだやおろそかな金ではございません。場合によつてはその中のいくらかを米島屋さんの方にお廻しすることも不可能ではありません」

こうして欲に目のくらんだ善右衛門は言われるままに美春藩への紹介状を書いたのである。

彦五郎は米島屋を出ると

「これでまず第一の関門は無事に通過したわい」

彦五郎の持つてきた大間資金はこうした矢先の話であつたから、善右衛門にとつてみれば願つてもない話といつてよかつた。もしもこの話が本当だとすれば美春藩は一挙に貧乏藩から富裕藩になれるし、そうすれば米島屋の十三万両の貸付金も利子を含めて全額回収できる可能性が出てきたことになる。

善右衛門は次第に彦五郎の話を信用しはじめていた。欲が、両替商として持つていなければならぬ警戒心をゆるめたのである。

彦五郎は善右衛門のその心の動きを正確に讀みとつて「ご紹介いただけますね」

心にくいタイミングであつた。しかし善右衛門は「……………」

辛うじて即答を避けた。最後に残つていたわずかな警戒心が、善右衛門に慎重な態度をとらせたのである。だが、善右衛門は返事をしたがつて、返事が喉もとまで出かかつているのがわかる、その喉をあと一押しすればいい。彦五郎は声をひそめて言つた。

「実は大間資金の最大の魅力をまだお話ししてありませんでした。この金には利子を払わなくてもいいのです」これが最後の決定打となつた。

「無利子……?」

善右衛門の眼が動物的に光つた。

「六千万両もの金を借りて、利息無しだなんて……、今

と首をすくめた。彦五郎の顔にはいきいきとした生気が甦つていた。今まで善右衛門の前で緊張していたのが本来の彦五郎に戻つたのである。

顔をあげて空を見た。よく晴れた早春の空には風がのどかに浮いており、鶯の鳴声が聞えてきた。このまま宿に帰つてしまいたくない気持だつた。

「まだ日も高い……」

彦五郎は外桜田まで足をのびしてみようと思つた。外桜田には美春藩美川家の江戸上屋敷がある。それをじっくり見ておくことも悪くはない。

外桜田には数多くの大名の邸が思い思ひの規模で威容を競いあつていた。なかでも大きいのは松平家と井伊家の江戸屋敷であるが、その中に二十万石という藩の規模から見て大きすぎる、美春藩の邸が混つていた。この必要以上に立派な美川家の邸が、美春藩の財政窮迫の一因にも連つているのだなと彦五郎は思つた。

彦五郎はふところ手でその築地塀沿いに歩きながら

「ふーむ、これは腕の振る甲斐がある……」

塀の屋根瓦ごしに雪のように咲いた邸の梅の花を見上げた。この藩邸にも梅が多い。美春藩の国元は温暖の地にあり、梅見は名物の一つになっている。梅の木はその国元から運んできたものであろうか。

白梅は早春の日ざしに輝き、築地塀は温かそうな日だまりで、藩邸の外観はまことにおだやかに見えるのだが

『内側は火の車の地獄だ』
と彦五郎はつぶやいた。

彦五郎がつぶやいた地獄というのは、美春藩の藩主の交代であった。

しかし藩主の交代はどの大名家にもあることである。別に珍らしいことではない。だが美春藩の場合は交代の理由が異常だった。

美春周辺を領有する美春藩は二十万石の外様藩で、藩主美川光寧はその九代目に当り、百六十年の歴史を誇る名門であったが、極度の財政窮乏にあえいでいた。もつとも当時藩財政が困窮していたのは美春藩ばかりではない。ほとんどの藩が例外なく財政逼迫に陥っていたのであったが、とりわけ美春藩の窮乏はひどく、誰が見てもその再建は不可能と思われていた。

美春藩は今でこそ二十万石の石高に甘んじてはいるが、その初期には百二十万石を誇る外様大名の雄だったのである。それが関ヶ原の合戦で徳川を敵に廻したばかりに、二十万石に減俸され、一挙に六分の一に領地が減ってしまったのであった。しかし美川家は家臣の数を減えなかった。ここに財政逼迫の根源がある。つまり現代の企業でいえば営業収入が六分の一になったのに、社員数はそのままというのであるから、財政が窮乏するのは当然である。その上さらに参勤交代、幕府工事の手伝い、普

よつて、やつと藩土返還だけは思いとどまらせたが、しかしすでに光寧は藩政をつづけていく気持を失っていた。後継者にバトンタッチである。

しかし困ったことに光寧には子供がなかった。後を継ぐ人間を早く探してこなくてはならない。誰かいい人はいないかと当りをつけていると、これも光寧の叔母の血筋に当る青葉家に、ちょうど恰好の青年がいた。修身という名の、しつかりした若者であった。幼少の頃から英才を謳われていた。次男であるので、他家に出ることに差し支えはない。願ってもない話だと、話ほとんどん拍子に進んで、二十二才の青葉修身はこうして美川家の養子となったのであった。

もちろん修身はその時まで、美春藩の国元を一度も見ることもしなければ、また藩内がどんな状態になっているのかも、知りしなかった。ただ修身がはつきりと聞かされていたことは

「美春藩の財政再建をするために、美春藩主を継いでほしい」

ということだけであった。

しかし修身はこの申し入れに応じた。それには修身なりの次のような考えがあったからである。

修身の生れた菊掛藩青葉家は四万石と、美春藩と比較にならない小藩であった。が、父はすでに隠居し、兄の忠正が藩主を継いでいたから、次男である修身が菊掛藩

請、それに凶作や飢饉、大洪水などが代々相次ぎ、徹底的に痛めつけられたにもかかわらず、江戸屋敷の維持をはじめ美川家としては昔ながらの格式を重んじなければならなかった。九代光寧の時代には、もう、につちも、さつちもいなくなってしまうていたのであった。

今からちょうど六カ月前のことである。ある日突然に、藩主光寧が二十万石の藩領を幕府に返上して、美川家を廃絶しようと言いつ出したのであった。財政の破綻を封土の返上によつて打開しようとしたので、光寧としてはこれ以外に財政困窮の解決策が思いつかなかった。現代で言うなら倒産であり、破産申請ということになる。いわば藩主としての義務を放棄してしまつたわけであるから、家臣、領民から見れば、これ以上の無責任はない。

封土返上というのは実質的にはお家断絶も同じことであるから、いくら財政が困窮していたとはいえ、藩主自身から封土を返上するというようなことは当時絶無であった。長年にわたる財政困窮で気の弱い光寧はいささかノイローゼになっていたのちがいない。

驚いたのは家臣たちであり、親戚筋であった。いくら貧乏とはいえ、二十万石の傘の下に入っていれば、とにかくにもその日の生活は成りたつていくが、それが無くなつてしまつたのでは路頭に迷わなければならぬ。そこで光寧の奥方の実家にあたる竜山家の説得に

主になれる余地は残されていなかった。とすると残された途は、領地を分けてもらつて独立の藩を起すか、他家に養子に行くか、あるいはそのまま青葉家に徒食して生涯を終るか、そのいずれかである。しかし独立などということはたかだか四万石の菊掛藩に許されることではないし、また美川家の部屋住みのまま生涯を終るのでは、いかにも情ない。

だから修身は早くから自分の運命を養子と、ひそかに心に決めていた。しかし養子の話にありつくためには実力をつけておかねばならないと、修身は平素から儒学者の月岡実山について勉学にはげみ、また家老たちからひそかに藩主としての教育を受けていたのであった。

美春藩からの養子の話はそうした、いわば修身としては準備の出来あがつたところへ持ち込まれた話といつてよかった。石高も菊掛藩の五倍もある二十万石である。悪い話ではなかった。財政窮乏といつても小藩に育つた修身は儉約に堪えることに慣れている。たとえ財政が苦しくとも美春藩二十万石の養子に入つて努力した方が生き甲斐があると、若い修身は修身なりに自分の一生を判断したのである。

さて、こうなると光寧は一刻たりとも藩主の職責を全うする意思はない。だから養子縁組が終るとさっさと後事は修身に託して、隠居してしまつた。

こうして美春藩は辛うじてお家断絶だけは免れたもの

の、新しく藩主の座についた若い修身の前には、藩政の破局が横たわっていたのである。救いようのない財政の窮乏、そして農村の荒廃。これをどうして救うかが、後事を任された修身の責任なのである。修身は美春藩財政再建のために送りこまれた生贄であつた。

『だから今が絶好のチャンスなのさ』

と彦五郎は築地塀ごしの梅の花を見上げながら、もう一度つぶやいてみた。

『このチャンスをうまく掴めば、成功は九分九厘まちがいない。そのパスポートがこの紹介状なのだ』

米島屋からの紹介状を着物の上から押えながら、彦五郎は口笛でも吹きたい心境であつた。

やがて屋敷の正面へ来た。二十万石の大名の正門は彦五郎を威圧するようであつた。それを見上げながら

『美春藩との交渉に有利な舞台は、この江戸屋敷か、それとも国元なのか……』

としばらく考えた。美春藩の江戸藩邸と、国元に居る人物、その権力関係、そして人脈など、知っている限りの知識を集約して分析してみたが

『やはり国元の方か……？』

と慎重に判断を下した。

外桜田まで遠廻りをしたので馬喰町にもどつた時には、

バシッ

的に当る矢の音が明るい梅林の静寂さを破る。

新しく藩主になつた修身が弓を引いているのであつた。右手で弓を引きしぼると、片肌ぬいだ色白の二の腕に、

力こぶが盛り上る。的を狙う。的に神経を集中させる一瞬は、すべてのものが消えて、頭の中が澄みきつた。

修身は十才の時から弓を始めていた。身体鍛錬と精神修養の両面からである。毎朝どんなことがあつても稽古を休んだことはなかったが、美春藩に養子にきて喜んだのは、その稽古場が広いことであつた。修身は菊掛藩

主青葉頼之の次男として生れ、ずっと江戸藩邸で育つた。菊掛藩は四万石という小藩であつたから、江戸屋敷も小さいし、弓の道場もせまい。それが美春藩に移つてきてみると、道場は広々としているし、また周囲がいちめんの梅林で、すがすがしい。

『さすが二十万石のことだけはある』

修身は一瞬美春藩が抱えている財政困窮の難問を忘れる思いだつた。

だが今日は新藩主として就任してからの、最初の御前会議の日であつた。

昨年度と今年度の、財政収支の審議である。美春藩の財政の窮乏は知っているが、それが具体的にどうなっているのかはまだ知らない。

『決算も予算もひどい数字にちがいない』

早春の一日はとつぷりと暮れていた。

彦五郎は松葉屋と掛行燈に灯の入つた旅籠に入った。そこがどうやら定宿らしい。六千万両の話を持ち歩く男の宿としては貧弱すぎたが、しかし秘密を守るためにわざと人目につかない所を選んでゐるのかもしれない。

部屋に入ると彦五郎はすぐ手紙を書きはじめた。美春藩の国元家老高柳玄宰へ宛ててであつた。左手に巻紙を持つと、それに筆を立てるようにして一気に書いた。そのあざやかな筆跡は、馬喰町の旅籠の一部屋で書く手紙にふさわしくない見事さであつたが、それはあまりに見事すぎてかえってどこか偽物の匂いがした。

(二)

さて、その美春藩江戸屋敷の内側である。

今日も、今を盛りと梅が咲き、早春のさわやかな空気が張りつめていた。

数日前、この屋敷の外側を、彦五郎とかいう、うさん臭い男が、塀ごしの梅を見上げながら歩いてしたことなど、屋敷の人間は誰も知りもしない。塀の内側は、外の世界と隔絶していた。

長屋につづく裏庭が梅林になつていて、その長屋と梅林の間の縦長の空地が、弓の稽古場になつていた。

バシッ

どんな数字がこれから説明されるのかと思うと、気が重かつた。

『はたして財政は再建できるのか』

はつきり言つて自信はない。だが、やらねばならない。自分はそのために美春藩に送りこまれてきたのである。

修身は弓の命中に、未来の自分の運命を占う気持ちになつてた。

『矢がうまく命中すれば財政再建は成功。外れれば失敗』

弓を引きしぼる修身の視界に、弓の的の、黒白の模様が大きく迫ってくる。

矢を放つ。

『うまく当れ！』

矢はうなりを立てて飛ぶ

バシッ

的の中央の黒点を正確に射抜いていた。

『成功だ……』

幸先のいい矢の命中に気分をよくしているところへ、

『殿、会議の時間でございます』

近習の高沢小文治が呼びにきた。

修身は稽古をやめると、裸の右肩を着物のなかに戻し、弓道場の木戸を閉めると、自らの手で鍵をおろした。弓道場に封印をしたのである。封印したのは、今日限りで弓をやめようと心に誓い、弓道場を閉鎖したからである。

それは修身が

『今日からは農夫にならう』

と決心したからであつた。

修身は財政再建という目的を果たすために政略的に美春藩に養子に入つたのである。藩主といつてもはつきり言えば財政再建の道具である。だが、それを修身は承知した。修身は自分の全生涯をその道具にする覚悟なのである。そのためには自分の性格、生活、行動を、政略的要求に合致させるよう、自己改革をしなければならぬと決意したのであつた。

弓道は武士の道である。大事なことは知つてゐる。しかしその大事な道さえも絶縁する覚悟でなくては、財政再建はおぼつかないというのが修身の考えなのであつた。これからの美春藩にあつては農民だけが働けばいいのではない。武士も、町人も、職人も、いや藩主を含めた領民全員が百姓になつて田を耕し、荒地を開墾しなければならぬ。修身もその農夫になり切るために、弓と今日かぎり絶縁したのであつた。

実を言えば今日の御前会議はもつと前に開かれる予定になつてゐた。それがすっかり遅れてゐたのである。

遅れたことについては少々理由があつた。それは開催の予定も間近になつたある日、勘定方の山岡助之進から『しばらく日程をのばしていただきたい』

の決算書が、その再準備の真最中に同じ蔵の中へ戻つてきたのであつた。ある朝勘定方が蔵を開けてみると、元の場所にきちんと決算書が格納されてゐたというではないか。

いったん盗んで、また戻す……不思議な盗人だ、と修身は思った。

『なぜ返してよこしたのか』

『それはわかりません。でも戻つてゐるのは事実なのです』

怪盗は盗んだことが見つからぬようにそつと返してゐたのか、それとも見てしまつて用事はもうないから返したということなのか。

『決算書が戻つてゐるということは、盗人が、二度、この美春藩上屋敷に忍び入つたということになるな』

『おおせの通り』

『度胸のよい怪盗だ』

修身はつぶやいてみたが、附に落ちなかつた。目的がわからないだけに、うす気味が悪い。もしこれが現代であれば警察がきて、決算書についた指紋を調べるとか、捜査方法はいろいろあるのだから、当時ではそうはいかない。真相ははつきりしないままに、うやむやになつてしまつたが、なんとしても後味の悪い事件であつた。しかし若い修身はもうそのことにこだわつてゐない。これからの会議の内容に修身の好奇心は移つてゐた。

という申出があつたからであつた。

『準備が出来ていないのか』

『いえ、そういうことでは……』

山岡助之進は言いよどんで困りはてた表情である。緊張のあまり鼻の頭に汗を浮かべてゐる。

『どうしたのか』

『実は、盗人が入りまして、決算書を盗まれました』

『決算書を……？ そんな馬鹿なことが……。大名家の決算書など盗んで、何の利益になる。金も盗まれたのか……？』

『金は盗まれておりません』

『不思議な盗人だな。思ひがちなのか……？』

決算書は蔵の中にいつものように格納しておいた。それが三年分、忽然となくなつたのであつた。誰かが持ち出して蔵へ戻すのを失念したのではないかと思つたが、あらゆる心当りを當つたがそうしたことはなかつた。盗まれたのに、まちがひなかつた。

『美春藩の決算書が何のために……？』

本当に盗まれたのなら、その目的は何なのか。修身は黒い不安にかられた。

御前会議の準備を至急やり直さなくてはならなかつた。そこで勘定方は大あわてで決算書の復本を取り寄せに、国元に使いを走らせたのである。

しかし不思議なことがその後で起つた。というのは件

御前会議は大広間の隣の、奉行溜りの間で行われる。

修身はいったん居間に戻ると、汗になつた身体を冷水で拭いた。そして茶を飲んでから少しおくらせて溜りの間に入つた。若い新藩主なので、家老たちからあなどられまいとする気持が無意識のうちに働き、それが定刻よりわざと遅れていくという行動に現れたのであつた。

会議に出席してゐるのは家老の村田外記、安藤茂左衛門、片倉頼負、中老の松波忠助、吉田左太夫、梅津大八、それに勘定方の山岡助之進の七人であつた。それに修身を入れて八名になる。あと近習が一人控えてゐる。

修身が上座につくと、さっそく財務、経理を担当する家老の村田外記が、手許のぶ厚い書類をひろげた。一同の視線がいつせいにその手許に集る。

『昨年度は予想外にいろいろなことがありまして、支出が嵩みました。まず大きなものは上野東叡山普請工事のお手伝い。これに莫大な費用がかかりまして、九千八百両を支出いたしました。それに加えて、春の御参観ご入用に千五百両、それから江戸表、国元、いずれも最近諸物費高騰いたしましたして、日常経費も一割以上の支出増となりました。また借入金の子もあがりまして、その利息の増加だけでも八千両以上となりました上に、米島屋から借金返済のきつい催促がありまして、やむをえず二万両の返済をいたしました。そうした支出がかさむ一方、収入の方はなかなか思うように増加いたしません。

あいにくと昨年は夏の長雨で米が不作のため、年貢米も減少いたしました。米の納入につきましては百姓どもにきびしく催促し、怠けている者は水牢に入れるなど、きびしく取りたてておりますが、なかなか思うように進まないのが現状でございます」

村田外記の説明はとめどもなく、次から次へと続けられるのであるが、断片的で統一性がなく、焦点が絞つてないので、すこしも全体像がつかめない。全体がわからなければ正確な問題点の把握はできない。そのうえ、江戸勘定がどうの国元勘定がどうのと、そんな分類のことばかりに時間を費し、また後の勘定がいくらあるとか、含みの金額がいくらあるとか（含みとは予算を先喰いしてしまつていいる金額のことらしい）、粹繰りがどうのといたずらに技術的なことばかりがくわしいのである。

「これが財政担当の家老の言うことか」

聞いているうちにさすがの修身もいらいらしてきた。『養父の光寧殿はいつもこんなつまらぬ会議で満足していたのであろうか』

こんな思いつきを寄せ集めたような説明だけで大事な財政会議が終り、ただなりゆきに流された藩の運営をやつていたので、財政危機に陥るのは当り前である。

ついに修身は途中で言葉をはさんだ。

「細部の説明は後でよい。つまり全体としてどうなったのじゃ。最終的には赤字になったのか、黒字になったのか」

そうした修身の気持を反映した部屋の上らじらとした空気の中で、そろばんの音だけが変に冴え返る。だが計算はなかなか終りそうにない。

「もう、よい。わしが一つ一つ聞かから、それに答えてくれればよい」

「かしこまりました」

村田外記は身をちぢめた。

「まず、昨年一年間で藩全体の収入はいくらになったのか」

山岡助之進はばちと新しくそろばんを置き直し、村田外記と相談しながら、あの項目、この項目と指先を動かしていたが

「米による収入が四万二千五百三十八石、それに現金による収入が三万六千九百九十両でございます」

「では、それに対する支出の方は……？」

修身の強身は係数に強いことであつた。数字をよく覚える。そして数字を使つた全体像を掴むのに秀でていた。それは特技といつてよく、藩主という立場にある人間として、当時珍らしいことであつた。

「米による支出が五万三千三百六十一石、現金による支出が五万二千八百三十六両でございます」

「すると差引の不足は……？」

「米で一万六千二百三十三石の不足、現金で二万二千四百十六両の不足でございます」

のか」

説明の腰を折られて、村田外記は不満そうな顔をして修身を見上げた。先代藩主光寧の頃はこんなことはなかった。光寧はいつも最初から最後まで話をだまつて聞いてくれた。そして最後には決つて『ご苦労、それでよろう』と言つて、会議は終りになった。藩主が積極的に財務の話に介入してくるなどということは、前代見聞のことなのである。

村田外記は一瞬狼狽して

「全体の数字と申しますと……」

これまでそうした説明をしたことがない。だから急には説明の言葉がまとまらないのであつた。あわてて勘定方の山岡助之進にむかつて

「そろばんを入れてくれ」

村田外記が書類のあつち、こつちをめくりながら数字を読みあげると、山岡助之進がそろばんの玉をはじいた。そのゆつくりしたそろばんの動きを見ていると、修身は腹が立つてきた。

「更めてそろばんを入れなければ、そんな数字も出ないのか……」

となりつけようとしたが、しかし師である月岡実山からつねづね教を受けている『藩主たるものは決して怒りを面に現わしてはなりません』という言葉の思い出し、辛うじて怒声を押さえた。

これではやつていける筈がなかった。いくら上野東叡山普請のお手伝があつたとはいえ、支出が多すぎる。現金收支の方だけで見ても、三万両の収入に対して五万両の支出である。たれ流しと言おうか、出鱈目に近い。

「そして赤字の結末はどうつけたのじゃ」

「いつものように両替商からの借入れで穴埋めいたしました」

「昨年一年間でふえた借入金はいくら？」

「二万九千両でございます」

「すると借入金の残高は総額でいくらになったのか」

「二十万三千両でございます」

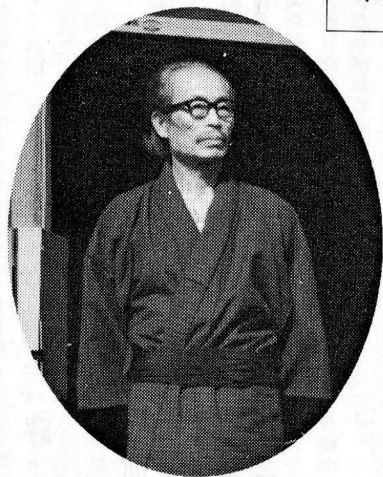
「二十万両……」

修身は思わず悲鳴をあげた。美春藩の年間の米と現金との収入を合計して現金換算してみても四万両程度である。それに対して二十万両の借金。藩収に対して五倍の借金である。

美春藩は財政の資金ルートを主として江戸の両替商米島屋善右衛門に依存している。古くから美春藩の御用をつとめていた関係から、藩でも彼の功績を認めて、紋服、知行などを与えて、できるだけの処遇をしてきていた。もちろんこれだけの借金を米島屋だけから調達するのは不可能であるので、他にも備前屋、近江屋、平野屋などからの借入もある。

しかし最近主力銀行ともいふべきその米島屋の態度

追悼 常石三郎



「午前堂医院」前で
(S. 53, 2)



「作家群」同人による送別会 中央 常石三郎
(S. 42. 6. 25 深大寺)

に微妙な変化があるのが気がかりであった。美春藩への貸出を渋るようになったのである。あまりに龐大になった借金のために、その返済能力を警戒したのである。そこで最近では江戸や大阪の豪商からも当るをかわず借り歩いて、やっと辻棲を合わせているという現状であった。しかし最近はいくらも次第に困難になって、家中の者の給料の借上げや、領民からの搾取を更に強化する以外に道がなくなってきた。

『その借入金返せるのか?』

修身はわざと意地悪く聞いてみた。

『いえ、とうてい返せる金ではありません』

家老、中老たちは、いっせいに頭を垂れた。養父の光寧がすっかり嫌になって財政を投げ出してしまった気が、今になって修身にわかってきた。

『利息だけでも三万両は毎年払わなければならない』

『はい』

『その上に元金の方も内入れ返済しなければならないだろう』

『はい』

『赤字はますます、ふえるばかりだな』

『はい』

何を言っても、『はい』だけの返事である。毎年、ただ借入金があるだけの、まったくの無策なのである。財政は窮迫どころか、完全に破綻している。放置してお

けば倒産はまちがいない。

『えらいところへ養子にきたものだ』

修身の中に後悔の念が湧いた。しかしいまさら『財政再建の自信がないから生家へ帰ります』などと口が腐つても言えた義理ではなかった。いったん決心して養子にきた以上、美春藩に骨を埋める覚悟でなくてはならない。

『過ぎたものは仕方がないとして、これからはどうするのじゃ。これまでの反省の上に立ち、今後の計画を立てなくてはならないと思うが、その案は出来ておるのか』

『……………』

家老たちは口をつぐんだままである。顔をこわばらせ、修身の視線を避けている動かない表情は、家老たちがいったい無能なのか、それともすでに財政再建への情熱を失ってしまったているからなのか、修身には見当がつかなかった。

『それは、まだ…』

やっと低くぐもった村田外記の声。

『まだ…?』

『出来ておりませぬ』

修身には怒りよりも、絶望の方が強く、身体が崩れていくのを感じた。

『もはやこの連中を頼りにはできない』

そう思い、修身は会議を打ち切った。

(つづく)

常石さんの批評

前島白貞

常石三郎が国文社で出版した著書は、歌集二冊、句集二冊、詩集三冊である。かれは自分の著書を国文社一社にかぎって出版している。ひとりの人が自分の著書を一社でばかり出版するということは珍しいことで、かれの性格の律儀さと純粋さを示している。

かれをわたしに紹介したのは、詩人の高木護である。昭和四十年ころである。詩集『OSTEOLOGIA』常石三郎の奥付を見ると、昭和四十一年刊、あとがきは昭和四十年歳暮とあり、刷り込みの新刊広告二頁、ビボー叢書の広告二頁のなかに76高木護詩集『夕焼け』300円とある。そのころの目録を見ると、歳月の隔たりと同時に出版への新鮮な情熱が憶い出されて、生死事大無常迅速ということばが身に沁みて感じられる。

かれの最後の著書、歌集『寡黙』の奥付の前頁に、既刊の目録がある。

詩集 OSTEOLOGIA 一九六六年 (昭和41年)
歌集 合歓の花 一九六七年 (昭和42年)
詩集 れくいえむ・迷宮紀行 一九七三年 (昭和48年)
詩集 蜉蝣呻吟 一九七六年 (昭和51年)
句集 蟹座も光れ 一九七九年 (昭和54年)

句集 遯世記 一九八一年 (昭和56年)
これに歌集『寡黙』が一九八四年、昭和五十九年刊で、計七冊がかれの生涯の著書である。

はじめてかれと会ったころ、わたしは池袋東口のメインストリートの現在の大和証券のビルのあたりに、薬火書房という古書店を開

いていて国文社の名義で出版も行っていた。昭和四十一年七月下旬に現在地に移転しているので、かれは古書店の終りころの客であった。かれはわたしの店に寄る時は、近くの飲み屋街美久仁小路の焼鳥屋平田屋に、小説の同人誌の友だちと集まっていたようで、その帰りだとかこれから出かけるとか言っていた。詩集OSTEOLOGIAが出来たのが五月でわたしは間もなく移転したので、かれの詩集が古書店をやっていたさいごの出版であった。現在の小さなビルに移転してからは、古書売買はやめて出版だけに切替えたので、出版の点数も増えて出版活動が活発になった。

かれは、かれの小説作品の載っている二、三の同人誌をわたしにくれた。医者としての素材にした短篇だったようであるが、わたしは題名も忘れていたのと同入誌も失くしている。

かれはわたしより一つ年上であった。若い時先生をしていたが途中から医学校に入ったので苦勞の道を歩いて来たらしかった。戦争経験もあるが、わたしなどと違った軍医関係なのであり、戦後に勉強をして博士号をとったらしかったが、くわしいことはわたしは全然知らない。文学の話といってもわたしは小説家になろうと思って本を読んだので、医者のかれとは教養の質というか文学観も違うよ

うであった。しかしかれは自分を文学老年と呼びわたしも同じように文学老年であるとして親近感をもってくれた。講談社に勤めていた練馬に住んでいた山口さんは芥川賞候補になった人だが、やはりいつも自分を文学老年と呼んでいた。芥川賞候補になる前に、志賀直哉のところにも挨拶に行っていた。わたしの古書店にくる人のうち同人誌をやっている文学老年と呼んでいる人は幾人かいた。四十歳に近くなっていて売れない小説を書いてい

る人はみな文学老年と呼ぶらしかった。わたしは文学老年と自分を呼ぶことも他人を呼ぶことも好きではなかった。そのことばの中にはある卑下のひびきの中に甘えのような自慰の気持が見えるのが嫌であったからである。かれはわたしは、戦前小説を書いていてこ

とや南方方面に海軍軍属として従軍していてそのことを記録文学というより記憶文学として書きたいという話に、是非物にするよう勧めてくれた。わたしも生涯の大きい出来事なので、小説に纏めようとしてメモをとっていたのだ。

そのころ、三島由紀夫に名刀関の孫六を贈った渋谷の大盛堂書店主船坂弘が、自らの従軍記を出版しようとしていた。しかし、わたしの戦記は、忠勇義烈の国のために戦うというようなものではなく、戦争からのがれて軍

属として生きのこりたいというようなりしうめたい気持をかくして自分の行動を律していたような人間が主人公なので、人に宣伝出来るようなものでなかった。わたし自身がそのうしろめたい行動をとっている男なので、かれにも心の底を輕輕に語ることは出来なかった。

わたしは戦記を一応書きあげて、何年間か推敲していた。それから、心情的にも空間的にもいつも身近にいる田中清太郎先生に読んでもらった。わたしは、あとで常石さんにも読んでもらってあげばかれがこの戦記にくれた批評ほどはげしいものにならなかったかもしれない。作品自体ももっと立派なものになっていたかもしれない。

戦記の表題は、推敲のあけく『大鳥島戦記』に決めた。そのころからの戦記に関わりのあるかれのわたしにくれたはがきや封書を写しておきたい。かれのわたしに対する愛情と戦記に対するかれの文学理念の表われである批評文をながく記録に残しておきたいから。そしてかれの健康は、そのころから悪い方に傾いていっていたので、その経過がよくわかると思うから。

だいが春らしくなってきました。
しばらく御無沙汰ですが、お元気ですか。
もう大鳥島戦記も本になったのでは？と

思います。如何でしょう？出来上りましたらお知らせ下さい。私が十冊程購入致し度く存じて居ります。その節は発送宛先をお知らせいたします。

さて、私、去年晩秋ごろより胃の具合わるく、十二月初旬思い切って受診、レントゲン、胃カメラの検査の結果、胃潰瘍と診断されました。夏の頃に比し六キロもやせましたので、これはただごとではないぞ、と恐れたのですけれど、幸いにも胃ガンではなく、自宅で食事療法と服薬にてよろしいとのこと、相当厳重な「潰瘍食」を約二か月、二月初、再検査の予定でした。

しかるに、一月末より当地猖獗のB型肝炎フルエンザにやられ生れてはじめて一週間臥褥という仕末で、これにはホトホト弱りました。

インフルエンザ治ゆのあと、レントゲン、胃カメラ検査を先月下旬実施、潰瘍はよく治っているの服薬の要もない、とのこととでやっと安心いたしました。

ところが、こゝ一年有余不眠症に悩む家内が、いよいよ悪化し、ノイローゼ(神経症)気味となりましたので、東京にて入院治療させようと思ひ杉並の義兄を通じ、都内都下の神経症専門の病院をあたってもらいましたがいづこもこの現代病である神経

症の患者多く、六ヵ月先まで入院待機患者があるため、余程の強力なコネでもない限り入院は不可能とのことでありました。

そんなわけで万策尽き（当地にも精神病院は四〇カ所ほどありますが、そこへは本人も入りたくないと思われ、私もそこでは神経症の治療はできないと思います。）二週間前より熊本市内に、今は母が死んで家内の実妹が一人ぐらしをしています。そこへしばらく預けることにして行っております。

薬は私が勤務先の病院からもらって届け家内は妹の家で静養、その間に神経症は結局「自分で不安がる」病状故、そこをこのころを深く洞察して、自分で自分の心を克服するように、と指示しております。時々私も出向いていますが、妹からの報告によると、この数日は気分よく起居しているとの事であります。

男の独りぐらしは不自由千万ですが、曲りなりに自炊を致して居ります。そういう次第で拙宅では本年は年頭より、悪い事のみで、うんざりしています。阿々。

「俳句とエッセイ」の牧羊社から、何思ったのか十二句欄へ作品を呈上して、結社（鷹）には無断で作品を出していただいたのが三月号に三橋敏雄らの作品と一緒に載った。

くれるのに変だなとわたしは内心で感じていた。

つぎの書簡は五月九日付であった。便箋七枚に細字でびっしりと書かれたもので、作品の批評が頁を繰り、行を追い、朱線をつけたものかと思えるほどであった。わたしは健康でないかが仰臥のままとか、非日常的な姿勢で、すこしずつ読みながら朱線を引いて批評してくれたのであろう努力に対して、その誠実な人柄を思いながら感動の念にうたれていった。

四月二十六日に手術が無事終了しました。途端に身体障害者に転落、不自由な生活を余儀なくされています。左前上胸部（乳の上）にベース・メーカーを埋めこみ、そこより線が皮下を通して鎖骨の下の静脈に入り、ずっと下って心臓の中、右の心室まで届いています。そこで心筋に刺激を与え（ベース・メーカーが）それによって心臓が動くという仕掛けであります。それ故やたらに左腕を動かすと鎖骨や付近の筋肉が動き、従って中を通る線にブレが生じ心臓の中の線の位置が変り刺激発生に異常が出やすいということらしいです。

線が肉（組織）の中でしっかりと固定さ

ております。書店で立読みでもなさって下さい。『遷世記』の簡単な（不親切な）書評が俳句二月号に載っていました。

白貝さんは句作の方は如何ですか？

私が心配するのは白貝さんのご体調ですが、血圧の方うまく管理しておられますか？ 私はもう七十才になりましたから、血圧はやたらに薬で下げないことにしています。高齢者の場合は、九〇—一〇〇位ある方が頭の働けが鈍らないとの説もありますから。

奥様お元気でしょうか。国文社のご子息方お元気でしょうか？ どなた様へもよろしくお伝え下さいませ。近況お知らせ方々ご無沙汰お詫びまで。

一九八二・三・五

草々
常石三郎

便箋三枚に書かれていた。かれの手紙は、つねに親切で、自分の状況を的確に知らせるとともに、いつも私の身体の調子を心配してくれている。

快晴好天が一週以上続いています。その後如何ですか。戦記の上梓は進捗していますか？ 小生三月ごろより不整脈を再三感じるようになり（以前にもありましたが）少々不安になりましたので四月一日受診。入

れ、線の先端が心臓の中の心筋に密着してしまえば少々左腕を動かしても（強く上方へ挙げることはやはり無理）いいらしいですが、それには期間を要するので、術後三日間の絶対安静（文字通り動いてはいけな）ので、この三日間は死の？ 苦しみでした。一週間後歩行トレが許されました。

そんなわけで、これまでは仰臥のまま右腕のみを使用して日常の動作をせねばならずとてもとても難渋しました。そのため御本を読むのも少しづつというわけで中々歩らず昨日やっと読了というわけです。読みつゝ気のついた点等々に印をしたらしまったので時間もかかりました。以下その感想を忌憚なく述べますのでお気にさわる点がありましたらご容赦下さい。尚右手のみで机らしい機能もない台の上で書いていますので、どうかよろしくご判読下さい。

全体として、書きなれた人間の悪ずれた筆致でなく、いかにも素人臭い、たどたどしい文体が、逆に、生々しい真実を以て迫るという奇妙な効果をあげています。それだけに読者にまどろこしさ、冗贅を感じさせ、スビードの乏しいいらだたしさを覚えさせます。文章にメリハリが乏しく従ってリズムがなく、だからだと作者の視覚そ

院の上更によく観察、検査をしようということ、四月十五日表記に入院しました。

いろんな検査の結果、来る二十六日に、ベース・メーカーというのを心臓に挿入し、その端末を胸部に埋めこむということになりました。つまり、このメーカーによって規則正しく心臓を鼓動させようというわけです。術後は器械の作動具合等をみるため、三週間位入院し、そのあと退院ということらしいです。御本が出ましたらお知らせ下さい。私が贈りたい人の名簿を送りまして、お宅からその人たちへ送本して頂きたいと思っています。

家内の方は心配してはいないのですが、私の入院のショックでかえって元気をとりもどしつゝあるようでこの点喜んでいます。では又書きます。奥様へよろしく御伝へ下さい。

一九八二・四・二四

このはぎの住所

熊本市段山本町四番三八号
済生会熊本病院循環器病棟508号室
常石三郎

この四月二四日付のはぎが来たころは、『大鳥島戦記』は刊行されていて、かれにも贈られていたと思われる。本が着いたことに対する連絡はなかった。いつもすぐに返事を

のまなざつたような表現が多くなっています。全体が過去形で書かれ、ことに「……」なのである。「式の「であった」で結ぶセンテンスの多用は読者に倦怠を与えます。物語り体は過去のこととそれを想起して書いていくという形なので過去形は当然としても中に生起する事件等の描写は現在形を使い、しめくりに過去形を用いるという手法の方がいいと思いました。文章をいちいち主語・述語で完結させたものとして書いてゆくとは煩雑冗漫を免れませんから、体言止めなどを活用してセンテンスを短くボンボンと切っておくのも、読む側の生理にかなうと思います。といっても私は、新聞記者が書く短く切った体言多用の文章や、週刊誌にみられる文体などは好みませんが、大抵のところは、志賀直哉流の簡潔、鷗外流の短かい文節、緊密堅確な措辞が好ましいと思っています。一般に素人や同人雑誌の人たちの文章はくどいと云われています。教員乃至教員あがりの人の文章も説明が多すぎて（噛んでふくめるような）冗漫な傾向が多いと云われます。

前島さんのこれまでの評論のスタイルから推して、これほど小説（記録）の文章が柔らかすぎ、説明調であるとは全く意外でした。ここで例をあげましょう。殊に「志

賀筆生は……」と主語が多すぎて英文の（I）や（It）（There）を使うように「志賀筆生」が出てくるのは、どうかと思えますし、明らかに本人であることがわかっていても……筆生、……技生は、という風に個有名詞が頻出してくるのは甚だめざわりでもあります。

P80 消燈の時間が近いと思い、疲れているので早く寝ようとして、矢島筆生に挨拶をした。

「今日は、すこし疲れていますので、お先に休ませていただきます」

矢島筆生は、志賀筆生の挨拶を聞くとい

「志賀筆生、まことにすまんが、お願いがあるんだが」

「なんででしょうか」

「実はこんばん、お客さんがあるんだ」

「誰ですか」

「志賀筆生も知っている、今日志賀筆生が乗って来た船の輸送指揮官なんだ」

点線の部分は、内容上だぶっているのだから、と注をして「」の会話を入れる方法は余りよくないと思います。会話をしている人間が誰と誰と読者にわかっている場合には会話している人間の固有名詞は省く方がいい。また概して会話に必然性のない、何でもない挨拶みたいな会話が、わざわざ「」に入れて行を改めているのも無駄でしょう。必要最少限のしかも決定的な意味は、役割を荷った言葉として会話の中に入れ、それ以外は地の文の中で書いてゆく方法がいいと私は思います。最近当地から出た直木賞の「機雷」を読みましたが、流石に会話など、ぎりぎりの迫力あるものだけに会話など、爆撃と艦が受ける状況などもきびきびと短いセンテンスで描いてあるので盛り上がりを感じられました。（もともと著者は記者あがり故短文節は書きなれているのでしょうけれど）

海胆とりや信天翁捕りの描写も、余り必要でない微細な点までいちいち説明調で描いてあるために、肝心の海胆とり、信天翁捕りの場面が、スローモーションフィルムのように先へ進まないいで読者は折角の事件なのに退くつしてしまふという難点もあります。

P206 ……内臓を全部とり出した。とり出した内臓は全部、いらぬいひと山になってる上に置いた。内臓をとり出した鼠の胴を、肋骨を抜けて背骨を割いて、一枚の平

面になるように抜けた……

（点線はだぶり、むしろ削って簡略化した方がいい）

P207 ……鼠のひらきを醬油をつけながら焼きあげた。醬油をつけて焼きあげられた鼠焼きは、……

（この僅か一行の中に同じ文語が二つも出てくる冗漫さ）

P209 ……鼠はその飯粒を見つけると、二つの前肢で飯粒をとらえ、後肢と尻尾で立ちあがるようにして食った。前肢で捧げるようにして口へ選んだ……（後略）

（点線所を削って続けても鼠の描写は十分）

こういう風に注意して読むと、かなり意味が重複した記述や描写が目につきます。親切でたどたどしい語り口の効用も余り多すぎるとたいくつでもあります。

ここで肝腎な点を一、二。

構成はよく考えられていると思いますし、夫々の小題見出しもそれなりにジョッキングで読者の興味をそそります。ただ「膝に飼う鼠」の章は鼠より海胆とりの記述に^{2/3}が割かれています。もっと鼠そのものずばりを克明に描けばカフカのなおもしろさも出たのでは？

この本で私が一番疑問に思うのは、作中

の主人公とおぼしき「志賀筆生」は、知識人でありながら「捕虜の打首」や「吊るし刑」について極めて平凡な感想（時には何の感想もなく、ただみたままを描いている）しか洩らさないこと。この異常な事件の現場に居合わせた人間としての、ジョッキングな感情が書かれていないことは何よりも惜しまれます。軍事裁判なしの、西部劇まがいのリンチにも等しい蛮行が平然と行われていることの異常さに対して主人公の反応の無神経さ、いくらか書かれている感想もセンチメンタルな常識を出ない点など、大変不満に思いました。私はこの二つの事件と蛆と肉片、この四つをリアルにとことん描ききるならすごい文学作品になるだろうにと思ったことです。尚、施設部、筆生、技生、工員、守衛、司令等の組織、就中筆生の所属する組織について適当な解説を適当な場所（なるべく冒頭に近く）に入れておくことも読者に対して親切であり筆生をとりまく上下関係、命令系統が明らかにになり、人間関係がすっきりすると思えました。

最後に一つ。出てくる人物の会話が皆一様のニュアンス、イントネーションで、全く個性的でないために、会話のやりとりがぬけていて、小学校の学芸会のセリフみたいな感じとなる。いろんな職分の人があるのに、それがわかるような口のきき方が、また出身地による訛りがちゃんと加味していたら、よりリアルになったと思います。（P17終5行〜P18この部分の挿入は後出の間の伏線としてなら必要なれども、読了後のこの頁不要、組織などを述べるくだりにちょっと触れる位の方が可）

悪口ばかりになりました。アラ探したようにで申訳ありません。私は御本に、私が目についたところ等々にいちいち朱線をつけました。全巻を通じてかなりの部分に赤線がめだちます。校了前に、こういう赤線部分を手を加えられていたら、私としては、この戦記はよりよいものとなったであろうと惜しまれます。

大島島戦記といっても、これは飢餓との戦いが核心であり、まさしく異色のこれも戦記に間違いない。それだけに、その飢餓感が読者をもその飢えの中へ引きずりこむように飢餓そのものについてももっと克明にリアリスチックに描けたらそれこそ優れた異色戦記になったであろうと思えます。

この文の冒頭にも記しましたように、私のように小説を自分でも書き、読みなれた、悪ズレした読者からは上記の如きいろいろの注文点がつきますけれども、一般の読者

には、前島さん特有の軟質の緩徐調の文体は一種の魅力かもしれません。例えば犀星の文は悪文と知りつつ読まされて了うというところもあります。そんなわけで素人が書いた素人向けの変わった戦記としてこの本の存在価値はあると存じます。

それにしてもあれほど遠慮の評論を書く人が小説―記録となるとこれほど説明があったゆるい文章を書かれるとは意外でした。

ここに名簿と謹呈の文章とを同封しますこの文章をコピーして、本に挟んで夫々の名宛へ送ってやって下さい。お願いします。（七部）。三部は私宛に送って下さい。計十冊代は後日お送り申しあげます（何と申しても入院中の身不自由極まりないのでご諒恕下さい）

私も大体本月一杯で退院できるのでは、と考えています。年末筆奥様へよろしく。

昭和五十七年五月九日

常石三郎

前島様
このほかメモ用紙に
畏友俳人の前島さんが、非戦闘員としての異色の戦記を出されました。
私から謹呈いたします。ご高覧下されば幸甚に存じます。

一九八二・五

常石三郎

と記されて同封してあった。

わたしは病床の身をおして、これだけ綿密な細微な批評を書いてくれたかれに、言い尽せない感謝の念をもって、誠実なかれの人格に深く撃たれ敬服したのである。

しかし一方で、わたしは作品の良否についての批評に神経質になっていて、人の批評をすなおに聞くがその裏腹に敏感に一喜一憂している時期だったので、かれの厳しい批評にひどく落胆し、萎靡沈滞のあげく出版を取り止めた方がいいのかと考えはじめた。むかし堀口大学が、『マウイ乙女の歌える』という詩集を出版するときに本の出来が悪く意に満たないとの理由で十数冊をのこしてあとを全部断裁して廃棄処分した話を思い出した。それは作品の不満というより製作の不満で、それと質のちがうわたしの場合の恥辱の度は決定的であるわけである。わたしはこのことを田中清太郎さんに話し、手紙の批評も読んでもらった。先生にはこの戦記に関して終始面におかけし、校正もお世話になっていた。先生はわたしを勇気づける意味が主であらうが、わたしの期待していなかった慰めの文章を書いて下された。それにはわたしの納得するものもあり、わたしの力でそんなに

いいものが書けるわけではないし、これがせいぜいのところであるという諦念に落着かせるものがありいくらか勇氣も湧き発売をつづける覚悟も出来た。先生の了解を得てその文章を参考に記す。

今朝速達を拝見いたしました。午後は卒業生の結婚式があって、先刻帰宅したところです。

常石先生の大変きびしいご批評には、私も少なからずびっくり致しましたし、御作の原稿を予め拝見した私も、ひどく叱られているような感じが致しました。常石さんはご病氣だそうで、ご自分の健康を気になさっておられるので、その関係で少々調子が強くなってしまったとも思われますが、ご自分の小説観・文章観からのみ批判され、それに合わないのは全部いけないうっておられるようですが、文章のスタイルは *Le style, c'est l'homme même* とか

のビュフォンのように千差万別、好みもちがうはずです。私はたとえは志賀直哉のいわゆる簡潔な文体は余り好きではなく、むしろ谷崎潤一郎の粘着性のある長いセンテンスからなる文体の方が好きです。白貝の文体は確かにやわらかい、冗長な感じのスタイルですが、それがいいなというのなら、白貝さんは初めから小説や回顧

録は書けません。文体は人柄に密着しているもので、すぐにかえることはできないからです。それに俳論の方はきびきびしているところありますが、そんなことはありません。俳論の方はかなりベダンテックに（失礼）外国語やむずかしい漢語がたくさん入っているから、一見そう思えるかもしれませんが、文章そのものはやはりどちらかといえ

ば *Kineo* で冗長の方です。白貝さんのおおらかな人柄からくることだと思えます。もう一つ、吊し刑や人肉試食の際の志賀筆生の想いについての批判は、私には納得できません。一等兵、二等兵としての私の経験からいえば、人間の精神はたぶんに身分や状況に支配されるものです。戦争や飢えは人間から、本来のインテレクチュアルな批判精神をどうしても奪うはずのものです。志賀筆生が鋭い、痛烈な批判を余りしないところに、私はかえって戦争体験の迫真性を感じます。常石先生は戦争においてになったのでしょうか。おかしい気が致します。もしおいでになったとしたら、きっと将校としてだったのでしょうか。

歴史的現在の使用法は、時にあって然るべきかもしれませんが、そのためには全体の文体がもっとテンポの早い場合の方が効果的です。体言止めのセンテンスは、近こ

ろの若い人の文章には多いようですが、あれを多用すると文章の品をおとすので、私は必ずしも賛成できません。

その他ダヴっているところなどのご指摘はご尤もで、私もいささか責任を感じて、申訳なかったという気も致します。でも有名な小説家だってくわしくよめばいくらでもおかしなセンテンスは発見できます。あるいは白貝さんの気休めになればと、二、三の実例をかきうつします。

神護寺の山をおりて、谷川を渡り、急な坂を登って行くと、丸太を運ぶ女たちが、坂のなかほどに休んでいた。二十ばかりの娘二人、それに五十過ぎの女四人だったが、少女は見習のように細い材木で、重い丸太を運ぶのは年よりの方だった。

（川端康成・「虹いくたび」点線田中）
娘が、花嫁として、美しく粧われた満足が、このように、大きいものであることを、私は、知らなかった。

（獅子文六・「娘と私」、過多）
花井先生はいつでも、尊敬する菊地井護士の話を聞いていたのだが、彼は、今日は学校は特別に休暇を取って傍聴に来ていたのである。

（大岡昇平「若草物語」はが多い）

こういうまずいところは確かに文学作品としてはない方がよいにきまっているのですが、専門家でもこういうことがあるのですから、「断裁し本の発売を中止しようか」などとおしやる必要は毛頭ないと確信致します。まさか、芥川賞、太宰治賞をとることだけが目あてでおかきになったのではないと思うのです。

私は学生の日本語の作文をみる授業を一つもっていましたが、誤字や語法、文法の明らかなる誤りは訂正しますが、スタイルはなるべく生かすように、認めるような方針にしています。志賀直哉式文章は古いのですし、今の週刊誌的、或いはSF式文章は時として品位がありません。常石さんご指摘の二、三の点についてはもし再版の機会がありましたときに、少々手をお入れになればよろしいかと存じます。ビュフォンの言葉のうちに、ご自分のスタイルは即ち白貝という人物の表われとして、もう少し自信をおもちになりますように、と私は希望致します。と申しましたも常石先生のように詳しくお読み下さる方はなかったにせよ、よから作者としてはありがたく拝承しなければならぬかもしれませんが、でも先生がもしご健康でしたらお手紙の調子もかなりちがったものになったのではないかと私には思え

ます。

……中略「河原」俳句の評……
夜もだいたいふけたので文字が乱雑になり申訳ありません。白貝さんはもうおやすみでしょうね。

五月十六日夜半
前島白貝様
田中清太郎

わたしは清太郎さんの手紙で、打ちしおれた心が大分やわらぎ、くらい影をもちながら戦記はそのまま発売をつづけた。しかしどうして常石さんがあんなに烈しい意地悪くもとれる文章で「大島島戦記」を批判したのであるうかと考えている。勿論清太郎先生の指摘通り、ご病氣のための神経の昂りもあったであろう。また文学の後輩であるとするわたくしに小説集を出すことがさいごの目標であるかのように話していたのに、曲りなりにもわたくしが一冊の戦記を出したことに對するジェラシーみたいな気持があったのではなからうか、と考えることはゆき過ぎであるうか。

しかし常石さんが書いてくれた批評文は、かれの作品の中でもあとに残っていい愛と誠実さと見識を示す力作であらう。わたしがここに記録する理由の一つである。

（60・2・3）

常石三郎への挽歌

弓削 悟

彼の最後の歌集になった「寡黙」の中に、こんな歌があります。

相寄りて葉蔭にふとる青柿の
われらにはなきやさしき寡黙

この青柿こそ彼の生きざまではなかったかと思ひ、贈られた本を手にした時に、早速、読後感のようなものをしたため、私は良い歌だと思ひ、本の題名もこの歌から取ったのだらう、と書いて送ったのですが、今から考えると、多分間に合わなかったのでしょう。いつもすぐ来る返信がなく、何も応答はありませんでした。

それからひと月有余過ぎて、電話でもしてみようかと思ひ、矢先に、熊本に住む私の息子から、彼の死を伝えてきました。呆然としてしまつて、自分の息子にさえ思ふような言葉が見当りませんでした。

しばらくして、何という悲惨な終末であらう、と思ひました。一人息子の文里君には十八年前に人為的な学園内の事故で先立たれ、

そのショックの後遺症とも思えるうつ病の奥さんは、長い間入院を繰り返して、現在も入院中といひます。ということになると、彼はひとり肺ガンと闘ひ、刀折れ矢尽きたのでしょうか。

不図、私は永井荷風の死を思い浮かべました。孤独のシンボルとも云える荷風は、看取る人もなく、陋屋で唯一人、いつ亡くなったともわからぬまま、幽明を異にしていたので、ほんとに考えられないようなことで、人々は同情というより呆れたものでした。

松本清張氏は、その日記の中で「人は荷風を孤高と言わず、変屈なる奇人となし、その変死にもひとしき最後を憫笑す。孤高に至るか。荷風の晩年とその死は、凄絶といわんよりも、むしろ当人にとって爽快ならん。」と書いています。

彼の場合も荷風に似ているようです。何ともやるせない終焉だと、多くの人は同情を禁じ得ないでしょうが、よく考えてみると、ひ

っそりと生きてきた彼としては、誰にも頼らず、誰にも泣き事を云わず、誰にも告げず、ひっそりとこの世から消えたかったのではないのでしょうか。

私が彼と知り合ったのは、昭和二十三年頃だったと思ひます。満州から引揚げて郷里の熊本へ帰り、勤め人になるのも何となく嫌で、本屋を開業していた時でした。

その頃近くで同じ本屋をしていた熊本文壇の雄荒木精之氏と親しくなり、氏の主宰する「日本談義」に小説や社会月評を書いたり、また氏と伊吹六郎・森本忠両氏を中心とした「詩と真実」の同人になったりしていました。最初に出席した同人会の時から、彼と私は云わず語らずの中に、何となく気が合ったのでしょうか。帰途が同方向であったせいもある、十年の知己の様なつき合いが始まりました。

私の店は味噌天神の前の電車通りで、この道を、水前寺の近くに住んでいた彼は、朝晩自転車で国税局の医務室へ通っていたのでした。帰りにはよく店の前で自転車を停めては寄り、一息いれて行ったものですが、その自転車の音が待ち遠しい日もありました。

木造バラックの狭い店内、上り框に腰を掛けて、同じ廂を並べる隣の菓子屋から女房が

したが、その席上の彼。二次会三次会と今度は次々歩く仲間たちと機嫌よくつき合った夜の街の彼。いろいろな想い出が、昨日の事のように脳裏を走りまわります。

「生」と「死」と

故常石君のポートレートがやっと彼の里御船町よりとどきましたのでさっそく御送りしました。

実は、私も此の肖像は、初めて接しましたので、瞬間あつと愕きました。というのも、余りにも故人が生きていたと映しだされていまして、彼は生きていたのだ、死んだのではない。彼と拙宅でまた街角のコーヒー店で語らい、打ち興じた日々はまだ続いている。彼の死は夢だったのだー彼の死を考えたくないのです。

だがまぎれもなく、いま幽明を異にしていること、あの御船の家（この家はコンタリートで彼の独特の設計、彼は台風が嫌いだった！）で葬儀に列したとき、正面に常石君の姿

この家に人絶えたれど白木蓮

生き残り咲きみだるるや惨

彼が歌で示したように、これが人の世の習いかも知れません。

兄よ！安らかに眠れ！

永原 博人

買ってきた塩落花生を齧りながら、ボソボソと話したものでした。ピーナツは彼も私夫婦も大好物で、よく三人で一刻を過ぎました。これが、彼が来た時のキマリみたいなものでした。日曜には文里君を自転車に乗せてやって来たり、私の方から同じひとりと息子、同年の有為を連れて訪ねる事もありました。

思い返してみると、物もありなく、貧しい生活を強いられた時代でしたが、のんびりして、何とはなしに希望に充ちていました。

昭和二十七年になって「ボクらはボくらで同人雑誌を出そうではないか」という相談がまともり、誌名を「浮標」として四月号から月刊で発行することになりました。創刊号には福山嘉直・土方学洋・永原博人など三十三名が参加、表紙も中味も同じ紙を使った、色の黒い判紙のものでした。

しかし、それも最初の二、三号で、印刷所を変えてから紙質も良くなり、同人も八月には五十五名を数えるに到りました。翌年の熊本地方大洪水で、本類の殆んどが阿蘇からの泥水で残骸となり、現在手元に資料らしいものもありませんが、東京の「作家群」の太和漬人や女流の飯島節子さん等が参加したのもこの頃だったと思ひます。

発刊以来、毎月一回「浮標の会」をお城近くの「セルバン」という喫茶店で行っていた

が額ぶちの中に納っていたのですが、その姿、何々大笑しているー彼らしいなあーこれが実感でした。彼は常に「強気」で世を過してきました。彼の運命を彼が知ったとき、「永原先生、わしゃ、医者だけ、ちゃんと分つとる！」と私に洩らしたとき、私は黙して答えてなかったのですが、多分、彼は「死」をも「生」の一部と受け止めていたのではなからうか！と考えました。常石君はまたユーモリストでもあった。遺作となった最後の歌集の中に七夕の竹……の歌があり、これをよむと微笑ましくなります。

私はとにかく彼は私の身近に生きており、その過去が私に語りかけてくるのです。

常石三郎さんを悼む

佐藤庄造

それは大和さんからかかってきたのか、わたしからかけたのか、電話でいろいろ話したときに、たまたま短歌についての話になった。

そして、大和さんは常石さんから最近送られてきたという第二歌集について、こんどの歌集の歌は難解のものが多くあまり感心できなかった。そう書いて、それよりは創作集を早くまとめるように手紙を送ったのだが、常石さんからまだ返事が来ないと言う。わたしも短歌を作っている、それに常石さんの最初の歌集をいただいているので、今度出たその歌集もおねだりしたいなどと話して電話を切った。

それからいくらか経たない日、何通かの郵便物の中に、奥さんからの、夫常石三郎の喪に服しているのて年末年始の礼を欠く、というはがきを見たときはとても驚いた。それで早速大和さんに電話したら、大和さんの方は郵便の配達が遅いとかで、まだ来ていないというので、わたしの話を聞いて非常に驚かれ

た。そしていろいろ常石さんについて話し合った。

わたしが常石さんと知り合ったのは、大和さんたちの「作家群」を通してであった。常石さんの小説をいくつか読んだし、その頃わたし達も同人雑誌を出していたので、双方の作品の合同批評会みたいなものを何回か持ったりしたこともあって、そのときお会いした。大和さんのところにおくられてきた歌集「合歓の花」を見て、わたしも大和さんを通してねだっていたいだたりもした。わたしが出張で熊本市へ行ったとき、すでに帰郷しておられた常石さんにお会いしたいと申し入れて、旅館に来ていただけて、それから「一水」という料亭に案内してもらい、いろいろご馳走になったりえネクタイピンをいただいたりした。そんなことで、その後も詩集や句集をいただいたりしていた。ただわたしが筆不精のためとかくご無沙汰がちに過ぎていて、年賀状の頃になると、お便りしたいと思いがら

またつぎの年を迎えるというようになしまつてあった。

いま常石さんの計を聞いて、もう日ごろの疎遠を詫言することもできなくなったことを後悔したり、あの温和な中に文学に寄せる激しい情熱を潜ませた風貌に再び接することのできなくなったことを痛恨に思ったりしている。それにしても、あれほど深く愛していらっしやうたご子息文里さんのそばに行かれて、いま常石さんはほっとしておられることであらうか。やさしい筆蹟で「佐藤庄造様 常石三郎」と書かれた四冊のご本と、あの折いただいたタイピンを思い出のすがとした。

心からご冥福をおいのりする。

(歌誌「あさかげ」所屬)



常石三郎兄を悼む

小久保勝義

(俳号 水虎洞)

文芸首都の新人欄の作家に「恒井四三」のいることは知っていた。恒井四三は常石三郎の若き日のペンネームである。作品に「少年の思想」と云うのがあることも知っていたが、読んだか、読まなかったか、記憶が定かでない。その後、九州で「詩と真実」の同人として活躍していることも聞いていた。僕の阿保鼎太郎時代の話である。

突然、大和から電話があつて、池袋の滝沢で上京中の常石三郎と会うから、君も来いと云うことであつた。

初対面であつたが、なんの屈託もなく、彼と会うことが出来た。句集「蟹座も光れ」が発刊されて、未だインクの匂う句集をそこで恵贈された。

常石三郎は小柄のロマンスグレーの紳士だった。静かな口調で話された。現在では俳句に興味を持ち、打ち込んでおられた。赤尾兎子の「渦」に所統している由、「渦」に三三郎がいてネ、と常石三郎は語った。三三郎の一

人桑原三郎は隣町の狭山に住んでいて、句会でも会っていたし、彼の句集出版会にも出席していたので、話題には困らなかつた。又、彼は医師で、僕は薬剤師だったから、その辺の話も出た。

「蟹座も光れ」の瀟洒な句集には、あちこちに彼自刻の篆刻がちりばめてあつて、楽しい品格のある句集だった。が令息の死を嘆き悲しむ慟哭の句集でもあつた。昭和五十四年四月十五日の刊だから、会ったのもその頃であらう。

その後、句集「遷生記」を贈られた。その後記によると「渦」を退いて「鷹」に移ったらしい。然もや・かなの多用が目立って来た。

「蟹」の時の覇気が鎮静して行ったのだらう。昭和五十三年より五十六年の作品集。

「遷生記」なぞと遜と云う活字が良くあつたネと大和と話したものだ。

歌集「暮然」は昭和五十五年より昭和五十九年の作品集、これも突然贈られて来た。

彼が短歌を作り、「昭和万葉集」にも戦地での作品が収録されていることを、聞いていたので、別に驚きはしなかつたが、詩、歌、句、小説と多才な仕事を残しての突然の訃だった。

もっと彼と話しをしておくべきだった。

一度しか会ってないのだ。それも珈琲をのんだ短時間だった。一緒に酒をのんで語り合いたかつた。熊本はうまい焼酎が出来ること云うではないか。

身辺いよいよ淋しく一夜語り合う友が欲しい。

午前堂、恒石居、常石三郎兄の御冥福をお祈りして筆を擱く 昭六〇、一、五



息子

常石さんの話は、息子さんの死を抜きにしては語れない。

あの日の午後、私は大和さんからの電話で常石さんの息子さんが、柔道の練習中事故で急死された、と知らされた。たった一人のお子さんだった。

夕方、池袋で待合せて、大和さんと私は清瀬にあった常石さんの家を訪れた。通夜の客はあらかた帰った後で、祭壇の飾られた座敷はひどくがらんとして感じてあった印象が強く残っている。お線香をあげたあと、祭壇の写真を見上げていた私に、

「柴田さん、いい息子でしょうが」

いつの間にか私の後ろに坐っていた常石さんが、写真から目を放さずに言った。黒い眼鏡をかけた柔和な表情の若者の顔が、一瞬ゆがんだように私には思えた。

「あつ」私は小さな声をたてた。

「じつと見てると、時々あいつが泣くんですよ、まだ死にたくないって。無理ないですよねえ」

柴田 富佐子

写真を見つめたままの常石さんの頬に涙が伝わるのを、私は凍てついた心で見ている。部屋の片隅に、壁の方に頭を向けて突伏して動かない奥さんの姿があった。

「家内は昨日からずっとああです」

割烹着姿の手伝いの人が三、四人、台所口に坐ってうつむいていた。部屋に満ちた余りの悲しみは、一片の言葉すらも喉から出さないうまに人々の心を凍らせてしまったようだった。大和さんも私も、ただ頭を下げるだけで常石さんの家を辞した。

電車の座席に腰を下した時、大和さんが大きく溜息をついた。私も同じ想いだった。

私の頭の中には、夫婦二人きりになった後の、あの部屋の光景が焼き付いて離れなかった。妻は昼も夜もなく泣き伏したまま、夫は放心した表情で写真を見続けたまま……朝が来ても夜になっても変わらない二人の姿、ああ淋しいなあ、と私は思った。その淋しさは、肩先から背中一面に寒さを走らせ、私はコートのポケットに手を突込んで肩をすくめた。

た。

もう一人、子供を生もう、その時私は決心した。突然消え去る生命があるなら、突然生まれ出る生命があってもいい、そうだ、今度こそ男の子を生もう。電車を降りて歩きながら、私は大和さんに言った。

「もう一人、子供を生もうと思います」私の言葉は大和さんには唐突すぎたようだった。

「え、何ですか」

立止って大和さんは私を振り返った。

「いえ、何でもありません、じゃ」

私は頭を下げて地下鉄の切符売場の方へ駆け出した。

翌年に、私は念願通り男児を生んだ。息子の生まれ替りのような気がする、と常石さんは手紙をくれた。

それから六年経って、息子が小学校一年の夏休みに、長崎へ行く用事が出来た。その事を常石さんへの手紙の終りに一寸書いたら、是非熊本で降りて坊ちゃんを見せて欲しい、と言われた。それで急遽熊本経由に予定を変更した。大阪からブルトレに乗ったので、熊本へは早朝に着いた。人気のないホームに常石さんは一人で待っていてくれた。駅内の食堂で朝食を済ませ、熊本城へ行った。常石さんはずっと息子の手を引いていた。

「柴田さん、いい坊ちゃんだね」

ベンチに並んで腰を下していた常石さんが息子の頭をなぜながら言った。私は、少し親孝行をしたような気がした。

常石さんの計報を聞いて私はアルバムからその時の写真を出し息子に見せた。息子はもう高校の一年になる。

「この先生、覚えてる」

「熊本のお医者さんだろう」

「亡くなったんだって」

熊本城を背景に二人が並んで写っている写真を見つめていたが、

「拜んでこよう」と写真を手に仏壇のある隣の部屋へ馳けていった。仏教系の幼稚園で三年間通ったせいか、息子は仏壇に線香をあげて拜むのが好きだ。好きというのは当らないかもしれないが、気軽に拜むという行為をする。息子の叩く鐘の音を聞きながら、常石さんも、これやと息子さんに逢えたんだ、と思った。息子さんを亡くしてから常石さんの文学は、総て息子さんに捧げられたものだった。いや、文学だけでなく、常石さんの生活そのものが、息子さんの追悼一色に染まっていたと言ってもいいだろう。だから、別の世界で息子さんに逢い共に生活を始めた常石さんには、もう文学の必要はなくなっているのではないかと、ふと思った。

常石三郎さんを悼む

井上 二三男

常石三郎さんのお名前を知ったのは、戦後、私が赤城山の中腹で病を養っていた当時、恩師である大和さんのご紹介で、九州の常石三郎さんから「詩と真実」をお送りいただいたからでした。

昭和二十五年に、大和さんと常石さんの創作脚本が英語劇名作選集として泰文堂から出版されましたが、その際、私もご好意のお誘いをいただきながら、未熟の故にそれに副い得ませんでした。

その後、折にふれ、大和さんから常石三郎、恒井四三という知友のお名前が私の記憶に刻まれていました。

昭和五十二年、大和さんの短編選集が刊行され、その同人聚記の巻頭に常石さんの「芸芸首都から作家群へ」が寄せられ、その中で前記創作脚本のことも触れておられ、私は、大和さんと常石さんのご交友を美しく、貴重なことと感じ入っていました。

続く大和さんの小説選集の「ひとこと抄」

に、三度、常石三郎さんのお名前がありましたが、「ひとこと抄」の目次には、常石さんのお名前に並んで私の名があり、常石さんのお便りのページに私の大和さんの創作脚本によせた拙文が載せられ、ふとした感慨を覚えたのでした。

それが五十九年七月のこと、その十二月二十日付「まんじだより40」には常石さんの計が伝えられ、私は、言い知れぬ人命のはかなさを思いました。その号の森本忠さんの「ある詩人の死」には、常石さんの純粋な人柄が偲ばれ、ご息子を事故で亡くされて隠棲されたことに私は、父親の悲しみの極限の慟哭を聞く思いに打たれました。

遂にお目にかかるとのことのなかった常石三郎さんは、私にとって、深く思い出に連なるお名前であり、「まんじだより41」のご撮影を拝して、つつしんで、哀悼の意を表する次第です。

お逢いになれましたか

八十島 元

医師——文学——愛息の死——
 帰郷——死

常石三郎という人は、私にとって、なまなましい人間の苦悩というものを如実に見せてくれた部分の人であり、九州に引籠って、午前堂（多分、午前中だけで診療を終える医院、という意味に解している）と称してからの氏は、ひたすら愛息を想い苦提をとぶらう生活にはいったと想像できる。が少くとも私には氏は、曇りガラスの向うの幻影のように遠ざかった、伝説上の人物のような印象がまぬがれなかった。かと思えば、突然、詩集、歌集、句集などがはるかかなたから精力的に贈られて来たり、現在と過去が錯綜して、私の頭の中で、虚と実の昏迷の存在であった。

この感覚は、氏と私が生活のぶつかりあい
 がなかったせいかも知れない。

しかし、そうではないと私は否定してみる。
 氏と私の接触は数える程度しかないが、まさ
 に、それは生活者の匂いを発散していた現実

感の濃いものであった。

私は昭和四十一年頃、東京の西武は清瀬に生活の場を求めて都心から移り住んだが、生活に追われて離れていた文学を再び我が身にと数年退会したままになっていた「作家群」に復帰し、そこで氏と知りあった。しかし、どこのどのような人か暫くわからなかった。ところが、ある日扁桃腺を腫らして近くの診療所を求めたが、そこで意外にも医師姿の氏と遭遇し、聴診器を胸に当てられる立場に私はなったのである。大袈裟に云えば命を救うける名医としてのイメージを植えつけられたのであった。

やがて私は清瀬から東村山に移転し、同人会の集いが重なるにつれ、氏が私とは極く近くに住んでいることがわかり、自動車で往復を常としていた私は、やがて氏を家まで送るのが習わしとなった。

二度目のなまなましい触れあいは、愛息が亡くなられたとの報せに、葬式から数日遅れの

て駆けつけたとき、仏壇に案内された氏は、仔細に死の様子を話されてから、涙をためられて「よい息子でした」と仏壇の中を眺めながら言った。

九州に帰ってから幾度も上京し、同人会であってはいるが、このふたつの触れあいのときの生身の匂いが次第にうすれ、昇華され、氏の身を借りた魂の匂いが私に感じられ始めていた。

贈られてくる詩にも歌にも句にも、虚へ虚へと逃亡してゆくような姿があり、否定し否定してゆく魂が思われ、私の中でその苦悩を見まい識るまいとする心が氏を幻影化してしまったのではないかと思ってみた。贈られてくる本の礼状も、書いては破り筆を執っては捨てた私である。

いま私にも二十二才と二十になった息子がいる。もし私がこれを失ったらと考えると、常石氏の姿は、いや私は、常石氏が好むと好まざるにかかわらず、分身でなくてなんだろう。それも子を失った苦悩を観念的にしか理解できないでいる分身なのだろう。

常石氏、息子さんと逢えましたか
 息子さんとお逢いになれましたか
 お逢いになれましたか

合 掌

常石三郎さんの

優れた篆刻作品群再見

大和 禎 人

常石さんは篆刻に親しまれ、その奥技を極められた。自ら告白されているように師について手ほどきをうけたものではない。しかし、その作品は非凡で、多くの佳品を残されている。まさに印人と呼ぶにふさわしい業を積まれた。

氏の詩形の一つは篆刻であった。忘我の一彫一鑿は氏にとって、そこにあるいは逃れる必要があつて、と言えなくもないが、それだけではこれほど優れた作品は生まれないだろう。単に刀技だけのものではない。彫者の心を写して作品は出来る。生命をふきこまれる。（一発真剣勝負です）との言葉を氏は残しておられる。また、別の場合には（詩の筋肉化作業でもある）とも称えられている。

常石さんは生前でできれば印譜をまとめた

余有爽實爰千罰千



という願いをもっておられた。自家製の「午前堂印譜」を（命あつて他日）と第二句集の後記にそれを書いておられる。氏に待望した小説集の刊行もさることながら、「印譜」の刊行もまたあつてよいと私は考えている。

篆刻

昔の仲間も遠く去り
 逢うすべあらぬあけくれや

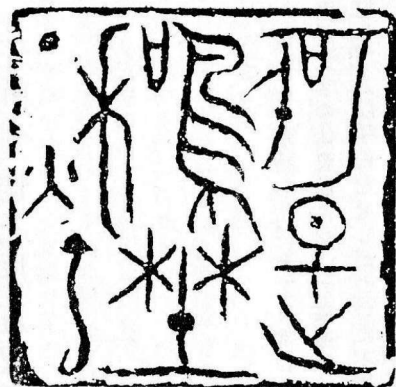
花がちる散る人恋し

老いの一徹篆刻は
 ああやとこさ出来上り

王賜女赤市回黃麗盤敬夙夕用事



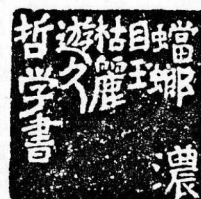
朱泥によらないため、真価を伝えない恐れがあるが、遺作を蒐めさせてもらった。



何是鳴野秋虫(ナゼニ鳴ク野ノ秋ノ虫)(石)



炎帝(石)



(蠅螂の目玉枯れゆく哲学書)



海棠(梅)



葉月(石)



寒昂(石)



(黄泉に讀む羅旬語予修夜二蕎麥湯)(石)



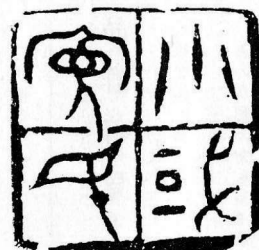
沈魚落雁



唯吾知足



午前堂



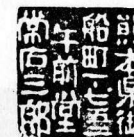
小國寡民



心織筆畊



恒石居



殷周時代の古字で、四神の中に「常石」



午前堂恒石居左文氏還淨図

大和禎人

一月十四日（土）

十時頃、大和氏より電話あり、十二日常石氏の子息文里君が大学の体育館において柔道練習中頭部を強打し、入院手術をせしがついに不帰の人となりし由を知る。十二日は即ち同人会のありし日なり。その朝、大和氏に「なんとなく体がすぐれぬゆえ欠席したし」との電話ありしことも、虫の知らせにやあらんと大和氏の言う。文里君は常石氏にとりたつた一人の子供なり。五十の坂を越した夫婦が二十年手塩にかけて育てし一子を失いしはいかばかりの歎きにやあらん。

弓削氏、大和氏と共に霊前に詣ずることとしたし、池袋に待合わせしが、弓削氏は仕事にて遅れ、大和氏とのみ先に清瀬なる常石氏宅に参ず。空気澄みたれど、それだけに寒さきびしき畑中

の道を行く。常石夫人のやつれし姿胸をうつものあり。思わず涙ぐむ。常石氏の祭壇の上を見上げて、「いい息子でしょう」といいし言葉忘れ難し。父親の悲しみの情この言葉に圧縮されて、返えず言葉なし。なんたるむごき運命なりや。

集いし人去り、祭壇の写真と老夫婦のみ残されし時の、常石氏の心情を想えば、ただ哀れという外はなく、その後の常石氏の去就を秘かに案じたり。

帰途中より夕映えの中に富士の黒き姿凜然と孤立するを見る。

これは仲間の柴田富佐子さんの書かれた文章である。女史がその時の心象をノートに書きとめておられた。ノートは『作家群』会計簿となつてゐるが、そのインクの色とは異なるペン字で（小誌）という文字が書き加えら

れている。いまは貴重な意味をもつノートであり、文章である。（小誌）の文字は気づかれてご本人が後に書き添えられたに相違ない。昭和四十一年九月に書き起こされ、翌四十二年の右に写した記事をやまとしたわずかなページ、余白を多く残したノートである。それは皮肉なことに私たちの拠る同人雑誌の消長をも物語るものなのだが、ここでは常石さんにまつわる記事に注目をおきたい。ただ言い添えておく必要があるとすれば、昭和三十三年のオリンピックの閉会式の日に校了した『作家群』復刊号以後、後続して雑誌は出せないまま、同人の会合は細々と続いており、友情を温めあつていたという事実だけを知っておきたい。

一月十四日の記憶は柴田さんの記事を通して生々しくよみがえってくる。当時の常石さんの住所は、

北多摩郡久留米町前沢町一四七〇

であつた。私たちは知らせを聞いてはじめてその宅を訪れることになった。電話を通し沈痛な声で不幸を告げられてから寒気の中の長い一日であつた。かねて前沢へは同じ西武線でも池袋線の（清瀬）よりも、むしろ新宿線の（花小金井）の方が近いようにも聞いていたのだが、この日私たちは落ち合う都合上池袋線で往き、帰途は常石さんがわかるまで道案内をしてくれ、といつても迷うこともない一本道を（花小金井）へぬけたように覚えてゐる。

喉締めましを

前沢の町はいまは東久留米市に属するようだ。私たちのひろい歩いた道は小金井街道とよぶらしい。柴田さんが（黒き姿凜然と孤立するを見る）と形容される情景はこの道での所見にも一致していた。一望、どこまでも平坦な、武蔵野の風景。常石さんの家庭を破壊する不幸は突如この空の下で起つた。術もない暗然たる思いに沈みながら私たちは歩いてゐた。寒夜のどぼりはやがて下りてきて、愛児を失つた常石さん夫婦の悲傷を夜の底に包むに違いない。足音を立てぬ運命の神はその闇の中をなおさまよいつづけるのであろうか、この荒涼平坦な武蔵の野辺に常石さんはこれからの人生をどう生きられるのであろうか、なにを支えとして生きてゆかれるのであろうか。ふと、胸を過ぎる思いにこんな短歌の記憶がある。

人ならば吾をさいなむ運命にをどりかかりて咽

これは相次いで三子を病死、戦病死に失つた『国民文学』の歌人半田良平の昭和二十年、自らもまた病んで床上詠としてその遺歌集となつた沃野社刊『幸木』に収められる一首だ。『幸木』は昭和二十三年度（芸術院賞）に輝いている。この時期私たちはまだ常石さんが歌作に思いをひそめられていたことを少しも知らないでいたが、歌人半田良平の名はよく承知しておられたことをずっと後になって知ることになる。常石さんはやがて亡児にささげる第一歌集『合歓の花』を上梓されている。

ないなら、私はそれを返えしてもらつて息子の霊前に供えたいと思ひつゝいた。

ここにいう自製豪華本については前後したが、父子のはのぼのとした交情を伝える前文があるのでやはり写しておかねばならない。

この歌集の原稿を綴じる時、ひとりっ子の息子（略）が手伝つてくれ、ついでに表紙もつけたらと提案し、自分で緑色（息子は緑を好み、持物は緑色のものが多かった）で草模様の浮きでた厚紙を探してきて、寸法を合わせて切り、それを表紙として、自ら紅白の紐を以て綴じてくれた。

ここに瀟洒な生原稿による一冊の歌集が体を成した。そこに私が『合歓の花』と歌集の名を墨書した。息子はこの歌集名も気に入つたらしく、後に同名の歌集が既にあることを知つた私が「解氷期」と改名しようとしたとき、息子は『合歓の花』に固執した。

出来あがつたこの自製豪華本？とも云うべき歌集『合歓の花』を、息子は飽かず眺めては己のアイデアにしきりと満足した。そしてもう何度目か、をめぐつて読んだ。

さてこの経緯があつて結末を著者は同じあとがき追記にこう記している。

幸にもそれは原形のまま、まだ前島氏の手元にあつた。私は氏の好意で、その歌集を涙ながらに息子の霊前に捧げた。

その歌集からこのたび別の原稿用紙に写し代えて、それを私は前島氏に渡すことにした。今日やつとその悲しい作業を終えた。

この日はからずも百ヶ日忌に相当し、生原稿そのまの一冊とやがて活版印刷のもう一冊をわが家に加えることになるかと述懐を記し、

今あとがきの追記を認めながら、この活版本の扉にこう書き入れたと思う。

文里よ いま、あらためてこの歌集を
お前の霊前に捧ぐ 父と

そして、年月日とともに、

淳心院釈昭念 百カ日忌にしろす 合掌

とある。氏の思ひは切々として読む人の心をうたずにはおかぬ。引用するに取捨をはばかられる文章である。なお、文中の前島氏は常石さんとは深い交際のあつた出版社主前島幸視氏である。氏はまた俳人でもあつて、なおさら常石さんとはいつそうの親交をもつた人である。常石さんの生前に版行した詩集三冊、歌集二冊、句集二冊のすべて、造本に凝ろうとする故人の意に添ひ贅美の限り、協力を惜しまれなかつた方である。常石さんは上京されると、必ず何泊かを同氏の厚意にあづかつていた

ようである。

さて、文里君の死に至つた事故について大学当局の周章は言うまでもない。管理下の学内に起つた出来事だから、事重大を免れない。教務部長、学部長らが病院にかけつけ、また通夜、葬儀にいたるまでひたすら最善の心くばりと誠意の表明に躍起のありさまであつたが、それはむしろ喪家にとつてこの際はわずらわしさか与えないもので、（そつとしておいて欲しい）と思われた。

（死者はかえらない）

と、常石さんは心にさげびつづけ、あわただしく騒々しい空気の中に、つとめて冷静になろうとしていた。どんな難詰の言葉を吐きつけようと息子はいかえるものではない。大学の当局者に対して常石さんはついに一語の非難の聲も発しなかつた。

加害者にあたる柔道場での練習相手の学生も保護者に伴われて度々失ひ、蒼く悲痛な面持を席にならべていた。通夜も、葬儀もこの人たちにとっては針の筵のようであつたに違ひない。家庭は富裕のようすに見え、この際いかようにも慰藉を尽したいという申出があつた。

「いや、どのようにしていただいても、もう息子とはどつてはきません」

「……………」

相手は真意を計りかね、いつそうおろおろするばかりであつた。

「これが息子の運命だったのでしょう」

そう言いながら、はげしい怒りが燃え上つてきた。それはどこへ向けようもない怒り、目前にかしこまつている青年にどう言おうと、空しくわが胸に暗澹たる絶望感だけをひろげ、痛む傷口をいつそう深くし、とり残された夫婦だけが辛じてそれを分けあい、慰めるしかないもの……（運命）という言葉のもつ非情をあらためてかみしめる無惨、たえがたい無惨であつた。

「いい息子でしょう」

そして、この悲嘆とはうらはらにそうとしか言いようがなかつたのだ。その一言を文学仲間の柴田さんはいうけとめて小誌に書きとめていたのである。

事故のてん末は大外刈という技をかけたことであつたらしい。この技そのものには問題はないが、その技をしかける場合の無理、あるいは受身の未熟、いづれにしても血気の両者が阻止しがたいはずみにもつれ込んだと思われる。大学側はこの経過を説明しながら、それは（未必の故意）に相当しないものという見解をとろうとしていた。くだくだしい説得の姿勢にかえつて腹立たしい思いを覚えた。

「もうよかですたい、なんば言わんといてつかあさい……よかですたい」

九州弁が出て、内心では香美郡土佐山田町宮ノ口出身という土佐人の（いごっそう）魂がむくむくと頭をもち

あげ、相手に少なからず動揺を与えたようだった。しかし、窮極のところ、一見この気難しげに見える父親が（ものわかり）という点ではごく一般の場合とは違うらしいことがわかり、安心したようである。職業が医者であるということで必要以上に気をまわしたフシがある。そうと察してみると、医者だからこそ事を荒だてまいとしているこちらの心象はかえってぐらかされる。どの途、悲しいことだ。救いがたい悲しさである。

この時から一年が経って一周忌に際しては加害の某君はやはり父親に伴われて熊本へやってきた。飛行機の旅でかけつけたということであった。帰途は天草の方へ回遊して帰京するのだと言っていた。

（彼らの誠意はここまでであらう、それにつけても文里は浮かばれないな）

と思った。歳月の重い足音もそこまででふつ切れたように思える。この胸のうちをどう処理したらよいのかと惑った。この経緯は一年先のことなのだが、ここで書いておこう。

傷心の生活を夫妻は事故の後日、あの東久留米の前沢町になお数か月続けている。熊本へ居を移そうという決心はこの間に固められた。息子の文里君を失った今は東京に止まらねばならぬ理由がなかった。清瀬病院の勤務は近郊という環境にあるとはいえ、東京という都会人の

生活とけっして無縁ではなかった。国立病院の医師たちが余分の収入を得るために、私立病院にアルバイトをするという、今日なら許されそうにない慣行があり、常石さんもそれらしい勤務を都内に出してしている。はじめは北区桐ヶ丘の生協診療所に、後には文京区白山の個人病院その他に時間を限って（上京）していた。国立病院の医師が嘱託として週に何回か来院するということがそれらの病院の信用になり、看板にも公然とうたわれるといったあんばいのものだ。常石さんは言わばそうし余祿の時間を活用して私たちとの交流を行っていた。同人会が池袋の（タカセ）に行われたり、駿河台の柴田さんの宅を拠りどころにして集ったり、私との個人のつきあいでは池袋新栄堂書店地下の喫茶部が繁く足だまりとして使われたものである。

といったわけで常石さんの東京での生活は五年余の間におよそ都会の空気にもなじみながら、一面では氏の性情は（雑踏の文化）になんともやりきれぬ愛憎ずかしを覚えていたという側面もあったものようだ。私たちの『作家群』に発表された「東京の屑」という作品ではそれを戯画化し、鋭い諷刺をもつて描かれている。

いま子息を失い、何ら東京生活を固守しなければならぬ理由はなくなった。東京の屑としてなお伍することの根拠が雲散し、霧消した以上なんの未練もない、むしろ踏み止まっていることが心の傷をいつまでも癒し得な

い原因にもなりそうである。文里君の生育した熊本こそ

は住みなれた安住の地、それは常石さん自身にとつて第二の故郷というより、それ以上のさまざまな思いに満ち、忘じがたい青春の夢をはぐくんできたところなのだ。

医者になろうとして医学校の門をくぐったのもそこであつたし、それ以前に刻苦勉励して教員資格を検定でとつて奉職した勤務も同じ県内だった。医者の勉強はそれから志を立てての晩学と言える。学業半ばの召集をうけたから、復員後に復学してようやくその業を了えたものだ。

住いは水前寺にあつて、豊肥線をまたぐと大江町には弓削悟氏が住んでおり、『日本談義』の荒木精之氏も同じ町内にいた。前記した永原氏は神水町である。復員してから常石さんはほとぼしるような勢いをもって創作活動をはじめている。まさに堰を切るおもむきを呈する。『文芸首都』の昭和二十一年五月号にいち早く「昼餉の薯」という作品で同誌へは二度目の入選を果し、前記の荒木精之や伊吹六郎、永松定、福山嘉直、吉良至誠、森本忠といったメンバーの拠る『詩と真実』に「駅の子」「死生」「ひゆまにす」と「病歴」「祭文」「霜夜の物語」「冒瀆」などの小説をいくつかの詩編とともに矢継ぎに発表するのだ。

一方『日本談義』にも「異質の世界」「胃痛の話」「弟子」などの小説を書くといった精力ぶりであった。なお永松定、伊吹六郎らと福山嘉直の主宰する『風貌』にも

同人として名を連ねていた。

そうこうするうち、弓削さんと語りあい自分たちの雑誌をもちたいということになり、『浮標』の創刊をみる。昭和二十七年四月のことだ。当時、大江町に書店を営んでいた弓削さんの主唱で結社が成り立った。福山嘉直、土方学洋、それに常石さんの恒井四三が主流である。永原博人さんも加わっていた。地方都市にいくつもの同人雑誌が輩出し、それらが月刊であつたことは驚くに値する。また同人のメンバーもいく重にもまたがる参加をみていることに一驚する。それほどこの時期が戦後の土壌の渇きを慰すに急をみた傾向はなにも同人雑誌だけのものではなく、商業誌の方でも同様であつたことに注目をする必要がある。『日通文学』の田代儀三郎が唱導して（全国同人雑誌連盟）がやがて結成されるが、その調べるころによれば結社総数七九一という記録がある。いまに残る連盟発行の「銘鑑」は貴重な戦後文学史の資料である。

さて、常石さんの恒井四三はあくまで恒井四三であつて、その筆名の由来する（おれは常石ぞ）というほこりをもった活動期を疑いもなく迎えていた。前記『浮標』には「帰郷」「手記愛国者」「癌を病む男」「珠」「刺のある感覚」などの作品を書き、詩編では後に一冊にまとめられて処女詩集となる *Osteologia* のシリーズを意欲的に発表している。私もまたこの『浮標』に第三号

から仲間に加えてもらっていることを明かにしておきたい。『作家群』からは他に飯島節子さんが参加している。これとは逆に常石さんの方も弓削さんとともに私たちの『作家群』への加盟を実現して、昭和二十九年十月発行の第八号から同人に名を連ねている。やはり恒井四三のペンネームである。しかしこの方への作品発表は氏が清瀬へ居を移し、私たちと至近の関係をもつようになってからになった。前記した「東京の屑」、そして東京オリピックの年に出た復刊号の「眼」などがあることを書きとめておこう。

そうした常石さんとは氏が上京定住する以前、たった一度しか会っていない。すでに十年の知己のような交友からいえば信じがたいことだが事実である。そして、その初対面は昭和二十六年十二月八日の土曜日のことである。いまこの日を記念する一葉のスナップがある。YMC Aの屋上のものだ。常石さんは若く、私もまたそれなりに若い。どうやら私は客気に満ちているが、氏はそれにひきかえて村夫子然たる面持ながら、はるかに大人の風格がある。写真はなぜかうら若い青年男女が一緒であるが、それはこの日そのYMC Aに私の書いた英語劇の舞台稽古が行われたからであつた。常石さんの上京を迎える日がこの日に重なって、氏もまたそのことと無関係ではなく、ともに稽古を見せてもらったという経緯であつた。

常石さんと私は昭和二十五年六月、つまり右の初対面の前年、ともに創作劇を書き、それが翻訳されて一冊の本にまとめられていた。(中学から大学までの英語劇)というキャッチフレーズのついた『英語劇名作選集』という本である。語学出版の老舗泰文堂が当時この種のブームにのせた発行だった。原作を尊重して日本文を独立した扱いで組む約束があつて執筆に応じたものであつた。常石さんを誘つたのは私だった。氏はこの場合実名常石三郎として「誰のために」「野口英世」の二編を書いている。出版社は上演用リーフまで発売したものだが、常石さんの「野口英世」は好評で全国各地から原作者に上演の知らせがあつたと聞いている。ちなみに、前記の舞台稽古は私の作品「小猿のリンカーン」を上演するためのもので、若者たちはそのキャストの人々だった。後年になって常石さんはこの折、出版社からもらった印税は大いに助かったと文章に書いている。この本は好評で再版を重ねている。

もうひとつだけこの時期の常石さんの文獻を書いておかねばならない。それは『財政』という大蔵財務協会を発行元とする雑誌が創刊二十周年記念懸賞募集を行ったのに応じて氏の作品が入選しているという一事である。昭和三十一年七月号(同誌第二十一巻第七号、通巻第二三八号)に当選作が発表されている。当時熊本国税局診療所医師の職にあつてこの応募の機会をもつたものだ。

一般には知られない誌名に思われるが、堂々たる総合雑誌である。作品は「都井岬」、約三十枚ほどの短編であつた。

選者の石坂洋次郎氏評は次のようである。

第一席「都井岬」 恒井四三

作品としては、これが水準をぬいていた。

文章も格調が正しいものだし、主題も高い

ものを狙っている。……(略)

もって常石さんの瞑すべき快事であつたに相違ない。作品はまさに氏の全作中、佳品の一つに数えられて然るべき出来であつた。この場合応募作は四八編、常石さんの作品を第一席としたが、他に佳作二編を採るに止まっている。常石さんの獲得した賞金は貳万円であつた。常石さんの年来の習練から言えば入選は当然すぎるものであつたと言えなくもない。

応召して五年の軍隊生活のブランクをはさんで、いやむしろその期間をふくめる多感の時代のすべて、それは深くかわつて熊本の天地にある。

いまはすっかり遠い昔のことになったが、昭和二十八年の六月には大きな水害を経験している。文里君はまだ就学前の満齢で六歳足らずという幼なさで遭遇している。抱きしめる父親の常石さんの腕の中で恐怖に戦き、小さきみに体を震わせていたわが子の感触はふしぎにいまも生々しい。二十六日から二十七日にかけの集中豪雨に白

川があふれ、全市の八割、罹災者一九五、五〇五人、死者二〇六、行方不明一二五、流失三四一戸、全半壊六、三四九戸、浸水家屋四八、九七四戸という未曾有の大水害である。大江町味噌天神の弓削さん、当時西水前寺町一二四に居を構えていた常石さん、ともに浸水と泥土とのたたかひを経験し、多く貴重な蔵書を失っている。同年八月号の『日本談義』は地元誌として特集を組み「熊本大水害号」を出している。増ページの特価百貳拾円、いまは貴重な資料である。復興の礎石を念じた主宰の荒木精之氏が心意気の編集後記を書いている。

その災害の記憶もはや遠く、小さいものが恐怖を詐らない戦きに示し、それを肌に伝えたわが子はすでに亡い。故郷忘じがたしとする思いはそうした惨たる出来事である水害の記憶すら懐しく、はげしく胸の切ない想いにつながる。ひたすら望郷の念をかりたてるばかりだ。もう一度帰りたい息子への挽歌を捧げることにはしたい。

そうこうするうちに、半年がまたたくうちに経っている。

私はその半年ほどを、(その後の常石氏の去就を秘かに案じたり)と「小誌」に記した柴田富佐さんと全く同じ気持ちで常石さんに接している。清瀬から都心へ出てくる常石さんの勤めは続いていた。清瀬の奥へ帰って行く途中に池袋がある。だからそこをおのずから会合の地

点にしていたのだ。すでに書いたあの(タカセ)や新栄堂書店地下の喫茶部、また武蔵野種苗園の街角などが会合の指定場所によく使われた。二人とも口数の多くない性質だが、うまの合う同志ではよく話をした。(腹ふくるわざ)を吐露しあうことで明日の勇気を与えられるのであった。ようやく人生に倦む年齢だった。いつても、常石さんの本当の年齢は知っていたわけではない。それはずっと後年になって「昭和万葉集」の作者略歴欄ではじめて知ることになり、(明45)とひそかに知ったのだ。私よりは三つほど年長だった。

それと、限ったことではないが、ある日常石さんに聞かれたことがある。

「あなたは朝、あれが立つかね」

「うむ、小便がたまるからね」

「いや、それでいいんだ」

さり気ない会話だったが、相手が医者だからと私の方は聞き流したような気がする。常石さんがなぜそういうことを聞いたものか、深く考えなかった。

「やはり、熊本へ帰ろうと思う、息子の骨はやはりあれの生れ故郷の土に返えしてやりたい」

とうとう常石さんは意中に格闘させ続けてきたものの決論をそんな風に口にした。

「やはりね、ぼくにとつては一番恐いと思ったことが仕方がないね」

を失うは『作家群』の一大危機なり。暗澹たるものあり。

と柴田さんの「小誌」は記録を残している。この日までの間に三月例会が二十八日(火)、池袋(タカセ)三階に「常石氏を慰める会」を、また六月十五日(木)に通常の例会を。都合二度ひらいていることを記録により知ることができる。

深大寺の柏亭を設定したのは三鷹に住む山本儀一さんの紹介によるものであった。山菜料理の食卓を囲んでという趣向であった。私たちの会合は酒ぬきであったが、この日は微ぐんを帯びた一葉の記念写真を残している。弓削さんのカメラでシャッターは松野さんだったように思う。熊本らしいの友人である弓削さんは常石さんとは前後した東京移住で、とりわけ惜別の念が強く、一人とに残される哀しみを強く胸に抱いていたはずである。松野さんはそれを承知していてシャッターを引受けたようだ。彼だけがこの写真の中にいない。同じ松野さんの車で三鷹まで便乗して皆が送ってもらっていることはすっかり忘れていた。山本さんだけが愛用の七ハンにうちまがたり、颯然としてほぼ同じ道先を駆け、やがてその姿を見失った。常石さんはこの山本さんの七ハンに便乗させてもらったことがあり、後に文章にそのことを書き残している。

七月二日(日)夕刻、常石さんを東京駅頭に見送った。

「わかってもらいたいな、……」

「わかるとも、わかるけれども残念だな」

「うむ、それは私だって同じことさ、ああいうことさえなければね、人の運命なんてわからない」

「そう、わからないな、こういうかたちで別れがくるとはね」

つとめて微笑をうかべながら、常石さんは静かにそう話し、私も私で同じようにつとめて冷静にこれを聞こうとしていた。若いカッパルなどの多い(タカセ)の二階、談話室というコーナーだった。

六月二十五日(日)

常石三郎氏送別会 深大寺 柏亭にて

出席者 常石 大和 山本 弓削

松野 柴田 all member

常石氏数日来的歯痛のため気分重き様子、ここ半年間の心労が重なり、めっきり痩せた氏の姿痛ましく、慰労の言葉も空しくして同人一同も氣勢上らず。七月二日に帰熊の由。会費一〇〇〇円と五〇〇円を記念品代として集める。氏の希望により刻み煙草のケースと決まり、大和氏が七月二日までに買い調えることになった。帰り際に雨。松野氏の車で三鷹まで送ってもらい帰途につく。ここに常石氏という「書き手」

当時はブルートレーンなどと呼ばなかったが、たしか特急寝台の「みずほ」で発つたように思う。私たちの仲間は弓削さんと二人だけだった。他に病院関係の何人かがホームの夫妻を囲んでいた。松世夫人の姿を見るのはこれが二度目である。これからはこの方が夫である常石さんを、常石さんもまたこの夫人を頼みにする生活を迎えるはずに思われる。

「これはソ連産だそうで、白い花をつける夾竹桃は珍しいからもつていけとくれた人があつてね、あちらから持ち帰ったものらしい」

携えている植木の包紙を常石さんが示した。

「きょうの記念に一枝もらおうか、うまくいけばぼくの庭でも花をつけることになる」

活着を危ぶんだが、夾竹桃は強い木であった。この日の友情の証しに毎年いまでも無事に花をつける。

冠省 本年も余すところ僅かとなって参りました。皆様お元気にお越しの事と存じます。私も本年一月ただ一人の息子(大学一年)を突如不慮の事故にて喪ないましたために、傷心癒やし難く、亡児の眠る当地に転任いたしました。七月一日付を以て国立熊本病院に転勤、熊本市の義母宅に身を寄せていましたが、このたび左記墓所の近くに小屋を建て、亡き子の菩提を弔い

つつ余生を送ることにいたしました。

この地は亡き息子が小学時代までに、ゆかりの深い水の美しい古い町で、熊本市からバス三十分の処でございます。今後は妻と二人の淋しい日々をできるだけ豊かに生きてゆきたいものと念願しております。東京を離れて以来市井の一隅にひっそりと過ごして参りましたために、失礼いたしておりました。転居を機に以上きさつを述べて御挨拶に代えます。

尚明年年頭のご祝詞は遠慮させていただきます。

昭和四十二年十二月一日

熊本県上益城郡御船町一七五二一

常石三郎

この挨拶のはがきは熊本中央局十二月九日の消印で発信されている。文面にうかがえることは諸方に音信をそれまでは絶つて沈黙を守っていたということだ。

私たちのところへは十月に一度だけ消息があり、詩編を二編送ってきている。後に詩集『れくいえむ・迷宮紀行』として第二詩集を子息の七回忌に相当する昭和四十八年刊行するにあたって収録される作品である。それは「ブル」―「蒸気機関車」の二編で、詩集では鎮魂歌として亡児に捧げるものであった。だが、その頃はもう私たちのグループに雑誌を出すだけの意欲に欠けるものが

あって、いまも（生原稿）のまま私の手もとにある。さて、ここで常石さんからの手紙を写しておきたい。それは文里君の一周忌前後のものだ。

本日はお手紙懐しく拝承。今日は倅の命日にて、いつもより早めに退庁、途中納骨堂（これ墓なり）に詣り、倅の白き骨の入りし小さき壺に対面 合掌

それより工事現場に回り、コンクリート壁の枠組みなどを打眺め帰宅。二階に設けし仏壇に灯を点じ香をたく。

倅の持物の梱包中よりレコード類を取り出し五、六枚次々にかけて仏に聴かしめ、われもそれを聴く。曰く「悲しきカンガルー」「禁じられた遊び」「パットブーン」「ポールアンカ集」「北風」「若者たち」等々。この中かつてわが耳にせし曲も二、三あり。俄に胸ふさがりぼうだとして涙頬を伝ふ。妻の来らざる間にとて急ぎ顔を拭き、そして次にこの曲を最後にかく、「骨まで愛して」

この歌、倅大学のコンパにて盛に愛唱せし曲なりという。この歌詞の奇妙さがかつて倅と語りしこともありしが、倅はいつの間にかこれを受唱歌となせしや。知るよしもなし。今はもの云わぬ白き骨なれば――。

レコードを片付け、仏壇に一礼して階下に降り、炬燵に入りて所在なし。夕餉の仕度をする妻の後姿にうつろなる視線を泳がせて為すこともなし。ただ涙せき上るのみ。やむなく素知らぬ風を装ひ庭に出でて、ソ連渡りと伝ふる夾竹桃の前にしばし佇立し、心平静に復するを待つ。やがて日暮れなむとして風俄かに寒し。

（これが二月十二日、私の一日と云へます）

そして大兄の御手紙を二度読んだのです。また落涙しそうでした。友を離り、都を去つて、ここに住む。不思議なる運命と人は云うであらうけれど、私はそうとばかり思い切れない、ものがあります。

こちらでは一夕共に飲みたいと思う友人もありませんし、帰りにお茶に誘おうと思う知り人もありません。いや知友は多いのですが、なぜか会つて話をする気にはなれません。

長く離れていたふるさとがよそよそしいように、他人めいてなじめないものがあります。それ故に敢て孤高のそしりを甘受して自ら閉じ、自らかたくなに外に出ようとはしません。生業のための人との応待には何の気も使いません。生業と思う故に。生業とかかわりなき人々と会うのは気がすすみません。（略）

大兄が馬上杯を嘗めるが如く私も亦10CCのウイスキーを口にふくんで東京での生活を反芻します。妻と二人で静かな命日の夜が、こうして時を刻んでゆくのです。

熊本日日新聞に書評が載りました。筆者は名は知つていますが会つたことはありません。病院に電話をくれました。（あなたの本の書評を書きたいので一度お会いしたい）と、しかし、私は顔の見えない電話で要点を述べて会うことは断りました。しかし、評は（同封）のりしました。

その後も続々返事が来ます。大抵（いや全部）の方が倅の冥福を祈つて下さいます。あの後記に他意はなかったのですが、あの後記こそ人々の心情を刺しているようです。余りにあの歌集の著者が不幸であるが故に――。（略）

日付は文中にもある二月十二日のものである。正命日は一月だから、氏はあれから月ごとになんか精進供養を続けて、涙を新たに生活をおくっている。工事現場云々のことは前年十一月頃着工して鉄筋コンクリート平屋建23・5坪の建築中という事情、ソ連産の夾竹桃のことは私が駅頭別離の挿話として書いたそれである。歌評のことは同封されていて、いまは赤茶けた切抜によると、内田守人氏と知ることができる。

歌集『合歓の花』は前年十二月に出来て、常石さんは一月には上京していた。歌集の発送を行うことを主として数日を滞在している。私の架蔵する一冊には署名とともに、

昭和四十三年一月十六日

と記され、歌集名として採った（わが死すは此処ぞ）というあの一首が扉に書かれている。あわたたしい予定の中を時間を割いてこの日に会ったものと思われる。

『合歓の花』に寄せられた反響についてはさきに写した手紙に先立ってはがきを受取っていて、上京の折の礼とともにそのいくつかを伝えられている。

——本日は土岐善麿氏より「滅亡した短歌の中から出て来た短歌ならざる短歌であろうと思いましたが」とありました。また塚本邦雄氏からは亡児と同様緑色が好きで服装持物に至るまでグリーンであり、最新の第五歌集『緑色研究』を態々亡き息子宛に贈って下さいました。人の情の深さ、また奇しき暗合、ゆかり等について深く考えさせられました。昨日は柴田さんからも読後感をお知らせいただき、小生の小説よりも歌の方が良いとの御言葉でした。なんとも有難いことです。当地でも歌集出版を機に私を慰める会、私を囲む会等々を『詩と真実』グループや歌壇関係の方々が企画されましたが、すべて

として近況如件と心なしか文字も躍るようで、写真の外に細々と説明をつけた見取図が主文の方にも描かれている。「午前堂医院」という構想がはじめて登場した記念すべき通信でもあった。邸という文字にテレがあつて註記しているところがいかにも常石さんらしい。

国立病院には六月三十日退職の願を出し、開業医の準備をすすめ、保険診療の許可も近くおりるという。午前堂の謂は午前中を診療にあて、午後は休診して三昧の自由時間にあてようというもの、在京中すでにそんな理想をもらして、

「それは良い、いい院名じゃない」

「いいでしょう、そうなら宮仕えはしないでもいい、なに暮しはなんとかね」

そんな会話が あつた。氏の親近する関係に林富士馬さんがあるが、この方は親代々の院名（精義堂医院）を襲つておられる。ヒントはそのへんにもあつたかも知れない。いづれにしても宮仕え、それも官途の勤めを潔よしとしなかった常石さんの独立は慶賀すべきことだ。

別棟1・5坪はもう少し広くすればよかった。ここに隠れてローソクを灯して読書瞑想と息をぬくところ、小さかったのが残念。と見取図に説明されている营造物はこれぞ常石さんの方丈であろう。建築費の外に医療機関だから、設備投資がある。それらを含めて少からぬ借金になったが、診療をしつつ返済のメドを立てているとい

お断りいたしました。まだまだ当地のジャーナリズムに登場したくない心境ですし、少しく猶介と云われようとも、孤高を保ち、ひっそりと生きてゆくつもりであります。私には東京に『作家群』という強い心の絆があることを支えとしていきます。（略）

塚本邦雄さんは右のような経緯があつて、やがて七回忌を期に刊行される第二詩集に「哀歌伴奏」として友情にもとづく序をおくられる。それにしても常石さん自身の心に屈折するさまざまな思いと、自らを閉じようとする傾きにある心境はまことに気がかりであつた。いまは遠く距離をおいているだけになおさらであつた。

昭和42年12月1日着工

昭和43年5月23日竣工

総工費560万円

建坪23・5坪

付属建物1・5坪

鉄筋コンクリート造

敷地123坪（設計書 届書にこう

午前堂医院 常石三郎邸 書かれている）

これは送られてきたスナップの裏書きに読める文字である。北面、南面の二枚が手紙に同封されていた。（男が生涯をかける）という城が成った、その喜びを伝え、抱負に満ちた内容の手紙だった。七月十五日夜つねいし、

う。これは余分のことだが医者は結構なものだと思わないではない。

ところで、同じ便の一節に次のような部分がある。

：：建築の基礎材の残りの石を一寸ばかりコ手調べに彫つて、それらを玄関横の花壇に積みあげ、空間造形を試み、訪問者のドギモを抜いています。石彫に習熟したら、全精魂を傾けて息子の像を本格的に彫ります。そいつを庭の芝生のどまん中にでんと据えてやるつもりです。こんなことでもしないと、喪児の苦痛から逃れられないのです。哀れなる哉。

明るい内容と思われた手紙にやはりこうした心象を伝える部分があつた。石彫のノミをふるう常石さんの孤影が一種鬼気迫る様子で私の頭の中に像を結んだのである。その石彫が完成したという話はしかし聞いていない。

熊本市城内二の丸

国立熊本病院

常石三郎

と差出人を記した一通の封書がある。やはりこの頃のものだ。十一月十日夜と日付は記されている。封筒がなぜ比較的新しい状態に保存されている。もちろん、ある宛名書きがあるのだが、それはしばらく伏せておきたい。

御手紙を拝見してびっくりいたしました。私の息子が死んだ時、今更悦楽などということになしに授かるものならもう一人ぐらい子供が欲しいと仰云いましたことを私は強く記憶しています。その後お伺いした時、どうもその望みは叶へられそうもないと仰云いましたね。私は実はそんな時、あなたのような若い方なら、或いは私もこれからでも子供をもうけることも不可能ではないのに、あなたのような若い方を通じて私の子孫を残したいという無意識の願望が心奥に萌しました。何故なら私の妻は十数年前第二子を妊娠中ひどいつわり（妊娠中毒症）の爲止むなく堕胎いたし、その序に卵管結紮（くる手術、不妊手術）も施しているからです。従つて不謹慎で放埒な私は妻以外の愛する女性を通じて自分の種を保存をはかり度いという強い冀求を覚えたものです。これは特に息子を亡くしたあと私の子孫の断絶ということを直感したときに反射的にひらめいた感覚でした。その感覚（思い、願ひ）は特にあなたの家を訪問しあなたと正対してお話している瞬間に燃え上りました。しかし、老獪？な私はそんなケブリはいささかも表に示しませんでしたけれど、未だ若くそして自由に妊娠が可能であるに違いない

あなたを見たときに、そしてあなたの才能や知能を考えたときに、極めて強く私を衝動したことです。小説を書き、人間の悪魔的な一面をも敢てエグリ出さねばならぬ文学する人間の、これは正直な告白としてお聞き下さい。ただ私がそういう不逞な企図を胸に蔵しつつも、それを行動にまでもつてゆく勇氣がなかったというだけです。私にも勇気があったら、どんな奸策を弄しても、また如何なる暴力を使つても、目的を達したかもわかりません。しかもそれは種の保存の爲の至上命令に應える形のもので、同時にこれに伴う悦楽をも若干は考慮に入れた上での……。

冒頭から叙述に大変オカシなものになつてご免なさい。さて流産の件について、今夜当直のため図書室で調べましたが、簡単に要約すると次のようなことです。

①流産は妊娠婦人の20—30%（報告者によつては60—70%）は妊卵の異常が原因であるから云はば流産すべく運命づけられた妊娠であつたということ。

②流産が徐々に進行（延滞流産）した場合は娩出された胎児は浸軟していて血状胎を呈する。つまり体外に出るまでに、子宮内で死亡して

いて、かなりの時間が経過しているということ。死亡した胎児は母体にとつて異物であるから生体としてはそれを排出する自然の作用が起るけれども、それが弱いと長い時間滞留する。その間に浸軟されて、吸収されたり変化したりして、前記の血状鬼胎と称する死胎児が娩出されます。

③流産（普通は胎児が死亡するとすぐに起る）の原因としては④妊卵（受精した卵、即ち胎児）の異常（例へば遺伝的な胎児の奇形、生存能力の弱い胎児など。そしてそれは母体年齢が増加すると共に頻度は増大し35歳以上では特に高率となる。45歳以上では35歳以下の三倍もの奇形児分娩を見る）⑤内分泌障害（黄体ホルモン不足等）⑥子宮形態の異常（狭小、裂傷等）⑦子宮内膜の異常（内膜炎、出血等）⑧胎盤の異常⑨精神的因子（夫婦間のトラブル、姑との家庭内の精神的圧迫、夫又は本人が妊娠を嫌う場合等々）⑩その他（血液型不適合、梅毒、腎炎、外的刺戟—乗物、性交、ダンス、階段等、ビタミン欠乏、高熱性疾患）などがあります。特に最後の高熱疾患として、肺炎、インフルエンザ、腎盂炎、扁桃腺炎、ビールス疾患などで高熱を出したりすると、

胎児死亡の大きな原因になるようです。ですから、外的原因で流産するのは割に少なくて、多くは妊卵の異常その他が組み合わさつて起る。

大体そんなところです。けつして御心配には及ばないと存じます。仰云る通りなら、十一月一日に娩出されるまでに、ちょいちょい性器出血が以前にあつた筈です。それがなかなか出にくかつたために変色したり、変形したりするのだと云えますから、あなたの場合はおそらくそうでありましょう。

御不快を恐れずに申しあげると、流産がむしろ幸であつたかも知れません。何故ならあなたは妊婦としてはもう高年と申してよく、奇形児分娩の可能性がかなりあると云わねばならぬからです。現在お元気なお嬢さんの口蓋破裂？も一種の奇形ですし、そういう既成の事実をふまえて、前記の高年受胎という点などを考え合わせますと、このたびの生を得ずして終られた胎児も生きてゆけない運命（敢て云えば奇形？）を持つていられたのではないでしようか。私が医者であり、あなたを熟知し、お親しい間柄故に、こんな不都合極まりないことを敢て申しました。お気を悪くなさつたらどうぞご勘弁

下さい。

今日は当直なので街の美しいネオンがこの高台の病院から眺められます。当地もすっかり肌寒く、朝夕お城の道は紅葉が散り敷いています。御主人様御転勤なら、熊本にお出にならないかなアーなどと空想します。もしそうならあなたと二人で雑誌を出しましょう。たとえガリ版でも。御病氣後？故、御自愛のほど切に祈ります。では右まで

十一月十日夜

つねいし

—————様

お手紙の封はノリが剥けて届きました。

ノリジケ嚴重に！

この手紙の署名は（つねいし）とある引用では二つ目のものだ。あえて言えば親愛の表白ともうけとれる。そしてこの場合は豊大閣が（お禰）まいると認め送った書簡の（大かう）、（おちやちや）にあてた（てんか）と通じるものがあるように思える。大閣書簡はいまに自筆のものが六十八通残り、その私生活を知る上で貴重とされ、とくにその無縫ぶりがほえましい。ここに長く引用をした（つねいし）書簡も同様の感がある。熱っぽくこれを書いたその人は医師であり、文学の徒であるところに興趣を深く覚える。—————様としてあて名を伏せ

だということであった。

「そういうものかね」

「もう、必要はないし、だいいち安全なのが良い」

この話は多分、文里君を喪う以前のものであったろう。

「まづくし、はつはる、こけのほぎごと」と題する戯詩如何。大抵の人がこの歌舞伎まがいの難解の詩に面くらったようすでした。小生あの戯詩のとおりで、散文的な日々を過していることと文字通りです。町医者というのはまことクダラン職業ということをもつて体験。本年は廃めるべきか、続けるべきか、それが問題です。患者がふえ繁盛することがオソロしい日常。ぬけ出して自由を得たいのが本音。税込月収25万位のために、自分の自由になる時間がもてないなんて実にクダラン。月収は5万でよろしい。小生だけの自由時間が欲しい。有限の余生を日々食いつぶしてゆくという、月収の多少は問題外。離京二年有半、酔生夢死。戯れて賀状の詩となる諒察あれ。

これは四十五年一月の便だ。そしてこの末尾に一月二十四日（土）に旧清瀬病院が近代化建築の落成にともない、新たに東京病院としての発足をひかえての解散会があり、常石さんも旧職員として都合をはかり上京しよう

た部分はやはりそのままにしよう。そこに書かれている女人の名は私の覚えのないものだ。この手紙の封筒がなぜか比較的新しい状態に保存されたものであることを書いたが、このあて名の人が（つねいし）書簡をいかに大切なものとして胸に温めていたかを察することができる。この女人はまた私たちと志を同じくする人であることは明かである。手紙の末尾に至ってそれがわかる。（二人だけの雑誌を……）というわずか一行は読むものに妬ましささえ覚えさせる。しばらくはその名を伏せておきたい、と書いたが覚えのない名前である以上このままそつとしておいた方が良さそうである。入手の経路も従って一切これもまた秘事としてこの小説の謎として封じこめることにしよう。

秘事といえば常石さんと私は前記の場合を例外としてかなり深い話をしている。何気ない問いのかたちで私に朝の生理を問いかけられたことをすでに記したが、右の手紙の経緯とは反する内容のものがあつて、いまとなれば真偽いずれかはなはだ迷う仕儀のものが一つだけある。それはパイプカットにかかわることなのだ。それを氏自身が施術をうけているという告白をたしかに私は聞いていたのである。

「家内が体が弱いからね、それにあの手術は男の方が手軽なんだ」

そして、その後の性欲についても、何ら支障はないの

かということ伝えている。そしてやがて二度目の上京を果している。

東京はたしかに生き生きとしています。地方都市のそのまた周辺の田舎町にちつ居に等しい生活者の私にとって、東京はやはり何かを与え何かを促してくれるようです。

何を？、それは求めようとして未だ得られぬ私の文学への契機なのかも知れません。私が立上り飛躍出来るとするなら、その発条が東京にかくれているかにも思われます。（略）

清セのサヨナラパーティーの一週間後、やはり同じ土曜に清セ病院火災のテレビニュース（フジ）を見てオドロきました。全院に波及せず、二つの二階建病棟を焼いたそうです。（略）

創立四十四年何の事故もなく、新館移転を一月後にひかえてのこの火災は消ゆべき運命の病院とは云へ、不思議な因縁みたいなものを覚えすにはいられません。パーティーが一週間遅れて開かれていたら、その悲しい焼跡を悲しい思いで見つめなければならなかったでしょう。

私は旧状の清瀬病院を一回だけ訪れたことがあり、常石さんが与えられていた研究室ものぞいている。旧軍隊の兵舎を思わせるような粗末な建物であった。東京病院への統合で間もなくそれらのすべてが夢の跡と化したよ

うである。

(略) 九月二十四日朝、突如起った発作で三日間休診いたし、それより大事をとりかつ戦々兢兢としていましたところ、何となく無事にいきそうだと思いはじめた本月二十日夜外出より帰宅直後に再度起りました。幸、事無きを得てかくペンを走らせている次第ですが、何と申してもこと(心臓)ですと、これは生命に直結しているだけに、その不安、苦悶、怖ろしさは言語に絶します。今は座右に酸素ボンベを常置し、救急薬を身辺において警戒これつとめているところ。ショックだったのは先月二十四日の発作の数日後? ナセル大統領がやはり心臓発作でアッと世界を驚倒させて急逝したという事実であります。天? はナセルへすらも慈悲を与えず召したれば、況や小生如き、いつ何時いかなる所でも召し得るわけです。怖い哉、怖い哉。

この発作が閉院への決意を不動のものとした。(略)

十一月一日からは心臓の養生を主にしつつ、週2-3回の楽なパート勤務でやっていこうということになりました。そういう生活が軌道に乗ったからその時から、私はここ三年有余の沈黙

を破り、セキを切った怒濤のように、書きまくる? つもりです。(略)

十月二十五日零時
閉院後も「午前堂」の屋(称)号は残ります。ハハ。

ここに常石さんにとって貴重な晩年が、右の宣言の通りスタートを見ることになる。ほぼ二十年、それは思えば子息文里君の葬い合戦にも似るものであった。第一義の道である文学に、そして医学研究を深めることに、：

次のような音信を年を越えて四十六年七月手にする。

読書一辺倒にて、この方は哲学と異常心理学とが主でありまして、文学関係はまだありません。(略) 専門の精神科のために、哲学、心理学が必要なので、難解を以て世界的に有名なハイドッガーの「存在と時間」をもう三度めを読んでいます。やつとオボロゲに自分なりに理解できそうです。この外は実存哲学で、これは精神療法に実存分析とかがありそのために必要であります。これらは九州では余りどこの大学でもやっていないし、日本全国をみても、京大に一人、医科歯科に一人、南山大学に一人、上智大に一人位しか論客がいませんし、ましてその理論を実際の場に応用しているのは数える位

しかないのです。それはこの理論が難解であるというのが主な理由のようです。こんなものにとりつかれたために肝心の文学も執筆がオロソカになるといったところ(略)

昨日の新聞で保高德蔵氏の死去を知り、感慨を催しました。昭和十年代のなかば頃の、あの熱狂的な創作時代を、老人が少年時代を回想するようなたのしきで追想したことでした。文芸首都については大兄にも多くの思いがあることと考えます。われわれもたしかに年老いたということを否応なく痛感せざるを得ない気持ちです。

白い夾竹桃が丈余、花をつけました。もちろん第一花を亡児の霊前に捧げました。この白い夾竹桃を賜はった老国手の吉田という方も昨春逝去され、私どもにこの花をのこされたわけです。

現在、月火水の三日連続で友人の精神病院に副院長ということで勤め、金曜の午後は大学の精神科へ研究?に通っています。あとは全くの自由で、読書が主で他にこれといったことはしていません。そんなわけで体の調子は良いようです。不用となった診察室の方を臨時の書斎(クローラーあり)にして、過しています。(略)

常石さんが開業医をやめてからの暮しぶりが良くうかがえる。そして氏が医家としても決して凡庸でないことも知ることができる。右の便りに見える病院は健軍町の上妻病院で、副院長、医学博士の肩書のある名刺が残っている。

この年、私は妻とともに九州周遊の旅をしている。熊本へは島原から船便で三角へ渡る経路をとった。常石さんは永原さんとともに迎えてくれ、お決まりの城と水前寺成趣園を共に観光してホテルに入った。八月一日の烈日が燃える中を、つかの間の再会であった。

「このへんは文里を連れてよく散歩したものだ」成趣園へ足を運びながら、両側の土産物店の軒を仰ぎふと常石さんが涙ぐんだ様子に見えた。強い印象を私に残している。私たち夫婦は翌日朝、(山なみハイウェイ定観Cコース)という便で阿蘇へ向っている。ホテルの階下がバスターミナルになっていて、市内在住の永原博士がひとりわざわざ見送ってくれた。この永原氏には阿蘇不知火というペンネームを使った昔があった。当時は県立の熊本工業高等学校の教師だった。常石さんと私の二人にとって共通の友人である関係についてはすでに書いた通りである。

同じ八月末に主として『詩と真実』に拠った活動をしてきた大重春二氏が亡くなっている。その全詩集を編むことに常石さんは友人として大変尽力するということが

あった。新聞、雑誌、どんな小詩の一編でもこれをもれなく集めるとなると大変な労作である。四十年にわたる活動をあとづけ、また年譜をまとめるとなればよい困難を伴うことは想像に難くない。氏はその編集をほとんど一人の手で果した。

こういう故人の作品集を編むことはむづかしいことですね。故人の書齋に入って茫然自失といったありさまです。そんなわけで、かなり精力的に動いていますが、そのため本月初、珍しく博多まで小旅行をし原田種夫氏（九州文学）に会いにゆき、故人の遺言による序文執筆を依頼したりしました。

十二月に入ってからこの便りにこんな一節を発見する。こんな経過があつて大重春二氏の全詩集『阿蘇変幻』は翌四十七年六月になって日本談義社から刊行される。そんな経緯から序文は前記原田氏、跋文は荒木精之氏、年譜の編とあとがきを常石さんが担当している。菊判三四八頁の大部である。常石さんからの要請があり、また熊本文壇の友情に感激して私もまた一本を書架に加えている。詩人大重春二の名は私もまた知らないわけではなかった。没年五十九歳とその年譜に見える。奇しくも常石さんとは生年が同じであることにあらためて気づいている。

四十七年に入ると、二月に茅ヶ崎に在住の氏の従弟に

さきに、昭和二十八年の災害に触れることがあつたが、再びの災厄を熊本市は蒙っている。幸、いまは御船に住む自身には被害はなかったものの、往年の旧居の方に舎弟が住んでおられ、わずか十分余の鉄砲水の増水の難に遭遇されたことを伝えて、

町の大半は床上、床下の浸水、交通杜絶の惨状。

二十年前亡兄宅に私の全蔵書を預けていて流失

してしまった同じその家……

と書いている。この年は台風の被害が山陰地方にかけて多く、水害列島と列島改造論を皮肉るように名を冠せられたものである。

さらに、そうした惨害を報じた便りのあとの方に注目をひく数行がある。それを写しておきたい。

去る七月八日は精神科の学界があり、

火野葦平の病跡序論（火野葦平の自殺について）なる演題で発表、演説をしました。異色の発表とて会場の睡魔を追払う役目を果たしたようです。これは他日文章にまとめ、学術雑誌に発表予定です。

とあるのがそれだ。火野氏の自殺は昭和三十五年一月二十四日のことだ。「革命前後」という自己処罰の作品を書き了えた直後のこと。死因の一部はその文学的生涯そのものにあつたとされているが、常石さんはそれを精神科医の立場から、興味を覚えどう解釈をしたものか。

あたる方の危篤の知らせがあり、急遽見舞のため上京するということがあつた。さらに思い立って奥さんを連れて高知へ墓参、帰来すると、こんどはさきの茅ヶ崎の方が亡くなられ再東上という慌しさであつた。

何とも二年分の門外不出を償うかのような半月に及ぶしかも強行スケジュールによる旅行、いささかグロッキー気味であります。

という一節がその頃の便りに見える。こうした事情の上京の中一度だけは会う機会があつた。

特に戦前の自然主義文学の影響濃厚の詩などは流石に今日では貴重にさへ考えられます。荒木氏とも話したことです。詩人として世に知られた人の生涯の全作品が百数十編しかないということに感を新たにしました。或は余りに少なすぎると思えるし、或はその作品の成立から考へてかなりの量産だとも思へるし、何れにしても一個の詩人の全生涯の全歴史が百数十編の詩に一貫して息づいていることを感じました。

大重春二氏の詩稿を整理し、校正をもうけた常石さんはついには詩編を暗記するに至ったと述懐して、いよいよ『阿蘇変幻』の出来上った喜びをこのように伝えている。

ところで、同じ便は七月五日朝の大水害を報じている。

これには続報があつて、三十枚の原稿にまとめられ翌四十八年二月号の学術誌に発表されたようである。精神病理学サイドから分析を試みる内容のものであつたらしい。門外の私たちは詳かにはその内容までは知っていない。

離京以来五年有半、この間の泪の滴のあとを二十四編に整理し、一冊の詩稿を編み了えたのが十一月。それを再三再四推敲を加え、装幀を終ったのが年末。本年一月亡兄七回忌当日を期して「あとがき」を認め終わりました。いま序文を依頼しております。快諾されて送ってもらえたら、それを添えて国文社の方へ回すばかりであります。詩集は、

『れくいえむ・迷宮紀行』と題しています。内容を 成年無惨の章12編 老来無残の章12編の二部に分けています。

もともと文学は無償の行為と観じ、己の足跡を何かまとまった形で残しておこう、という執念のささやかなあらわれとも云えましょう。たとえ自分の子どもがあつても、無関心であれば書棚で埃をかむるにすぎないでしょうが、友人知人に贈っておけば、その中の誰かは、いつかはひもといて目を通してくれ、彼の琴線に触れることもあろうかといふことにささやかな希求があるからこそ、と思われまふ。（略）

さて、氏はこの本の本文のすべて特に緑色インクをもつて印刷をさせるといふ凝り方で仕上げさせている。私は未だかつてかかる本に出会ったことがない。外面は黒に白インクをもつてする題字、表紙も同じ黒、そしてこちらには題字の部分を朱地で浮き立たせるもの。何とも美事な意匠の造本である。

扉にこういふ言葉を読み取れる。

緑は汝のが愛好し汝の身辺を圍繞せし色、黒は
私の青春開眼赤は身血開帳の色なり、今茲に緑
を以て刷り、黒と赤とを以て装ひ、汝の七回の
年忌に際し上梓せんとす。これ畢竟は老牛犢の
骸を甜ぶるの挙措と云ふべき乎。

少しく一般には難解に思われる恐れもあるが、これは達意の美文であろう。読むものの心肝に徹し、涙を催さずにはおかぬ。子息の文里君を思う至情がほとばしるようである。

すでに触れているように、序文を請うた塚本邦雄氏が快よく序をおくってくれた。「哀歌伴奏」と題するものだ。

それを読み、私も妻も感動して落涙した。われら老父母のこの涙、泉下の息子も嘉してくれるであらう。

と、あとがきに感激の文字が見える。同序から次のような一節を写しておこう。

心臓の鼓動が汽車のリズムに同調し
呼吸は窓から秋の陽を満喫する

息子よ お前の心臓が停った時から

父の心臓も変調していたのに

今日 久しぶりの小さな旅に出てみると

これまで空っぽだった私の胸の中に

何かが いっぱい充ちてくるようだ

これは 息子よ

私が失っていた私の実存なのだろうか？

息子よ 父の乗った汽車は

かつてお前が十三歳の感傷で通過した

九州中部地帯を

お前の軌跡をなぞりながら

北へ北へと疾走している

成年無惨の章のうちの詩編だ。ここにいう十三歳の感傷とは子息文里君が東京の学校に入学するために、一家が挙げて移住するための旅を指しているものに相違ない。そして小さな旅は大重春二氏の詩集の序を請うため、博多に原田種夫氏を訪ねた時のものかも知れない。常石さんはその仕事を近來になく生甲斐としていた。（北へ北へと疾走している）としている結句はなにかを仮託しているようにもうけとれる。

永遠に二十歳の子息は、緑濃い中有に漂ひつ
つ見つめてゐることだらう。生死の別はさもあり
らばあれ、かくまで愛する者をもち得たことは、
著者にとつて至福ではなかったらうか。私は今
むしろこの詞を以て、殉愛の士の鎮魂を禱るよ
りすべがない。迷宮とは、思ふに父なるものの
聖なる安住の場所であり、男のつひの栖に他な
らなかつた。

ここで、一編だけ『れくいえむ・迷宮紀行』から常石さんの詩を写しておこう。

お前のための小さな旅

息子よ お前を埋葬するために

お前と生きた東京を離れて九州に住んだ
すすまぬ気持をふりたてて

父は久しぶりに旅に出た

街をぬけて汽車は急ぐ

その窓枠の一こま一こまがうつし出す

稲の刈られるたんば

小川に水を呑む犬

赤や青のシャツを着た中年の農夫たち

ようやく 息子よ

父の迷走神経が安らぎをおぼえはじめた

珍らしく、一葉の写真がこんどの便りには同封されて
いた。自宅の庭前にある石の上に腰をおろす氏だが、何
とこれは鼻下に髭を貯える姿だ。

昨年来、ヒゲを貯へました。私のヒゲは、亡
き息子及び私が尊敬する亡き、キューバの革命
家 チェ・ゲバラのヒゲを模したものです。こ
の人、アルゼンチンの出身で医者。カストロと
共にキューバの革命を遂行、のちカストロと別
れ、ボリビヤに武装ゲリラとして侵入し、ボリ
ビヤ軍に捕まって殺された。最も偉大な革命家
です—— もちろん、御承知のことと存じます
が——

大兄には和服姿を送ります。傍にキンモクセ
イが花をつけ、そのうしろによく見ると、夾竹
桃の葉が見えます。これ即ち白い夾竹桃なん
です。

セーターにバックスキン茶色の若者たちが好
む靴を履いて正面向いた写真もあります。これ
は自ら称して曰く「予言者サブ」或は「幻の全
共闘指導者」と。

ここに言うサブは氏が三郎をもじったもの。左文とも
記すことがあった。やがて氏の凝りはじめる篆刻にしば
しばこの（左文）の号を用いるようになる。
ヒゲを貯える常石さんはゲバラというより、むしろ二

天宮本武蔵という面ざしに見える。熊本にこの武蔵は甦ることがあっても不思議ではない。武蔵は細川家にゆかりがあった。市の北郊立田自然公園の好ましい環境にある細川氏歴代の墓域の背後には、(宮本武蔵の供養塔)という標柱のもとに一基の五輪塔がある。ここまでは足を踏み入れることもないのが普通と思われるが、後年わざわざ常石さんに導かれて、そこに立った。記念の写真は氏を傍にしたものになった。まさに武蔵は洋服を着て再来したかと思える出来である。オールバックのやや長めの総髪、これに二刀を構えるポーズをとれば見覚えの武蔵晩年の画像とそっくりではないかと思った。ここは忠興室秀林院のガラシャ夫人も眠る泰勝寺の寺域である。ゲバラを敬し、これに似るヒゲを貯えるに至った常石さんは私は勝手に二天宮本武蔵にしてしまったが、他意は全くない。小説を書き、詩を作り、歌作をし、これからは篆刻の技を磨き、ついには短詩形を追いつづけて十七字の世界に没入する。これはまさに達人の業と思えば擬して(二天宮本武蔵)を想像することは決して付会ではない。

さて、常石さんが前記したように左文を号して篆刻に親しんだことは、あまり他から称揚をうけることもあるまいと思われるが、これを書き漏らしてはならない。

ついでに、篆刻のことを記すと、「篆刻」という言葉すら知らなかった昭和十八、九年頃、

が持てなくなってきた。盲蛇に怖じずだった自分をばげしく愧じた。

とは云え、私は所謂篆刻の「師匠」又は先生について習おうとは思わない。私は古璽、金石文を知り、秦漢の印を師として、これらを摹刻し、基礎の力をつけた上で、もし私なりの詩心が石に刻みこまれる日があるとしたら、或は死ぬ日までそういう作品は生れなかったとしても私は自足するであろう。

常石さんの篆刻作品は私の知る限りにおいて第五集を数えるに至ったというところまでは消息を伝えられている。氏のことからその印譜は自家製で装いもまた凝ったものであろうと思う。いつの日か請うてその作品を印譜にして鑑賞したいものと、筆墨を商う店に需めて用意をしながら、ついにその機会を逸してしまった。

「奥付の印・印人常石三郎」、「篆刻通信」などと題してその香り高い芸術を愛し、すでに何度も文章を私は別のところで書いてきた。ここに引用したものは氏自身第二詩集『蜉蝣呻吟』の(後記)の文字だが、私は私で自分の文章からも若干を引いておきたいと思う。

洪柿であるところから、伐採したわが家の黒柿が印材として好適なものであることを知って、私は閑にあかせてそれを乾燥し、彼に贈ろうと鋸ひきに汗を流し、素材の域を出ない輪切りに

満州の部隊で功績室勤務をしていた上等兵の時、不用になったゴム印の台木に、ガリ版用の鉄筆を研いだ刀で、姓名や号めいたものを彫った時期がある。生死を測れぬ戦局のただ中で、満州とは云え、よくも暢気なことを、と今では思う。(もつとも他の兵や下士官らは囲碁に興じていたのだが)しかし生死が予測できぬデスペレートな環境故に、本務から離れたかかる遊びにも熱中できたのかもしれない。

敗戦以来、私の云う得意の時代を含む激動の二十有余年間、私は篆刻とは無縁の世界にいた。先年陣中日記等を整理している時、遺髪、遺爪の包と共に、前記のゴム印の台木に彫った印数個を発見した。その中の一個を蔵書印代りに使用してみたが不満なので、そこで「篆刻」の知識を仕入れ、中国展で石の印材を買っては、姓名印、遊印、と手当り次第に刻んだ。

石を刻むことで私の苦渋が石ににじみ、拡散してゆくのがわかる。一日一顆刻す、一日一編の詩を作る気持で。しかし、一昨年頃より、篆字、もつと広げて漢字そのものの素養の不足を身にしみて覚えはじめたため、私は甲骨文、金石文から入って篆字の勉強をはじめた。篆字に対するこれまでの無知から、不安が先立って刀

することにふしぎな情念を燃やしたのもすでに昨年のことである。

ここにいる昨年は四十九年のことであって、篆刻に没頭し、「篆刻通信」というべき音信を受取ることが多くなっていた事情が思い出される。和紙に作品を捺印し、毛筆で消息が添えらるというもの。私は作品の非凡に驚き賞賛を書き送ることが度重っていた。「篆刻通信」と呼ぶ所以はこのへんにある。そして、たまたま庭木を伐採することがあり、ふと気づいて黒柿の材料を提供するという経緯があったものだ。

昨日は貴重な印材をわざわざご恵送下さいまして、本当に有難うございました。十分乾燥しているのが何よりです。拇指程のものから印材として成形、磨きあげ(一部皮を残して)ました。試みに刀を入れましたが、梅に比すれば若干材質が柔らかいようです。木の印材はやはり白文(陰刻)で刻した方が刀勢がよく現われるようです。名前や雅号は朱文でというのが一般的なのですが、今後はこの常識を破って白文にて刻してみてもいいです。(略)

私は全然道具がありません。わずかに手斧一丁と普通の鋸、従ってカンナをかけることもできません。といつていちいち建具屋あたりへ持っていくって削ってもらうのも口惜しいので、手

斧で円空が身辺の木片を削ったように無器用に削って大体の形を作り、それを紙ヤスリでコスります。ヤスリは粗、中、密と三種ほどそろえ、大体ナメラカになったら、仕上げに最も目の細かいもので丹念に磨くとツヤが出てきます。あの木がこんなに、と思うほど生れ変わった美しい木肌をみせて、そこに印材がある、ということになります。(略)

印稿を創作する過程と、実際に刀で刻する過程との、この二つのプロセスの間におのずとデフォルメされてゆきますので、予期以上におもしろい作品となったり、意に満たぬものになったりします。一発真剣勝負的です。

そして、氏はその篆刻の醍醐味と印刀を揮う心境を今度の詩集ではこんな詩に表現している。

篆刻

昔の仲間も遠く去り
逢うすべあらぬあけくれや

花がちる散る人恋し

老の一徹篆刻は

ああやつとこさ出来上り

やはりここににじむものは氏の孤愁と見るべきであらう

詩集『蜉蝣呻吟』は限定式百部、朱泥に篆刻の映える二色刷の豪華本である。序として「石に刻む」を林富士馬氏、跋は上田三四二氏が書いている。林氏は第一詩集にも序を書いておられるが、こんどの序では次のような一節がある。

篆刻というような世界に不案内な私も、それは私は常石さんの新しい詩と受け取るのである。そして、私は、常石さんの新しい表現の道をよろこび、たのしみ、また私の詩心の励みとするのである。その作品をねだったりした。

さすがと思われる。常石さんも快心事とされたに違いない。林さんは不案内の道とされながら、魅かれて作品をねだったとあることも、むべなるかなと思われる。

さて、常石さんは自らの後記では末尾にこういう文字を書き記した。

九州・肥後・午前堂・恒石居

常石三郎

そして、鮮明に(午前堂)(恒石居)という二つの篆刻作品が朱泥色で刷り込まれている。ところでこの(午前堂)の方の作品はふしぎな扇形状の印面だが、これは象牙を素材としたもの、ある象牙師から提供をうけ、長く温存していたものを氏に贈呈したのであった。常石さんは喜んでくれ、彫るにあたってさらに素材を二分し、一は(午前堂)と刻し、他を(桃李庵)と私の屋号を彫

うか。氏はそのすぐれた篆刻作品をこの詩集に七点ばかりをチリパメている。氏の篆刻における印稿に先立って、選文の好ましいことにも注目をおきたい。

曰く、(小国寡民)、(沈魚落雁)、(心織筆耕)、またこの詩集ではないが、(十羊九牧)、(聖者無名)(似木鶏矣)など。その雅趣とともにこれらを原典から探る氏の素養のほどは舌をまくばかりなのだ。そしてまたこれらは氏の奥深い思想をあらわすものと思われる。

さて、多く余事を挿しはさんだが、もう少し詩集の後記から引用して常石さんの心事に近づいておきたい。

敢て記すなら、約二十年間の内科医から、精神科医に転向しなければならなかったというのも、要は私自身の精神病理をも含めて、心を病む人々への共感をこめての、やむにやまれぬ衝動の結果ではなかったか。現在の私はそう思っている。人間の実存について考え、アルピニストが岩壁に挑むような感慨で、実存哲学、とりわけハイデッガーの存在論に取組み、少し大げさに云えば、現存在分析論を以て私なりに精神病理にかかわろうとする生きざまが、私に曲なりにも詩作を続けさせ、憂然と石に刀を揮う篆刻をやらせ、私に死を先取りすることをやめさせているのだ。とも、己を客観化して分析することが今はできる。

ることで謝意を表されたのである。このことはいかにも常石さんらしい配慮である。こうして全く同形、同一の素材で印文を異にし、友情を分かちあう結果が生れたのである。

さらに、この詩集の奥付の印がまた素晴らしい。この方は殷周時代の古文字で常石、それを四神の中におくもので、造本の気品を高めている。

私の所蔵する一冊は限定版ナンバーの挿し紙に、これを受贈した年月を記し、五一、七、三一とある。奥付の発行日は八月だが、先立って東上した氏を迎え、この時は池袋東武のスカイラウンジの中華料理店に仲間が集った記憶になっている。

昭和五十二年五月、私は博多、長崎、そして熊本へ回遊の旅に恵まれた。博多でのある会合への出席が主な目的であったが、これと期をあわせて私は最初の短編集が出来上って、二十冊ほどを携えた旅行だった。ギリギリの仕上りで東京駅のホームで本を出版社の使から受取るという一幕もあった。選集ということで作品の選をあらかじめ常石さんに依頼して、その意見に従った編集であった。誰よりも真先に喜んでもらいたかった。

熊本入りは五月十七日になった。水前寺に宿を二泊とついていた。この旅行で市内の武家屋敷を訪れたり、泰勝寺を尋ねている。常石さんの二天宮本武蔵をスナップし

たのはこの時のことだ。二日目は永原博人さんの案内で漱石ゆかりの「峠の茶屋」、「草枕」の発祥地小天温泉に「漱石館」を訪れている。当時の宿は営業を廃めていて、漱石が雨にうたれてたどりつき、案内されたという二階三号室だけが辛じて保存されている。

常石さんと永原さんの歓待があつて楽しい旅だったが、私のひそかに期待していた御船町の訪問は実現しなかった。常石さんがつとに水明を伝え、書斎の窓外に眺めらるという桜坂の風情など、常石さんの作品を生む環境をこの眼で確かめたいという願ひであつたが、それはかなえられなかった。午前堂恒石居のたたずまいをついに知ることを得ずに終った。いまとなれば送られてきた二枚のあの落成直後写真だけが残ったことになる。

この熊本での二日間を氏は御船町から通いつづけて、私への厚い友情を示され、永原さんと共々にくれとない歓迎の気持を尽された。しかし、永原氏の宅に行くことはあつたが、ついに常石さんは御船を避けられた。その理由が何故かを知るのはずと後年のことになる。いや、後年というより死後と言つた方が正しいのかも知れない。常石さんはその苦渋をついに胸に秘めて逝かれたのである。

熊本からは特急寝台「みずほ」で帰京した。ホームに入る前に氏とは別離の杯を交わした。永原さんは勤務があつて朝、宿を出て市街電車の停留所で別れを告げてい

た。「みずほ」が関門を通過する時間は夕景になる。ホームの売店で常石さんは清酒のワンカップをもとめ、それを窓から差入れてくれた。(美少年)という土地の銘柄だつた。

前年の五十一年頃から氏は句作をはじめていて、次のような作品があることにあらためて気づいた。

鬱に居る君さんとさくら雨

第一句集『蟹座も光れ』に収められる一二〇句の中の一句である。

そして、それは氏の最後の刊本になった第二歌集「寡黙」二〇〇首中の末尾の一首となつた、

さみだるる闇に祈らむ鬱病める汝の奈落に
神もしあらば

とあい照応する句であり、歌である。夫人の松世さんは子息を喪われてから鬱々として楽しまれる日とてなかつたという事情を私は氏の死後はじめて知り得たのであつた。

『蟹座も光れ』という第一句集は昭和五十四年四月の刊行である。この題名は生れ月が蟹座である子息文里君のはやくも十三回忌にあたり上梓されている。十七字の世界になじむことの薄い私には氏の句作はひどく難解であり、また難解の文字に出会つて閉口した。ここに引用した(さんさんとさくら雨)の場合もさんさんは偏がシでつくりは林に月という漢字が原句では使われている。

ポケット版の漢和辞典ではとうてい索引の不可能の用字が多い。常石さんの孤高、あるいは狷介とも思われる姿勢がいよいよ強いという印象をうけた。そうした中にも平易を選び三句ほど写しておこう。

病む君に偽薬モルヒネ立葵

一夜来て去にけむ亡き子姫螢

梅は未だ莊子白文読みなずみ

偽薬を投与する医師の背徳を、そしてやはり子息の幻影を、また近頃の読書傾向を、短詩を志向してたどりついた十七字の世界に昇華させている。

この句集の上梓を機に氏はやはり上京している。池袋の「滝沢」で、私は小久保水虎洞君をとくに誘つていて三人で会つた。水虎洞君は俳句で一家を自他ともに許す私とは竹馬の關係の友人だつた。『文芸首都』を通して三人は同時代の投稿で互にその名を知っていた。しかし、常石さんと水虎洞君が会うのはこれがはじめてだつた。

「来てくれない人には本はあげない」

会談を終つて外に出たところで、氏は私の耳にささやかれた。実は他に仲間を誰彼誘つてあつたのだが、断わりもないままとうとう来なかつた仲間に対して腹を立てていたのだ。遠来の自分に対する不実がやりきれないのだつた。常石さんにふと老年の気短かを私はその時感じたことを忘れていない。

私の常石さんに相見える機会はこれが最後のものになつた。駒沢の方に喫茶店経営をしているという青年があつて、甥にあたると聞いていたが、あらかじめ時間がきめてあつて自動車で迎えられ、氏は去つていつた。

「体調に自信がもてなくてね、嫌いな飛行機で明日発とうと思つている」

すでにかなり無理な上京であつたようだ。

句集『蟹座も光れ』には新たな篆刻作品が七点、本文にチリバメられている。印材は石が多い。しかも大作で技いよいよ円熟を示すものになっている。氏の到達した一つの頂点を覚えさせる。

第二句集『遜世記』は二年後の九月の刊である。期待した篆刻作品は飾られていなかった。作者の氣力に欠けるものがなければ良いがと案じられないでもない。題名は「周易上経・乾文言」から採つたと後記に明かにしている。あいかわらずの凝りようである。五十三年から四年間の句集である。好みに従ひ三句ほどやはり写しておこう。

顎出して蛇棒と化す大暑かな

泰山木葉の一枚に朱の挽歌

曼珠沙華一朝蜂起一部落

私は長い詩作のあと句に入つたので、や・かな・けり、などの切れ字に関心を持つ。や・かな、を古いとして避ける句作者もいると聞くが、

私から見れば「俳句」を作る以上、それは論外
としか言へない。更に言へば、これらの所謂切
れ字、それに季語を、十七字形式の中で如何に
生かして使ふかは、作句の一つの要諦とさへ思
っている。

と、句作上の所信を氏はこの句集の後記に述べている。
第一句集の時は『渦』に属していたが、その後『鷹』に
移って今度の句集を編んでいる。『渦』を主宰する赤尾
兜子氏とは第一句集を刊行する際に若干の経緯があつて
袂を分けた事情を聞いている。句界というところが常石
さんのような反骨をもつてすれば住みよい世界ではなかつたことを、他から見ても容易に想像できるような気がする。

常石さんとの音信は互にこの頃からめっきり少なくな
っている。氏は体調を次第に崩されていったようであり
はがきによる短信に変わつていった。五十七年、彼はそ
の胸部にペースメーカーというものを埋め込み、絶対安
静を命じられ、病床にあえぐことがあつたらしいのだが、
一言もそれを伝えてはいない。

土用三郎大いに耐えて笑ふかな

この作句の時と場合は違うがそんな心境であつたよう
だ。私たちが向つては決して弱音を聞かせていない。
私が第八冊目の『うえん・むえん』を刊行したのは八
月であつた。氏はすでに医師として死を先見する病状に

あつたと思われるのだが、何気ない筆致で温かい感想を
与えてくれている。

これに先立つ消息としては、二月に、
旧ろうより家内が入院中、四月心臓大手術予定
のため、目下、いや尚しばらくは大変困難な時
間です。

とあり、越えて、六月になると、

当方韻律の魔に魅入られ、目下印刷進行中、あ
と一か月もあれば上様の予定です。家内の入院
中もあり、上京叶はず、いささか残念であり
ます。

と、書いている。後から気づくことだが、すでにある
予知をもつて歌集の完結を待たれたものと思われる。私
の『うえん・むえん』に与えられた便りが最後のものにな
つた。さりげなく、まことにさりげなく、氏は断腸の
思いでこれを書かれたのではないかと思う。

第二歌集の『寡黙』を私は秋彼岸の日に受掌した。発
送を国文社にまかせたもので、前の句集の時と同じだつ
たことが私に不安を与え、この歌集の感想を折返し送
るとともに、氏の小説集を一日も早く、と希望を申し送
つたことだ。その返事はついになかつた。私たちが最近
またはじめている雑誌の第十三号は同じ時期の発行だつ
たが、いつも送られてきた寸評すらついに寄せることが
なかつた。

ペースメーカーよりの刺激に生かざる

る生も実存と呼ぶやサルトル

凍てし田に一羽のみ居る白き鷺雪降り

くれば消えなむ孤独

天界に散華の掟ありといへどな散りそ

泰山木終の一華は

ここに歌集から三首ほどを写した。ペースメーカーの
病床詠があり、白鷺に託す孤独が詠まれ、また散華の掟
と詠んだものはこの歌集の末尾から二首目である。そし
て、すでに引用した遺される松世夫人の上を思う一首に
しめくられる。もう一度掲げておきたい。

さみだるる闇に祈らむ鬱病める汝の奈

落に神もし在らば

やはり、この歌集中の秀歌であらう。何と深い悲傷で
あらう。何たる無惨であらう。

十七年前記録の意味で、歌集「合歓の花」を刊
行しているが、私にとっては、今回のこの集こ
そ、所謂処女歌集の感が強いが、同時に最終歌
集でもあり、墓標代りでもあると思つてゐる。

と、常石さんは後記に記している。句作との二筋道、
しかし、歌作への復帰は五年前、それ以後の歌作ゆえに
自らは処女歌集の感と言つたものであらう。なお、この
後記中に、常石さんの発言として次の一節がある。

しかし真の韻文定型詩はやはり減じるだらう、

と言ふ人もある。私もそう思ふ。

自ら（韻律の魔）に魅入られてしまひとしながら、冷
徹に短詩の未来を予言している。発行の期こそ遅れたが、
この年、文里君の十七回忌に相当したことに気づかねば
ならない。しかし、氏はそのことをもはやこの後記では
片言も記していない。

やがて冬ゆきて息子の骨抱かん

いき絶え絶え雲も切れ切れ窓の秋

（十月二十八日）

詩人は死にはたじろがないが、痛みには勝てない。

主人をあの世へ送つた人の目はやさしい。

（十月二十九日）

常石三郎氏は昭和五十九年十一月三日卒然として逝い
た。右に記すものはその辞世の句と伝えられるものであ
る。年末喪のご挨拶を松世夫人のお名前前でいただき、私
たちはがく然として、厳肅な事実を知つたのである。夫
人はなお入院中で、詳細はご親戚の方からようやく伺う
ことを得た。

熊本市立市民病院に入院されたのは十月五日、絶えず
氏の氣遣いとしてきた心臓の方の持病とは異なり、肺癌
であつた。苦しい闘病の生活であつた。歌集の自家發送
分を辛じて發送し了えた入院だった。

法名 至心院釈昭信 浄土真宗法光寺に十一月六日

埋葬された。子息文里君と合祀されたことは言うまでもない。

年を越えて、一月、私は有楽町の西武アート・フォーラムに「平山郁夫展」を見た。そして「画禅院青邨先生還浄図」という大作に大きく感動を与えられた。前田青邨は平山さんの尊崇する恩師である。作品はその浄土の人となった恩師を仏陀が雲に乗って迎えに来るという来迎の図であった。これを描いた平山さんの真情が鑑賞するものの心をうつたのである。

私は常石さんを喪ったばかりである。平山さんのこの画中の前田青邨先生の秀でた前額は常石さんにそっくりに見え、石の上に腰をかける姿はかつて常石さんの送ってくれた、髭を貯える午前堂主人が庭前の石に腰をおろし横向きのポーズをとったあの写真に酷似していると思えた。折しも本編の稿をすすめていた私はこれで題名が決ったと思った。

(六〇 二 二七)

編集後記

十五号は常石三郎氏を偲ぶ特集号にした。氏を知るたくさんの方々より寄せていただいた原稿で充実した号にすることができた。

私などは常石氏とは面識がなく、その作品に接したこともなかったと記憶している。いま、追悼文を読ませていただき、氏の輪郭はもちろんのこと、一人っ子のご子息を失つてからの悲痛このうえない魂の遍歴も知ることができた。

過日の同人会で、常石氏について書かれた古い記録、写真、切抜きファイルをみせられた。茶黄色に変色したたいへん古いものでびっくりし、よくぞ保存していたなあと感嘆した。柴田富佐子さんがゆっくりと、ていねいに大きな封筒から引き出されたものである。

古い物をすぐ処分してしまう習性の私に大きな教訓を示してくれた場面であった。

常石三郎氏のご冥福を心よりお祈りしたい。

大和氏が氏をテーマにした力作を寄せられ、巻末を大きく飾ることができた。

山口氏、柴田氏、三戸岡氏、共に健在で、頼しい限りである。三戸岡氏は「すこし長くなりそうだ」といい、その溢れるほどの意欲が素晴らしい。

他の同人諸氏（私も含め）も頑張つてほしい。（も）

「まんじ」第十五号

— 追悼 常石三郎 —

昭和六十年四月十五日発行 (非売)

編集 大和 禎 人

印刷 (有) 加藤清耕社

千代田区神田神保町三十一
α(26115743)

発行 「作家群」 (まんじ) 編集部

〒100-1 東京・千代田区神田駿河台二一九
〇〇三(二九三) 〇〇九四 柴田方
郵便振替口座 東京二一九〇八一五

目次

男たちの藩(二)	三戸岡道夫	1
秋思	茂里英介	29
お遍路道中記	山口健二	38
離婚届	柴田富佐子	46
『汽笛一声』今は昔	大和禎人	50
松尾芭蕉―臨終の蠅―	八十島元	58
連載 ハイラル挽歌		
第二章 開嶺の崩壊(一)	金子正義	69
編集後記		74
表紙	岸田幸雄	

連載

男たちの藩(二)

臆

三戸岡道夫

第一章 江戸屋敷

(三)

溜りの間に戻った修身は絶望と焦らだちで、喉がからからに乾いていた。水をたてつづけに二杯飲むと、気分が少しは落着いた。

『あの連中はもう相手にできない』
更めて思った。

今日の会議の検討事項はあらかじめ修身の方から指示しておいた筈である。当然、決算報告と、今年の予算計画の両方が出来ていなくてはならない。そのうち修身の関心はもっぱら予算計画の方にあった。だから内容の如何は別として、財政再建の足がかりとなるような前向きの案が出てくることを期待していたのである。

それが計画の「け」の字も出てこないではないか。出てこないどころか、赤字の決算書を憶面もなくひろげて、その言い訳と、借入金苦勞話を述べたてているばかりで、今後の見通しについては、ただ

「困った、困った」

思案投げ首をつづけるばかり。

赤字解消はもう最初からあきらめてしまっ

「今年もまた借入増加はやむをえないでしょう」

などと言っている始末。

『いったい、やる気があるのか、ないのか、それとも能力がないのか』

修身は何回も大声をあげそうになり、それが口から出るのを押さえるのに苦勞した。

だが一歩さがって冷静に考えてみると、これまで彼等にはどんな計画を立てても、それが採用され、実行されたことがないのだった。先代光寧の時ばかりではない。

その前も、その前も、ずっと昔の藩主の時代から、財政の赤字はたれ流しで、何を計画しても実行されたことがない。その繰り返しの絶望感が彼等々を無気力にしてしまっているのにはがいない。

だから修身が多少の腹案を話してみても

「そんな前例がありません」

「当美春藩のような格式のある藩が行うには問題があります」

「それは危険です。もし失敗したら誰が責任を負うのです」

「もし実行したとしても、きわめて困難です」

ちっとも結論が出ない。批判はしても、代案などは出てこない。冷笑を浮かべて互いに顔を見合わせるばかりなのである。

だが、話題がつづいていくうちにはいい方で、やがて彼等はだまりこくって修身の言うことをただ聞いているばかりになってしまった。聞いているといっても、修身の言うことに共鳴しているわけではない。財政再建などというものは要するに彼等にとってどうでもいいのだというところが、修身に次第にわかってきたのである。

結論として修身は、家臣からひろく意見を聞いて再建計画を作っていくというようなことは駄目だと判断した。修身が自分で計画を立て、自分がそれを実行していく以外に道はなさそうである。しかし

であることであつた。今度の仕事は戦争に勝つことではない。財政再建が目的であつてみれば、必要なのは武力ではない。経理の力である。

武士の世界において尊ばれるのは武道であるが、時代は大きく変りつつある。今後藩にとって必要なのは経理的手腕であると、修身は冷静に先を見ていたのである。

修身はずっとそのような視点から探していた。人間に関する情報を集めては分析し、候補の人間をよく観察もした。修身の人の選びの臭いを嗅ぎつけて、自分を売りこんでくる者もいて、自薦他薦のリストがたくさん集ったが、そうした候補者には興味がなかった。修身は自分の眼と、自分の嗅覚とで、パートナーを見つけたかった。

そのためには抜擢人事が必要だった。抜擢人事には反感がつきものであるが、従来の旧弊を打破し、一大改革を行うのであるから多少の軌轢はやむをえない。そうであれば財政再建のエネルギーを汲み出すことはできないだろう。

修身の頭の中に、最近一人の男の顔が焼きつき始めていた。名前を長尾真十郎といい、戦国時代の武士のような颯爽とした名前を持つ男であつた。年令は二十八才。修身より六才年上の、男盛りであつた。今は近習の職にあるが、元は足輕の子弟で身分は低かった。しかし身分などはどうでもいい。要は能力である。質実剛毅な武士であると同時にこの男は稀に見る経理手腕の持ち主でも

『自分はまだ充分美春藩のことを知らないから、相談相手となる強力な協力者が必要だ。誰か勇気ある者をパートナーとして起用しなくてはならない』

と思つた。実を言うところのことは、美春藩に養子に入つて以来、ずっと考えていたことでもあつた。本当に仕事をなしとげるためには、自分が選んだ人間を家老に据えなくてはならない。それでなくては本当の仕事はできない。かりにいまの家老たちが有能であり、修身に忠誠を誓っていたとしても、しよせんは前藩主の家老である。修身の家老ではない。

人選については修身なりの条件があつた。自分の一生涯をかける仕事の仲間である、きびしい条件が要求されるのは当然であつた。四つの条件を考えていた。一に忠誠心が厚いこと、二に私心があつてはならない、三に働きものであること、最後にあまり才氣走っていないこと、この四つである。

財政窮乏のどん底感にあえぐ領民の心は、先行きの見通しも暗く、不安感に充ちている。本当に財政再建は可能なのか、先行きどうなるかわからない不透明な時代。そうした混沌の中に今後の方向を見つけ、『やれば出来るのだ』との固い信念を持って闇に進路を切り開いて行くためには、この四つの条件が不可欠であつた。

さらに以上の一般的な条件の外に、絶対に欠かせない特殊な条件がもう一つある。それは経理的手腕の持ち主

あつたのである。

今日の御前会議の出席メンバーは、家老の村田外記を筆頭に家老と勘定方とが七人であつたが、それに近習が一人控えていた。その近習が長尾真十郎であつた。かねて聞いていたその力量を具体的に試してみたいと、出席の人選に特別修身が指示したのであつた。

もちろん控えの近習にすぎないから、家老と同じように意見をのべる立場ではない。しかし意見があつたら充分言うように申し渡しておいた。だが、会議の間、真十郎はあまり喋らなかつた。しかしそのことがかえって修身の氣に入っていた。しかし喋らないといっても、意見がないわけではない。ときどき発する言葉の端で充分それはわかるが、要するにそれを輕薄に人前でひけらかしたりしない性格なのであつた。だから会議の終り近く真十郎は次のように発言して、修身を感心させた。

「財政の赤字はいわば結果論でございます。結果としてそうした数字が累積してしまつたのです。だから過去の数字をいくら分析し、いじくり廻してみても、その中から今後の解決策が生れてくるわけではありません。必要なことは今後どうするかということを新たに考え出し、それをひたすら実行することでございます」

修身の考えとまったく同じであつた。

修身がためらうことなく長尾真十郎を仕置家老に登用しようとしたのは、この瞬間であつた。

家老の種類には大きく分けて二種類ある。どの藩でも、家柄家老と、仕置家老の両者を分けて置くのが普通であった。もちろん美春藩とても例外ではない。

家柄家老とは漢語で言えば「社稷の臣」で、一代の主君に仕えるのではなくて、いわば主家に仕えるのである。だから家柄家老には誰でもがなれるというわけにはいかず、その家柄が自ずと決っていた。家柄が決っていると選定される人間の範囲も自ずと限定されてしまうわけでした。が、どの藩にも傑出した家柄家老は少なかった。

しかし凡庸な家老ばかりでは藩政は廻らない。そこで実際に仕事をやる家老が必要になり、これを仕置家老と称して別に選定し、藩政の停滞を防いだのであった。だから仕置家老は家柄身分にこだわらず、人物本位に家臣の中から相当な拔擢をした。だから長尾真十郎のように若くて身分の低い家臣が、突如として仕置家老に昇進するのも珍らしいことではなかった。

ともあれ長尾真十郎はこうした背景の中で、近習から一挙に江戸藩邸の筆頭仕置家老に昇進したわけであった。

それから間もないある日。いよいよ先代藩主光寧が国元へ帰国することになった。すると真十郎が

「私も帰国の一員にお加えください」

と修身に申し出た。

「帰国……？ どういう意味じゃ。これからやらねばな

「一門の皆さまとも今日を限って縁を切らせていただきます」

祝宴はたちまち混乱した。

「何と申されるか、真十郎どの。妻子は離縁で、一門は義絶だ……。いったい、どういうわけか……。急の出世で気でも狂われたか……」

「家老ともなれば、もはや我々のごとき者とは付き合いできぬと言われるのか」

人々は怒り、妻もおろおろと悲しんで

「旦那さま、そのようなこと、理由がなければとても承服できることではありません。だがそのように言われるからには、何か深いわけがあるのとおもいます、どうぞそれをお聞かせくださいませ」

真十郎の顔には固い決意が浮んでいた。

「新しい藩主修身さまは瀕死の美春藩財政を救おうと、この私を仕置家老という大役に選ばれたわけですが、これは極めて難事業、なまじの覚悟では成しとげることはできません」

一同は静まり返って耳を傾けていた。

「そのために私は今後、食事は飯と汁の外は食べないと、節儉の覚悟をきめました。また着物も、木綿よりかは着ません。しかしたとえ私がするように衣食の儉約を徹底しても、妻子や親戚がこれを破ったのでは何にもなりません。そのような妻子や親族ならば、いっそ無い

らぬ仕事が出積しているというのに……」

「それには国元の事情がわからなくては、よい思案も生れません。私は国元を離れて久しくなりますので、すこし最近の情勢をこの眼でたしかめてきたいのです」

「そうか、それもよからう……」

「それに身辺整理をいたしたいこともございます」

身辺の整理とは何だろう、修身は詮索したい気持ちにもかられたが、だがそれはやめた。

さて真十郎が国元に着くと、妻子をはじめ親戚一門が待ちかねていて

「仕置家老へのご就任おめでとうございます。わが一門から家老職が出るなどとは夢にも考えられなかったこと、一門一家の名誉この上もないことでございます」

祝いの言葉を口々に述べた。しかしその言葉を受ける真十郎の表情はきびしく、あまり嬉しそうではなかった。一通りの祝辞が終わると奥座敷で酒宴に入った。めいめの盃に酒が注がれたとき、真十郎は

「この盃を別れの盃にしたい」

と突然言った。人々は驚き、その意味が理解できない。

「いま、何と言われましたか？」

「では更めてもう一度申しあげます」

とまず真十郎は妻と子供の方に向き

「今日限りそなた達には離縁勘当を申し渡す」

つづいて親戚一同を見渡し

どうか

方がいい、そう思って親戚は義絶し、妻子を離縁したのです」

これが真十郎の身辺整理だったのである。

「そうでしたか、よくわかりました。それほど覚悟とはつゆ知らず、まことに御許しください」

中で最長老の老人が親戚を代表してそう言い

「だが残念なのは、義絶、離縁という前に、なぜ俺といっしょに儉約してくれとおっしゃってくれなかったのですか。私たちは一門から出た家老を大いなる名誉と思っております。その家老の命令なら、火に入れと言われれば入ります。水に潜れと言えば、潜ります。どうか私たちもその儉約運動の中にお加わえください」

そう言われてみればなるほど義絶離縁とは、あまりに自分の気のはやりの軽卒な言葉だったと反省し

「かたじけない」

真十郎は居並ぶ一人一人に酒を注いでまわり、祝盃を「儉約を誓う」

と、固めの盃に更めて飲み干したのであった。

その翌日、長尾真十郎は家老新任の挨拶のために城中を訪問した。

しかし国元筆頭の家柄家老、高柳玄宰をはじめ、その他の家老、奉行たちの真十郎に対する態度は、きわめて冷やかであった。

城を下ると、真十郎はつづいて城下の町やその近郊を廻ったり、馬に乗って遠い農村や、はたまた海岸の方まで、領内の様子を調査して歩いた。しかし江戸で修身が首を長くして待っていると思うと、そう時間をかけて調べているわけにもいかない。

真十郎は三日間ばかりで調査を打切ると、江戸に帰った。

(四)

うけ継いで国のつかさの身となれば
忘るまじきは民の父母

という和歌をよんだ。自分は領民の父となり、母となつて、必ず美春藩の再建を達成することを誓うというのである。そしてこの和歌に修身は

『必ず再建計画を実行いたします。もしこれを怠ったときには、神罰を受け、家運が破滅してもかまいません』

という誓文を書き添え、使いをやって国元の美春神社に奉納したのであった。もちろんこの誓文のことは藩では誰も知らない。修身が自分自身の決意を固めるために、

をまず真十郎に述べた。

「ごもっとも。まったく同感でございます」

そう答えながら真十郎は、修身がさすが幼少のころから英才のはまれ高いだけのことはあると思つた。修身は言葉をつづけて

「そもそも藩というものを経済的に考えてみると、農民の上にのっかっている、いわば消費団体にすぎないのではないか。我々はいっさい生産をしない。農民の作ったものを吸い上げて、それで家中の者が生活しているだけである。だから藩の財政を繰り廻すのには、農民からの税の吸い上げをふやすか、支出を節約するか、あるいは借金をふやすか、この三つの方法に頼るより外はない。要はこの三つの柱の組み合せによって藩の財政は動いているわけであるから、財政再建もこの三本の柱を主軸とする総合対策を作ればよい。

「ごもっとも。しかし殿、農民からの税の吸い上げはすでに限界にきております」

「……………」

「先般帰国した折りに私はできるだけ方々を見て廻りましたが、ひどい、ひどくない、ではございません。わが藩は半分は米で納め、半分は金で納める、半石半永制の貢租体系をとっておりますが、これがたえず遅れがちでございます。加えてわが藩はこれまで三十八回という凶作、飢饉に見舞われ、そうしたものが積み積って農民

神の前に一人で誓ったものだからである。

修身は師の月岡実山から諸藩の財政窮乏の実情をひろく聞き、その対策の成功例、失敗例を中心に勉強し、抱負も自分なりに持っていたが、それを実際にやってみたという意欲が最近非常に盛り上ってきていた。だから財政再建は、藩主の座と引きかえに、いやいやながら引受けたというよりも、むしろ自分から積極的に引受けたという気持の方が強い。

いわば覚悟は十分できている。途中で逃げ出すことはない。絶対成功しなければならない。失敗は許されない。そういう意味において修身は自分自身の心を神の前にさらし、不動の信念を固めたのであった。

長尾真十郎が国元から帰ると、二人はすぐ財政再建の計画に取りかかった。

他の家老達の反感を買ってはまずいので、あまり大ぴらに相談するのを避け、夜間とか、昼間なら人目につかぬ時間と場所を選んで打合せをした。とにかくこれまで歴代藩主の誰もが成功したことのない大事業に取組むのである。それだけに修身は慎重を期したのである。

「今度の計画は思いきってやらないと成功しないと思うが、そのためには時間がかかっても、基本的な計画を充分練った上でやらねばならぬ」

修身は計画立案に際しての自分の考え方、取組み姿勢

を圧迫しております。

農村の極度の疲弊を端的に示すものとして農村人口の減少があります。昔の美春藩の人口は十六万人余りでしたが、その後十四万人に下がり、さらに減りつづけて現在十二万人すれすれのところまで落ちてきております。人口の減少の原因は間引きなどによる自然増の停滞や、逃亡や出稼ぎ、あるいは百姓をやめて浮浪化したりするなどいろいろの原因がありますが、とにかく農村の荒廃はひどい。租税を納めない百姓は捕えて水牢に入れるなどしてきびしく取立てをしておりますが、いっこうにうまくいきません。

また財政窮乏のしわ寄せは家臣団にも及んでおりまして、それが度重なる知行借上げとなつて現われ、恒常的なものになってしまつております。当初借上げは利息つきで返済するようになっておりましたが、今では返済もされております。したがって蔵米の支給なども最近ではあてにならず、家臣たちも生活のためには武士の体面などにかかずらうていられないと、下級の武士たちは日傭稼ぎや細工物をやっているのが普通であり、また金を貸して利殖する者もあり、家臣たちからもこれ以上借上げすることはできなくなつております」

「わかった。それで余はこう思うのだが……。古来より金を貯める方法は、入るを図つて、出づるを制する、と決つておる。したがってわが藩の再建案もこの基本通り

に行こうと思う。だが今聞いたように、『入る』が絶望とすれば、『出づるを制する』方に主眼を置かなければなるまいな」

「お説の通りです。まず儉約」

「では、その儉約を第一の柱としよう」

「しかし儉約令や贅沢禁止令はこれまでも山ほど出ております。家臣団、領民は儉約令に麻痺してしまつてまたか、という程度にしか思いません。だからなまじっかの決意では効果がありません」

「それはよくわかつておる」

一般に儉約をする場合、どこかの藩でも下の者には儉約を強制するが、上の者は実行しないのが通例であり、それが実効のあがらない原因である。美春藩でも同様である。修身は自分自らがきびしい儉約を行う覚悟であつた。

「さて、第一の柱は儉約でいくとして、それだけでは再建はできない。二本目の柱は何とする……？」

「やはり基本のもう一方、『入るを図る』にあります。農民、家臣団からの吸い上げはすでに限界にきているとすれば、別の『入る』を考えねばなりません」

「という……？」

「殖産振興であります。農民から吸い上げるには、新たに吸い上げる元を作らなくてはなりません。すなわち農民に米以外の収入の途を講じてやること、言いかえれば副業の導入で、それによって貢租の収納も高まり、農

民の生活も安定しましょう。茶の栽培、桑、密柑の増植などが効果的ではないかと私は思っております。それに平行して新しい田圃の開墾や荒田の整備も奨励して米作の増加を図れば、収入の増加は確実に見こまれます」

修身の頭の中に美春藩の国元の光景があざやかな絵のように浮かんできた。

表むき修身は一度も国元へ行ったことがないことになつてゐるが、実を言えば一度美春の土を踏んでいるのであつた。財政再建計画を作るに当つては、一度自分の眼で国元の風土を見ておかねければならないと思ひ、真十郎が国元に帰つたのと前後して、ひそかに、供の者二人という身軽なおしのびで江戸をたち、美春の国元を訪れたのであつた。

その名前から想像してゐた通り、美春は美しい田舎であつた。

修身の記憶に一番残つたのは、すすき野とよばれる台地の山から見た領国だつた。そこは美春の東部に位置する南北に細長い広大な台地で、その一角に立つて眺めると美春のはば全貌が見渡せるほどであつた。

台地の正面には、西に向けて広い田圃や畑がひろがり、その緑のなかを美春川がゆっくり海にむかつて流れてゐた。右手の遠くには美春城の天守閣がかすかに光つて見え、その周囲に町家の屋根がかすんで見えた。はるか奥

手には美春富士とよばれる高い山が形のよい姿を晴れた空の下にそびえ立たせてゐる。視線をずっと左に転ずると、そこは海で、美春灘がきらきら鑠のように光つてゐた。

その景色を眺めながら修身は

「こんなにたくさんさんの原野がある。まだまだ開拓の余地はある」

と思つた。

「それなのに、なぜもっと開拓しないのか」

財政窮乏、財政窮乏と言う暗いイメージから想像する貧しい風土ではないのである。少くとも自然を見た限りではそうなのだ。

「働けばもっと豊かになる余地はあるはずなのに……」

要は農民に働く意欲がないか、あるいは農民に対する行政のやり方が悪いのか、どちらかなのだ。年貢を納めない百姓は水牢に入れて懲らしめてゐるというが、そんなことをしても百姓は働かないだらう。

そのとき修身は殖産興業の策として、ふと製茶と密柑はどうだろうかと思つた。それは美春の風土が、見れば見るほど修身の出生の菊掛藩の国元に似てゐたからであつた。その上に気候も似てゐた。

菊掛藩は美春藩の五分の一にすぎない小藩ではあつたが、山や丘陵にかこまれて南は内海に面し、清冽な菊掛川が海に注いでゐた。そのなだらかな丘陵や山麓は見渡

す限りの茶畑で、茶の木の下には密柑がたわわに実つて黄金色に輝いてゐた。菊掛藩では百姓の副業に茶と密柑の栽培を奨励して成功しているのだつた。

この美春の土地にも茶と密柑を殖えてみたらどうだろう。このすすき野の台地もきっとすばらしい茶畑に変身するだらう。修身は美春の自然、美春の土にほれこんだのである。財政再建の母胎である自然、土地……その国元の土を藩主修身が気に入つたということは、先行き『吉』だといつてよかつた。

修身の中にはそうした美春の印象があつたので、真十郎の殖産振興策にすぐ共鳴できたのであつた。

「しかしここで注意いただきたいのは、殖産振興に速効性を期待してはならないということです。今日やつたからといって、すぐ明日収穫が出来るというものはありません。茶や密柑の木はすぐには大きくなりません。収穫の実効が見えてくるのは数年先です。しかし数年先の実を収穫するためには、今から着手しなければなりません。そして着手しておけば確実に収穫が出来ます」

「長期計画というわけだな」

「さようです。そしてそのためにはある程度の先行投資が必要になります。元手をかけなければ何事も得ることはできません」

「苗を買う金のことか……？」

「はい、それもありますが、新しく土地を開墾するの

にも金がかかります。一時的には借金が必要です」

「仕方がなからう。開墾が成功すれば返ってくる金なのだから」

こうして二人は知恵を絞りあい、再建計画は儉約令と殖産振興策の二本の柱を中心に構成することにしたのであった。

次に再建計画を数量的に押えておく必要がある。

「三つの目標に絞りたいと思います」

と真十郎は進言した。

「三つの目標……？　言ってみい」

「その一は、現在抱えている二十万両の借金を全部返済してしまうことです」

「第二は……？」

「米を五万俵備蓄して万が一に備えます」

「なるほど。そして第三は……？」

「美春藩二十万石の石高を、実質四十万石の石高にまで高めます」

「そしてそれを何年でなしとげる……？」

「十五年で達成いたします」

領地が昔の百二十万石に戻るなどということは夢である。しかし領地はそのままでも、田畑を開拓し、副産物の収入をはかるなどして生産を倍にし、表向きの石高は二十万石であっても、実質の収入は倍の四十万石程度にまで増加させることは、やり方によっては可能であると

頭でっかちの計画を常にいましめ

「計画は最初から完全でなくても、方向さえ間違っていないければ、大体の形が描けていればそれでよい。出来るものからすぐ実行することだ。実行の過程で必要があれば計画を修正し、細部に手を加えていけばいい。実際やってみるとそれまではわからなかったことが判つてきたり、よりいい方法が見つかったりするものだ。現実に仕事をするということは、そういうものだ。まず実行しなさい」

小藩に育った修身の目から見れば、美春藩美川家はすべてが贅沢すぎた。いくら大名家は格式を重んずる必要があるといえ、財政面を無理してまで格式にこだわる必要はない。藩主の身辺だけをみても、かなりの経費削減ができる。

「まず自分自身から見本を示さなければならぬ」と決意した。

再建計画と儉約令が出来あがると、修身自身がまず江戸藩邸内において神に祈願した。

藩邸の庭の奥には国元的美春神社の分身を祀った祠堂がある。

夜になると修身は一人で庭におりていった。江戸の夜空が庭の青葉の上にひろがり、星が神秘的に光っていた。誰も供はつれていない。誰にも見られたくない。自分一

いのが真十郎の主張であった。

「本当に十五年で達成できるかな」

「殿、弱気になってはいけません。達成できるか、出来ないかではなくて、達成するのです。達成するように私たちがやるのです。やれば必ず達成できます」

修身は先日弓の稽古を思い出した。三つの眞中を、一つずつ確実に射抜いていった手応えを修身は思い出していた。的は自分の力で射抜くのだ。

「は、は、は……、今日は真十郎に一本取られたぞ」

修身は高らかに笑った。

こうして美春藩財政再建十五年計画が出来あがったが、その作成の途上でしばしば師の月岡実山を訪れ、種々の教えを受けたことはありがたかった。案がうまくまとまらなくて困っているときには

「計画というものは最初から完全なものを狙うとかえって失敗する」

と現実的な考え方をアドバイスしてくれた。

「立派な計画を頭の中で作ろうとすると、計画倒れになってしまつて、うまくいかないものだ。計画があまり素晴らしいと、計画だけに満足してしまつて、実行の方がおろそかになる。また計画作りだけに全精力が取られてしまつて、計画が出来あがつた時には疲れてしまい、実行という段になって、へたばつてしまふ。必要なのは実行であつて、計画ではない」

人で神に祈りたかったのである。修身は厳肅な気持ちで庭木の暗がりの中を、拝殿にぬかずいた。

拝殿に再建計画書と儉約令とを重ねて供えようと、その成就を心をこめて祈った。一心に祈っていると、夜空の星が間近かに見えて、まるでその星に対峙しているような気持ちになった。この時の修身の気持ちをたとえて言えば、その昔山中鹿之助が月にむかつて七難八苦を与え給えと主家の再興を祈った、その必死の心境に似ていたかもしれない。

祈願が終ると翌日、修身は家臣全員を呼び集めて、再建計画と大儉約令を發布した。とくに今回の儉約令は従来のものにまじりてきびしいものであったので、家臣の一人一人が自発的に実行しなければ効果はあがらない。したがって大広間には家臣をはじめ、藩士はもろんのこと、足軽、仲間、下男、腰元、女中にいたるまで全員を集合させた。美春藩始つて以来の異例であつた。

一同が揃うと修身は出座した。

平伏していた家老の村田外記以下が顔を上げるのを待って修身が説明に入ると、一瞬、息づまるような空気が座に流れた。大広間を埋めつくした人波にむかつて修身は、静かに、ゆっくりと、藩の財政窮乏の現状を説き、その財政再建は藩主と家臣とが心を一にして儉約を実行する以外に道がないことを懇切丁寧に説明した。

「当家には百二十万石の大家から二十万石の小家に縮

小したにもかかわらず、まだ大家だった頃の風習が残っている。昔の家格をいまだに重んじているので、その費用は莫大である。また昔は質素律儀だった当家の家風も泰平の世がつづくにしたがって、その美風が次第に失われて奢侈に流れていることは、まことに嘆かわしいと言わざるをえない。財政の困窮も現在はあるとかやくりくりして表面を繕うてはいるが、こんなことがいつまで続くものではない。もしも今後当藩に、水難とか、旱魃、火災、あるいは幕府の普請お手伝いなどが一つでも起れば、財政はたちまち破綻してしまうであろう。心もとない限りである。それなのに財政再建の見通しはまったく立っていない。私は藩主としてこのまま美春藩が亡び、領民が苦しむのを、手をこまぬいて見ているわけにはいかなのである。

そこでなんとか再建の方法はないかと多くの人の意見も聞いてみたのだが、ほとんどの人は不可能だと言う。しかし私は決してそうは思わない。このまま黙って亡びるのを待っているよりは、君臣が心を合わせ、力をつくり、出来るかぎりの大儉約令を行えば、再建は絶対にできるものと信じている。もちろん儉約令を皆にだけ押しつけるつもりはない。私自身が率先して節約できるものは極度に切りつめていくつもりであるから、ここに集まっている家臣たちも、どうか大儉約を実行してほしいのである。そうすれば財政再建成就是間違いない、長く美春

一、……………

このように大儉約令は、諸儀式や佛事、祭礼、祝事などについても大幅に延期あるいは中止を指示し、また個人生活についても、木綿の着用、食事にまで一汁一菜を指示するというように、こまごまとしたもののまでも決め、これまでの儉約令にはない画期的なものであった。

江戸での示達が終ると、修身は使いを国元に送った。使いの目的は再建計画書を美春神社へ誓願奉納することと、国元家臣たちへの示達であった。

使いは家老の村田外記に命じた。村田下記は長らく江戸の筆頭家老を勤めていたが、財政再建に当って長尾真十郎にその座を奪われた人間である。企画能力や先見性はない。しかし長い経験から藩の実情をよく知っているし、年令の点からいっても顔は広く、知己も多かった。国元への使いを誰にするかについて修身は、長尾真十郎にすべきか村田外記にすべきか実は迷ったのである。長尾真十郎が行けば再建計画の説明は十分通り心配はなかった。しかし真十郎はまだ若い。論旨を十分説明すること、相手を納得させることは別の問題である。いま必要なのは国元を納得させることである。そのためには国元の家老たちにも顔が知れ、老獪な外交手腕を持った村田外記の方がいいと判断したのである。

藩は安泰であろう。どうか全員一致協力してほしい」修身が頭を下げんばかりにして、嚙んでふくめるように説きふせると、これまでに大広間に入ったり、藩主から直接声をかけられたりしたことのない、下働きの男たちや女中たちは、もう感動の涙を浮かべて聞き入っていた。

続いて儉約令の具体例が箇条書きにして示されたが、その中の主なものをひろってみると次のようなものであった。

- 一、毎月行っている稲荷堂延寿院の護摩は初午祭礼の時だけにすること
- 一、毎年の祝事はすべて先にのぼすこと
- 一、大般若経を行うのはしばらく延期すること
- 一、行列の費用は節約すること
- 一、内輪の不断着には木綿を着ること
- 一、日常の食事は一汁一菜にすること。ただし暮だけは一汁二菜にしてもよい。
- 一、江戸、大阪、京都の三屋敷では表向きであっても木綿の着物を着ること
- 一、たとえ簡単なものであっても贈答はいっさいやめること
- 一、屋敷の修繕は極力質素に行うこと
- 一、江戸の奥女中は十名に減らすこと

しかし後になってみると、これは修身の誤算であることがわかった。というのは村田外記は自分が立案に加わっていない計画書を持っていくことに抵抗があったために、国元に赴いても熱意をもって計画書の内容を説明しなかったからであった。それに加えて国元の再建計画に対する批判が、新顔の長尾真十郎に対するよりも、昔なじみで仲間意識が通っている村田下記の方が言いやすく、かえって再建計画へ批判が集中したということであった。

だがそれは後のことで、ともあれ、村田外記は修身の命令を受けると、江戸を出発し国元に向ったのである。

美春に着くと、村田外記は修身からの指示通り、まず美春神社に詣でて再建計画書を奉納し、翌日、城中に赴いて国元家老以下に再建計画の示達を行った。しかし国元筆頭家老の高柳玄宰を始めとする家老たちの反応はきわめて冷めたかった。

[五]

江戸藩邸から国元へは絶えず飛脚が走っていて、江戸表の情報は逐一詳細に国元筆頭家老の高柳玄宰のところへ届いていた。便りは正式の飛脚の他に、村田外記などが個人的に藩外の飛脚を使う場合もあった。正式の便には書けないような個人的意見とか、あるいは公に知られ

てはまずい秘密事項などは、こうした藩外の臨時飛脚によってひそかに連絡されているのであった。

高柳玄宰はこうした情報網によって国元に居ながらも、修身が養子として江戸藩邸に入ってから以来の情報を逐一細かく承知していたが、しかしそのいずれもが高柳の意に染まぬものであったことは言うまでもない。先代藩主光寧が財政窮乏に絶望して隠居してしまい、その後、名前も顔も知らない若者が突然やってきて藩主の座に坐ってしまったということからして、国元を預る玄宰にとってショッキングな事件であったが、加えて財政再建の御前会議において、江戸筆頭家老の村田外記が若い修身から無能扱いをされ、ほとんど意見を聞き入れてくれなかったという書状を受取ったとき、玄宰は

「この青二才め！」

と激しい反感にかられた。

「財政のやりくりや再建というものは、頭の中で考えるほど、そんなに単純なものではないわい」

その後を追うようにして長尾真十郎の仕置家老への昇進の知らせが届いた。

「あの若僧が家老にだって……？ 断じて許せぬ。元はといえばたかが足輕の息子ではないか。世が世なら政治の表面に顔を出すことさえ許されぬ蛆虫にすぎぬ。それが一挙に筆頭家老だって……笑わせるな。そんな奴の言うことなどが聞けるものか」

「無念だとは思わんのか。計画にはまったく参加させられもせずに、出来たものだけをこの国元へ持つてくる……まるで子供の使いだ。それでもおぬし、江戸表の筆頭家老なのか！」

お互い旧知の間柄であるだけに、村田外記に対する玄宰の言葉はかえって容赦のないものになった。村田外記を怒っているのではない。彼に激しい言葉を投げつけることによって、自分たちの怒りを江戸に向って投げつけているのである。もちろん村田外記とも思いは同じで「残念でない筈があるものか。修身さまが藩主となつて以来、あの長尾真十郎めがわがもの顔に振舞っているが、仕方がない。殿は我々には言葉もかけてくれないし、また我々の意見は聞こうともしないのだ」

修身の背後で足輕風情の真十郎が糸を引いていると思ふと、腸がにくり返るのだった。生意気な真十郎の顔が臉の裏に浮かびあがってくる。玄宰は声をふるわせて「これまでも無策だったと指摘するけれども、我々としてもいろいろなことを献策してきているのだ。しかし先代の光寧さまは何もやらなかった。ただ、ずるずると事態を引きのばしてきただけで、その結果いたし方なく、じり貧になってしまったのではないか」

その言葉を国元勘定奉行の片桐五郎太が引きとって「その間我々は必死の思いで金のやりくりをして泳いできた。金を借りることだって大変なことだ。最近ほど

修身自らが財政再建計画の作成にとりかかったという情報も、直ちに玄宰の耳に届いていた。村田外記をはじめとする従来からの江戸詰めの家老側近たちの意見は、まったく聞かないという。その上、国元への相談ももちろん無いし、国元筆頭家老の立場にある高柳玄宰の個人的意見さえ打診してこようともしないのは、何たることか。財政再建となれば国元こそがその元締めである。江戸表は金を使うだけで、金を作るのは国元である。その国元を無視した再建計画案が国元へ示達されてくるとは、一体全体どうしたことなのか。

その日、高柳玄宰は城中の書院の間に諸老臣を集めて、江戸から村田外記の来るのを待ち受けていた。

半分開いた障子の外の、見事な楓の若葉の照り返して室内は青く輝き、その青葉の翳のせいか、評議が始まる前から玄宰の顔は青ざめてみえた。

村田外記が再建計画書を持って入ってくると、玄宰はそれを奪い取るように両手で押し開いた。だがさっと眼を通しただけで

「こんなもの、役に立つものか」

びりびりと書面を二つに引き裂き

「おい、村田殿。おぬし、よく、こんなものを、おめおめ我等のところへ持つてきたな」

吐きつけるように言い

の両替商だって当藩の内情を知っているから、いい顔などして金を貸してくれはしない。金を借りる苦勞も知らないで、これまでの借金を悪しげに言うのはお門違いも甚だしいというものだ。金がそんなに簡単に借りられるものなら、自分で借りてみたらいいのだ」

勘定奉行の言葉が終わるか終らぬうちに、玄宰はさらに声を荒げて

「江戸表からの財政再建案といったって、新しいことを言っているように聞えるが、読んだところ、国元の我々がこれまでに献策してきたことと、たいして変わったところはない。それをいかにも画期的な政策のように言いふらしている。我々国元を馬鹿にするにもいい加減にしろ、と言いたい」

そうした玄宰の言葉に触発されたように人々は

「財政再建も唐天竺の財政なのではない、わが美春藩の財政なのだ。そう急に変わった名案が出来るわけがないではないか。要はいかにうまく立案者が新しい藩主にとり入ったか……、そういうことではないのか」

「我々国元の意見も聞かないで、失礼千万だ」

「国元の協力がなくて出来るものなら、やってみろ」

「まずお手並拝見というじゃないか」

「遠い美春の国元からじっくり拝見させていただこう……」

こうして意見が白熱した頃をみはからうと、玄宰はき

と一同の方に顔を向けて

「さて、そろそろ、いかがであろうか、おのおの方の結論は……？」

団結を呼びかけるように鋭い眼を光らせると、待っていましたとばかり次席家老の松前久信が

「もちろん反対にきまっています。我々国元の重臣に一言の相談もなく、こんな重大な改革を、たとえ藩主であろうとも独断で決行するなどということは、決して許せるものではない。我々の面目が丸つぶれではないか」

「それに村田殿の報告によれば、江戸藩邸では大広間には足輕、女中までをも集めて、殿が直き直きに話をしたというではないか。それなのに肝心の我々の方へは代理による通知だけでは、国元を馬鹿にしているにもほどがある。国元を輕視している証拠ではないか」

この段階でもさまざまな意見がふたたび飛び交ったすえ、

「我々としては絶対に承服できない」

「断固反対である」

そういう結論に達したのであった。

「よいか、村田殿、さっそく江戸表へ帰って申し伝えてくれ。我々に一言の相談のない再建計画案には反対だとな。そして通達するのなら、殿自らがこの美春に下ってきて、直接われらに申し渡してほしい。わかったか」

その夜、高柳玄宰は屋敷に帰ると久しぶりに酒を飲んだ。

庭に面した障子を開け放ち、一杯一杯を味うようにして飲んでみると、庭木の若葉のむせかえるような匂いが闇にあわだち、風にのって、部屋の中に流れこんできた。

近頃はずっと酒をひかえている。肥りすぎのうえ、心臓が少し弱っているから用心した方がいいと、医師から薬をもらって養生しているのだが、今夜は酒でも飲まなければ落着かない気分だった。昼間はああいふ形で江戸から来た村田外記を追い帰したものの、考えてみれば事態がこれで済むとは思われなかった。

庭の暗がりに眼をやると、庭木の梢が黒々と茂り、その彼方に晴れた夜の空があった。玄宰は江戸の方角を見上げながら、ふと江戸を遠い存在に感じた。それは今までに一度も感じたことのない気持であった。江戸を遠いと感じたのは、江戸藩邸に住む新藩主を遠い存在と感じたからにちがいない。

修身は藩主である。藩主であるから、わが「君」であることに間違いはないのだが、その修身に玄宰は急に他人を感じたのであった。何かが江戸と玄宰の間を引き裂いている。

玄宰たち国元派にとって我慢ならないのは、すべてが事前に決っていることであった。すべての指示が江戸から来る。国元の意見はすべて無視されてしまう。今まで

「そろそろお薬が切れたのではないかと思ひまして持ってまいりました」

薬箱から調査した薬の紙包みを取り出したが、薬はほんの口実で、夜おそくこの屋敷に來たのには明らかに目的が別のところにある。

「本日の江戸よりのお使いの内容、松前さまより拝聴いたしました。村田さまをそのまま追い返されましたとか、さすが高柳さまのお差配と感心いたしました」

さぐるような眼つきの言い方には、玄宰の心中を押しかけると同時に、玄宰の感情を煽るようなところがあった。

山科宗悦は医師として美春藩に仕えているが、同時に儒学者でもあった。いや本人としては儒学者が本当で、医師は副業だという誇りが強い。これまでも宗悦は美春藩の財政再建策なるものを作って、二度ほど献策したことがあった。その内容を簡単にいえば美春藩二十万石の身代を実質的には半分の十万石しかないと想定して、これを再建策の立脚点とせよというのが基本発想で儉約策がその中心をなしており、従来の失敗による具体的な欠陥を詳細にのべ、すぐれた人の言行を引用するなど、藩の再建への情熱が激しくあらわれたなかなかの案であった。しかし先代藩主光寧にはそうしたものを受けいれる余地がなかったから、陽の目を見ずに没になってしまっていた。そこへ今度の再建計画書である。気にかから

激しい感情にかられた。

『この自分はどうなるのだ』

孤独感とも虚脱感ともつかぬ、これまでに味ったことのない不安が玄宰を襲った。

そんな時であった。一人の来客があった。

「医師の宗悦さまでございます」

取次ぎの奥女中が言った。

宗悦からは酒を禁じられているので、あわてて盃を隠そうとすると、すでに宗悦は部屋の外まで来ていて

「そのままで、どうぞ……。お酒でも召しあがらなければいられなる氣持、私にもよくわかります」

玄宰に調子を合わせるようにそう言い、

ない方がどうかしている。あまつさえ計画書の背後には儒学者の月岡実山の手が動いているというではないか。宗悦の心はおだやかでない。しかしその問題にはすぐには触れずに

「同じ家老と言いましても、高柳さまと、江戸の長尾さまとは格がまったく違います」

長尾真十郎への批難からまず口火を切った。

「うむ……」
「高柳さまは何と申しましても美春藩九代にわたり、筆頭家老の地位を継いでまいりました家柄家老でございます。いくら殿の信任が厚いとはいえ、昨日までちょうちんと足輕などをしていたものが家老に取りたてられたのとはわけがちがいます」

たしか宗悦の言う通り玄宰の胸の中には、家柄家老としての誇りがある。玄宰の背後には家の重みがあり、歴史の重みがある。だが今やその重みが、長尾真十郎という青二才によって崩れ去ろうとしているのである。宗悦は巧みにその点をついていて

「しかし成り上り者にたいした事ができるわけがありません。その証拠に、現に藩の財政を動かしているのは、今も、れっきとして高柳さま、あなたさまではございませんか。高柳さまが苦しい藩の財政の切り盛りをして、江戸藩邸で使う金を江戸へ送っている。だから高柳さまに感謝してこそ然るべきなのに、金を作る苦勞も知らぬ

「月岡実山は殿の師じゃ」

「ですが、たかが菊掛藩四万石の家臣ではありませんか。美春藩二十万石への経綸などあるう筈がありません。それに師といっても、殿がすでにわが美春藩に来られた以上、月岡実山は他藩の者ですし、具体的に美春藩のことを少しも知りません。現に一度も美春へ来たことさえありません。そんな人間が作った再建計画をどうして承知できますようか」

宗悦が夜分わざわざ訪れてきた目的は、これを玄宰に直訴するためであった。

「以前私は二度ほど、私なりの再建計画書を提出してございますが、今度の再建計画案も私のものと内容はそれほど大した違いはございません」

月岡実山の再建案を採り上げるくらいなら、自分の計画こそが採用されて然るべきだというわけであった。

宗悦が帰っていくと玄宰はふたたび夜の庭に眼を移して、宗悦が残していった言葉を反芻していた。

すると庭の暗がりでは、黒い固まりが、むくくと動く気配がした。ギョッとして

「何者だ！」

庭の闇に声を投げると、黒い影はするすると近寄ってきて、庭先の灌木の蔭から玄宰を見上げ

「これをお持ちいたしました」

若い二人が勝手に作った絵空事の再建計画など、おかしくて真面目に取組めるわけがありません」

玄宰は酒を呑みながら宗悦の喋るのを聞いていた。自分の喋りたいことを宗悦が代わって喋っている。それがお追従とわかっていても、酒で陶然となった玄宰には耳ざわりよく聞えた。

「うむ……、そうだ。それなのに今頃になって、美春藩の借金二十万両は多すぎる、財政政策の失敗だとぬかしおる。この『たわけ者め！』と言ってやりたい」

「さようでございますとも……誰にこれ以上のやり方ができましたでしょうか」

「出来なかった筈だ。やれるものなら、やってみるがいい」

吐きするような玄宰の言葉を宗悦はさらに煽るように

「さようでございますとも……。それなのにあんな若造を家老にしくさって、こちらに一言の相談もなしに再建計画を決めるなんて、国元をないがしろにするにもほどがあります。そのみならず……」

そこでちょっと言葉を切り、盃を一杯あけてから

「江戸の計画書には儒学者の月岡実山が参加しているというではありませんか」

宗悦は巧みに自分の方に話題の方向を切りかえていった。

両手で白いものを差し出した。手紙だった。土地の者ではない。江戸の人間らしい。

「なぜ、昼間、表門から入ってこぬ？」

「秘密にわたることゆえ、夜陰ひそかにお渡しするようにと言われておりますので……」

書状の宛名は高柳玄宰様と達筆でしたためられており、差出人は笠倉彦五郎、住所は江戸加賀屋敷内となっていた。

だがこの手紙がきたのは始めてではない。これで三回目である。ちょうど三カ月ぐらい前だったろうか。最初

は「貴藩にとって重大な用件がありますので是非お目にかけたい」

とだけの簡単な文面だった。重大な用件などという思わせぶりの科白を用意して玄宰に近づいてくる人間は数多い。しかし言葉を信用して逢ってみれば、依頼事か、金をせびりに来たとか、相場は決っていた。碌なことはない。それに笠倉彦五郎なんて名前は聞いたこともないし、加賀屋敷などにもかかわりあいはない。玄宰はもちろん返事も書かずにそのままにしておいた。

二回目の手紙がきたのはそれから二カ月ほどたってからだった。内容は一回目のものと大異小異のものだったが、ただ

「貴藩の財政上のことについてご相談いたしたい」

と多少一回目とは違っていた。少し具体的になってきたといっている。

「財政上のことは何だろう？」

玄宰は興味をひかれた。美春藩はたしかにいま財政上の危機に頻している。一度その話を聞いてみたいような気もした。だが、と玄宰はすぐその気持を引きとめた。一回目も二回目も裏木戸から盗人のようにすーっと入ってきて、人目をさけて手紙を渡すやり方が気に入らないというよりも、そこに陰險な罠のようなものを感じるのである。国元筆頭家老としての地位が玄宰の思考を慎重にさせた。それで二回目の手紙もそのままにしておいた。そして今夜が三回目。執拗な奴だなと思った。今度の手紙には

『多額の金を動かす人間を知っている。絶対貴藩にとって得になること間違いないし』
そう書いてあった。

回数を重ねるごとに話が少しずつ核心に近づく書き方になっていく。甘い密にじりじり玄宰を虜にするアプローチである。どうやら話の核心は金のことらしい。それも多額の金。それが大閣資金だとは書いてないが、ほぼそれに近いことを玄宰は三通の手紙から感ずいていた。

前二回のときと同じように黙って手紙を受けとり、そのまま使いの男を帰そうとしたが、玄宰の心には前二回

った。藩主は名君の誉れ高い人物でもないし、手腕家の家老がいるわけでもなく、財政再建の妙手を打つ力がある藩ではないだけに、

「なるほど……」

と頷けるものがあった。財政再建のポイントは、要は金である。金があれば何でもできる。金があれば難かしい財政再建策も要らないし、名君も不必要である——と玄宰はそう思う。

しかし大閣資金には危険な要素がある。うかつに近づけないところがある。澄田藩のように本当に金が入ったかと思えば、内海藩のように、すったもんだの大騒ぎのあげく、金は結局一両も入らずに騒動だけが幕府の耳に入り、お家断絶だけは免れたものの、処罰として石高は半分に減封され、家老は切腹という憂目にあった藩もある。成功すれば利得も大きい、代わりに危険も大きい。それに大閣資金の最大の問題点は、話がまとまるまで本物が偽物なのか、はっきりしないことだった。幕府の目をのがれて動く金だけに、資金導入の手続が極秘という盲点について、偽の幹旋グループが盛んに出没するからであった。そんなものにひっかかったら大変である。しかし話が持ちこまれた段階では真偽の区別がつきにくい。巧妙なものになると、話の初期だけでなく、最後まで嘘だったのか本当だったのかわからない場合もあるのだという。おそろしい。

とはちがったものが動きはじめていた。で、使いの男が帰ろうとして立ち上ると、その中腰の背に向って

「返事を出すには加賀屋敷でいいのだな」

と念を押した。男は振りむいて

「へい」

闇のなかで答えた。

大閣資金については玄宰も噂に聞いたり、また江戸からの情報によってかなりのことは知っていた。大閣秀吉の遺産である五千万両とも六千万両ともいわれる巨額な金が、先代將軍の頃から動きはじめていたという根強い噂があることは事実であった。その金は表に出ることがない。徳川幕府の眼をかすめて裏の世界で動く金であるが、財政の困窮している藩に貸し出されているということであった。金利はかなり安いらしい。

その大閣資金を実際に手に入れた藩がどのくらいあるかは知らないが、噂の中で最も金額が大きく、幹旋にあたった人々が『あの藩へは本当に入った』と信じているのが澄田藩であった。入った金は二百万両とも三百万両とも言われる。事実長い間、財政困窮にあえぎ、懐減するのではないかと見られていた澄田藩が突如として奇蹟的な立直りをみせたのは、大閣資金においては他に考えようがなかった。そのとき玄宰も密使を走らせて実情を調査させたが、澄田藩への導入はまちがいないようであ

しかし魅力はある。

玄宰はふっと誰かに相談してみたくなった。だがめったな人間には喋れない。玄宰の頭にはごく自然に、さっきこの部屋から帰っていった医師の宗悦が浮かんできたのである。

夜はすでに深更。だが明日まで待てない気がした。

違い棚の鈴を振ると、若い男がすーっと影のように寄ってきて膝まづいた。六助という。玄宰の手足となって陰の世界で動く男である。身のこなしは猫のようで、眼も鋭い。

玄宰から短かい手紙を受けると、裏木戸から闇のなかへ消えていった。

深夜の呼び戻しに再び宗悦はやってきた。途中誰かに怪まれないように薬箱を片手に持つ用心深さも忘れなかった。

宗悦はさっきと同じ位置に坐り、玄宰から相談を打ちあけられると

「私もいまある藩で動いている大閣資金のことを耳にしております」

さすが情報が早い。玄宰自身もかなり情報通だとの自信はあるが、その玄宰ですら知らないことを宗悦は知っていることがある。どこで仕入れてくるのか。そういう意味においても宗悦は油断のならない男である。

「だがそれがどこの藩なのか、はっきりしません。おそらく仙川藩ではないかと私は見当をつけておりますが、豊臣秀次の血筋に当たると称する男が、『私が大閣資金の窓口担当者だ』と言って出入りしているようです。貸出しが実現すればパーセントに当る二万両が謝礼としてその男の懐に入るが、それまでの活動資金を貸してほしいといって、かなりの金を仙川藩から持ち出したようです。しかしこうした動きのあるものは危険です。用心なされた方がいい」

「具体的な被害にあったのか？」

「話は進行中ですからまだ何ともわかりません。成功するかもしれませんが、私の見る限りでは失敗と予想されます。失敗すれば男が持ち出した金は返ってきません」

「そうかも知れぬ」

「要するに大閣資金といってもいろいろなケースがあって、すーっとうまく入ってくるものもあれば、幹旋者がワッと群って目茶目茶になってしまいうものもあります。しかし駄目になったからといって必ずしも入らなかったとは断言できません。世間の眼から隠すために、本当は入っているのに、嘘の話のようにしてしまう場合もあるからです。そういった辺が大閣資金の難かしいところですよ」

「なるほど……」

そんな裏もあるのかと玄宰は感心した。

「どうか……？」

玄宰は謎のような視線を流してよこした。誘いこむような、そして宗悦の心を試すような……。

だがすぐに返答できることではないと宗悦は思った。二人の間にしばらくの沈黙がつづいたが、やがて宗悦は視線を玄宰の顔から庭の闇に移すと

「お受けなさいませ」

低い声だが、はっきりとした口調でそう言った。

「まちがいないかな……？」

「筋はたしかかなような気がします」

嘘か、本当か、それはやってみないことにはわからないと宗悦は思っている。それに嘘であれ本当であれ、やってみないことには金を握る可能性が生れてこないのも事実である。金を握らない限り高柳玄宰を中心とする国元の勢力はじりじり追いつめられて、江戸表の勢力を追いつまうすのではないのである。

「うむ……」

玄宰も同じ考えらしかった。低くつぶやくと、ゆっくりと手紙を手文庫に納めた。

〔六〕

国元から帰った村田外記の返事を聞いたとき修身は

「敵は外にはなくて、内部にいる」

と思った。だが内なる敵は征服しなくてはならない、

「そうかと思うと、初めからわざと多数の幹旋者を入れ替り立ち替り行かせて、ことさら騒ぎを大きくする場合もあります。その間に藩のトップの考えが本気かどうかをよく見きわめて、本気とわかればその騒ぎが収まった後に、すーっと入る、という工合です」

「もし本気でなければ……？」

「相手も危険な仕事をしているわけですから、その段階ですぐに手を引いてしまうようですよ」

「何が何だかわからなくなってくるな」

「その通りです。だから個々の動きをよく見きわめることが大切です。表面の動きの底にどんな本物の動きがあるか、それを見抜く眼力が必要です」

「お前にはその眼力があるか……？」

「これは難かしいご質問……」

と宗悦はじつと玄宰の顔を見つめ返していたが

「なにか具体的なお話しても……？」

思いきって探りを入れてみた。

実はこの部屋に呼び戻されたときからの疑問であった。なにか具体的な相談があるのだ。そうでなければ深夜に宗悦を呼び戻すはずがないと、この質問を切り出す機会をうかがっていたといっている。

玄宰は手文庫をあけると、だまって一通の書状を宗悦の前に差し出した。さきほど江戸から来た手紙である。中味を読んで宗悦が緊張に顔をこわばらせていると

怒ったら負けだと、自分自身に強く言いかせた。

藩主といえば一国一城の主である。国の最高権威であり、やろうと思えば出来ないことは何ひとつない。家臣は絶対服従、領民は虫けらも同然といえた。だから短気な藩主であれば烈火のごとく怒って

「直ちに切腹させい」

ぐらいなことを言い出しても不思議ではないのに、修身は違っていた。

それは修身の根底にたえず自分は財政再建のための養子だという自覚があるからである。藩主として君臨するのではなく、財政再建の手段だと絶えず自分に言いかけさせている。だが考えてみると修身にはそうしたものを素直に容けいれる性格が生れつき備っているといつてよかった。自分自身を一種の手段、一種の機能、機関として眺めることができる能力を持った人間だといっている。封建時代において藩主機関説という立場をとり得た稀な人間だと言えようか。極論すれば美春藩の藩主とは、財政再建という機能を果す限りにおいて自分に許されているポストにすぎないと思っているから感情におぼれるところがないのだった。

しかし修身が藩主機関説に立ち得たのはそうした性格のほかに、もう一つ別の原因がある。それは養子の身なので、生れつきの藩主のように天真爛漫に最高権力に酔う甘さが許されなかったからでもある。家臣たちは子飼

だから村田外記が国元から持ち帰った返事も冷静に受けとめることができた。できたと言うよりも、受けとめなくてはならないと思った。したがって冷静というよりも、『事務处理的に』と表現した方が適切かもしれないなかつた。だが

次の手をすぐ打たねばならない。

代わる手段を採る必要があつた。

すものと言わねばなるまい。こんなにけちけちしたのでは、美春二十万石の家格が泣こうというものだ」

真十郎は胸に無念さがこみ上げて

「いや、我らとても財政再建の必要性は充分に承知しておる。しかしさればと言って再建を急ぐあまりに他を一切かえりみぬというのでは困るのだ」

「でも、事態は急を要します」

玄宰はふいと横をむくと、真十郎の顔も見なかった。若い真十郎は次第に腹がたってきた。

しかし国元の家老たちが賛成してくれなくては、計画は一步も実現しない。怒ってはならない。真十郎は必死の思いで

「高柳どの、お願いでございます。どうか再建計画案にご賛同ください。この計画は藩の浮沈にかかわる重大なもの、だからぜひとも協力願いたいと、殿が直接筆をとられてめいめいに書面をしたためたものでございます。」

しかし国元の家臣たちの態度は以前と少しも変わらなかった。いや、それどころか相手が若い真十郎なので、反って雰囲気は村田外記の時よりも陰悪なものになり、まず高柳玄宰が

嘲笑的に、ずばりと言った。

久信が

と厭味を言い、その上に重ねて高柳玄宰が

「そもそもこのような大儉約はわが美春藩の面目を汚

どうかお願いいたします」

困りはた真十郎は最後の手段として、先代藩主光寧の力を借りるより外はないと思った。

隠居して江戸から帰った光寧は西山屋敷で余生を送っていたが、真十郎の話を聞くと

「それは困ったことだ。だがどうしても藩主直接の伝達でなければ承知しないというのであれば、この余が直々に通達する外はないだろう」

それから十日ほどたったある日、光寧は美春城の大広間に家臣たちを集合させた。

「このたび当藩は財政再建計画にもとづく一大儉約令を発令することになった。聞くとところによると家臣たちにもいろいろ考えがあるようであるが、しかし江戸表で発令ずみの方針が国元で行われないようなことがあれば、これこそ藩主の威信にかかわる大事件である。どうか当地美春においてもこの大儉約令を実行するようにしてほしい」

と示達を下した。

先代藩主直き直きの言葉ともあれば、さすが頑迷な家老たちもこれに従う外はなかった。

なかった。

江戸に戻った真十郎からこのいきさつを聞いたとき、修身はやはり一日も早く修身自身が国元に帰って直接実行しなくては、計画は進まないと思った。だがそれには修身の江戸詰め任期が明けるのを待たねばならなかった。それまでの間は江戸表でやれるだけのことをやって手本を示す以外にない。

修身は自ら率先して儉約を実行した。

「敵は外にあるのではなくて、内にある」

更めて自分にそう言い聞かせた。

内にある敵に打ち勝つ方法は言葉ではない。実行あるのみである。

これまでにも儉約令は何回も出されているのに少しも実効があがらないのは、それが形式的で、内容が伴っていないからであった。原因は明白である。上が守らないから、下も守らないのである。修身は美春藩に入ってから、その実態をつぶさに見てきた。

たとえば冬の火鉢である。炭の節約。火鉢の炭をこのように節約するとこの冬はこれだけの暖房費用が節約になりますという報告が上ってくるので、今年の冬はさぞ寒かろうと心配していると、修身の部屋だけは炭火がカンカンおこっていて暖かなのである。主君を気使う気持はわかるのだが、これでは下の者はついてこない。

『殿ばかり暖かで、いい気なものだ』
口には出さないが心の中では批難しているにきまっている。それなのに近習からは

「炭の節約はこのような実効があがっております」と調子のいい報告が上ってくるのである。藩主がそれを真に受けて

「それはよかった」

などと言っていたのでは、何のことはない藩主に対する点とり主義なのである。点とり主義のために儉約令が使われている。これでは下の者は納得しない。納得しなくては徹底しない。

調べてみるとこうした点とり主義の原点には次のような事件があった。

今から数代前の藩主のときである、ある実直な家臣が儉約令をその通り藩主にも本当に実行してしまったのである。贅沢に慣れた藩主は怒ってその家臣を左遷してしまった。それ以来美春藩ではたとえどんな儉約令が出ようとも、藩主は例外というしきたりが出来てしまっているらしい。藩主は従来通り楽をして、ただ号令だけをかけていればいい、これでは儉約令など実行される筈がないのである。

この弊を破らなければならない。そう固く決意すると修身は黙々と自分自身の儉約にはげんでいった。

まず木綿の着用である。大名は絹の衣服を身にまとう

のが当時の常識であった。だから修身は木綿というものを見たこともないし、触れたこともなかった。しかし藩主が絹を着たままで、家臣が木綿を着る筈がない。

しかし着用してみると、木綿の固い感じは改革の決意を秘めた修身の気持に、似つかわしいように思えた。なにか修身の気持も変えるようであった。絹の軟弱な世界から、固い質実な世界へと、修身の精神が変身していく、その手応えのようなものを荒い肌ざわりに感ずるのであった。百姓に一転したような気分に修身をさせる、思いきって身体を動かして働いてみたいという盛り上りが体内にふくれ上ってくる。

食事の一汁一菜もそうだった。藩主が贅沢な食事を食べ切れなくて残してしまう、そのお膳が下っていくのを女中や配膳人が見ていたら、儉約しようという気が起きるわけがない。飯と味噌汁、それに簡単な煮つけという食事を見て、最初は近習が

「これではあまりにも恐れ多い。せめて殿だけはあと二菜ぐらい追加しては……」

と進言したが、修身は

「いや、このままでよい」

断呼とその申出を受けつけなかった。

事実、美食にあれこれ注文つけているよりも、素食を腹一杯たべた方が健康によかった。気分もすっきりした。木綿が百姓の肌ざわりであるように、一汁一菜も百姓の

味覚だった。木綿と一汁一菜によって修身は素直に百姓の世界に入っていけそうな気がした。

次に修身が実行したのは仕切料の縮減であった。仕切料とは修身の身の廻りに当てる費用で、修身が美春藩に入ったとき養子の身分としては年額二百五十両であった。それが新藩主になった時点で二千両となるのが習わしであった。しかしこれを二百五十両のままに据え置いたのである。これは歴代藩主の異例事である。

「藩主の仕切料をそんな額ではとてもできません」
強い反対を受けたが、これも押し切って決行した。

つづいて問題にしたのは江戸藩邸の奥女中六十名を十名に減らすことであった。だがこの奥女中減員については、さすがの長尾真十郎も

「それには問題があります。どうかご再考をお願いします」と進言した。というのは江戸藩邸の奥女中の大半は、先代光寧の奥方の実家である竜山家から連れてきたものであったので、これを解雇することは竜山家との間をこじらす危険があるからである。それを心配して

「たとえ美川家の女中は減らしても、竜山家からの者を減らすことはいかがかと存じます」
が修身は

「真十郎らしからぬことを言う。できないことでもやる、それが今度の改革ではないか。藩の再建のために儉約するのだ。そのためには竜山家といえども遠慮すべき

ではなく、実情をよく説明すれば解ってくれるはずだ」
そう言って修身自らが筆をとって、美春藩の窮乏と、
財政再建の決意をのべ
「そのような実情があるので、ぜひ、奥女中たちをお
引取り願いたい」
と懇切丁寧に依頼すると、竜山家でもその熱意に感銘
して

「よくわかりました、お引取りいたしましたしょう」
心よく応じてくれたのであった。

こうして修身は出来ることから一つずつ、誠意をこめ
て忍耐強く実行していったが、なにぶんにも二十万石の
藩の財政を基本から再建するのである、その前途はもち
ろん容易なことではなかった。

(つづく)

秋 思

階段の隅には小さな紙屑が吹き寄せられていて、一段
あがる毎に低く舞いあがり、小池のズボンにまとわりつ
いた。前方を歩く川村やす子の足が少し速くなった。十
号棟のわが家が近くなったせいだろう。階段の紙屑を気
にする気配はなかった。五階建の市営住宅にはエレベ
ーターはない。やす子は十四歳にしてはよく伸びた、肉付
きのよい脚を、川村の眼前にさらしながら、五階までい
つきにあがっていった。

彼は五階のあがったところの通路に立止り、大きく息
を吸い込んだ。やす子は十五戸程並んだドアのちょう
ど中央あたりで止り、彼を振り返った。

吹き抜けの通路から外を眺めると、豊かな樹木に囲ま
れた市営のスポーツセンターの全景が展けていた。晩秋
の寒気の中に裸の木がそそり立って、緑を保つ周囲の低
い樹木をみおろしているようだった。

——悪い眺めじゃないな。

社 告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。
「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発
行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円の拠出を
しております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあ
て、作品を掲載した同人が別に作品分量に応
じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当
の支弁してあげようとお考えの方からせつか
くのお申出があり、誌友として維持会員にな
って頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三
ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現
在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月
報「まんじだより」や合評会へのご案内をさ
しあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接
納入されるか、郵便振替口座へのお振込み
をお願いいたします。

茂 里 英 介

小池は一瞬、団地の五階からの光景に魅せられた。そ
してゆっくりと下を眺めおろして、呼吸を整えた。彼は
今更のように五十五歳という年齢を想起した。しかし、
外を眺めていたわずかな時間、彼は、これから展開され
るであろう人間臭い、どろどろした人間の葛藤場面を完
全に忘れていたことに気付いた。

川村やす子が市庁舎一階の隅にある少年相談センタ
ーに姿を現わしたのは、二日前で、北風の強い夕刻であっ
た。センターは市役所の玄関を右にみて、細い通路の奥
に小さな木製の看板がかかっていた。

「この子をどこか、しっかりした施設にいれてくれま
せんか」

冷めたい風と共に来訪し、来客用の長椅子に坐ると、
やす子を伴って来た五十年輩の男が言った。

相談員は三名であるが、一名ずつ交替で休むので、常

時二名が待機している。直接面談するケースは前もって電話予約が多いが、突然の来訪も追いかえすわけではない。

男と少女はノックもなく、顔を覗かせて、受付で書いたのだが、この子のことでお願いがあるんです……、と男がいい、こちらの返事も待たず、少女の肩を強く押して入室をうながした。

三名の相談員のうち、誰がどのケースを担当するといふ特別な内規は何もない。小池は過去の経歴から比較的年齢の高い子供の相談を担当することが多かった。彼は中学三年生位の少女をみて、すうっと席を立った。

なんの事情説明もなく、連れの子供を施設に入れろ、という男に、小池は一瞬油断のならないものを感じた。しかも父親というのには頭に白いものが多すぎた。

彼は施設うんぬんに対する返事は後回しにして、

「あなたはこの人のお父さんですか」

「いいえ、知り合いの者です」

小池は、あゝ、そうですか、とゆっくりうなづくと、男の次の言葉を促がすように、メモ帳を開き、ペンを握った。少女を眺め、男へ視線を移した。どんな関係なのか説明があるはずだと予想して待ったが、それはなく、

「どうですか、この子はいれるところは」

と同じことを繰り返した。

この男には話し相手の思惑など考えるゆとりはないら

しい。物事の順序、背景などの説明なしで、しかも、住所氏名もいわず、まして両親の許可もなく、知人の子供をどこかの施設へ収容させることができるのも思っているのか。

「まあ、その結論はあとにして、まず住所やお名前をきかせていただきますようか」

少女は川村やす子、十四歳、市立A中二年生。

男は山崎、小口の金融とアパート経営。

小池はメモに住所と共に記録すると、立ち上って二人にお茶をいれることにした。

二人の関係について、男の説明があったのだが、かなりあいまいでわかりにくかった。

山崎は昨日の昼頃、少女がひとりで小さな公園の中のブランコに乗っているのをみかけて声をかけた。みんな学校へ行っていなければならない時間である。彼女は近頃続けて学校を欠席している。そして家にも帰っていないことがわかった。男は彼女に昼めしをおごると、家には帰らないときっぱり言い放つ娘を自宅に連れて行き、泊めている。若い娘を泊めたりすれば、あらぬ疑いもかかるので、今日こうやって連れて来たのだと語った。

「実はこの子の母親に十萬程貸しているんですよ。金を借りに来たとき、この子を連れて来たんです」

「なぜ、昨日親もとに連れて行かなかったのですか」

「まあ、この子がいやだと言うし、わたしが顔を出せ

は貸した金の催促に行ったようで」

男はあらかじめ用意していたような返事をした。

「あなたのご家族はこの子を泊めることで何かいいましたか」

男は不意を衝かれたように、一瞬、狼狽の色をみせた。

「家族はいません。ひとり暮らしで」

天井に視線を泳がせると、低い声でつぶやく。

一人暮らしの中年の男のところに、親に無断で少女をひとり寝泊りさせることがどういふことか、男はよく承知しているようだ。

小池は男に対する警戒心を強めた。一夜、十四歳の少女を泊めたことで誘拐犯人にでもされたらかなわないという思惑がからんでいる。少年センターへ連れて行ったという事実をつくっておく必要があったのではないか。

家出の原因については、二年前、父親が蒸発後、母がスナック勤めを始めて間もなく、一人の若い男を二間しかない家に同居させたことが直接の引き金になっている。やす子は二人姉妹の長女で、下には九歳になる妹がいる。妹は母から、若い男を、お父さんと呼べと厳しく命じられて、いつかそう呼ぶようになったが、やす子はどうしても母の命に従えなかった。

若い男は三十歳位で、母より五歳程年が若い。この家の父の座についたかに見えた男は、はじめのうち、一日おきに外で働いていたようだったが、いまは一日中ブラ

ブラし、朝からバチンコをやり、家でテレビをみているときはいつも酒くさい息を部屋中にまき散らしていた。夕刻から勤めに出る母はいやな顔もせず、気易く小遣金を与えている。

やす子と山崎が交互にしゃべった。少女のいう家にいざらいという事情も理解できた。よくあるパターンであるが、なんとか娘を救ってやる方法はないものか、娘はまだ少女らしい幼さを残している。

「この娘さんと二人だけで話したいんですが。ロビーの方でちょっとお待ちください」

小池は、男を正面から見据えるようにして言った。男は自分がこの場を離れたあと、何を話し合うのかという疑いを強く感じたようで、顔をこわばらせた。小池はそれを当然のことと予期していた。どうぞ、と再度声をかけた。男は不満げにゆっくりと腰をあげた。

「家に帰らない時はどこに泊るの」

「友だちの家や、団地の屋上です」

「おとこの晩は」

「団地の屋上。公園で夜を明したこともあります」戸外はぼつぼつ木枯しの吹く季節。コンクリートの建物の人気のない屋上でどうすれば一夜を過ごすことができるのか。深夜、うずくまった少女の頭の中に去来するものは何か。暗闇の恐怖とどうやって闘うのだろうか。小池は自分の想像力や理解力を超えるものを感じた。

学校へ行かない理由については、不登校の子供たちが述べるところと全く変わるところはなかった。勉強がわからない、友だちがいらない、担任が好きになれない。などであって、特異な点はなかった。

「夜、帰らないとお母さんが心配するだろう」

「わたしがいない方がお母さんはいいみたい。だから心配なんかしない」

少女らしさが一瞬消えて、突然、大人びた調子をおびてきた。小池は彼女の変化におどろいた。

——これは同居しはじめた若い男と何かあったな。

と気付くと、少女をとりまく問題の難しさを感じとらないわけにはいかなかった。とっさにいい考えは浮んてこない。

夕刻から母が勤めに出る。男はバチンコから帰って、夕飯をたべて娘二人と狭い部屋の中でテレビでもみる。男をお父さんと呼び始めている妹はすぐ寝てしまうのだろう、そしてやす子と男は、母の帰宅する深夜二時か三時まで起きていたのだろうか。少女のからだはもう立派な成人並みだ。母は自分の留守の間に長女と男に何か起ってはいけないと思うのは当然であろう。それは母性愛という格好のいい思慮なんかではない。男の心が娘に移りはしないかという中年女の不安、嫉妬だと小池は推察してみた。

小池は思い切ってきいてみることにした。

えようとはしなかった。昨夜の男のようすについてたずねたが、何かがあったかどうかについても、口を開かず肯定も否定もしなかった。大人の分別で、喋ってもいいことと、喋ってはまずいことの判断をしながら言葉を選んでいるようだった。

「ロビーのところで、あの男の人と一緒にしばらく待っててください」

少女を室外に出すと、学校名簿から彼女の学校の電話番号を拾い出し、ダイヤルをまわした。

電話に出た教頭に用件を話すと、担任を呼びましようと言う。教頭は川村やす子の輪郭は承知しているようだった。学校でも困っている生徒の一人だと付け加えた。

担任は男で四十歳位だろうとやす子は言っていた。放課後の校庭でテニスをやっている男に、職員室の窓から声をかけているのが受話器から伝ってきた。

「川村がそちらへ行きましたか」

担任の口調は不満げで、センターなどへ行くことはないので、という感じである。しかし、彼との短い会話のなかで、それなら自分でなんとかする強い意志をもっているのかというところでもなく、あの母親と若い同居人がやす子をダメにしているので、どうしようもない、もうおてあげの状態だと結論づけている。

やす子の家に電話をかけると必ずあの男が出て、母親は在宅していても電話口に出ようとしない。そして男の

「同居しはじめた男の人はあなたに何かしたんですか」
「はい、お母さんのいない時、わたしのからだに触りました。お風呂にも一緒にいるうというし、わたしのねてるふとんにはいつてきたこともあります」

「そのこと、お母さん、知ってますか」

「前に少し話しました。それなら、お母さん、男の人にこの子に手を出したら承知しないよ、ってすごく怒って言っていました。それからはもうお母さんに何もいいません」

少女はそこまで言うと言が変り、涙ぐんできた。

「でも、なんでも全部お母さんに話した方がいいと思うがなあ」

「ダメなんです。ちょっとという、お前が悪い、お前にスキがあるからだ」と叱られます。わたしが友だちの家に泊って帰るととてもきげんが良くて、鼻歌なんか唄ってます」

小池はふと、生き地獄ということばを想起した。こんな言葉があるのか、ないのか、彼は知らなかったが、針の筵に坐らされているような夜の生活にはびったりあてはまる表現のように思えた。この少女には自分の家に自分の席がない。

彼女を同道した山崎には会うのが二回目なのに、何故泊めてもらう気になったのか、しかも一人暮らしの男の家に。と念を押してたずねてみたが、黙ってうつむいて答

言ひ草は決って、自分は留守番の者で何もわからないと言って電話を切る。やす子のことは聞く耳持たぬということであるらしい。家を訪ねても玄関払いのこと。

こししばらく担任とやす子の連絡は途絶えていて、数日間家出同然だったことは知らなかった。担任はよろしくお願いします、と最後に述べた。やす子の身の振り方はセンターで決めてくれとでも言いたげである。

——この担任には子どもへの愛情も、指導の意欲もない。

小池は学校の対応に失望した。担任は母親と若い男の責任と割り切っていて何もしようとはしない。担任や教頭も、あの母親と男と同じではないか。誰も火の粉をかぶろうとしない。

小池は女の子を収容してくれるいくつかの施設を思い浮べたが、そこへの連絡や依頼は少し考えてからのことにして、待たせていた二人を呼びいれた。ロビーでは話し合っていたようすはなく、二人共不安げな表情をかくさなかった。

明後日は土曜日なので、午後二時に川村やす子の家にいき、母親と会って話し合いたいと告げた。

「これから帰って、お母さんによく話しなさい。そしてやす子さんはあさって二時に団地の入口で待っていて、私を家まで案内してください」

小池は強引とも思える一方的な約束をし、帰えすこと

にした。山崎は黙っていて、施設にいれるとはもう言わなかった。母親の都合が悪かったら電話しろと告げるべきところだが、小池は言わなかった。若い男は同席しても、しなくても先方に任せるというつもりである。聞きようでは、母親に行くから待っているという命令口調になっている。こうでもしないと会えないだろうという小池の判断だった。

「じゃ、真直ぐ家に帰ること。今までのことはすべてお母さんに話さない。明日とあさっては勇気を出して学校へ行くこと。そして、あさって団地の入口で会いましょう」

小池は学校へ電話して担任と話したことは伏せておいた。担任の先生が心配していたよ、と別れ際に告げることも空々しい感じである。

山崎はこの場の結論が出て、自分には何事もなかったと思ったのか、平静さをとり戻した。少女が歩いて出口へ向ううしろ姿を眼で追うようにして言った。

「あの子は母親と引き離れた方が幸福ですよ。どこか施設を世話してやってください」

自分が最初に言ったことは正しいのだと、相手に認めさせようともいいかげである。

小池はそんな彼の感想に同調する気は全くなかった。

「親に断りなく自宅に女の子をね泊りさせることは今後なさないでください。母親とはお知り合いのようで

すから、あさってあなたのことも話題になるでしょう。果して母親が何人というか」

男はお世話になりました、と小声で言い、さらに何か言いたい素振りをみせたが、黙って背中をみせた。

小池は男に、少女を家まで送り届けるように言うべきかどうか迷ったが、何もいわず二人を見送った。ここを出てからのことはそれぞれの判断にゆだねた方がいいと考えたのである。男が少女をまた連れ歩いて、何か食べさせたり、自宅に連れ帰ることはなからうと感じていたからでもあった。

川村やす子が消えて、開いたままのドアの中へ、ごめんくださいと大きな声をかけた。下を見ると、乱雑に脱ぎ散らした運動靴やハイヒールなどで足をふみいれる余地はなかった。なぜか足もととは暗かった。

「どうぞ」

不愛想なかすれた女の低い声に、小池は履物を整理し、自分の靴のスペースをつくった。

窓があけてあるのだろうか。化粧品の臭いに、人間の体臭を感じさせるなま暖い空気が玄関へ向ってゆるく流れている。

声の主は姿を見せず、どこにいるのか一瞬わからなかった。家の中は住人が不自然に手を加えたようであった。すぐ右手にキッチン、その前に小型テーブルと椅子が四

やす子は同席せず、部屋の外にひとりているのだろう。静かだった。妹の絹江の姿はみえない。外で遊んでいるのか。

「ところでやす子さんのことですが」

「そうだわ、あの子、なんだってセンターなどへ行ったのかしら。いいかげんな子供で困っているんです。この人ともどしたらいいか話してらんですよ。あの山崎って男が悪いのね……」

女は放っておいたら山崎のことを喋り続けていくにちがいない。

「ところで、やす子さんがだいぶ家を明けていたようですが、お母さんはご存知でしたか」

話の中心は山崎ではなく、やす子でなければならぬ。「そうねえ、何日か家に帰ってなかったようですね、ねそうでしょ」

女は男の方に視線を移していった。

「うん、そうらしいな」

男ははじめて口を開いた。かすかにアルコールのにおいと煙草のにおいがただよってくる。

「娘さんが夜から朝にかけてここにいたかどうか確認はしてないのですか」

小池はできるだけ冷静にと己にいいきかせながら、きいてみた。

「なにしろ、わたしが夕方から店に出て、帰りは明け

女は男の方を見て、そうよね、と繰返した。

方の三時、四時ですからね、もうくたくたになって、多少酒も入ってますから、そのままごろんですよ。よく友だちの家に泊めてもらうっていいですよ」

女は、それだけいうと、立ちあがった。

「申しわけないですね、ごらんの通り、もう店に出なくちゃならないので。娘のことは、よくいいきかせて、なんとかしますから結構ですよ。ああ、そうだ、この間あの山崎っていう男の家に一晚泊してもらったんですってね。話聞いてあの子をぶんなくってやったんです、男の一人住いのところになんか泊まるんじゃないって」

じゃあといって立ち上った。そして、キッチンテーブルのところに坐っていたらしいやす子に、

「お前がしっかりしないから、こうやってセンターの人が来るんじゃないか」

荒っぽい口調でいい残すと、外へ出たようであった。

小池はさてどうしたものかと迷った。母親の消えかたは鮮かである。帰れともいわない。父親代りの男と話せとも、この男に任せてあるともいわない。そして、もっとも大切な娘の身の振り方については何も考えてないし、愛情のかけらさえ感じとることができない。自然になんとかなると思っているのだろう。

「やす子さんのお母さんはいつもあんな調子ですか、なんかとりつく暇がないようだなあ」

小池は直ぐ立ち上るつもりで男にいつてみた。男とだ

小池は立ち上った。不安げに黙って立っているやす子に、

「さっきみたいなのに、団地の入口のところまで、おじさん送ってくれるかなあ」

少女は、不意に声をかけられ、夢からさめたように、えっ、と口の中で言うのと、すっと椅子から立ち上った。

とその時、奥から男がのっそりと歩いてきて、

「やす子ちゃんはいいいよ、ちょっと留守番してて、おれが送っていく。なあ、そうするよ。センターの人に少し話もあるでな」

男はそう言うのと、やす子の肩に手をかけ、椅子にすわらせ、自分が先になってドアの外へ出た。少女は、じゃ、さようならと言った。

団地の入口の手に小池が公園があって、四五人の幼児がブランコと砂場で遊んでいる。

男はやす子に聞かせたくない話があるらしかったが、少し前を黙って歩いていて喋ろうとはしなかった。

小池は公園の囲いの前に立ち止まって砂場で遊ぶ子供を見た。男は先に行きかけたが、戻ってきて、小池の傍に立った。

「実はあのやす子が家を明けた夜はおれのアパートにいるんです。公園や団地の屋上で夜を明かすなんて嘘つきやがって。おれはこの前まで一人で住んでいたアパートまだ借りてるんで、解約してないし、荷物もそのまま

いじな話をするつもりはない。

「まあ、あんな調子だなあ。まあ、あれも悪い女じゃないけど。うん、まあ、おれにはよくわかんねえ」

この仕切られた場所には家具らしい物はおいてなく、汚れた壁面が露出し、狭い倉庫の中をおもわせた。開いた窓からは冷めたい風がゆるく吹きこんでくる。

小池は男の言葉づかいに少し妙な印象をうけて、やはり大切な話は無理と判断した。彼はここへなんのために来たのか、と空しい想いをかみしめていた。これでは玄関払いと同じではないか。中にいれて二人が会っただけでも学校の担任よりましなのか。外出の支度で待っているというの、第三者と娘のことについてゆっくり話し合う意志のないことを示していた。

やす子に対する哀れさがつのってくる。山崎がセンターから去り際に言った、この子は母親から切り離れた方がいいですよ、ということばを思い出した。しかし、母は、よく言いよらせるから放っておいてくれと言う。

小池にはとっさにいい考えも浮ばない。放っておくつもりではない。来週はじめ、やす子と二人でゆっくり話し合う時間をつくって、その上で、母親と再度会ってみることにしよう。母親と話し合う機会をつくるのは、こちらにもほど腹をくくってかからないとできないことだ。『それじゃ、また何うかも知れませんが、今日はこれで帰りましょう』

残してあるんですよ。やす子のおふくろといつまで続か知れたもんじゃないすからね。まあ、そういうことで、あの子が家にいたくねえという時に、おれの部屋へ連れてって、最初はめしの支度もしてやったもんですよ。今は鍵も渡してあるし、おれも心配で夜ようすを見に行くことありますよ。淋しいからもう少しいてくれなんて、甘えたりしてよ。まあ、おふくろとうまくいかないので、しばらくそうとしておいた方がいいかも知れねえなあ」

さっきまでの沈黙が嘘のようであった。男は自分の語る話の内容がどれほど重大なことであるのか認識してないようだ。とつとつとした口調だが、よどみがない。作り話でもなさそうであった。

「そのことは母親には内緒ですね」

「知れたら大変なことになるよ。まあ、大変だな」

着古したジャンパーに両手を突っこんで、からだの向きを変えると、じゃあ、と言って去ろうとした。

小池はそんな男の背後に声をかけた。

「やす子さんと少し話し合いたいんだが。十号館の下まで行って下で待っているの、やす子さんにそう言って降りる言うてくたさい」

「さあ、あの子がうんと言うかな。まあ、言ってるように階段を昇った男の姿を眼で追った。

「もう、あの子はいないね。どこかに遊びに行ったよ」

降りかけた階段の中程で男が告げた。

(了)

お遍路道中記

山口 健 二

「ねえお客さん、アレがあんなところについてないで、肩にでもついてりゃいいのにネ、どうしてあんなところについてるんでしょ、玄関と台所の流し口が一緒だなんて……神様のやることわかんないワ」オバさんは言った。

「ホントだ、束子の様なモノって言へばそれまでだが、アレには表情があるんだヨ、ボクはその表情に夢中になって来たんだ。魚が子を生むために……生めば死んじゃうのに死に物狂いで急流に逆らって上ってゆく、あれだナ、さめた目であたりを見廻すなんてユトリはなかったもんナ」

「あんた……ひどくど助平だったのね」

「うん、今だってそうだよ。女のようにコッソリ想いを包んでおくなんて上等なことは出来ねんだ。真すぐなやり方だよ。それでも覗くって恥ずかしいことだって、子供の時から知ってはいたヨ。ボク町医者の子供にせがれだっ

たから盛んな頃はうちに看護婦さんが七・八人いて、看護婦部屋と云う名の別棟に住んでいたんだが、婦長と称する年増が独立した六畳の部屋に一人でいたが子供のボクの目からも矢張り婆に見えて魅力なかったナ。その独り居の部屋を覗く気は起きなかったヨ。あとは十七、八の見習いから二十五、六の一張前までどれでもよかった。たまらなくなると、奴らの部屋の窓の下に忍びこんで覗くんだ。夏なんか相当ワクワクするポーズでいるからナ。でも一番初めは誰でもそうだろうが、おふくろさんのアレを狙った。それから女中さんがいたからその方へもちやんと目をつけていたナ。夏なんか女中のオハナさんなぞ、あれを丸出しにして寝てるんだ。だが子供のボクには女中さんのアレよりや看護婦さんのアレの方が上等に思われたな。だからオハナさんのアレには余り長く興味がつづかなかったよ。丸出しのアレの真中あたりに蚊張の中に迷いこんだ蠅がとまったりしてるんだ。それにオ

ハナさんは未だツルツル丸まるしてて毛が生えていなかったから表情に乏しいってこともあったんだろ、毛が生えていないのは威厳がない。それに比べるとおふくろのは大きく広く威厳があり何やらおそろしい生き物の感じ、その上寝る前に風呂に入るから石鹸の匂いがフクイクとしていたヨ。何……九ツや十の子供にしちゃませすぎているって……」

「イヤだね……お客さんはおませだよ、それで看護婦さんの方はどうだったの」オバさんはY之助の話をきいてくれる顔になって言った。

「うん部屋の外から覗くだけじゃ余程チャンスがなければ……例えばこつちをむいて服から着物に着かえる時とか、独りだけで他のものがみな外出して、のびのびと独り居の姿勢をくずして自分のアレを眺めて楽しんでるのに出会すとかしなけりゃ巡礼にはならんわネ、そこでほらあの時分はズロースだのバンティなどなかったからナ、連中が長廊下に雑布かける時、廊下の下にひそんで覗く手を考えた。時たま、丸々と見事なお尻のあたりからチラリと黒い島が表情ゆがめているのにお目にかかれるんだ。一度二度ひそんでる所を見つけたが、その長廊下のそばに、人間五人ぐらい入れる鳥小屋があって、十姉妹や脊黄青鸚哥が二十羽程キイキイさえずっていたから、朝ッぱらから熱心に鳥の観察しているぐらいに思ったんだろ、呑気な時代で変態趣味について一般の

ニンシキも浅かった。まさか院長のせがれが廊下の下にひそんでアレを覗いているなんて思わなかったんじゃないかナ」

「でもわたしたち女は、いつもどこから覗かれていますって云う警戒心と言うのかな、期待みたいなものに包まれてるんだよ、お客さん」

「オバさん、ボク今だって子供の時と同じ気分だよ。一寸おがませてくれない……」

もう先程からY之助の足がカウンターの下のびて、オバさんの着物の合せ目を分けて脹ら脛のあたりにとどいている。

「どうしてそんな所からわたしの足にさわるのよ」

「どうしてってことはないんだ。さわりたいんだ。でも手は届かないだろ、足じゃ少し鈍感だけど仕方ないや」

「あんたって人、ほんとにド助平ね、足に足でさわったって仕方ないじゃない」

「いや仕方あるんだ、兎に角ボクさわりたいんだ、おがみたいんだ、アレにや表情があるからな。気がつかないだろ。人様々な顔しているようにアレも様々なんだ。キミ自身のアレトクと覗いたことある？ないでしょ、いい加減に見てるだけでしょ。うつむいて見たって表面しか見えないからな。表情ってえのは、いろんな姿勢で、鏡当ててみなければ駄目だよ、やったことある？」

「いやだなあアおかしくって出来ないワ」

「おかしくってちゅうのは自分の体に親身でないな、ボク、キミのアレに親身になり度くなっちゃった」

もうその頃は、Y之助の足の先はオバさんの股のあたりまでせり上っていた。店にはかれとオバさんだけである。店から土間つづきの奥の部屋から男と女のクツクツ笑い声がもれてくる、午後五時頃の夕陽が、店に斜めにさしこんでいる。呑み屋が夜の部に入る前のY之助と店番のオバさんだけのいつ時の静かさである。奥の部屋の男女のクツクツ笑いと中味がよく聞きとれない会話などY之助には気にならない。かれの全身の神経はオバさんの股にまでせり上った足の先に集中している。この男女のささやき声がオバさんを刺戟したのか、かの女は着物の前をおさえながら決心した表情になって言った。

「見せてあげようか、いたずらしないうって約束して……」

「うん、おがむだけでいいんだ」Y之助はゴクンと生唾呑んだ。オバさんって言ったってまだ四十前でY之助と同じぐらいの年恰好だ。かの女はちょっと店の外をガラス越しに気にかけていたが、次の瞬間、カウンターの上にすくと立った。そして店に差しこむ夕陽に向かってさ々と着物の前をまくった。何も佩いていない。それでもかの女は一寸腰をひねり気味にしてアレが完全に露出するのを窺いでいる。裸体画にあるモデルの恰好である。Y之助はかの女の片足に抱きついて引っぱり、股をひ

×

×

×

どこの町にもそれはあった。町離れの臭いどぶ川に面したり、曲りくねった真昼でもほの暗い湿った小路の中間に、かくれるようにしてそう云うものはあった。しかも近くには社格もあやしい祠や神社があって、夕方の闇が次第に濃くなってゆく頃、女は銭湯からの帰りに、そう云う祠や神社に手を合せて長い祈りをささげるのだ。祈りの中味はその女によって様々であろうが共通しているところは、その夜の客に恵まれますようにと云うことであつた。一夜に三人も客が来る夜もあり、ひとりも客のない夜もあつた、その客の姿、顔立ちなどに贅沢な祈りはかけられない。せめてあやしい病人であつたり、目鼻が普通についていない化物でないようにと云う遜りくだった祈りであつた。

その種の女は、その地方地方によって呼び名がちがっていた。寒干しと云う名は南アルプス降ろしの寒風の中に立って客を引くからであろう。関東一円では達磨で通る。坐布団や床の間枕に寝転んですぐ立ちあがるからであるうか。又東北の果てまで行くと昆布巻きとか雁鍋と云う呼び名もあつた。これは安くて珍味だと云うことであらうか。

「お客さん、下駄の音でわかるワ、来てくれる人の年だって……」

ろげさせて両足の間に顔を入れて上を見た。そこには、夕陽はとどかず、陰影の中に谷間があつた。そして谷間のあたりに、ひと雫透明な液体がにじみ出していた。

Y之助の心は先き程まで足さぐりでオバさんの股に近づいていた時の緊張が雪解けにも似て溶けさり、森閑とした深い木立の中に凝然と立った孤独を感じてオバさんの立ち姿に向って両手を合せていた。

「変なのね、手合せておがんだりして……」

オバさんはさっとカウンターからもとの自分が坐っていた場所に飛びおりて前を合せていた。

それから数日後、Y之助はその店へ行きたくなくて、今度は一層深い決意をしてその店のあつた駅に降り立った。決意と計画のある固い足取りで、そのような呑み屋が軒をつらねている一角を半日歩きまわったが、どうしてもその店を見つけないことが出来ない。たった数日のうちにその店は夕陽の金色の中に、溶け去っていた。それとも、オバさんも店も、狐狸の仕業で、Y之助は白日の中に夢を見たのであらうか。

お遍路は観音さまの示現を求めるさすらいの旅であるが観音さまは、その文字の示す通りかすかな音でしかなく、その姿はついにマザマザとこの目で見、この手でさぐることは出来ないものようである。

女はY之助を部屋へ連れこみながら言った。こう云う家に入るときは、前後に人氣のないのを全身の神経で見届けて、すっと飛びこむのである。家のものは大概姿をみせない。世を忍ぶ生き方だからだ。それでも時には女を使っている老婆などが、これ以上は人間の顔がみにくくなるまいと思われる程縦横に走った皺の深い顔に満面の愛想笑い浮べてのぞいたり、年とった男が独りで花札をいじっている姿を半びらきの襦どしに見ることがある。部屋に入ると女はY之助の前をひらいてアレを勢よく引っぱり出して、じっと眺めてから、つまんだり押してみたりしている。十七才のY之助には世の中にまだこわい者が多い。センセイ、オマワリ、オヤジetc。だ。がもうこうなると何もこわくはない、女の手はやわらかく、あつたかい、かれは両足が自然につばって、足の指がうち側にまがる程くすぐったい。女が厚手にぬりたくった安白粉の匂いも気にならぬどころか何やら好もしく鼻を刺戟する。でも余りうっとりとなつては女に見くびられるぞという背のびしたい気分も手伝って言った。

「ボクの、他の人のより小さい？」

かれは十二、三から自分のアレを弄ぶことを覚え、ずい分耽溺して来たから成長が途中で止つてはいないだろうかと云うおそれを秘かに持っていた。

「ちっちゃくないワ、普通だよ」女は言った。これはかれを一人前と認めてくれたことになってY之助には女

が神しくさえ見えてくる。だがY之助も、もう十七才、此処らでなめられてはいけない、なめられると一円が二円になったりすることもあるかも知れん。日雇労働者の男の日給が一円、女が八十銭の頃だ。二円あれば酒が呑める。銚子一本二十銭だ。Y之助は二円もおふくろの財布からいちどきに抜きとることは出来ない。一円でも、おふくろは「この頃だ、ちよくちよくお金がなくなるよ」とY之助の顔を真面に見て言ったことがあるからだ。かれは女を押し倒して、着物の合せ目に手を入れた。威勢のいい所を見せる必要もあろう。女の足許に跳出しが乱れて白い股があらわになる。黒い鳥はもうすぐだ。こうなるとY之助の意識は朦朧としてただ一筋に観音様に会いたくなる。客をとる前に入った風呂の匂いと人肌の匂いがまじり合っている。女は乱暴なことをしながら小さきみに震えている少年を可愛いくなくて、するがままにまかせておこうと言う気分になる。日によっては全く客の来ない夜だってある。こんな子供に出会うことは冥利と云うものだ。こうなると来ると女は商売気がうすれてY之助の前をさぐってかれの固いものをしっかり握って普通の女になってゆく。

「女のアレの巡礼は金がかかる、金のかからない方法ないだろうか」ある日Y之助は町の古本屋で「人体透視術」

とアレは相対的な位置にあることになるのだから人相はアレ相と相対的と云うことになる。その証拠にこんなことも書いてある。「揉み上げに毛うすき者、陰部に毛少なきもあるいは全く無し」

これはY之助にとって甚だタメになる本である。かれは学校の教科書など顧みずに「人体透視術」を愛読、熟読した。だがこの本を読んだだけでは満足出来ない。読めば読む程、本当にそうだからと人体透視術の説くところを実際にためしたい欲望にかられる。結局「人体透視術」はY之助をアレ巡礼に益々駆り立てることになった。

×

×

×

「Yさん、余りヒト馬鹿にしないでね。アタシこう見えてもちゃんとした結婚もして、二人も子供持つてるのよ」そのオバさんは威丈高になってY之助を叱った。だが、Y之助にとっては、ちゃんとした結婚も、二人子供持つてることも、そんなことは一向に、差支えない。ただ、そのオバさんの揉み上げがうすくて耳のつけ根にもとどかないのはアレに毛がすくないか、又は全くないかそれを確かめたい。一種のガクモンの情熱に燃えているのだ。

「でも、オバさん離婚してるんだろ、何故なの？」
「そりゃ相手が勝手に女つくって……あたしや我慢

と銘うった本をみつけた。これはX線による透視ではなくて、西洋、東洋の古い骨相、手相や、催眠術のたぐいを基にした一種の忍術の本である。序文のところに、こう云っている。

「物おしなべて内に蔵するところあれば、必ず形にあらわるるものなり。人体もこの原理をまねがうるを得ず。医師は打診、触診、聴診等によって病いの所在、性質を探る。吾人は身体の外観を観察して、衣服の内部に秘されたる部分の形状、機能を察せんとする者なり」

これはまさにY之助にとって天来の声に等しい。外にあらわれたところからアレを観ることが出来るというのである。だが催眠の術を説くところに「催眠の術は、女人を眠らせあやしき振舞いに及ぶが如き天地の正道に反したる行為に應用すること断じてやるまじく候」と書いてあるからY之助のアレの巡礼には適さない。だが総じてまことに適切なことが書いてある。例えば、「危機に頻してその危機を脱せんとせば放尿せよ。泡立てば必らずその危機を脱するを得ん」などは可成り応用自在であり、カガク的な根拠がある。又「足の裏がわに黒子あるは五臓六腑に重患の憂あるべし。黒子はすべて相対的にしてのどに黒子あらば必ず臍下三寸に黒子あり」相対的なんて言葉がY之助には気に入った。アインシュタインの相対性原理の解説書が巷に盛んにあらわれて来た頃である。Y之助の相対観によれば両手と両足は相対的であり、顔

が出来なかつただけよ」

「それだけかな？」Y之助は「人体透視術」に書いてあったことを頭の中で総復習して、このオバさんは性的に不感症気味か、又はあの方の行いを余り男のよろこぶ様に振舞えない高尚な性質を持っているにちがいないと決断した。そしてこの決断を立証するために、どれ程オバさんに叱られようと、威張られようと下手に出なけりやならんと考え、ねばり強く言った。

「オバさん一度だけでいい、さわらして……ネ、ネ」
「しつこい人ね、自分のいじくってればいいじゃないの……」

「ははん、こんな風に旦那を取扱ったにちがいない」
Y之助は観察をすすめながら言った。

「自分のいじくるってどんな風にするか知ってるの」
もうその頃Y之助の手はオバさんの足の甲をしきりとさすっている。「人体透視術」に女人の足は準性器なり、故に西欧の娼婦、全裸になるも靴下を脱がずとある。

「知ってるの？」とY之助に軽ろんじられてはオバさんの気位がゆるさない。

「こうするんでしょ、こうすりゃいいんでしょ」オバさんは邪剣にY之助のモノをズボンの上から握って扱いた。そのやり方はやさしくなく、しかもえらい勢いで上下するからY之助は悲鳴をあげた。「痛い、いたい、オバさん痛い」

痛いと言われるとオバさんはひときわ手の速度に力を入れた、いっ時も早くY之助に一回戦を終らせて沈静をあたえ、自分をブジョクしたことに對する仕返しをしようとする熱意が感じられた。それは自分の氣位を維持する自尊自愛の氣持が先立っていてY之助をいい氣持ににしてやろうとする他愛の精神に欠けている。痛い痛いと呼んだY之助は復讐心で先程まで遠慮して足の甲をさすっていた手でオバさんを後ろさまに押し倒して着物の合せ目からアレ目にかけて手を入れていた。オバさんは両股をしっかり締めて禦ぎながら言った。

「何すんのよ、Yさん、やめてやめて……Yさんてば……」

だが防禦のしめ方は段々ゆるんで、「ヤメテ、ヤメテ」を連発しながら返ってY之助の手がぬきとれなくなる締め方に変っていた。

「オバさんだって自分のいじくるんだろ、ボクは知ってるぞ、そこそこへボクの当てて……」Y之助は喘ぎながら言った。初めの復讐心やオバさんの氣位を憎む氣持は消え去って、ヒタスラ觀音様に到達したい願ひに変っていた。だが年増のオバさんの抵抗はつづくのでY之助はかの女の抵抗はあたりが真ッ暗になればゆるむ筈だと「人体透視術」の秘術（暗闇の中でモノを透視する法）を思い出して片膝を立て片手をのばして電氣を消した。そして催眠の法を応用して低い声で繰り返えし言った。

のだが、アレの毛はちゃんと柔かいながらアレを覆っていた。そしてオバさんの高尚な氣位なぞとはかわりもなく、その毛は谷間の水にぬれてなびいていた。

今日巡礼は交通機関、殊にバスによって難なく札所をまわる。Y之助が子供の頃は、未だまだ山野に伏せて野宿の夜が多く「善根宿」「遍路宿」として大して変りはなく「更けし夜に目覚め哀しき馬と吾れ……」とは若き女巡礼高群逸枝がかの女の遍路道中、農家の厩に宿をあたえられた時のうたである。だがかの女には熊本から大分に出る途中・觀音様のおつげによって伊藤官治という七十三才の老人の同行が出来て、宿につくと塩でかの女の足をもんでつかえたと言ふ。Y之助だって二十四才の若い觀音様の化身に出合えば、足を塩でもんで仕えるくらいいと易いことであつたらう。かの女が八十八ヶ所を円成することが出来たのは伊藤官治という用心棒があつたことであることは「遍路狩り」という今日の浮浪者狩りの時の警察官と官治老人との言葉のやりとりでわかる。かれはお巡りに言った。

「お遍路をどげえ心得るか。お大師さまの大切な同行ぢやが、どげえ心得るか、その心得を知らぬか、いまの若い者は生意氣ぢや、仏の教へちゅうこと分つたらんわ」



た。

「オバさん、ホラ段々世間が遠くなってゆく……遠くなってゆく……トオークなってゆく……そしてあなたの膝の力はゆるむ……ユルム……ゆるむ、あなたがいつも指でこするところに……ボクのモノを当てる……当てるアテル……あてるあてる……あてる」

「こうすりゃいいの？」

オバさんの股は段々開きながら、かの女は細い声になってつぶやいた。何度もつぶやいた。「こうすりゃいいの」「こうすりゃいいの」そしてY之助のモノを手探りで握り、股のところへ持ってゆこうとする。オバさんは浅い催眠状態に入ったのだ。だから「こうすりゃいいの」と言いながらその手は自分の股の外側をすべっている。

Y之助は「人体透視術」の催眠の項にある禁止事項「女人を眠らせ、あやしき振舞いに及ぶがごときこと、天地の正道に反したる行為」を行なってしまったのである。

だが天地の正道を訪ねて遍路巡礼をしているんだと云うY之助の情熱はいささかもたじろがない。かれは自分の腰をひねってオバさんの手がアレに届くように修正しながらとうとうオバさんの股の締りをほどこしていた。あとは「暗闇の中でモノを透視する法」を行えばいい。

あった。「人体透視術」の教えはまちがっていた。オバさんの揉みあげは耳の頂点までもとどかない程うすい

Y之助もいつの間にか伊藤官治老人と同じ年の老人になっていったが、かれの心中白雲流水を侶としてアレの巡礼をつづける氣持ちは少しも衰えていない。

離婚届

柴田 富佐子

受話器に耳を当てた途端に、奥歯を吸う音が聞えた。それは、姉の言いくい事を言う前の癖だった。

「もしもし」

私は努めて平静な声で自分の名を名乗った。

「ああ、あたし」

姉は続けて奥歯を吸った。

「何か用」

「あのね、あんたの判を押して貰いたいの」

「判？」

「うん、やっと話し合いがついて……それで離婚届を出すのに、立合人が二人必要なの、一人はもう頼んで書いて貰ったんだけど、あんたにも頼みたいと思って」

「そう、いいわよ」

「今夜行ってもいいかしら」

「別に構わないけど」

夕飯を了えて洗い物をしていると、庭で犬が吠えだし

くく」

「今、忙しいの」

「まあね、いつでも同じよ」

「お茶、コーヒー、どっちがいい」

「熱いお茶もうわ」

私は湯を沸しに台所へ立った。茶をいれて居間に戻ると、テーブルに一枚の紙が拡げてあった。「離婚届」と書いてある。この用紙を見るのは初めてだった。

男の妻の名前と住所が書かれ、判が捺してある。横棒の多いその名前は、字画の止めが見立ってふくらんでいる。これを書いた時の女の感情の昂ぶりを見る想いがして、私は深い溜息をついてしまった。

姉は無言で、用紙の右の方を指さした。そこには立会人二名の署名、捺印の欄があり、下段にはすでに私の知らない名前が書かれてあった。

「だれでもいいんだけど、一人位肉親の名が欲しいと思って」

言い訳するように姉は言った。

「いいわよ」

私が名前と住所を書き、印を捺して紙を渡すと、姉は「ありがとう」と初めて嬉しそうな顔を見せた。

「あんたにもいろいろ心配かけたけれど、これでやっと終わったから……長かった」

何年になるんだろう。家をマンションに建て直し、三

た。(来た)という意識が私の神経をけばだたせ、私はお湯を出しっ放しのまま足音の近づく気配に呼吸を合せていた。

「そんなに吠えないでよ」と言いながら姉が玄関の戸を開けた。私はスリッパを二組取出して並べた。

「電車で来たの」

スリッパを見て姉は言った。肩にがちりはめられていた鋳型がガラリと外れた気がした。

「みんなは」

姉は部屋を見廻して言った。

「まだ会社から帰って来ない。子供達は部屋で勉強してんじゃない」

「そう」

椅子に腰かけた姉は、また奥歯を吸っている。

「どうしたの、虫歯」

「うん、歯医者へ行きたいんだけど、なかなか暇がな

階の一室に同棲するようになってさえ、十年余りの年月が流れている。それ以前にも母とトラブルの絶えなかった何年かがあり、母が亡くなってからさえ七年が経つ。その間に男の娘達は短大を出て嫁ぎ、息子も大学を出て社会人になった。入学、卒業、結婚のそれらの費用はその都度姉が支払い、いま又、男の妻が納得するだけの慰謝料を支払った。

二十年近い歳月を、姉は一体何のために働いて来たのか。しかも、それによって姉の受ける報酬は、男の家族の憎しみだけではないか。いや確かに浪花節と歌謡曲のテレビしか見ないような、下スな初老の男が、姉の手に残った。

「慰謝料払っちゃったから、当分スカンピンよ」
笑いに紛らして姉が言った。

「高い買物ね」と言いたい言葉を私は飲みこんだ。

「あの人も全部捨てて来たんだから、私もその位のもののは捨てなきゃね」

又歯が本当に疼き出したのか、姉はしきりに奥歯を吸っていたが、

「あんたは、いい結婚してよかったわね」

と私の顔を見つめて言った。私は何と答えてよいか解らなかった。

母の亡くなった晩の事を、私は忘れない。

病院の霊安室に運ばれた母を前に、姉は

「今夜はあんたがついててね。母さんはあんたが一番可愛かったんだから」

と言いついて帰ってしまった。

いかに母とはいえ、コンクリートむきだしの地下の部屋に、死んだ人間と二人で一晩過せというのはひどすぎる。死に対する本能的な恐れがある。従弟でさえ

「いくら何でも、一人で残っているのはひどいよ。

僕と一緒に残ってもいいけど、兄姉がいるのにそれも出しゃばるようで変だし、兄さんの奥さんに残るように、僕から言ってみようか」

と言って、兄嫁を探してくれたが、すでに兄も兄嫁も帰ってしまった。この従弟は学生時代に家に下宿していた事があって、母とは気の合う仲だった。

幸い浪人中の娘が

「どうせ私は起きてるんだから、一緒にいてあげる」と残ってくれた。

私には姉が男を一人にしておけなくて帰ったとしか思えなかった。私は姉を蔑み、男を憎んだ。柱に寄りかかって膝の上に本を据えている娘の脇で、私は毛布にくるまって横になった。うとうととしては目が覚め、目が覚めると顔に白布をかぶせられた母の姿を眺め、母がいなくなって鎖を解かれた囚人のように晴れ晴れとした顔をしているであろう男と姉を想い浮べ、その都度私は唇を噛

んだ。

帰るという姉を私は駅まで送って外へ出た。暗くなると人影が途絶え、都心とは思えない静かな暗さに包まれる道である。

まだ何か私に話したがつている姉の様子は、私一人で受止めるには気が重すぎる予感があった。話題を外すには、犬でもないよりはましだと、とっさに判断して、私は犬の名を呼んだ。

「ついでに犬を散歩させちゃうわ」

犬は勇んで綱をぐんぐん引張ったが、私は綱を引締めてその速さには乗らなかった。喉を締められて、犬はゲーゲー言い続けた。

「大きくなったわね」

「汚なくなつて」

前足を宙に浮かせるようにして歩く犬の姿を二人はしばらく無言で見ている。

「慰謝料はね、現金でくれって言ひの、だから新札で揃えて持たしたんだけど、あの人がそれを出すとね、すごく嬉しそうな顔して、ありがとう、つしまつちやつて、じゃさようなら、ですって、夫婦なんてそんなもんかしらね、あいつは金だけが目当てなんだ、ってあの人も言つてた」

妻と子供達を捨てて他の女に走った夫に、どんな愛想

を言えというのだろう。私には男の妻の心情は十分すぎる位理解できても、女の揃えた金を懐に、妻の前に出る男の心情はいささかも理解できない。

姉は私が祝福の言葉を一言も言わないのに拘泥している。何か言つて貰いたくて、しかし言つてくれとは言えなくて、苛々しているに違いない。そんな姉の気持ち、私を伝つて流れてくる水のように、私の心に流れこんでいながら、私にはどうしても「おめでどう」の言葉が言えない。気味悪い沈黙を破るように、私は街路樹の根元にすり寄ろうとする犬を邪剣に引張った。

「可哀想よ」

「いいのよ、この犬お行儀が悪くって」

気がつくとも、姉はまたしきりに奥歯を吸っていた。

「そんなに痛い」

「うん、歯だけじゃなくて、この頃この辺がずつとしびれたような感じなの」

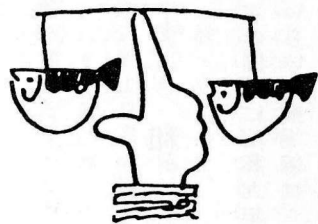
姉は左の目の下から顎にかけて指先で撫で廻している。

「血圧が高いんじゃないの」

「そうね、きっと、首の後ろも変に重つたらしいし、罰が当たったのよ、きっと」

姉は以前から血圧が高かった。ここにくるまでの心労が又一段と血圧を高めたのかもしれない。

右手で首筋を押している姉の横顔を見ている中に、姉への哀れさが素直に私の胸に湧上つて来た。この人も、



『汽笛一声』今は昔

大 和 禎 人

茫々六十年近い昔の「参宮記念」という一冊の印刷物を発見した。(昭和三年二月、東京市富士前尋常小学校とある。緑色のリボンで二か所ほど綴じられた粗末な、それでも二十数ページにわたる当時としてはその準備にかなり時間をかけたと思われるものだ。ろう原紙に鉄筆の手書きであることは止むを得ないことだろう。今はワープロを備える学校すらぼつぼつ見られる時代にこれはまさに隔世の感を免れないもので、多く鮮明を欠くという部分もある印刷物だった。しかし、それでもそれはそれなりに一種貴重な古文書の発見には相違ないのであった。O君が発見したものだ。

「ちょっと興奮ものだった、ねえ懐しいじゃないか、国府津、山北、小山とくるからたまらないよ、古い話だ」
「おやっ、小山じゃない、駿河となっている」
「うむ、それねえ、この頃に小山をそう呼び変えたところには説明されている、だが、いまは駿河小山という

らしい、丹那トンネルの開通は昭和九年とあらためて調べてわかった、それらしい御殿場線はローカルとして残り残される、同じ駅名ではここで中泉というのも、いまは磐田、地元の運動が実って新幹線の停車駅にもなろうという時代のうつりかわりようだ」
「鉄道唱歌の時代だねえ、あと押し蒸気機関車を連結するために、山北では十分間停車なんてのんびりした時代だった」

「電化は国府津までだったんじゃない？」
「そうそう、そういえばそうだった」
「いではくぐるトンネルの
前後は山北小山駅
今もわずれぬ鉄橋の
下ゆく水のおもしろさ
大和田建樹一流のリズミカルだよ、いいねえ」
「よく覚えていたな、君」

「うむ、これには相当苦心もあってね、知人の音楽の先生に聞いてみたが、調べがつかなくてねえ……」

「そんなもんだらう、口ずさんだ覚えがあるとしたら、大正生れのこどもまでだらう、

汽笛一声新橋を

はや我汽車は離れたり

愛宕の山に入りのこる

月を旅路の友として

さて、お次はどうだっけ」

「うむ、こうだな、

右は高輪泉岳寺

四十七士の墓どころ

雪は消えても消えのこる

名は千載の後までも

いい調子のもんだねえ、ここには汽車の旅の夢がある、うれしいねえ」

「うむ、」

O君にあわせてK君も唱和した。しかし、歌詞の記憶はそのへんまでだから、あとはハミングで二人ともしやし酔うかに見えた。

「延々六十六節、その末尾はこうなんだねえ、写しておいたよ、

思えば夢か時の間に
五十三次はしりきて

神戸のやどに身をおくも

人に翼の汽車の恩

あと続くもう一節あるが、この(人に翼の汽車の恩)というところが実にいい、素朴だねえ、この唱歌の作られたのは明治三十三年五月、新橋―神戸間の全通は十二年、起点が東京駅に移ったのが大正三年の十二月だそうだが、神戸まで五八九・五キロ、戦前の特急で九時間普通列車では十六時間を要した、この唱歌の作られた明治三十年代では特急で十三時間はなかったというのだが、歩いた時代から考えれば汽車の恩に感激したとしてもふしぎではない、(人に翼)がいいじゃないの」

「ほんとうだ、ところで「参宮記念」のわれわれの修学旅行の方はどうだらう、おそろしく時間のかかった覚えがある」

「それだがね、これは六年生にとって、大変なハードなスケジュールだったということがわかる、

昭和三年二月十日(註・金)

午前五・〇〇：：学校集合、出発

五・二〇：：駒込駅より省線電車乗車

集合が五時ということにまず驚くね、二月といえは払暁までは時間がある、暗い道をたどったわけだ、省線電車というのもいい」

「そうだっけね、たしかそうだったな」

「さて、東京駅へは五・四五ホーム着、とある、

六・一五……東京駅発（臨時列車二見マデ直行）

二見マデ列車中ヨリ沿線見学（別紙参照）

静岡昼食

名古屋晩食

午後九・四五……二見着、朝日旅館ニ投宿、

時間がかかって大変だった、六年生といってもまだ子供だからね、他校と合同の臨時列車の車中は通路を渡す板が準備されていて、補助椅子がわりに使われた、公平にということだろう、時々先生が座席の交替を命じた：「：」

「そうだった、そうだった、乗ってる時間が長いのでしかられても騒いだもんだった」

「旅館に着いた時刻はわが家なら、もう寝ているかも知れないね」

「そうだろうなあ、まして長旅のあげくだからな」

「新幹線なら大阪まで一直線、三時間半なんだから、疲れてあたりまえだったな」

「その朝日館という旅館では就寝前たしか（娯楽会）

というのがあった、一方には土産物屋が出張してきて店をひろげた、この時だった、君が落語を演じたのは：」

「そう、（七巻と八巻）というのだ、それで君がオレをはじめて認識した」

「そうそう、そのことではここにはるか後日の一通の

手紙も発見している、それを見せよう、これだ」

「ほほう、だれの」

「だれて、君のさ、きわめて真面目なものだ、恐いくらいのものだ、いいかい、読んでみよう、友人O君へ」

君トハ随分喧嘩モシタシ仲良ク遊びモシタ。今迄ノ交友ヲ深ク感謝シマス。僕ハ戦死スル。君ガ遺骨ヲモツテ呉レ給エ。

最後ノ作品ハ「曼珠沙華」。ソノ次ノ作品ハ「Tーノ死」。

河童ハヤツバリ僕ノ心ノ拠リドロダ。君ハソレヲ笑フカモ知レナイガ、曼珠沙華マデ到着スルト、モウアトハアノ付近ノ地図ヲホツキ歩クノガ河童ノ予定ダッタ。君ガ伊勢ノ朝日館デ僕ヲ「七巻ト八巻」デ発見シタ、アノママノ姿ガ今ノ僕ノ姿デス。

僕ハ生レナガラノ楽道家ニシテ、「センチメンタリスト」デ野狐禅家デシタ。昭和十九年九月十日 Tーと、こういう文面だ」

「……」

「多分覚えのないものだろうな、（過去からの音信）というやつだな、発見した私も驚いている、これを書いた年月が示しているように異常なまでに緊迫した事情の中で書かれたものということがわかる……」

なにやら文意不明のところが多い手紙だが、K君がO

君にあてて差出したものらしい。当人同志はこれで通じたものとしても、今はどうかわからない。はたしてK君は怪訝の面持である。

「それにしても、君はよく旅館の名前を覚えていたものだ、この印刷物が事実を証明している、もっとも手紙はその時から十三年後、そして発見はさらに伊勢参官から五十七年後だから、さすがの君も覚えていまい」

五十七年も前、クラスの違ったK君が娯楽会におどり出て、落語を演じた度胸の良さに感心し、同じ中学校に進んでから交友がひらけ、その時の印象をK君に告白したことがある。真似ようとしてO君にできない行動だったのだ。

転校生で中途入学のKは一種の気張りがあったものか、それは必ずしも自己顕示欲から出た行為とも言えないものであった。（アノママノ姿が今ノ僕デス）と手紙に見える文字は一種の三つ子の魂を託すものにうけとれる。それにしても、（僕は戦死スル。遺骨ハ君ガ持ッテ呉レ給エ。）となると突飛の感を免れないのだが、これが書かれた昭和十九年九月という時代を考えると、笑ってはすまされないものがある。

TーというのはK君のペンネームである。「曼珠沙華」というのはその時期、同君が全霊を傾けて書いていた作品であった。未完の原稿のまま素読し、O君に熱っぽくその構想を物語ることのあった作品だった。この作品以

後K君は小説らしいものを書いていない。戯れ言のように

にこの手紙に書いている「Tーノ死」はそうした予見をもつて仮題したものか、あらためてこの手紙の発見によって一種の不気味さをO君に投げかけていた。K君の河童好きは早くからのもので、とうとう自ら俳号を河童の異称に定着して俳句作家の地歩を定めている。

「これは本気だよ、えらく悲壮だから、君は笑いかも知れんが、真剣なものだった、そういえばたしかにこういうものを書いた覚えがあるな、思い出したよ」

「いや、もちろんこれが君の虚勢だとは思わんよ、君も言う通り、悲しいほど真剣なんだ、だから悲しい」

「うむ、悲しいか、悪い時代だったなあ」

二人はそこで感傷に浸るものらしく、大変神妙な面持で言葉を途切らせた。

O君は前記のようにこの手紙の示す九月に召集をうけ兵隊生活をしたが、K君の方は戦争末期の二十年六月になって召集をうけた。

「まるで君は冷やかに軍隊へいったようなものだ」とO君はK君を冷やかすのだが、その頃はすでに銃後も修羅の戦場化をみているから、すでに妻子を抱えるK君だったので、六月召集の悲壮はむしろO君こそ察し得ない部分がありそうである。

「さて、この手紙を発見した僕はとっさには召集をうけたものを慰めるための手紙かと思ったが、そうではな

かった、君の手紙とたまたま同じ日付で僕のところへは赤紙が速達で発信されていた、松本在の叔父からだ、なにか偶然でないような気がする」

K君とO君の親交が並々ならぬものであったとはいえず、多分にミステリーに思われることの次第だった。二人の間にどうかしてインスピレーションのようなものがはたらいたのかも知れない。

「もうその話は止めにせんかい」

「うむ、そうだな」

「ところでこちらの印刷物の「参宮記念」の方だが、わざわざ焼津をヤケズとふり仮名しているんだが、これはまずい、思わぬユーモアだ、さて歌の方は、さやより抜けておのづから

草なぎはらひし御剣の

御威は千代に燃ゆる火の

焼津の浜はここなれや

と、こうだな」

「よし、ゆっくりと鈍行で行こうか、お次はどうかな、せっかく写してあるんだろ」

「うむ

琴ひく風の浜松も

菜種に蝶の舞坂も

うしろに走る愉快さを

うたふか磯の波のこえ

となる、少しはしよって準急ぐらいかな」

「そうか、そうか、ま、いいやな、それにしても、このメロデーはなにかに似ているんじゃないかな」

「それだよ、それが「日本陸軍」、あの（天に代りて不義を討つ）は明治三十七年同じ作者の後の作なんだ」「そうかどうりで、うたっているうちにチャンボンになりそうだよ」

「なるほど、いわれてみると、チャンボンの中にミリタリズムの足音が聞えてくるような気がする」

「さて、「参宮記念」の印刷物にもどうろ、あらためて感じ入った項目がある、それはこれ、（祈誓）というものだ、読むから聞いてほしい、いいかな、

祈誓

昭和三年二月十一日東京市富士前尋常小学校第六学年児童一同 当校後援会ノ後援ニヨリコノ神宮ニ参拝ス 実ニ無上ノ光荣一代ノ本望ナリ 今心身ヲ清メテ神前ニ額ケバ 自我皇祖ノ偉大ナル神靈ニ接シ 只管ニ聖代ノ鴻恩ニ感激スルノミ 茲ニ謹ミテ我皇室ノ繁栄邦家ノ隆昌ヲ希ヒ併セテ我等神靈ニ誓ツテ 皇祖皇宗ノ御遺訓ヲ服膺シ忠良ナル臣民トナリテ 聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

どう思う、これを」

「ふーむ、ほー、としか言葉がないねえ、へえー恐れいったねえ、大時代だねえ」

「そう思うだろ、古めかしいねえ、僕も驚いたのなんの、これは大発見だった」

「これ、だいいち、わかる、いまの世代に、わかるのはどういう年齢までだろう」

「そいつはいっぺん調べる価値があるだろう、すくなくとも疎開騒ぎより前だろうから、五十代後半より上はたしかだろう」

「そういう計算になるなあ、まいったな」

「なにをまいることがあるのか」

「だって、わかるだろう、この大時代はとくべつのものだからな、な、そうじゃないのか」

「それはそうだ、たしかにとくべつだな、うむ、とくべつだ、そう言えるな、臣民われらだ」

「ひとつ調べてみないか、その線引きをすれば日本人の仮面をはくことができる」

「仮面ねえ、たしかにそういう傾きはある、だが一般的にはなんの罪もない、生きるための仮面だった、なにもそうむきにらなくなっている、諸行無常じゃないの、いまはお伊勢参りの途中だよ」

「そうだ「汽笛一声」だ、「日本陸軍」にスリかえたのは一体ぜんたいだれさんかね、大和田建樹に罪を着せることはない、君が諸行無常なら行雲流水という、まだ朝日館の朝が明けていない、僕が躍り出て落語の「七巻と八巻」をやったところだ」

「うむ「参宮記念」の参拝日程の方はこうなる

二月十一日（註・土）

午前六・〇〇……起床

七・〇〇……朝食

八・〇〇……旅館出発 二見浦見学

八・三〇……二見停車場集合乗車

九・三〇……内宮前下車

内宮参拝

一、五十鈴川ニテ手水

二、参拝（外玉垣南御門迄参入）

1 最敬礼

2 拍手（四拍）

3 最敬礼

東御門ヨリ右ノ殿地（御造営地）拝観

荒祭宮（祭神の説明不鮮明）

風日祈宮（ ）

太々御神楽奉奏

紀元節祝賀式挙行

記念撮影

午後一・〇〇……如雪園着（大阪ノ富豪帯谷伝三郎

氏ガ神宮参拝者ノ為ニ設ケラレシ

無料休憩所ナリ）

朝食休憩

三・〇〇……内宮前停車場集合乗車

四・〇〇……：外宮前着

外宮参拝（外玉垣南御門マデ参入）
とあって、これからあとの参拝の手順は内宮と同じだから省略しよう、それにしても、外宮着はすでに午後四時ということに驚くね、どれほどハードな行程かがあらためてわかる」

「その日が紀元節だったなんて、忘れていた、忘却とは忘れ去ることなりか、厳寒の冬の日をいたいたいけな小学六年生が酷しいねえ」

「そう、いじらしいばかりのものだ、参拝を終って、

付近見学

夕食

とある、ここには時間が明記されていないが、午後の七時ごろじゃないかな、

八・〇〇……：山田駅集合乗車

八・三〇……：山田駅発

名古屋就眠

となる、みんな疲れきっていたはずだ」

「可哀相にな、皇大神宮参拝は必修科目だった」

いまは二人が当然の老境だから、これは案外な客観を許されることなのだ。彼等が兵隊経験を含める戦争体験を物語る時に似ている。懐し気であり、しかも楽し気であえあった。

「うむ、お可哀相に、だな、は、は、は」

どうして笑えるものか、はなはだ不可解というべき光景を演じていた。

「まだ日程は終わっていない

二月十二日（註・日）

午前五・五九

六・〇五）……：沼津 朝食

七・四一

七・四七）……：国府津

九・二〇……：東京着 省線電車ニ乗替

九・五〇……：田端着

一〇・三〇……：学校着

訓話解散

ということだ」

「山田駅を出てからなんと汽車の旅十三時間だねえ」

「退屈さま、もう少しこの「参宮記念」の内容を紹介しておこうじゃないの、この冊子の目次の部分をながめておこう、ご退屈さまついでで、こうなればね、

目次

一 御製

二 内宮図

そして、その次にさっきの（祈誓）で、これが三だ、次にいこう、

四 宇治山田及び二見付近略図

五 沿道略図

六 日程

七 沿線見学事項

八 伊勢神宮

九 心得

これで大正、昭和初期生れの小学生が経験した、それこそ昔、いや、そのまた昔という感覚で思い出せる修学旅行としての伊勢参宮プログラムのすべてだ」

「いやはや、なんとも苦労さなことだったね」

「でも、われわれは「汽笛一声」の名調子にのってそれなりに、ともかく汽車の旅に満足した、なにがなにやら夢中で引卒業しながら臣民の道を歩きはじめた」

「僕の落語みたいに七巻にしろ八巻にしろキリリと止めて人生を歩いてきた」

「ついでだから汽笛一声新橋を……の鉄道唱歌のことを調べておいたから、その話でこの対談を終ることにしよう、明治から大正にかけて、いや昭和初頭ぐらいいまだ余韻をひいて、乗物好きの子供達に夢を与え一世を風靡した鉄道唱歌、その解説だ、

初版が出たのが明治三十三年五月で、作詞は大和田建樹、作曲は上眞行と多梅稚との二曲譜があり、発行は大阪の楽器商三木佐助で定価は金六銭であった。作曲の上は宮内省雅楽部に関係していただけに、その曲も高踏的なものがあったが、大阪の師範学校の先生だった多梅稚の曲

はその弾むようなリズム感が若い人たちの夢と

あこがれを誘い、全国津々浦々で歌われるようになった。もっともこの歌を最初に売り出したのは、やはり大阪で出版業をやっていた市田元蔵で、それが倒産のため三木の手に移った。たのたのといわれている。そして三木は第一集の東海道編の人氣に力を得て山陽、九州、東北、北陸、関西編などをつづいて出版していった。

と、まあこんなふうの説明だ。この鉄道唱歌が得た爆発的人氣はなんだったのだろう、そして「日本陸軍」をこれにダブラせ、思わぬ古文書の発見というべきプリンツの中に掘りおこされた事実から、風化しかけていた心象の風景が甦った、これはひょっとしてわれわれが悪い時代をのりこえた力だったかもしれない、君からの手紙はそうした怒濤の中に無事を恵まれて、これも貴重な証言をはたした」

「よからう、ところで、小学生が修学旅行にぞっこん疲れはて、なにを心に刻んだものか、これ以上はめいめいの心に問うしかすべはないようだな」

「そうなるな、おひらきとしよう、「汽笛一声」の歌詞は写しておいたから君にさし上げるよ」

「今は昔の物語りだったな、しかしお互に今を大切にしようじゃないか」

「そうともさ、お互にな」

（六〇・六・二七）

松尾芭蕉 臨終の蠅

八十島 元

十月十日

「食べてください、どうぞ食べてください」

広瀬惟然と次郎兵衛は、炊きあがった土鍋の粥から飯汁だけを井へたんねんに掬いあげながら、二人共ぼろぼろと涙を流しあっている。

その二人の挙措をじっと見守っている、去来や乙州、支考に正秀、それに之道など、どの顔も、唇や鼻を歪めにゆがめ、両手のふさがっている惟然と次郎兵衛の分まのように掌と甲をくしゃくしゃに濡らして誘われ涙で嗚咽を忍ばせている。

師の芭蕉が病床に倒れてから十一日目、こんな涙の光景は始めてである。

元禄七年五月、次郎兵衛を伴って江戸は本所の芭蕉庵を発ち、西国行脚の旅にでた芭蕉は、郷里の伊賀上野から、大津、膳所、京を径て、七月には盆会のために再び

郷里に戻り、そこで惟然や支考と落合い、九月に大阪へ姿を現わした。

その頃から芭蕉はときどき発熱したり軽い下痢があったりしたが、生来胃腸が弱いのであまり気にはしなかった。

ゆくさきぎきの蕉門の弟子たちが催す句会には、辛いことがあっても無理も多少はした。

惟然が伊賀上野を出立するとき、師の兄から「今度の旅ではいままでになく体が衰弱しているように思われるので心配でならない、なにかあったら必ず報せるように。どうかその時は介抱をくれぐれも頼みまするぞ」と云われたりして、ずっといやな予感に纏っていたので、少しでも師の顔色がすぐれないと、

「お止めになっては」

と諫めたが、

「ほんに気鬱であれば止めましょうが、さして不安

も覚えぬので大事なようじゃ」などと云って、芭蕉翁来る、と浪花の俳諧人たちのはしぎように「断わるは気の毒」と心まかせだった。

惟然ははらはらしながら、支考と一緒にどの句会にも同道したが、奈良、大阪と幾日かの間に、身の震えるような師の名吟に接した。

この道や行く人なしに秋の暮

白菊の目にたてて見る塵もなし

秋深き隣は何をする人ぞ

大阪では、土地っ子の之道が、宿の世話から洗濯にいたるまでなにくれとなく面倒を見てくれるし、その熱心さにも芭蕉はほだされていた。

惟然にはわかつている。この道や、の句の「この道」とは、芭蕉の唱える蕉風を、理解してともに歩もうとする弟子のいないことを嘆いたことであり、隣は何をする人ぞ、と吐息する師の孤独をひしひしと感じていた。ことに近頃、師の強調する、軽み、の心は、惟然もまた接するのに苦悩なくしてはいられない。

そのこともそれ。弟子同士、主だった者はすでに一國一城の俳諧人なので、互いに主張しあうあまりの確執のしあいも目に余るこの頃であり、江戸でも大阪でも京でも、師の芭蕉に蔭でさからう者もちらはら目立つ。

それもあって芭蕉は出来るだけ弟子たちに触れたいと願っていた。

ところが、とうとう、園女という弟子、女流俳人の招きでの、句会の後で馳走になった菌の料理が胃に負担だったか、翌日になると激しい腹痛と泄痢に見舞われ、一日で肋骨が突出し、床に伏したままになってしまった。

惟然と次郎兵衛はそれからずっとかわりばんこに粥を炊きあってきた。ことに惟然は、師の体の無理を強引にでも引き止めなかった自分を苛み続けていたので、他の誰にもこの仕事をさせたくなかった。「せめても」と思うと、思う度に、師の食がすこしでもすすんでくれ、そしてそれが師の肉体に吸われてゆくことを願ったが、いつも裏切られた。食べた倍くらい腹痛と一緒に放出してしまうのである。そうかといってなにも食べないでは、餓死するばかりだし。

急を聞いて大津から駆けつけた弟子の木節もいろいろ手を尽すが、彼の調合する薬も、もう受けつけなくなっている。木節は医師である。

その木節がひとりだけ病室で診察しているので、涙の仲間入りをしていない。

木節は昨夜一睡もせず、新しい薬の調合をしていた。朝それを飲ませたので、結果をはやく知れたがっている。もしそれでも師に変化がみられなかったら、他に医師を求めて欲しいというのが本音らしい。ひそかに去来と惟然には、多分どちらにしても臨終の近いということを洩らしていた。

井にとつた重湯を飯茶碗半分くらいにして次郎兵衛が病床に運んだ。

「お師匠さま、どうか一匙お召上り下され」と唇へ触れた。惟然も他の弟子たちも祈る気持で見入った。

芭蕉はいやいやをした。

「新しく調合した薬で食欲もわいた筈でございます。お食べになっても昨日のようなことはございません」と木節が医師らしく毅然としてみせるが、木節を見ながら、そつと眼をつぶって、その視線が柔らかに、彼の苦勞をねぎらうてやる思いやりはあっても、やはり口を結んでいやいやをする。

昨日は、朝のうちは爽やかな容態だったが、昼過ぎになつて夕刻まで、着替をしたかとおもうと激しく汚した。その自分の姿を「浅まし」といって、弟子たちを近くに寄せなくなった。部屋に香を焚かせ、ときどき障子を開けさせたが、寒さに耐えられなくなると、弟子の方で師の表情を読みとつて閉めた。

次郎兵衛は、俳諧の弟子でなく、身内といつてよい。吞舟と舍羅は之道の弟子で、いうなれば芭蕉の孫弟子で木訥なうえ従僕のような人柄であるので、きがねなくしものことまでまかせていた。之道の連れてきた洗濯婆さんがそれをせつせと洗った。

木節は師が昨日の騒ぎを恐れて食べないのだと思つてゐるようだが、惟然には肉体の苦しみよりもその結果の

不淨のありさまが、耐えられなくいやいやをしているのだと思える。

臉が黒づんで眼球が盛りあがっている。その眼が木節から去来へ、支考、正秀とじゅんじゅんにゆっくり見廻し惟然で視線が止まると、そばへ来るようにと招いた。惟然が膝行して口元へ耳を寄せると

「去来どのとそなただけ残ってください。容態の静かなうちに話して置きたいことがあるのじゃ」といった。

一匹の蠅が羽音をいきなりたてて芭蕉の額に止った。

惟然が思わず「叱ッ」と手を振った。

惟然と去来を残してみんな隣の部屋へ姿を消す。それを見たのか、追われて落着きなくぶんぶん飛びまわっていた蠅が障子に黒い衣魚のようになって動かなくなるのを待ったのか、やがて、

「愚老の生涯もすでに極まらんとしておる」

と去来の手を布団の端を持ちあげて握ろうとする。その掌を押し戴くように去来は執つて膝をすすめた。

「身の安すべき栖もなく、草を褥、土塊を枕にして終るうとも悔なき身であるのに、このように美しい褥の上でそれも一期一会の契りの友たちに囲まれて賑わしく終るうとは本望じゃ。（此秋は何で年寄る雲に鳥）とは、まことに身に似たるや、去来どの惟然どの」

二人は「はっ」といって摺り寄った。

「秋の頼りげない雲の際に翔ぶ鳥の姿こそ愚老そのもの

じゃ。この秋もようやく更けての衰えの旁若無人さ。ああこの秋もまた漂泊のうちに暮れてゆくのか、と自ら憐み自らを弔するの感無量のあまりじゃった。けれど雲に遊ぶ鳥は籠に飼われて餌に飽くことのない鳥を羨みはせぬもの……この感懐の潔きよさはつゆも乱れぬが、どうぞ惟然どの、郷里の兄には報せずにおくれ、たとえ愚老の身が大切に及んだとしても、しばらくは沙汰のないようにどうぞしておくれ惟然どの」

惟然は頬いっぱい声を呑んで、去来の握っている枯枝のような掌を両手で包んで額を押し当てた。

「それから去来どの、愚老に叛いて遠ざかった弟子を頼みまするぞ。いかにその者を憎む者がいたとて、説得するの勞を厭わずにの……彼の者もその者も愚老にとつて我子同様の、じゃ」というと一息ついて、

「後刻、支考に遺言を書き記して欲しい……さてこれでさっぱりとしたので、梨の一切れも食べたいものじゃ」

「おお、食欲が出ましたか」と惟然は枕元の土鍋に視線を移し、土鍋の縁を歩きまわっている蠅に気づいて慌てて追い払った。

「梨も結構ですが、お粥をお召上りになつては」と去来、「いや、どうか梨を食べさせておくれ」

惟然と去来は顔を見合せ、互いに疑わしうに眼をばちばちさせた。それがおかしくて二人とも思わず笑った。芭蕉もつられて唇を綻ばせてゐる。

襖が開いて木節が耳敏く、「お師匠さま、梨はいけません。消化が悪うございます。せめて搾り汁ならば……いいえ、去来どの惟然どの固くお止めして下さい」

医師の木節にそういわれて惟然も去来も困った顔をしてすがるように師を見詰めてしまふ。

「はははは……」

芭蕉が力なく声を出して笑った。

「どうかみんな、愚老のわがままじゃ。」「蓑虫みのむし、かたち少ななるを憐む、わづかに一滴を得れば、其身をうるおし。」「じゃ……俳友の素堂翁もどこかで笑つていよう。妙なところで、翁の蓑虫説なるものを、こちつけて寸借したが、ついでに寸借すれば、みのむしみのむし、無能にして静かなるを憐れむ、胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいとなむにより、往来おだやかならず、誰がためにこれをあまくするや、とな。梨は誰がためにあまからむ。わしは蓑虫じゃ、蓑虫、ははははっ」

木節は眼を真赤にして黙った。惟然も去来も、乙州も丈草も、そして次郎兵衛も木節を見守っている。

「それでは一切れ、それも少しづつでございますぞ」ととうとう妥協した。彼は両掌を打ちあわせて天を仰ぐ仕草をした。が、木節はすばぬけて背丈が高く、この家の天井がまた妙に低いため、天井板に張りついていた蠅が二三匹、ふいを喰らうてぶつかりあいながら逃げていった。

それがおかしいといつてどっとみな笑った。久し振りの笑い声がこの家に湧いた。

次郎兵衛は嬉しくてたまらず、浮き腰になって台所へゆくと、たちまち梨を剥いて皿にちょこんと一片のせてきた。

二

「芭蕉庵の生活が恋しゅう思われる……其角の白酒を戒めながらも、無性に飲みたいときもあり、飲むと寝られぬ夜もあった。(酒飲めばいと寝られぬ夜の雲)と吟じられないではいられず……」

芭蕉は梨を一口食べていつまでも噛んだ。

仰臥しながら視線は天井の一点をみつめている。

「人生わづか五十年、伊達も浮き心も命の中ぞ。好きな酒も飲み、惚れた女に三味線弾かせ、唄のひとつも鼻にのせるのもよいものじゃ。ははは、じゃから其角の白酒を戒めたり、乞食路通の還俗を憤る資格は愚老にはないものぞ。ただ少しは、溺れることなく、酒色の間に身を観じて、風雅の道心を得たもの……あつ路通はどこをどう旅しているものか、愚かな弟子」そういつては一口そつと舌の上に噛み転がしてしゃぶり目をしばたした。

「道心を得てからの愚老は、その倫理観のゆえに、弟子はわしの側は気詰りというて、俳席の外は、其角すらこ

惟然は去来と丈草にうながされて其角を隣室に招き、こまごまと始終を物語った。

夕刻頃になって芭蕉は突然、

「粥が食べたい」

といった。みな嬉しさのあまりざわめいた。

木節も去来も惟然も、「名残りの粥じゃ、今生限りの粥」と次郎兵衛に炊かせて、師芭蕉にすすめた。

久し振りに床に起きあがり、重湯をうまそうに啜った。やっと一碗を終えると、次郎兵衛に助けられて横になる。

土鍋には当然ほとんど粥が残っている。去来がその土鍋を押し戴いて、師が食した碗に残った粥を移し入れ、下臉を濡らしながら食べ、食べながら、「おおお師匠さま、発句ありました。お聞き下され……病中にあまりすゝりて冬ごもり」

すると惟然が、

「そうだ、句会をいたそう。先生をお慰め参らそう」

「それはいい」とみなごそごと芭蕉の蒲団を取巻いた。

「まずそれがしから……実は先生、昨夜は正秀と一枚の蒲団にて寝ましたが、これがいけませぬ。正秀奴、稀代に寝相の悪いやつ、わたくし奴がおとなしいのをよいことに、寝呆けたふりしてずずず、ずずずと蒲団を引っ張ってゆく」

「はて惟然坊はなにを調子づいて云いくさる。己れの悪業を棚にあげて……いやお師匠さま、牝牛に腹を突か

そこそ逃げまわって歩きおった」

ふと芭蕉は眼尻を歪めて不安そうに木節の方を見た。「……：：：：：そういえば、其角にいたいものじゃ……」素晴らしいながら今度は眼が宙に浮いた。

芭蕉は俄かに身を振って呻いた。顔色がたちまち青くなって黒眼が上臉の中に吊り上って見えなくなった。

すわっ、みな総立ちになった。木節も驚いて胸に耳を当てる。がすぐに彼の緊張が解け、弟子達の狼狽ぶりを手で制しながら、ほっと留息を吐いた。

「お気を失なわれた。やはりご無理だった」

診察のため師の腹部が掂げられる。

惟然は茫然として、その暗い穴を見詰めた。

三刻ばかりして芭蕉はようやく気を戻した。人心地つくまでそれから半刻、「支考を呼んで下され」といい、支考に遺書三通を書かせた。みな在世中の恩を謝する、弟子に対するものばかり、そのほか郷里の兄に名残りの一筆を書かせて眠りに落ちた。

十月十一日朝、其角が駆け着けた。それも偶然である。芭蕉の病気のことなど夢知らず、江戸の誰彼を誘って伊勢参宮に詣で、近畿地方を旅し、大阪に来てそれと知り、驚いて駕籠を飛ばしてきたのである。胸せまって言葉なく病床に這い伏し、芭蕉も近寄ってくる其角の顔を見やっていたただ涙ぐんで見詰めあった。

れる。とはこのことです。惟然は、わたくしが遠慮がちに蒲団を少し戴くの寝返り打つふりして、たつぷりと隣りの人間を裸にする。」

「ははははは」ふたりは腹をかかえて笑いこぼる。

「そこで一句」と惟然は胸を張った。

「引張りて蒲団に寒き笑ひかな」

「それではお返しじゃ。腹黒い惟然坊に返す句、思ひよる夜伽もしたし冬ごもり」

みなこの争いに、半分は景気つけの声と半分はおかし

くて、やあ、とか、わああとか囁子たてる。

「みな子なり蓑虫寒く鳴きつくす」と乙州。

これはしゅんとした。

「うづくまる薬のものと寒さかな」は丈草。

すると芭蕉は「丈草よ、出来たり。寂としをりと整ひ、面白い、よく面白し」とほめた。

「では恥かしながら一句」と支考がいう。「実はお師匠さま、今日、お師匠の句集を出したい旨を去来どのに相談したところ、去来どのにきつう叱られました。よき記念に句集の心願あり、お師匠、今日はご機嫌うるわし、これに乗じて申出たいと……：：：：：しかるに、小賢しきことを申さるゝものじゃ、師匠は平生名聞らしきことは好まれぬし、諸氏がお師匠さまいっになく快くお在す、と喜ばれているのに、そんなことをお耳に入れて、もしお気に逆らうような結果になっては、どう詫言るといふのか。

ど病床から離れるがよい、あちらへ行き給え、と声を荒げて追い立てられました。去来どのは先輩、そういわれてそれがし面目を失いましたが、不思議と心さわやか：「」

「支考どの、ちゃんと聞いていた：：：だがそれもこれも愚老を思うてのこと、嬉しくもあり、その諍いはおかしくもありますぞ」

「それで惟然にそつと発句を記して貰いました。曰々叱られて次の間に立つ寒さかな」

「ははははっこれは輪をかけておかしい」と芭蕉は口を大きく開いている。最初の、はは、までは聞えたが、あとは声になっていないが誰にもそう聞えた。

「では締くりに一句」と其角が手を上げる。

「吹井より鶴をまねかん初時雨」

そういえば、なんとなく外にしとすると音がする。

雲ゆきがあやしいとは思っていたが、惟然は、師の失心騒ぎがあつてから、すっかり忘れていた。

思えばずっと雨が降らなかつた。

「おお、まさに初時雨じゃな」

芭蕉も気づいて耳を澄ました。

「ふむ、まことに楽しんでござつた：：：：：どうかみな、お引取り下さい。そうじゃ次郎兵衛、香を焚いておくれ」というと口を噤んでじつと眼を据えてしまった。

その夜、惟然がひとり芭蕉に伽をして、そつと師の足元に臥した。芯を細くした行灯のあかりが天井をほんのりと照らしている。

どこからか雨の気配を含んだ風が幽かにはいり込んでくるのか、行灯の明がゆらぐ。

宿の裏の篠林に濡れかかる雨の音が、遠い瀧音のように聞える。

なにか動くなと思つて眼を凝らす。そう思つて注意して見ると、天井板の節目に紛れて蠅があちこちで落着きなく、ちいさくちいさく動いているのが感じられた。

『蠅には蠅の法悦があるう。汚物を好むのに、四六時中羽を撫ぜたり、足どうし摺り合せたりする。恐れげもなく牛馬にたかり、人の手足の上を道中する。思えばわれも、芭蕉という巨木にたかる蠅かも知れぬ。ぶんぶん飛んで疲れて止つても同じ巨木の内：：：：：ふふふ、われは蠅ならぬ人間じゃ。蠅に法悦があるうとなかろうと、人畜にとつてただうるさいだけの生きもの。明日は出来れば蠅退治といこう。』旅人と我名よばれん初しぐれ』の師の行脚の感懐こそ、捨身無常の野ざらしの心：：：：：降る時雨、この時雨の音を惟然よ聴けよ。假の世に降る定めなき小雨こそ、なんと自分にも相応しく響くことか。だがまたなんとこの自然の皮肉なことか、自然を法悦と観ずれば観ずるほど、自然は、悪鬼さながら無慈悲の限りを盡し、地獄をも覚悟させずにはおかぬ。』野ざら

しをこゝろに風のしむ身かな』の師の句こそ行脚無常の中に法悦を見、地獄を見た人の句なのだ。雨にそぼ濡れ

風に晒らされ、朽ちて觸體になるかも知れぬ身をも覚悟の捨身行というべきか。実の姿をもつて真を現わさんとすれば、假の己れを殺さねばならず、』死にもせぬ旅寝のはてよ秋のくれ』としみじみとご自分を見詰められた』惟然は眠ろうとして寝返りをうった。そして師の方を見た。

仄かな行灯のあかりの中で、やがて芭蕉という個を捨てて俳諧という全に就こうとしている師を惟然は見た。

「お師匠さま：：：発句つかまつります』瘦顔のうつりて寒し夜の宿』、いえ、この句はわたくしの胸の中にて消し奉まつる、発表は致しませぬ」

そつと惟然は視線を反らした。

三

十月十二日

明方には止んでいたと思われた雨が、また降り出したようで、鬱々とした空気を、みな師のために追い払おうとして、静かにしづかにと気を配りながらもにこにここと笑いあい、ときたま正秀と惟然、乙州と其角といった組合せが冗談を云いあつては他の者の心を引立てた。

芭蕉は今朝は粥を食べない。

「おお晴れましたぞ。あれ、雲も切れ始めたが風が少し

出ましたな」と丈草が障子を少し開けていった。

その風もまもなく止み、みるみる日が差して急に暖かになった。

庭の落葉が吸いとった水が、たちまち白い湯気となつて立ち始め、部屋が妙に鬱陶しくて嫌だなと感じたら、どこにどうしていたかと思ふような数の蠅が、障子を性懲りもなく叩いたり、天井に群がり遊んで、ときおりこんな速く飛ぶのかと思うほど姿も見せず翅音を響かせ

る。惟然が、昨夜、明日は蠅退治を、などと考えたときの蠅の姿の想像どころではない。

「いや、これは俄かなる蠅。去来どの、ねえ去来どの、蠅退治じゃ、蠅退治。これ次郎兵衛どの、竊を用意し給え、裏の藪から篠竹を切り揃え給え：：：」

「やよ次郎兵衛どの、悪業深き惟然坊の、口を真赤に開きたる、あの頼みごと聞き給え。』口あけば五臓の見ゆる蛙かな』とは誰の句か知ぬが』あの声で蜥蜴くらふか時鳥』とは其角の句：：：」

と正秀が雑ぜ返す。

去来は惟然に呼ばれて障子一枚開け、飛びまわる蠅を外へ追いだそうと自分の羽織りを抜いで、蠅に向つて振るけれど、去来らしく鷹揚なだけ。正秀に自分の名と句を使われては其角も黙っていない。

「』どの声かなんで惟然が時鳥』だわい。恐れ多くも師

の句だが、△蛇くふと聞けばおそろし雉子の声△、雉子は雉子でも坊主雉子、姿ばかりかんと悪声……」
惟然が口惜しがって

△物言はば唇寒し秋の風△とも師匠の句にある。この惟然を憤らせれば兩人とも「襲きて火事場に入るようなもの、岡焼雀も飛び散ろう……」

「ははははっ、われらを雀にしたな惟然坊、雉子も鳴かずは打たれまい」ともいうぞ……」

「おおそういう其角雀に正秀雀、次郎兵衛どのが竊竿を用意された。そうそう蠅を獲り給え」

次郎兵衛がちゃんと人数分だけたっぶり竊をぬりたかった篠竹を配ると、みな、足を忍ばせながら右往左往した。

芭蕉も惟然に正秀、其角たちの戯れを嬉しそうに聞いていたが、こんどは蠅退治に興がって、眼をきょろきょろさせた。

其角が踊るように動くと、正秀もそれを真似た。

「はははは、雀百まで踊忘れぬ」とか、うまいものじゃ」と芭蕉がいう。

去来も釣られて「雀百までわしゃ九十九まで」

「惟然は下手じゃのう。それまた逃がしたではないか。

丈草どのはおっとりしすぎじゃ」

「惟然坊は、下手だねえ、たまに獲れば、まことに無慈悲に蠅をこねと竊だらけにするぞ」と其角がまだや

っている。

「いやいや、惟然雉子は蠅には無慈悲でも子には大慈悲じゃ、焼野の雉子夜の鶴」という」

と芭蕉が惟然をかばうと、

「それはなんのことですか」と次郎兵衛が問う。

「雉子の親は野原が焼けると己れを殺しても子を救い、寒い夜の親鶴は翼で子をあたためる、ということじゃ」

次郎兵衛が感心してみせてから、

「それでは、蛙の面に水」とかいいますが、先程、正秀どのが△口あけば五臓の見ゆる蛙かな△といわれた惟然蛙は、さかんに動きましたよ」といえば

「こいつ、わざと雉子の喩えをお師匠さまに説明させたな」と惟然が憤然としてみせる。

「惟然ももとを糾せば武士の出じゃ……ある時、庭の梅の花の、飛び立つ鳥の羽風に散るのを見て……感動……隠遁。自から薙髪して……我が門に入りたる者……だが……故郷には行衛を探す妻も娘もある、と聞く……ぞ」

みな、惟然を語る芭蕉の話の内容より、とぎれとぎれになった唇の動きに気をとられ、蠅獲りも忘れて聞いている。

「ああ、去来どの、襖も障子も取り離して下……され」

たちまち障子が外され隣の部屋との境の襖を取り払った。

の弟子達へと、惟然に書かせる。

その間、誰も一言も口をきかず、師の死力を注ぐ意志を茫然と眺めていた。

盥が運ばれ、次郎兵衛に吞舟、舎羅が、まめまめと芭蕉の体を淨めはじめた。ほかの弟子は、木節を残してみな隣の部屋へ遠慮したが、惟然も去来も、ときどき盗み見した。

行水がすむと芭蕉は、用意されていた新しい蒲団に真新しい夜着に替えさせられて横臥した。もう起きているだけの体力はなかった。次郎兵衛が、箸の先に粥汁をつけて唇を濡らしたが

「次郎兵衛や、素湯にしておくれ」といわれて狼狽して立上る。もう誰も、冗談も軽口も出ない。

「死ぬることは……生きることに……生きることは……死ぬることも……そを、無常、という。また……流転……でもある……」

惟然は芭蕉の息の弱りゆくを感じた。

「五年前の愚老の句に△……草の戸も住かはる世や難の家△……がある……奥羽行脚……に旅出るに、人に草庵をゆづりしもの。愚老の佞びしい……芭蕉庵も……華やかなかわいい娘の……声のする……家となる。これも流転じゃ……」

去来の肩が震えている。其角の膝に固めた拳に涙がこぼれ、親指の節をとがらせてがくがく揺っている。惟然

其角、去来、惟然、丈草に支考、正秀も乙州も息を呑む面持ちで順じゅんに坐り込んだ。どの顔も蒼くなっている。

芭蕉は次郎兵衛に抱き起こさせて蒲団の上に坐らせた。「やがてもはや涅槃ぞ……」と芭蕉。

誰も言葉なく、へなへなと枕頭に寄った。

「名残りに見たき顔、数々あり。曾良、嵐雲、杉風、嵐、李下、文麟に北鯢、素堂翁はいかがお暮しか。許六や北枝はどうしているやら……ああつ乞食路遍はどこにおるのじゃ。われに叛きし路通よ、汝のわれにつくせし薪水の労は夢ゆめ忘れぬぞ。路通という弟子は乞食の身より拾ひし男じゃ去来どの……どうかわが亡き後……見捨てず……に……の……あなんとかして最後の行水を使いたいものじゃ……」

木節は「いけませぬ」と制したが

「穢れしままを憚れるぞ……」と眼が懇願するので、しかたなく、吞舟と舎羅はいそいで釜を焚きに出た。さきほど次郎兵衛が伐ってきた篠竹が油を含んでよく燃えた。その音がばちばちよく聞えてくる。

芭蕉は、其角と去来に丈草を近くに召し、乙州と正秀を病床の左右にして、惟然と支考に筆をとらせた。

自分の死んだ後のことをこまごまとふたび遺言し、終いに次郎兵衛に抱き起させ自分で筆を執って、郷里伊賀上野の老兄へ認め、ついで、京、大阪、美濃から尾張

も支考も、ほかの弟子達も声を上げまいとしてか身を振
じっていた。

「次郎兵衛……抱き起し……掌を……組ませるの……じ
ゃ」

胸にがっしりと受けとめて次郎兵衛は芭蕉を抱き、両
手を合させた。

「押えている手を離しておくれ……」

……自我得仏来……所経諸却数……無量百千万……

……億載阿僧祇……

息の通いが遠くなり、脈診をとる木節の表情がうっと
り瞳がうるんでいる。

部屋に薄く夕べの彩が漂よい始めた。

観音經と聞えて、口から洩れる読經がかすかに流れ、
まだ続いている。ふと……

「……」

次郎兵衛に倚りかかりそしてついに寝入るように眼が
閉じられた。「涅槃ぞ」といつているように見える。

合掌した芭蕉の指先に一匹の蠅が止った。復眼を芭蕉
の顔に向け、か細い黒い前足を二本かすかに攪りあわせ
ていた。

誰もそれを追おうともせず、黙って見ていた。元祿七
年十月十二日申刻（午後五時）であった。

連載

ハイラル挽歌

第二章 開嶺の崩壊（一）

金子正義

（一）

開嶺を中心とした防衛陣地を構築し始めた四月初旬は
まだ戦雲の翳もなく長閑であった。大興安嶺の雪が解け
始め野草が一斉に芽生えと、忽ち伸び育って一面の花
畑となった。

陣地構築の先遣隊は、極寒の去った悦びに胸を弾ませ
て、鈴蘭や野苺・百合や蘭が色とりどりに咲く山野を暢
んびりと作業場に向った。陣地の構築も鼻歌混じりであ
った。作業中でも近くにノロでも現われると、

「おう！今夜はノロの鋤焼といこうぜ」

と作業を放り出して狩猟に夢中になった。旨く仕留
めた夜は、煖炉を囲んで取って置きの酒を廻し飲んで高
歌放吟であった。蘇州夜曲や、湖畔の宿で故郷を偲んで
夜を怡んだ。歌声を聞きつけて別棟の将校宿舍から、酒

たのし

粹拔考寸

※俳聖松尾芭蕉との人間にも艶めいた謎
の部分がたくさんある。郷里伊賀上野を、
主君藤堂良忠の死を機に出奔、と伝えられ
るが、御殿女中との恋愛がその原因とか、
そうではないとか。

※江戸に出て俳諧を志しながら酒と女にあ
けくれ、巷をさ迷ったとか。

※伊賀上野から芭蕉を慕って来て、芭蕉の旅の最中
に、江戸本所の芭蕉庵で病死した寿貞という内妻の
いたことも顕著な事実だし、本稿で次郎兵衛という
人物が臨終の芭蕉を介抱するが、彼こそその寿貞の
子、という。しかし、次郎兵衛は芭蕉の子でないこ
とも文献からはあきらかだし、いや、いやそうでな
く、寿貞の間に二人の子を生じた、というその一人
だとも。いや芭蕉には子はいなかった、とも。

※元祿四年三月二十三日付、意専宛書簡に「次郎兵
衛殿頃日俳諧めされ候よし珍重く、さめぬ内無心
元存候」云々と、殿で称んだり、「御客人御息災に
御座候御噂たのみ候」、と御客人と呼んだりするの
は、芭蕉特有のユーモアなのか。そうかと思うと、
後年、猪兵衛とか杉風宛の状中では、「次郎兵衛道
中達者にて」云々と呼捨てにしている。

好きの青木少尉が一升瓶を持って兵隊達に仲間入りして、
「俺が死んだら九段の坂でよ」

桜咲かせて酒を飲むよ

俺が死んだら三途の河でよ

鬼共集めて角力とるよ」

と囂声を張り上げて夜の更るのを忘れた。

ハイラル在駐部隊が逐次引揚げて来て、開嶺防衛の布
陣が決まると愈々本格的な陣地構築となった。

構築隊は先ず急増した部隊の兵舎造りに大童となった。
興安嶺の山々には白樺や松林が至る所にあって建築資材
にこと欠かないが、陣地や宿営地の周辺は防衛上切り倒
せないで、遠く離れた森林地帯から運んだ。各隊には、
入隊前に建築経験のある兵隊が居て、兵舎造りのときは
かりは階級を超えて棟梁となって、兵舎から炊事場まで、
忽ち造り上げ、便所、将校室、医務室と増築していった。

七月に入って戦局が急を告げてくると、地下要塞造りとなった。

開嶺・新南興を西に見下す二〇七七高地の第一大隊に、萩野中尉が混成中隊を率いて増援に来ると、地下要塞は急ピッチに進んだ。作業は昼夜兼行の突貫工事で、兵隊達は折角造った兵舎に戻って食事を摂る暇も無く、当番兵が炊事場から丸太棒に飯盒を通して運んでくる麦飯と味噌汁を、大急ぎに掻きこんで岩壁に鑿を打ち込んだ。

八月に入ると地下壕造りは戦闘と同じ激しさで、将兵は造営中の洞窟に泊り込んで只管に掘り進んだ。

状況が切迫してソ連の開戦必至となると、陣地構築隊からも突撃隊・遊撃隊・肉迫攻撃隊が編成されて慌しく山を下って前戦に向った。補充にはハイラルやチチハルから現地召集兵がやって来たが、碌々初年兵教育も終わっていないので洞窟作業の足手纏になるばかりで、陣地構築の能率はガタ落ちとなった。

陣地構築が緩慢となったのは、部隊の交替や将兵の転属ばかりでなく、壕掘り戦力の中心をなす歩兵部隊の士気が撓んだからだ。いざ戦闘となれば要害堅固の要塞には、速射砲隊や砲兵隊が入り、歩兵部隊は陣地から出撃して、戦車に突入する肉迫攻撃隊となるのだった。

昼食兼行、寝食も碌々とならずに難工事をしても自分達には何の役にもならない、と莫迦らしくなったのだ。

陣地構築の主力である工兵隊も自信を失った。資材

月上旬からノロは付近に随分と出沒していたが、陣地造りの兵隊達が重作業の疲労を癒やすカロリー源に撃ち倒して、滅つきり少なくなった。

「じゃあ、久々に徴発に行くか」

田上兵長が元気づいて大声をあげた。

「今夜は開嶺の近く迄行って見るか」

加藤上等兵はもう立ち上って上衣を着始めた。

兵舎を抜け出した古兵達は、近くの部落は通り抜けて遠い満人部落迄行ったが、何の収穫も無く疲労するばかりであった。だが彼等は狩猟も徴発もどうでも良かった。ソ連開戦の情報で日毎に重苦しくなる気分を紛らしたかった。長い兵隊ぐらしからの解放が欲しかった。ノロや野鹿を撃ち獲るより、部落の女達を騷り鶏や豚をせしめたかった。足は自然と開嶺の郊外に向って急いだ。暗夜の道を黙って暫く行くと、突然大きな袋を背負った四、五名が一塊りとなって擦れ違った。暗闇なので双方が共に惘然として様子を窺った。満人であった。彼等も日本兵が少数なのに安心して、

「大人、何処行クカ、部落、誰モイナイヨ」

と一人が挨拶のように言ってガヤガヤと満語で喋り乍ら闇に消えた。国境の緊迫した状況を察知した土民が避難し始めていたのだった。

屯営を余り遠く離れると危険と思った田上兵長が、

機具の不足で、どんなに焦ってもハイラル要塞のような完璧なベトン陣地は出来ないと言いつて仕舞ったのだ。

萩野中尉がどんなに叱咤激励しても作業意欲は昂まらなかった。関特演以来の古兵達は、開戦には未だ間があるさ、と夕刻になるとさっさと作業を止めて山麓の兵舎に引き揚げた。

中隊の内務班内では白樺造りのテーブルで夕食を摂ると、もう何にもやらなかった。古参上等兵達はベッドに寝そべり、六月の根こそぎ動員で来た現地召集兵が、忙しく食器洗いや、兵器の手入をしているのを眺め乍ら雑談していた。

「昔の関東軍ならなア、あんなロートル迄来るようにじゃあなア、対ソ戦になつたらどうなることやら、お先真暗じゃあねえか、給与だって悪くなるばかりだ」

田上兵長が嘆いた。

「ソ連とやったら元も子も無くなっちゃうからな、対ソ戦になる前に戦争は終るさ」

富永上等兵が暢気そうに白樺の根株で作ったパイプの烟を吐いていた。

「野菊や、百合のお浸しも厭きたな、蕨の天麩羅も飽き飽きだ、一丁ノロ撃ちと行くか」

加藤上等兵が起き上って大きな目を剥いた。

「今頃いると思うか」

向い側のベッドから誰かが言った。雪解けが始まる四

「おい、開嶺近くは危険だ、此処らを偵察しようぜ」と言った。開嶺は国境から三百軒もある、危険と言ったのはソ連軍ではなく、開嶺の日本軍の警戒のことだった。近くの満人部落に入って様子を窺ったが、どの家もひっそりとして灯も無くどうやら部落ごと避難して無人部落となっていたようだった。

兵隊達は手別けして戸締りの不完全な家に押入った。

富永上等兵が真暗闇の土造りの家に入ると、バタバタと鶏が騒ぎ立った。明るい外へ追い立てると加藤上等兵が次々と抑えつけ頭を捻った。

田上兵長達は豚を一頭棍棒に吊って来た。痩せ豚一頭と十数羽の鶏だけだったが、兵隊達は、

「まあ、まあ、戦果か」

と満足して帰途についた。彼等の後方に暫く聞えなかった狼の遠吠えが尾を引いて響いた。それに応呼して此処、彼処の闇に木笄のように狼声がおこった。

(二)

ハイラル・イレクテ方面より大興安嶺を東に登って来た満鉄浜洲線は、最高地の開嶺峠のトンネルに吸い込まれ、六百米の闇を抜けると興安北省から興安東省であった。雅魯河に沿って下れば博克図、札蘭屯を経てチチハルである。開嶺は大興安嶺の狹隘部にあって内陸へ出る

関門であった。ハイラルと共に満州防衛の要地であった。二百五十五連隊第三大隊は、開嶺駅の直ぐ東側の一〇二七高地に防衛陣地を構築していた。方四料程の草山陣地の北端は絶壁となつて、遙かに逸渡河方面が展望された。

ソ連軍が、ハイラルを抜いてイレクテより進攻すれば、草山陣地西北の饅頭山の十七迫撃砲大隊、及び開嶺を跨いだ向側の四〇五〇台地の第二大隊の砲兵陣地とで進攻する敵を袋の鼠にして、一〇二七高地より砲弾の雨を降らせて殲滅する。

将兵達はその重要性を克く心得て陣地構築に気合がかった。

八月八日夕刻、第八中隊長加納中尉が、山の陣地構築から疲労し切つて中隊兵舎に戻ると、中隊室に師団司令部の上田中尉が待っていた。上田中尉は第三大隊がハイラル駐屯時代に第八中隊長であった。加納中尉がドアを押すと同時に椅子から立ち上つて、

「ヤア、ご苦労さん。実は緊急に頼みがあるんだ」と唐突に用件を切り出した。

「八中隊から一個分隊程兵隊を貸して貰い度い。詳細は軍事機密で明かせないが、実は、ハイラル増援物資がやっとチチハルから着いた。直ぐ輸送しなければならぬ。鉄道は引揚部隊や一般邦人どこつた返してどうにもならない。そこでトラック隊を編成して明九日午前二時

開嶺の師団司令部を出発する。

ハイラルに居る師団長には連絡済みだが、軍司令部より野村旅団長に極秘命令の口頭伝達があるんだ。

既に九中隊がトラック隊護衛と決定し浜田中尉以下四十名が十輦のトラックに分乗して開嶺に集合している。

俺としては信頼できる自分の兵隊が欲しいのだ、是非一個分隊を貸して貰い度い」

頼みと言っているが、師団命令と了解した加納中尉は直ぐに先任下士官の吉田軍曹を呼んで、一個分隊十三名を選抜し、直ちに軍装して整列するように命じた。更に久し振りに前中隊長上田中尉が来られたので、中隊全員を舎前に整列させるように伝えた。

午後八時、暗い舎前広場に清水軍曹を分隊長とする十三名の選抜隊が横隊に並び、その後の中隊全員が集合した。上田中尉は十三名の選抜隊一人一人に、

「ご苦労、宜敷く頼む」と言葉かけた後、見送り整列の中隊全員に挨拶を始めた。

「今や、満ソ国境の事態は緊迫している。明日とは言わず今夜にもソ連軍が大挙して満洲里、ハイラルに侵攻して来るかも知れない。今、こうしている我々の頭上に敵機が爆弾の雨を降らすかも知れない。この重大な時に自分は軍命令に依つて急遽ハイラル方面に行動することになった。元より生還を期し難い……いくさの庭に

斃れるのは男子の本懐とするところ、武人の本分であるが、自分は嘗つてお前達と寝食を共にした。師団司令部付きとなった今でもお前達を忘れたことは無い、何時も一緒に居たい。死ぬ時も一緒に死に度いと思つてゐる。

だから、これから十三名の兵隊を連れて行くことにした。重大使命なので細かくは言えないが、今夜がお前達との今生の別れとなるだろう、十三名の戦友の武運長久を祈つて呉れ……」

上田中尉の決別の辞は、思い詰めて最後は言葉にならなかった。肅然と聞いている兵隊達は、戦局が重大化し緊迫した国境に戦機が漲ってきたのを感じた。上田中尉と、十三名の戦友は本当にこのまま帰つて来ないように思えた。残る兵隊達には、暗闇に微動もせず並んでいる十三名の黒いシルエツトが、もう死の立像のように見えるのだった。

別れの敬礼を相互にして、上田中尉と分隊員は野草を踏み軍靴の軋みを残して雨雲の低く垂れる夜の闇に消え去った。

加納中尉は、上田中尉とその分隊を見送つてベッドに入ったが、彼等の前途や戦局を思うと転々として睡れなかった『軍事機密とは何んであろうか、今更武器弾薬の補給でもあるまい。何にか対戦車戦の新兵器を届けるのかも知れない』などとあれこれ思案している内に外は次第に白んで来た。

起床喇叭が鳴り渡り、朝の点呼の響きや朝食の活気が兵舎に満ちて、何事も無かつたように一日が始まった。

そろそろ、陣地構築に出発する兵隊達が舎前に出始めた頃、大隊本部から中隊長集合の伝令が飛んで来た。加納中尉は何事か異変が生じたのか、と急いで大隊本部へ馬を飛ばした。

第三大隊の布陣する開嶺東側の一〇二七高地は、南と北が高く盛り上つて二つの頂上があった、その鞍部に在る大隊本部を中心にして高地一帯に、歩兵一般中隊、機関銃中隊、大隊砲中隊、附属の速射砲中隊、野戦兵器所、工作隊等が散在していた。それぞれ離れているので中隊長の集合には手間取っていた。

払暁、未だベッドに臥せていた皆川大隊長に、連隊本部から大隊長緊急集合の非常電話があった。非常事態と判断して各中隊長に緊急集合をかけておき、高地の西南山麓にある連隊本部へサイドカーを飛ばして行った。

正午近くになって漸く各中隊長が集合したが、大隊長が戻つて来なかった。気の短かい速射砲中隊の飯塚中尉は、

「何時迄待たせるんだ、何にが非常召集か！」

と大隊本部の下士官に当り散らしていた。漸く皆川少佐が佐藤少尉の運転するサイドカーで山を登つて来た。車から飛び下りた皆川少佐は、直ぐその場の中隊長達を呼んでぐると自分の廻りに集合させると、

編集後記

「状況は詳かでないが、本九日未明、ソ連軍は国境を各方面に於て越境し目下侵攻中である。特に満州里方面では優勢なる機甲部隊が越境して目下激戦中である。東部国境方面では逆に我が軍が、ソ連領に突入してウラジオを占領した模様である」

と早口に伝えた。中隊長達は、ソ連軍越境に緊張したが、ウラジオ占領の情報に『おうー』と歓声を挙げた。日ソ開戦となれば、作戦上西部国境方面はソ連軍の侵入は許すが、東部国境は直ちに我が方よりこれを突破してウラジオを占拠し、沿海州を制圧する。と兼てから伝えられていたので『我が関東軍健在なり！』と一同は溜飲の下る思いであった。

皆川大隊長は一同の静まるのを待って、

「我が大隊は、番号作戦の発動に従って戦闘体制に入る。作戦計画に従い、開戦と同時に我が三大隊より一個小隊の挺身斬込隊を出すことになっている。八、九中隊は兵員が少ないので七中隊で編成せよ」

と細かく命じた。

各中隊長は愈々日ソ開戦かと覚悟を新たにしたが、ウラジオ方面の優勢に気を良くして守備陣地に帰った。

前の号は亡くなられた常石三郎氏の追悼を特集させていただいた。そしてたくさんの方よりお便りなどがあり、意義深い記念号であったと思う。くわしい状況については「まんじだより」が報じている。

このところ、多くの方より維持会員のお申込をいただいている。ありがたいことである。会員の方からの便りなど期待したい。合評会などへの出席も大歓迎である。

この道ひとすじでこれ、自費出版などされている人は多い。もちろん本誌の同人にも何人かおいでになるが、私は、よくやるなあ、と常日頃感嘆している者の一人だ。

これはその本が質の高い文学作品である場合のことだ。世間によくある退職記念に一冊というのとは別次元の話である。私のように本にするような作品はひとつもできてない、とかたく信じている人間もいる。

中曽根さんが句集を出版したが、ほほえましいこと、と感じた。果して買うか、そして書齋に並べるかと問われたら返事に困るだろう。店頭で一回は手にして眺めるかも知れない。やはり、よくやるなあ、というささやかな感慨を覚える。

これだけは本にして残したいと自信をもっている作品をこれから書くつもり。残された時間はまだまだたくさんあるという「やる気」を失わないことだ。(も)

「まんじ」第十六号

昭和六十年八月十五日発行 (非売)

編集 大 和 禎 人

印刷 (有) 加藤 清 耕 社

千代田区神田神保町三十一

二(2611-5743)

発行 「作家群」 (まんじ) 編集部

〒一〇一 東京・千代田区神田駿河台二一九
〇三(二九三)〇〇九四 柴田 方
郵便振替口座 東京二一九〇八一五

目次

さいたま屋点鬼簿	山口健二	1
競馬屋の加代ちゃん	柴田富佐子	9
水出書店	大和禎人	18
ハイラル挽歌	金子正義	25
第二章 開嶺の崩壊		
男たちの藩(三)	三戸岡道夫	34
大和禎人寸論	八十島元	17
編集後記		46

表紙：岸田幸雄

カット：大貫雄司郎

さいたま屋点鬼簿

山口健二

「アタシ靈感あるのよ」ぜに子はそう言って、少し言い過ぎたかなと言う表情をちらりと見せながら店から上って仕切りになっているガラス戸を締めた。今年の夏は冷房装置を入れたので部屋をしめ切る必要がある。その部屋の裏は三尺程の間を歩いて、せんべいを焼いている。二十年前に、このせんべい屋さんは毎日夕方になると、その日に焼けたせんべいを石油罐につめて女房にリヤカーのあとを押させて必死の形相でだらだら坂を登って、駅の東側にある駄菓子問屋へおろしにいく。せんべい焼く熱風は容赦なくさいたま屋の部屋を吹きぬけて店にまで充滿する。こういう熱風を送る厄介料の意味で、たまに石油罐一コ分のせんべいをさいたま屋に届ける、さいたま屋の子供たちは、小さい時分はこのせんべいをよろこんで食べたが、せんべい屋の独りむすこが嫁をさがす今日この頃になると、さいたま屋のせがれ達も大学生とか高校生になって、せんべいを見向きもしなくなった。

せんべい屋の主人もいつの間にかリヤカーが小型の自動車にかわった。従って必死の形相がニコニコ笑う顔付きになっていた。手取り早く言うと暮しがよくなったのだ。それでもさいたま屋へ石油罐一杯のせんべいを届けることはつづいている。自家製造の品物だから安い勘定になる。ぜに子やカメにせがれの嫁を世話してくれと頼むにも何か贈り物をする必要がある。ぜに子は子供たちが見向きもしなくなったせんべいを一枚三十円で、熨斗いか、酢づけのラッキョウ、干鰯、はたはたの燻製、チーズ、ゆで卵などと並べて立ち呑み連に売る。他の摘みより儲けの率がいい。二十円の卵をゆでて五十円で売るより率がいい勘定になる。

「ママよ、そんなにまで頑張らなくなったって・・・」井中加和寿氏は少し厭味をこめて言ってみる。

「こうしなけりゃやっていけないのよ、センセのように恩給しこたま貰っているのところがうんだもん」ぜに子も

氏の厭味に負けていない。

「本当にヒヤヒヤしますよ。あのこがつつけつけ物言うんでね。何しろあれらの仲人が言ってたけれど……未だうちへ来る前、算盤が出来るってんでスーパみたいな所でレジやってたらしいんだけど、勘定まちがってまあやまったことがないんですって、あやまってる人に言われると紙にゴメンナサイって書いてその人の前につき出すんですって……もう少しやさしくなれないんですかね……」カメがある日氏に零した。

「ありゃ信州人のトクチョウだよ、我田引水って言葉あるでしょ。信州は山多いから、田畑が小刻みだ、しかも水の取りっこがひどいんですよ。夜よその家の田から水引くんだね、要するにビンボウで闘争心がつよいんだな」

井中氏は信州に生れて育ったから一家言を持っていると思っっている。

「そういえば……あのこの実家から何ひとつ貰ったことありませんよ、名古屋の兄とか千葉の姉とかが来れば、うちじゃご馳走したうえウイスキーの壱本二本持たしてかえすんですよ、あのこ嫁に來たって何ひとつ持ってくるじゃなし、みんなアタシが買ってやるんだから……千葉の姉って言うのアタシ大嫌い、亭主は電気製品屋だって云うけど店ないんですよ、それにあれの姉は姑に腕力ふるう人ですって……センセの言うトウソウ心

が強いんだネ」

「まあ仕方ないよ、七人兄弟の一番下だろ、それに旦那があれがいいって貰ったんだからナ、いつぞやぜに子さんが言ったよ、見合いの時、先代もあんなもついで行かなかったって……そうなの？」

「いえネ、何人も何人も見合しても、どれも駄目って柔一が言うから、今度も多分そうだろうって、本人まかせにしたら……あれがいいって言うんですよ、まあ仕方ない、天からのさずかり者だと思っであきらめるよりほかありませんよ。見合いた相手にはいい娘も何人かあったんですよ、ホントですよ」

「そりゃそうだろ、あの時分小姑三人いたけれど、兎に角これだけの身上持って……そのあととりむすこだもん、引く手あまたってわけだったさ……ところでホラ、あの西日暮里の方に持ってたちゅう長屋どうしたの……」

「戦争で焼けて、そのあと建てるってことも大変だったんですよ、それであの方は地主に取りあげられた形で、今残ってるのはこの店の前の三四軒だけです、それも安い家賃なんですよ……何しろ今は借りてる方が強いからね……又貸して結構こっちへ払う金の二倍もとってる人もいるんだから……家賃上げろってぜに子が言うけれど柔一は反対なんです、ヒトそれぞれ暮し方があるから……って言うんですよ」

「その家賃の上りは、おばあちゃん握ってるんだろ、ぜに子さんいつぞやそう言ってたよ……」

「あたし握ってなんかいませんよ、でもまだ海のモノとも山のモノともわからない数奇夫や高島平がいるでしょ、少しは役に立ってやり度いって思うんだけど……まぢがってますかね」

「いや別にまちがっちゃいないよ、母親の情ってものだ」

井中加和寿氏は八十になったカメの意地の張り方もつよいんだろけれど、この嫁と姑はとうとう仲よくなることはないなとカメの相手をするのも億劫になって、焼酎のトマトジュース割をストローでチュウと吸って店に出入するフリの客の方へ目をやった。

大雑把に云って、夕方頃は五分に一人の割合でフリの客が来る。一度に二三人重なることもある。旦那の柔一が配達がなくて店にいる時は、ぜに子と二人で立ち呑み連やフリの客をさばいてゆけるが、柔一が外出している時は老母のカメでも猫よりましと云う按配になる。

「でも品物の値段は覚えられないし、いちいちあたしに聞くんじゃしょうがないワ、そのくせ店に出たがるのよ、落ついていられないのネ……あした温泉にゆくなんて日は特別働いて見せるのよ、イヤダな」

ぜに子は辛辣である。二十一才の長男と十七才の双児の子供があるが、子供らは学校へ行く以外は、冷房装置のある部屋で長くなってテレビを見ているのが好きで、ぜに子が特別の猫なで声で「パパの配達手伝ってよ、アパートの四階でエレベーターない所なのよ」と声をかけなければ店には出て来ない。店に出てくると肩をいからせたり、身体をゆすったりして拒否反応を示す。

「なれないんですよ、あたしだって嫁に來て三年位は店に出るのがイヤだったモン」

ぜに子が言い訳めいたことを言う。

「数奇夫も大学なんてとこへやらずに奉公にでも出した方がよかったと今頃になって思いますよ、長男はそれ程でもないが双児の方は未だ子供のせいもあるんでしょ、うが、母親のそっくり真似してアタシに「死んじまえ」なんて言うことだってあるんだから……」

カメが孫のことを零す。零しも此処まで露骨になると井中加和寿氏は合槌の言葉に困ってきこえないふりをする。客の間を泳ぎながらぜに子の耳はピンと立ってカメと氏の方に向いている。すると感情のままに立ち飲み連に対するぜに子の応答も自然と尖って来る。柔一は配達で出ている。配達は醤油一本とかサイダ半ダースとかいう小物の場合もある。柔一はこう云う小物の代金は金銭登録器に入れずにズボンのポケットに押し込んでおくこととがある。一人で出かける時の資金になるのだろう：

「あれだけお客さんが来てくれるのに毎月足りない足らないってアタシの所から持ってくんですよ、教奇夫が店でも出す用意と思って土地を少し買っておいだのに、いつの間にか自分の名義にして売っちゃったんですよ、アタシが馬鹿で何も知らないのいいことにしてさ」

此処らになるとカメはぜに子に聞えないようにと井中氏の耳元に口をつけて言うのだが、ご本人が補聴器をつけているくらいだから声は自然に大きい。『靈感がある』と自称するピンと立ったぜに子の耳に聞えない筈がない。『うちの嫁さんは金銭登録器の前に坐ってるのが好きなんです』

カメは自分がかえた姑さんが帳場に一日中ピタリと坐って養子の亭主を顔で使っていた英姿を思い出しながら言った。

「ヤマノ内屋のおくさんなんかバイクに乗ってどんどん配達に出るのに、うちの嫁さんあそこに坐って若いお客さんと話しこむのが好きなんですよ、シュミッて云うものかね・・・」

ところがぜに子も負けてはいない。カメが夕食を食べに部屋へ上ってしまうと井中氏に近づいて来て言うのである。

「余りお客さんと話していると、おばあちゃんやきもち焼くんだから・・・」

「俺と話しててもかね・・・」

ついでだが、一物もスルリと入ったし、途中で自分のオッパイに手そえて舐ろって注文つけて来たんだから、相乗ってたんだろ・・・」

「まあヤダー、センセ相当なもんネ」

「だからこれだけの身上そっくりあんたたちのものになるんだぜ、せがれ達だって役に立つようになれば・・・アンタ楽だよ、それからだっておそくないぜ、やり度い放題だ・・・」

井中加和寿氏はぜに子に怪しからん焚きつけ方をして、さて俺はあと拾年は保たんと、ほろ苦々しい思いでうつむき加減になって、此処十数年、この店に呑みに来ていて死んだ者たちの顔を思い出すのだ。

一日もかかさず、一杯の酒をのどを鳴らす按配でのみはして手に握って用意して来た金をチャリンと置いて立ち去る行儀のいい客がフッと来なくなる。音も立てずに死んだのだ。死に方も行儀がいい。近処に葬式があると云う噂も立てない、甚だ慎ましい生き方だし慎ましい死に方だ。葬式のある呑み客のところへは主人の柔一が香典を包んで行く、三日に一度ぐらい回数が重なることがある。ぜに子は言うのだ。

「そんなに・・・マテイにお香典持っていかなかった方がいいのに・・・やり切れないワ、それに、そんなに儲けていないんですよ、ネーセンセ」

「つき合ってもんは金かかるもんだな」

「センセは大丈夫よ、手は早そうだけど、いつも」立たない。ッて言ってるから・・・でもあぶないかな、男は助平だから」

井中加和寿氏は八十の婆さんでも矢張りやきもち焼くかなと変な気持になりながら言った。

「仲よくしろよ、どうせ先にいく人だ」

「わからないワ・・・あと何年保つかセンセの易で見てくれない？」

靈感があるぜに子が氏の易に手頼って来た。

「俺の易は高いぞ・・・そうだな、あと拾年は保つな耳が遠いと長生きするって言うだろ・・・足腰は俺よりしっかりしてるし、いつも下から腰巻きうす汚くはみ出してるが、あれでも正式に外出する前の日にや、パーマネット屋へ行って頭ちゃんとして来るし、帯だって一人で結ぶんだろ・・・」

「でもね・・・家のことまかせとくと危なくって・・・ガス、水道出しっぱなし、しょっちゅうだし、煮物やお米まっ黒に焦がすし・・・十年保ったらあたしどうなるのよ、五十越しちゃうワ・・・」

「五十越したっていいじゃないか・・・俺、自分が年とったせいか近頃の五十女なんて若くって娘みたいに見えるよ、こないだ五十五のオバサンとナニした時のこと話そうか・・・」アンタ大丈夫なの？シンゾウマヒ馬上死なんていやですからネ」なんて初め俺を馬鹿にして落

井中氏はソッぽを向いてつぶやいた。いつぞやカメが端うたの会でうたうんだからと和綴の教本を持って氏の家に来て、その本の字を大きく見易く半紙にうつして呉れと頼みに来たとき持参の水菓子についてぜに子の言った言葉を思い出していた。「おばあちゃん何か持って行くんでしょ。そんなものうちの子にかかしたらいいのに。センセに頼めば金かかるのに」でもカメは井中氏に書いて貰うと仲間に「立派な字だわ、さいたま屋さん、自分で書くの？」と言われたことが忘れられない。

立ち呑み客は、大雑把に分けて三種類になる。自分の家で晩酌と云う呑み方を遠慮している者、他の呑み屋へ行く前に下地を作ろうと云うもの、さいたま屋を一日の遊び場と心得て居る者、そのうち、この最後の者たちが常連の呑み客となる。井中加和寿氏は第一類に属して三十年になる。だからぜに子よりさいたま屋の歴史にくわしい。先代のころからで、その頃は出入口に立って慎重しく呑んだ。ブドー割、梅割焼酎から日本酒に出世して行った。

その頃、今日井中加和寿氏が腰かけて呑む特等席には八十六才になる花亀の陰居が坐って、そのわきには、弁護士戸倉老人が七十五才の貫録で控えていた。かれらは町風呂であつたまてから夕方そろってさいたま屋に顔を出す、それは彼等の日課であつた。この二人は半年来がいで相ついで死んだ。

年寄りが超然と風呂と酒を楽しむのだから、老人を大切に心する風の俗がのこっているさいたま屋の立ち呑みの客筋もおだやかで天下太平の空気がただよっていたが、この兩名がそろって死に、さいたま屋の先代も六十二才の若さで心筋梗塞を胃潰瘍と誤診され三発の注射であっさり苦しみながら死んでしまうと、太平の空気が乱れた立ち呑み連の中で、ポスト花亀やポスト弁護士になろうとする者が蜂起する按配である。柔一、ぜに子若夫婦の時代に入る戦乱の時期、歴史はさいたま屋でも小さな渦巻きを立てていた。

久ちゃんは未だ五十二才だし、ポスト花亀やポスト弁護士になろうと云う野心などある筈はなかったが、さいたま屋では顔も古いし、土地の小学校を出ているし、さいたま屋の若主人柔一の小学校のセンパイでもある。只かれは正業で稼ぐのがみみっちく感ぜられて博打うちになつていたから、さいたま屋でポストを確保する資金がない。「一杯のめよ」と云った調子で振舞う金である。呑むものが誰が金を払おうとぜに子には問題でない、払って貰えればいいのだ。その種の金が久ちゃんにはない、そこで何時も後ろへそり返って横柄な口のきき方する井中加和寿氏に目をつけた、「あのデイ様商売何だ」かれは柔一にきいた。「教員らしいですよ」柔一は答えた。

おろしてそっぽをむいた。

暴力団君も井中氏と並んでパチンコをはじいたことがある。その折氏の「コラ俺は校長だぞ、入れ！コンチキショウ！」と云う独り言を聞いたことがあったのだ。そこで久ちゃんの目星がこの爺かと合点がいくと久ちゃんにこっそり言った。

「久ちゃん、あの親爺は駄目だ、おめえ仲直りしちゃうよ」

久ちゃんは暴力団君に見捨てられたのだ。その次の日かれは店に入って来た井中氏にあっさり言った。

「センセ、こないだはスイません。ミズに流してくれよ」

「スイませんってあやまるんか、あやまるようなことするなよ」

久ちゃんは一寸気色ばんだが、これで勝負はついた。これからあとは久ちゃんは死ぬまで井中氏に逆らうことはなかった。

その久ちゃんがS病院に入院したという噂が、さいたま屋の立ち呑み連の間に流れた。

「ご主人、見舞ってやりませんか」

井中加和寿氏は柔一をさそった。S病院というのは治療棟のある大きな病院だが、「あそこへ入れば大概あの世行きだ」という世評がある。世評と云うよりさいたま屋立ち呑み連の噂である。今迄急救車でかつぎ込まれ

「センセか」こりゃ恰好な相手だと久ちゃんは決心した。

ある日かれは頃合を見て井中氏にからんだ。

「センセ、俺を馬鹿にしてるな」

久ちゃんは顔をこわくして井中氏を睨んだ。かれは井中氏をパチンコ屋台湾会館でも何度か顔を見たことがある。背骨を真すぐに立ててポツンポツンと狙いをつけて玉をはじく、目付きは悪いがパチ師の指さばきではない、時々低くうなづいている、何を言っているのか中味は聞えない。実は井中加和寿氏は腹の中で「こら俺は校長だぞ、入れ！コンチキショウ！」と叫んでいるのだ。氏はその頃校長と云うものになってショックを受けていたのだ。だが別にパチンコ屋に出入することを止めたり、さいたま屋の立ち呑みをあらためる様なことはなかった。不変後ろへ転びそうな姿勢で歩き、その姿勢でさいたま屋の店先きに立っている。その姿勢の手前、久ちゃんの威しに負けちゃおれない。

「おめえなんか馬鹿にも何んにもしねえよ、要するに関係ねえ」氏は言った。腹の中では「この野郎きたな」という感想があったが、姿勢はますます後ろにそり返った。「こりゃ手強いぞ」と久ちゃんは感じたが乗りかかった舟だ。かれは台湾会館から「ダチ」の一人で暴力団松葉会の下ッ端をつれて来た。暴力団では出世は若いうちだ。四十近くなって若頭とか組がしらになれない奴は高が知れている。氏はその男をじろりと云う目付きで見

た立ち呑み仲間の名前をざっとあげても十人を越える。

急救患者に病院側が選り好みせずにとんどん受け入れるということと治療棟がある強味だ。博打くずれのキッちゃん、新聞屋のヤマちゃん、風呂釜屋のシンカワ、住所不定のシミーズ、鳶のクリちゃん、植木屋くずれのマンちゃん、近くは住友連合のオオノ、床屋のガリヤ、詩人のコダマ号、写真芸術家と自称していた海坊主、皆々行くところへ行行った。

「そうですね、行きましょうか。何んでもノアの箱舟お教祖もあそこの病院にいるそうですよ」

さすがに柔一は井中加和寿氏より世間にあかるい。

「そう云えば若い娘ばかり、それも家出娘ばかり集めてテレビや新聞にちょっとさわがれた人があったナ」井中氏は目まぐるしく世間にさわがれる人たちのことを頭の中で復習していた。

「おゝセンセ」

あたまをスッポリ縋帯で包んだ久ちゃんはベッドにおきあがろうと跪いた。柔一と井中加和寿氏はかれのベッドの頭の方に立っていた。絶えて見舞い客などない部屋中の患者の目が一斉にするどく二人にそそがれた。普通の患者の場合「面会謝絶」の状態である筈だ。二人共永くかれの枕頭に立っているに耐えない。一部屋全部の患

者共通らしい老婆の看護人が近づいて来て言った。
「この人昨日頭の水とったんですよ、多分駄目だろうがね」

「そう？・・・これで甘いものでも買ってやって下さいナ」

柔一は老婆に千五百円握らせた。ふと、この老婆に見舞金を出したって甘い物にはならないでそのままかの女の懷に入ってしまうぞという予感が井中氏の胸の中を走った。同時に、この金は柔一が小物の配達代金で金銭登録器には入れずにズボンのポケットに押し込んだもので、かれがぜに子に報告する必要はなさそうだと氏は考えていた。

窓から一台の自動車が入って来るのが見えた。それは病院の正面玄関に横づけになり狐の様な顔に、口髭を蓄えた初老の男が二人の若い女にいたわられながら降りて病院の中へ消えた。

「あれですよ、ノアの箱舟お教祖は」

柔一が言った。

「此処から警視庁に通っているんですよ。どうです、赤革の鞆女の子に持たして・・・豪勢なもんですね、何でもかれ一日二万円の特別室に入ってるんですよ・・・入院っていうのも世間から身をかくす口実でしょう」

「一日二万円なんてベッドあるの？」

「差額ベッドですよ。ヤクザの親分衆とか会社の社長

なんてえのは面会人に見栄張る必要あるんですよ、一日五万円の部屋だってあるそうですよ」

博打ちを心ざしながら、享年五十三で施療病棟で命を終ろうとしている久ちゃんを哀れむと云うより、いっそ人間の生きざま、死に様の哀れさがツ・ウ・ンと井中加和寿氏の胸をしめつけた。傍らに柔一がニコニコ笑って立っている。かれにはこれから帰ってあそこと、あそこに配達に行かねばならないという一日のもくろみがある。多分今頃店では八十の老婆が、せっせとぜに子の額の合図で働いているのであろう。柔一のニコニコ顔が、人間の運命を見通した鬼のニタリとした笑いに見えて来た。



競馬屋の加代ちゃん

柴田 富佐子

刈り上げの白髪頭をガクンと振って、つえが二階に向って叫ぶ。

「いいよー」

二階の窓が細目に開いた。

つえは左右に人目がないのを素早く確めて、早く早くとの両の掌を煽った。

ストン——窓から投出された風呂敷包みが、つえの足元に落ちた。窓はいつの間にか閉まっている。つえは風呂敷包みを拾いあげ、右手でその底の土を払うと、さっと踵を返して前の店の暖簾を潜った。暖簾には 質 田中屋と書いてある。

つえが田中屋の格子戸を開け

「ごめんよ」というのを、加代子は帳場の隣りの部屋で聞いていた。

「清太郎が帰って来たら、すぐに出しに来るからさあ」
膝で這っていった、帳場との境の間に手をつき、首を

突き出すと、つえは

「また上りこんで、すいませんねえ」

と小父さんに会釈し、加代子には

「悪ざしたら承知しないよ」と軽く睨んで出ていった。

「カヨチャーン」

窓際に突伏したままのひろちゃんが、廻らない舌で呼んでいる。年は加代子より二つ三つ上だが、生まれつきの脳性小児麻痺で、腹這いに寝たきりのひろちゃんの知能は、幼児に等しい。田中屋の前の横丁で遊ぶ子供達の声は、塀越しにひろちゃんの耳に入る。声を聞けばひろちゃんには遊んでいる子が解る。

それで「イッコチャーン、エイコチャーン、マアチャーン、あそぼうよ、あそぼうよ」

と体をよじらせて叫ぶ。その声が聞こえると、遊んでいた子供達は、一瞬心に氷の針を突き刺されたような痛みを覚え、顔を見合せて（仕方がない）といった表情を

する。そして塀のくぐり戸を開け、裏口から入ってひろちゃんの部屋に行く。そこに用意されているトランプやゲームやピストルなどの玩具を出してひろちゃんの枕許で遊ぶ。ひろちゃんは目の前に同年代の子供達がいるだけでここにこし、時にはケッケッと笑い声をたてて喜ぶ。ひろちゃんの小母さんも子供達に来て貰いたい一心で、上って来た子供達には菓子振舞い、新しいゲームを出して来る。

しかし、元気のいい子供達は、家の中の遊びにはすぐ倦きてしまう。ひろちゃんに気を遣うのに疲れても来る。いつとはなしに、一人減り二人去りで、部屋には加代子一人が残ってしまう。加代子もみんなと一緒に出て行きたいのだが、ひろちゃんの縋りつくような目でみつめられると、つい可哀想になって、浮かしかけた腰を又下す。ひろちゃんも加代子なら、自分の哀願が利くのをよく知っている。

外へ出た子供達は、遊び声がひろちゃんの耳に届かないように場所を変えたらしく、横丁は静かになった。

ひろちゃんは目で枕許の本を示し、読んで欲しいと加代子にせがむ。もう何度も読んでいた本だが、ひろちゃんはじっと加代子の口許をみつめて聞いている。

その時、奥の部屋で電話がなった。加代子は読むのを止めた。

「加代ちゃん」

「ひろちゃん家はいいね」

二つ目のキャラメルを剥きながら、加代子は言った。

「あら、どうして」

小母さんがひろちゃんの口の端から糸を引く涎を拭く手を止めた。

「だって、小父さんはいつも家にいるし、お金持ちだから、さ」

「加代ちゃん家こそ、加代ちゃんみたいないい子がいて、いいじゃないの」

何がいいものか、と加代子は胸の中で呟いた。

清太郎からの電話を伝えようと加代子が家へ帰って来ると、玄関に畳屋の小父さんが立っていた。大家さんという事もあり、体も大きいこの小父さんが、加代子は何となく怖かった。

「じゃとに角、何か解ったら知らしてくれよな」

小父さんは隣家の窓下に身を隠すようにへばりついている加代子には気付かず帰っていった。

「バカにしやがって、あんなはねえ返りなんか、光が相手にするもんか」

つえは加代子が入るのもどかし気にガラス戸を閉めた。

「美津、お前本当に光の居所を知らないんだね」

「ええ」

「光の行き先なんぞ、こっちが教えて貰いたい位だ」

矢張り、ねえやさんが呼んだ。

「加代ちゃん、お父ちゃんから電話よ」

もうかかって来る頃だと思っていた。受話器を当てた加代子の耳に、清太郎の声が低く流れた。

「今夜帰るからな、母ちゃんとはあちゃんにそう言っていてくれ」

「うん」

この界限で電話のあるのは、加代子の住む六軒長屋の家主である表通りの畳屋と、ひろちゃん家しかない。家賃がとかく遅れがちな畳屋には頼みにくく、近いこともあって専らひろちゃん家に頼むことになっている。

「お父ちゃんの電話、どこから」

ひろちゃんの小母さんは静かできれいな人だった。

「福島へ行ったんだけど、もう東京に帰って来ているみたい」

小母さんは掌のキャラメルを加代子の前へ出した。

「そう、福島にも競馬場があるの」

「知らない」

子供仲間に加代子は「競馬屋の加代ちゃん」と呼ばれていたが、加代子は清太郎が競馬場で何をしているのか知らない。半月程家にいたと思うと、半月家を空ける。

一か月帰って来ない事もある。それでも帰って来る時は何がしかの金を持って来るらしく、清太郎の帰った晩の食卓には魚が載った。

火鉢の前に坐ったつえは煙管の雁首で火鉢の縁を叩いていた。苛立った時のつえの癖である。

「父ちゃんが、今夜帰って来るって、ひろちゃん家に電話があったよ」

「虫が知らせたんだ。じゃ、何かみつくるって来るか」

つえは暮口を懐に入れ、立上りかけて台所の床板を斜めに見た。

「また、水を垂らしたまんまだ、ほら」

つえの指差す先には、確かに丸い染みがあった。

「だから田舎者は困るんだ。すぐ拭きいいが、垂らしっ放しにするから、染みになるんだよ。そっだけ艶がなくなるから、すぐ解るんだから」

「すいません、すぐ拭いときます」

美津はおからを入れた袋を持って来た。床に膝をついて両手で何度もこすった。

「どうして、そうすぐべたつと坐りこむんだらう。腰を浮かしてキュッキュッとやった方が力が入るんだ」

美津のやる事をじれったそうに見ているつえを、加代子は玄関まで引張っていった。

「早く買物にいったいでよ」

「後は乾いた雑布で何度も拭くんだよ、いいかい」

美津にそう言い捨ててつえは出ていった。

痩せて身の軽いつえと違って、確かに美津は体全体が水っぽく重たそうであった。動きも鈍かった。しかしそ

これは美津の病気のせいで仕方がないではないか。加代子は美津から雑布を奪い取ると、つえへの怒りをぶつけるように両手に力をこめて床を磨き続けた。

つえは異常なほどきれいな好きであった。仏壇の前で拝む時と、食事やお茶で茶袱台の前に坐る時以外、家にいる限りどこかを磨いていた。だからこの家には不釣合いに大きくて金びかな仏壇は手の跡一つついていないほどきれいに磨きたてられていた。玄関の上り口、闕、柱、台所の床など木という木の部分はおからで丹念に磨かれていた。つえの暇な時間の総てを吸いとって生き生きと輝いていた。病気がちの身で清太郎の稼ぎの足りない分を仕立物で補ない、その合間に家事をしなければならぬ美津には、床を磨く余分の時間はない。美津がつえの罵声を浴びるのは、いつも床の染みが原因だった。

「もういいよ、加代子、どうせ晩御飯の時に又汚れるんだから」

笑う事の少ない美津が加代子に笑いかけた。

「そうだね、こんなもん」

加代子は手の雑布を思い切り遠くへ投げつけると声を立てて笑った。

美津は二階から仕立物の包みを持って来た。

「済まないけど、相沢さんへ届けて来てよ」

表通りの相沢という仕立屋は、吉原の本店を何軒も得意先に持っていて、手広く仕事をしていた。入口のガラ

ス戸を開けると、広い座敷一杯に仕立台を並べ、二列に坐って仕事をしているお針子達が、一斉に加代子を見た。加代子の声は小さくなった。

「こんにちは」

奥の席から小父さんが立って来て加代子から包みを受け取り、中を調べてから替りの包みを渡してくれた。その時、「これは光ちゃんからの預り物だ」と白い封筒を一緒に包みこんだ。

「なにそれ」

「母ちゃんにそう言えば解るよ」

子供のないこの小父さんは、いつもやさしい。菓子包みも忘れずに加代子の手に握らせてくれる。

光からの預り物という封筒が、加代子は気になって仕方なかった。両手に抱いた包みの中で、その封筒の重さだけが手に伝った。

二階の部屋で仕事を始めていた美津に包みを渡ししながら加代子は言った。

「兄ちゃんからの預り物が入ってるよ」

美津は手早く包みを開け、中の封筒を見つけると両手に挟んで拝む仕草をした。

「ばあちゃんにも父ちゃんにも内緒だよ」

加代子は頷いた。

美津は裁縫箱の一番下の抽斗にその封筒をしまった。

「兄ちゃんみんなが言うような半端者じゃない。今は修業中だから大した事はしてくれないが、きっとその中自分の店を持って、お前や母ちゃんの面倒を見てくれるって言ってるんだ」

美津の細い目から涙がこぼれ落ちた。

隣りの小父さんがゆっくりと曳いていく屋台の灯が、ゆらめいて通り過ぎていった後、色の褪めた茶色い中折帽を被りチョビ髭を生やした清太郎が帰って来た。角の擦り切れた旅行鞆を畳に投げ出すと、

「ああ、くたびれた」と火鉢の前に坐った。

「土産だ」大きくない菓子折を一つ卓袱台に置いた。

「一風呂浴びといてよ」

つえが石けん箱と手拭を、菓子折と入れ替えに置いた。「帰って来るまでに支度しとくからさ」

仕事が終わらなかつたのか、清太郎は口数が少なかった。何度も促されて、ようやく腰をあげ銭湯へ出かけた。その後姿に

「お前も結構白いもんが増えたね」

つえが言った。

やがて風呂から帰って来た清太郎とつえが火鉢を挟んで酒を飲んでいる脇で、美津と加代子は夕飯を済ました。美津は洗い物を了えると、仕事を口実に二階へ上った。酔った父親が旅先での愚痴を並べたて、それに合槌を

打つつえが母親の悪口を言うのを聞いているのが嫌で、加代子も「宿題があるから」と二階へ上った。

「お前も、もういい加減に落着いたらどうかね。あたしゃもう嫌だよ。たまに帰って来ちゃ女房孕まして、消えちゃう。又流産だ。その後始末はみんなあたしがしなきゃなんないんだからね、もうあれの体は駄目なんだ。孕みゃ、流れるに決ってる。流れりゃ一層体は弱って駄目になる。あんな体にしたのも、元はと言えばお前なんだよ」

火鉢の縁に肘をついて、つえは下から清太郎の顔を見上げた。清太郎は聞かえないふりをして盃を口に運んでいた。

「ちったあいい事ないかね」

「ないね、お前がコブつきの女なんか連れこんでから、この家に貧乏神が巣喰ったか、やだよ」

「そうか、貧乏神が巣喰ったか、やだよ」

「やなのはこっちだ、お前は外に出ていい目も見るだろうが、こっちは病人とガキ抱えて質屋通いだ。たまには親孝行に、温泉の一つも連れてったらどうだ」

「温泉ねえ、いいねえ、行きたいねえ」

卓袱台の上の徳利は三本とも空になっていた。

「バアさん、酒」

「もうないよ」

「そんな事言わずにさ、もう一本つけなよ」

「だって、ホラ、本当にないんだから」

つえは台所から空の一升壺を持って来た。

「じゃ、加代子、オーイ、加代子、酒屋へ行つて来てくれ」

やだ、と言った所で、酔った清太郎は加代子が下りていくまで呼び続けるだろう。

「いつもこうなんだから、やんなっちゃう」

文句を言いながらも、結局加代子は一升壺を持って酒屋へ行かねばならなかった。

横丁を抜けようとした時、後から馳けて来た男が加代子の肩を叩いた。

「加代子、いいところへ出て来てくれた」

白っぽいジャンパーを着た男は、光であった。

「また親爺飲んでるのか」

光は加代子の抱えてる一升壺を見て言った。

「うん」

電柱に取り付けられた外燈の黄色い光の下で、加代子は光を仰ぎ見た。清太郎も美津も小柄だし、加代子も学校では前から二番目に背が低い。つえも小さな年寄りだった。光だけが長身で、その上美津に似て色が白く、少し吊り気味の目尻には薄く紅を刷いたような色気があった。中学生の頃の光は美少年で通っていた。勉強もよく出来たし、加代子には自慢の兄であった。それがどうした訳か、中学の二年で退学し板前になると言つて家を出た。初めの中は休みの日には帰つて来てたが、店を何度

か変え、居どころも変つて、気がつくとき全く家には帰らなくなっていた。美津に聞いても、「その中帰つて来るよ」というだけであつた。

「一寸、お前に頼みたい事があるんだ」

と言つて光は加代子の腕から一升壺を取り

「酒屋へは俺が行くから、お前畳屋の小父さんに、この手紙を渡して来てくれないか。いいか藤さんでなく、小父さんにだよ」

と念を押して折りたたんだ紙を出した。

「いいよ」

「じゃ、酒買つて来たら、俺ここで待つてゐるからな」

「お金」

加代子がポケットからつえに預つた金を取り出すと、光は

「いいよ、お前にやるよ」

うつ向き加減に離れていった。

表通りの畳屋は、もう店の電気が消えていた。重いガラス戸をようやく開けて、加代子は身を滑り込ませた。

「今晚は」

思い切つて大きな声を出すと、奥との境の障子が開いて、いいあんばいに藤さんでなく小父さんが出て来た。

「これ、兄ちゃんが小父さんに渡してつて」

小父さんはひたたくるように加代子の手から手紙を取り電氣をつけた。その何か慌しい動作が加代子を不安に

させた。

「光はどこだ」

小父さんの声は鋭かった。

「知らない。どこかへ行っちゃった」

加代子は怖くて本当の事が言えなかった。

「よしわかった」

小父さんは障子を閉め電氣を消すと、加代子の頭を軽く叩いて、そそくさと外へ出て行つた。加代子も慌てて外へ出た。さっきの場所へ馳けていくと、光は待ちかねていて、半分ほど入った酒の壺を黙つて加代子に渡し、馳け出した。

光と小父さんの間に何があつたのか。

加代子は家に帰つても気懸りで、もう宿題を続ける気にはなれなかった。清太郎は追加の酒を待ち切れずに火鉢の前に転つて寝入っていた。つえも卓袱台に突伏して寝ていた。加代子は美津にこれまでの経緯を話そうと思つた。一人の胸に納めておくには、不安が大きすぎた。

加代子から話を聞いて美津は、

「花ちゃんがね、光の後を追っかけて家出したらしいんだよ」

と言つた。

「花ちゃんが」

「今日も昼間その事で畳屋さんが来て怒つてつたんだよ。お前にこんな事話しても仕様がなないが、花ちゃんにも困

つたもんだ」

「じゃ、藤さんはどうなるの」

「どうなるんだかね」

花ちゃんは畳屋の一人娘で、光と小学校の同級生だった。顔付きも派手なら性格も派手で、SKDへ入るんだと、ダンスや歌の稽古に通っていたが、試験に落ちてしまった。小父さんは、小僧の時から店に在る藤さんともあわせて店を継がせる積りでいた。あのジャジャ馬が、温和しくて真面目一方の藤さんで満足する訳がない、という近所の噂が本当になって、花ちゃんは藤さんを嫌い、板前修業中の光を追いかけて出した。光はそのため店を何度か変えた。家も出た。光が家を出てしばらくは花ちゃんも家に落ち着いていた。小父さんは安心していいよ藤さんとめあわそうとしていた矢先、つまり昨日から花ちゃんの姿が見えなくなった。小父さんと藤さんは近所に知れないように心当りを探し廻っていた。

下で玄関のあく音がした。

光ではないか、加代子と美津は顔を見合せた。急いで階段を下りた加代子を、玄関に立っていた畳屋の小父さんが手招きした。小父さんは火鉢を間に寝込んでいる清太郎とつえの方を目で指して言つた。

「丁度よかつた。母ちゃんはまだ仕事してんだらう。夜分遅くて悪いが、話があるから一寸来てくれるように頼

んでくれないか」

「うん」

加代子は寝てる二人を起してはいけないような気がして、今度はそっと階段を這い上り美津を呼んだ。

「光の事だね、きつと」

美津はすぐに出ていった。

よくは解らないが、加代子は美津の留守に二人が起きない方がいいのだろうと思った。

二人の間に坐り、どうぞ起きませんように、起きませんように、祈り続けた。清太郎が寝返りを打って目を開け、すぐ前にいる加代子をぼんやりした目で見つめた。息をつめてその目を加代子は見返した。

「なあんだ。加代子か」

言い終らない中に清太郎は眠りに落ちていた。

美津が帰って来るまでの一時間近くが、加代子には長く感じられた。美津は目で加代子に上に来るように言い、二人は足音をしのばせて二階へ上った。

「兄ちゃん、どうした」

「兄ちゃんのお陰でね、花ちゃんが無事に家に帰って来たんだよ。兄ちゃんは偉いねえ。」

日頃は口数の少ない美津が余程嬉しかったとみえ、顔中に笑いの波をたてて加代子に話し続けた。

「昨日ね、六区で花ちゃんにばったり逢ったんだってさ、そしたら花ちゃんはどうしても兄ちゃんとこへ行くって

ついて来て離れないんだって、それで兄ちゃんは困って

知り合いの、ホレ、中学で一緒だった田原町の旅館の息子

さんに頼んで預って貰ったんだって、藤さんがいるんだからね、どうしても俺とは一緒になれないんだって、

兄ちゃんと友達に一晚かかって言いよかされて、花ちゃん

ん寝ないで泣いてたそうだけど、今日になって、やっと

家へ帰るって言ったんだって、それで、小父さんと呼ん

で花ちゃんを引渡したんだそうだよ。小父さんはね、兄

ちゃんが花ちゃんをそのかして家出させたと思ってた

らしいからね、悪かった、って兄ちゃんに何度も謝って

さ、花ちゃんも泣いて謝ってさ」

割烹着のポケットから美津はチョコレートを取り出した。

「花ちゃんが、お前にあげてってさ。光は矢張りしっか

りしたい男だ、よかった、よかった」

加代子は美津のこんな晴々とした顔を見るのは初めてだと思った。パーマネットをかけたお獅子みたいな頭をした花ちゃんが、口紅を塗った真赤な唇を震わせて泣いている姿を思い浮かべると、加代子は何となく可笑しく

なった。

「でも、花ちゃん、可哀想だね」

「なあに、花ちゃんはただ親の言うなりに藤さんと結婚するのがつまんなかっただけなんだよ。その前に、何かしなきゃ気が済まなかっただけなんだよ、きつと」

加代子にはよく解らないが、美津がそう言うなら、そ

うに違いなと思った。

「これで母ちゃん、胸のつかえがすつと落ちた」

美津の胸に押しつけた加代子の耳に、すつと何かが落ちていく音が聞えたような気がした。

「兄ちゃんは神様みたいだね」

美津の胸の中で加代子は言った。

「本当だ、光は神様だ。だから小父さんが生きてる限り、この家の家賃はただにしてくれるってさ」

「え、ほんと」

つえが毎日あんなに熱心に拜んでいる神様より、兄ちゃんの方がずっとずっと御利益のある神様だ、と加代子は思った。



大和禎人寸論（雨糸風片の人）

ふと立止った時、同行者が「君、ちょっとあそこを凝っと眺めてごらん。こんな光景を遠い昔に見たような気がしない」と促されたとする。まさにその時、そこがたとえば田園であろうと山峡であろうと、ビル街や下町の坂の途中であろうと、糸のような雨と微風に煙るやるせない詩情をそそる春景色だったとする——そう云われて「ふうむ」と思わず遠い目付になったとしたら、あなたは同行者の詩情の魔術にかかったのだ。「ほらほら、遠い昔のことだよ、なつかしい思い出が泛でこないかい」と再び促すとき、その同行者の眼にはさまざまな煩惱が去来しているように見える。そしてそう見えたとき、あなたは同行者の貌を美しいと思った筈だ。

糸のような雨、ビル街も森も河も、もの悲しげに煙らせる影のような微風。雨糸風片の人、それが大和禎人だと思ふとき、「ほら、君、遠い昔のことだよ」という言葉と一緒に一期一会の同行者として貴重な人物と思わないわけにゆかない。（八十島 元）

水 出 書 店

大 和 禎 人

水出芳兵氏は死んでいった何年になるのでしょうか、いまその店がまさに閉じざるを得ないという事情を迎えていることを知った。

芳兵老人は河上肇さんにひどく似たひとであった。この名前はよし、いと訓んだもののようだ。

ようだとするのは、

「ああ、義父はよしへいです」

と、太ッよのお上さんの話だったからだ。

「わたしは五十二、働きにでることにしています、ええ、主人の方は五十八ですから、いろいろあたってはみたんですが、もうどこも雇ってはくれませんの」

たずねもしないことをお上さんはしゃべった。

「で、ご主人、交通事故の後遺症かなにか？」

数年まえ、配達のパイクでトラックに接触する事故をおこしていたことを思い出したのだ。そうだった。あの

時も、ピンチをこのお上さんが配達にきてくれた。

「いえねえ、神経痛ですね、ですから、もうこのところ意気地なく寝たり起きたりなんですよ」

「ほおう、それは・・・で、あとは私の月ぎめの雑誌はどうなります？ どこかへ引き継ぐとか」

「それが、・・・どこか、このお近くにお店がないでしょうか、ご注文をお宅のほうでお願いしたいんですけど・・・すみませんね」

いかにも済みませんという顔をお上さんは見せた。

「ええ、店のほうは貼紙でもして、今月いっぱい」

「ふーむ、それはこまいったねえ」

私はそう言いながら複雑な思いになっていた。

私の記憶するところでは、はじめその店は区民館、つまり特別区としてはまことに贅沢ないまの文化会館の通りに面し、吉田種苗店に隣りあう位置のバラックという

覚えになっている。荒廃した戦後間もない焼けただれた町の記憶とともにそれは鮮明である。まもなく、店はK街道に面する薬局を半分仕切る格好の場所に移っていた。

そのころの薬局は医薬品の払底で営業もできない状態であったから、当然の店貸しであった。いまの松野薬局がそれだ。私はこの間口の狭い借り店舗の方で水出芳兵氏と懇意になった。河上さんに酷似したこの主の相貌の

実直さが第一に気に入ったし、名前も良かった。なぜかという、尾崎一雄さんの『暢気眼鏡』に出てくる愛すべき細君の（芳べー）に似通うという他愛のないことによるというフシのものであった。多分、名刺かなにかもらって知ったものであろう、店舗は小さくとも水出芳兵は地区の書籍小売業組合長だった。その上、この親爺さんが長野県人ということも、おおいに親近を覚えたもう一つの理由だった。私の父がやはり長野の出で、そのころはまだ疎開中だった。食料の乏しい事情下の転入抑制ということもあり、私はいまで言う単身赴任の身で、侘しさを本屋の店頭に立つことでわずかに慰めていた。戦争の直後の、それこそ貧しい店先だったが、親爺さんのもっている雰囲気はまぎれもなく本屋と呼ぶにふさわしい温もりをもって、私を迎えてくれた。

私はこの店で当時続々創刊あい次いだ雑誌の類をとりよせて貰ったのだった。

『世界』、『新生』、『人間』、『苦楽』、『学生』、

『赤とんぼ』、『童話』、や『文芸』、そして、『文芸春秋』、『改造』、『新潮』、『文学界』などの復刊号、やや遅れたように思うが、

『展望』、『近代文学』、『太陽』、『素直』、『黄蜂』、『饗宴』、『日本小説』、『群像』、など、

私はなにをを考え、なにを希求していたものか、さながら渴きを癒すように水出芳兵氏の顔でそれらを手にいれたものだった。印刷用紙の不足から発行部数が少なく、粗末な再生紙の使用が多かった時代のことだ。それでも、発行さえすれば飛ぶように売れ、なかなか手に入らないところを親爺さんは確保を私のためにしてくれた。出版物の氾濫する今日の事情からは考えられないことだが、そういう世相なのであった。

いらい、私の水出書店とのつきあいは延々と続いてきた。しかし、この店が利益になるような本を買うことはほとんどなかった。小売業崩しの一割引の本屋というのが勤めさきの方には来ていた。北星社といった。店舗をもたない本屋さんであった。こちらはオートバイで駆けずりまわり注文をとっていく、こまめな商法で重宝がられたものだ。すでに物故したが、青山さんといった。荷付けを終ったパイクを乗り出そうとしてバッテリーそのままだったらしい。

「なにせ、本は重うござんすからねえー、もう私も年ですよ、つくづくこたえましてねえー、はい」

(ねえー)という語尾に実感をこめて、このひとは少しづつ商いの守備を縮小していると、述懐を聞いていただけに痛ましい。掛売の集金に細君があらわれ、ことの子細を知ったものだった。途方にくれる話が哀れであった。一家をあげ、手をわけての集金だった。

私はこのひとから山川出版の『県史シリーズ』全四十八巻や『上林 晩全集』全十五巻などを揃えている。また、『日本の城下町』、『日本のチンチン電車』、『汽車半世紀』、写真図説『相撲百年の歴史』といった豪華本、また、日本文芸家協会による小説年鑑『文学選集』、この本は後に一九七三年からは『文学1911』として名を変え継承されるのだが、青山氏の生存する限りは頼ってそこから需めていた。読書人の需要に応じて、薄利多売を旨とした北星社の青山氏はその多売の戦の庭に倒れた。壮烈な戦死である。どんな商売にしても顧客とともに生きる心意気がなければならぬ。

「いい本ですねえー、お待ちどうさま、私にも覗かせてくださいよ」

青山氏はそういう本屋さんであった。だから、戦さ場に壮烈な死を遂げたのだった。小売崩しの一割引は大きく言えば日本文化のための奉仕に価したのだ。

「こんな内容見本がきております。おもってください、この組みは読みずらいかもしれせんア、でも、ようや

「遠いところを悪いねえー」

「いえ、この近くについてもありますから」

配達係は息子のいまの主がずっとしてくれ、とくに住いが奥まったいまのところへ移ってからは気の毒であった。そうなるからでもかれこれ三十年にはなる。

盆暮れ払いも悪いから月々に払おうと言ってみたが、「いえ、いままでのようで手前どもは結構ですから」

と、応じようとはしなかった。昔流儀を律儀に守って、中元ならタオルの一筋、歳暮ともなれば高島易断の『神宮館運勢暦』、名入りカレンダー、手帳、えとをデザインした紙入れ、といったものを届けてきた。親爺さんとはとくに亡くなっていたが、堅固に昔気質のしきたりが息子に受け継がれていたようである。その律儀すぎるものがいまの時代では貴重なのであった。ほだされるのであった。

大山ハッピーロード入口と店判などではなっているが、美観街入口、もしくはK街道に面して大山駅に通じるアーケード街の入口、と説明したほうが解りやすいかもしれない。ハッピーロードだの、アーケードなど横文字ばかりはここにもあり、美観街を唱えるとなるとむしろ滑稽であるが、それはともかく、その一角K街道に出はざれるところ、三角地を占めてわが水出書店はやがて長く存在するようになる。いまのK街道は旧街道の道筋とは違

くこれだけの本が出るようになりました」

一方、水出芳兵氏の方はつましくつねにこんなふうであった。戦火を潜りぬけて生きのこった本屋の感慨を伝える言葉として真実味があり、それが以心伝心といった案配でこちらに伝わるのだった。大店の旦那風にとりかまえていて、もみ手をするとかの客への媚びを一切示さないのであった。本を愛する本屋さんの一味違うところである。

月ぎめの雑誌にかぎって、なんとほぼ四十年、私は水出書店のほうからとりつづけた。戦争直後のあの私のために確保を惜しまなかった恩義に応える、それは私の方の徳義でもあった。一割引く本屋のあることを話題にしたことがあったが、親爺さんは笑って譲歩をしなかった。私のとりつづけた雑誌は『世界』、『文芸春秋』、『新潮』、『文学界』、『小説新潮』、それに相撲マニアらしく、『相撲』、『大相撲』、それに最近になって『新潮45』が加えられる。このうち『世界』はある時やめにしたが、一時は『朝日評論』もとっていたことがある。一割引ということのなかった文化教養費は馬鹿にならない。そして、これらの雑誌のことごとくを必ず読み了えたというわけでもない。古紙として、(チリ紙交換屋)の手にあえなく渡るのがオチであった。

ところで、これらの支払がまたすべて盆暮れ払いであったことも特筆しておかねばならないだろう。

う新道だから、蛇行していた古い道は斜めに交差するため、こうした不自然な地形を残す結果になっていた。三角形のショートケーキ、もしくは潜水艦の指令塔を想像すればよい。前記した松野薬局とは反対角にあたる。街道に面しては窓やその他の開口部の一切ない建物であった。家族の誰かはその三角形の頂点に足を突っ込んで寝るものであろうか、など、余計なことを考えたものであった。

ともかく、そんな立地条件だから店舗は猫額に等しく、本をならべてみても夜店の本屋のような貧しい店先であった。これではどうにもならないな、親爺さんの顔で保っているものの、先行きどうなる？ という懸念があった。

美観街約三〇メートルの間にやがて二軒ほどスマートで新しい書店が出現する。人の流れははずれの水出書店までは足を運んではこない。手前でスキッチバックをする。

四十年の歳月は流れてとどまらなかつたように、町の姿も絶えず変貌を遂げてきた。旧態依然の水出書店が孤塁を守ろうとすることは甚だ困難なはずであった。アーケード街というお天道さまに叛く街区を作ることの是非いずれか、それが商店街の繁栄にむすびつくものかどうか、その実現についても莫大な出資が必要で、商店連合の合意をとりつけねばならない。地元のため、水出芳兵

氏はまとめ役として奔走につとめた一人である。自分の店がその末端にある不利などは省みなかったものであった。かつて、この商店連合は『明治百年記念平和の時計』なるものを駅前建設し、開かずの踏切と不評の多い駅に接した踏切の混雑を解消しようとし、螺旋階段つきの歩道橋を実現させた。歩道橋建設はやりのムードにのせられたフシがないでもないが、線路をはさむ東西の商店街の共栄を策したものであった。もとは東に店構えの昔のある水出氏の人情もからみ、やはりもっとも熱心な提唱者になったものである。しかし東は東、西は西、どうしても西側がつねに優位に立っていた。東が区民館、さらには役所をひかえる言わば県庁所在に近くても、後背地の広がり西がはるかに有利であったからだ。しかし、同時に商店連合の熱意も買われなければならないことであったろう。水出芳兵氏の郷里は糸魚川街道に添う中萱に近い。義民、嘉助神のような血が多分に流れていたのであろう。アーケードの実現はついに見ずに亡くなったが、その葬儀は街ぐるみの会葬という盛大をみたそうである。

「へえ、傘いらずは結構かもしれませんが、負担が大変なんですよ、うちあたりは細い商いですから・・・、それに戸・ば・口ですから、なんのご利やくもなしですわ、つまりません」

（おれも年だからな）
と、落ち込んでいった。

「私がやってやれないこともないんでしょうけれど、女の声じゃ馬鹿にされるんですよ、発注も思うようでないとなると、ダメなんですよ、廃めるよりしかたがないんです」

お上さんは残暑の中を日傘をさしてきた。その柄をクルクル廻しながら話した。

「で、今日は、自転車かなにかで」

「いえ、バスですよ」

「それは・・・、大変でしたね、前後を歩きじゃ大変、遠いからね」

私は同情する一方、この水出書店のだしぬけな九月一杯で閉店するという終焉宣言ともいうべきものを、私自身にとって大袈裟に言えば文化教養の一つの終焉の危機のようにうけとった。

私は今年同じ九月、人生の一つの節目を迎えていた。二十二日にはその満才に達する、その直前のことであった。なにか私なりの覚悟を促すかのように、と言えば大仰に聞えるかもしれないのだが、まさにそうだった思いで、水出書店の廃業という事実を知らされたのであった。折も折だから、あるいはこれも天の啓示かと思う心境であ

ほんとうにつまらないのだという顔を二代目はしていた。

いまや出版業界は輸出が輸入にまさる貿易実績をつむような勢いといわれ、海外の日本認識の高さが話題になるという時代だが、一方、国内の方は漫画本のラッシュ、文庫本の氾濫に覆われる傾きが強い、街の本屋では用が足りない時代が来ているようだ。よほど店主がしっかりしていれば別だが、気の利いた書店は姿を消しつつあるような気がする。書籍小売商の危機は深刻なものに思われる。読者層のニーズを追わなければ立ちゆかないのだ。中央の大書店に客を奪われ、凋落する一方なのだ。親しみやすく、本の間に合う街の本屋さんは昔日のまばろしと化しつつある。

アーケード街に装いもスマートに出現した新しい書店にしても内実は苦しいのである。立ち読みの客が多いとにらんでいる。雑誌類に十文字に紐かけするようになった。この変化は微妙だが、やがて客足の速く原因に結びつくはずだ。

二代目の水出氏はひそかに、
（うちばかりではないな、そらご覧な）
と、商敵の景況を踏んだものだった。

しかし、現状打開の道は考えられない。親譲りの商いを守ることに必死だった。それ以上の才覚は湧いてきやうもない。

った。私もはや、いつまでも若い気持でいられないのではなからうか。読書という営みにもいつの日か区切りが必要で、淘汰の時期を迎えるということが、むしろ、ごくあたりまえの成り行きではないだろうか、思えるのであった。

そうとすれば、今後は自由選択で月々の広告に気をつけ、必要に応じて店頭買いという方法もないわけではない。目次しだいで買いたいとめることはどうか、などと、考えてはみるが全くそれでは自信がもてない。雑誌の方から見ればなされそうである。昔のように買いそこねても、夜店に出かければ月遅れで手に入った時代とは違うのだ。読み捨ての時代にこれではあまりにもミミチイ話になる。他に振り向けても、おいそれとために配達してもらえない店が見つからないとしたら、わが文化教養はとみに衰退を招くに相違ない。かくてとつおいつするのであった。

月末二十九日、ある会合のため私は家を空けた。夕刻になって帰宅してみると、郵便受をこぼれ落ちて水出書店の届けてくれた未配の雑誌が四冊、無残にも雨にぬれていた。家内を同道しての他出だから留守は誰もいなかった。

（ああ、やはり来てくれたのだな、これが最後の配達なら、もう一度あのお上さんと話がしてみたかったな）
私は悔やまれたが、あとの祭だった。重い雑誌はこぼ

れ落ちたが、もう一冊ポストの底に残っている本があった。しめくくりの配達だから請求書かなにか投げこまれていないかと思ったが、それらしいものは見当たらず、ポストの底から私のとりあげた一冊の方は、例の『神宮館運勢暦』だった。出先で今日私はそれが、早くも九月末というのに出まわっているのを目にしていた。(ああ、これがいよいよ最後だな、それにしてもなんと律儀な)

廃業していく本屋の、多年続いてきたこの贈りものをおし頂きたいような気持になった。運勢暦をわざわざ買ひもとめる好みを私はもっていなかったとしても、その真心が嬉しいのだった。

こうした経緯のなかで私はふと電話帳で水出芳兵氏の名義がそのままになっていることを知った。

(おや?)

と思ったが、この疑問はすぐに解消した。

雨の翌日になってお上さんが電話をかけてきたからだ。

「きのうはお留守にうかがって、本ぬれてませんでしたか、ああ、やっぱり、すみませんねえ、ちようどしや降りて、落ちたのがわかっていながら、どうにもならなくて、すみません」

「いや、悪かったね、それよりこれまでの支払もあったのに」

こんなやりとりの中で電話局は訂正しないままになっているとお上さんは言うのだった。

「そう、懐かしいねえ、それにしても店を閉じるなんて残念だねえ」

「あ、ちょっとお待ちくださいね」

店頭客のあった様子だった。

「いろんなお宅にうかがってお花を見せていただいたり、お話ししたもんでしたが、私も残念なんです」

もう一度受話器をとると、こんな話ぶりであった。娘は嫁にいき、息子の方はタイル工だと言った。

「いま景気がいいんですよ」

ひとの良なお上さんはそう言うのだった。

かの河上肇氏に酷似する書籍小売商、水出芳兵氏はその名を電話帳の中にだけ計らざるモニュメントとして残すことになった。

(六〇・九・三〇)



ハイラル挽歌

第二章 開嶺の崩壊

(三)

八月九日未明ハイラルでソ連軍の爆撃を受け、東山軍事基地を脱出して開嶺に向った塩沢師団長は、全速力で乗用車を飛ばして新南興の師団司令部に夕刻漸く到着した。

清水連隊長はトラックなので師団長より遅れて、開嶺の連隊本部に入ったのは二十一時を過ぎていた。

連隊長が不在であっても既に連隊は戦闘体制に入っていた。

ハイラルに駐だった百十九師団は、五月から開嶺の陣地に逐次転出中なので、師団長、連隊長がハイラルと開嶺を絶えず往還していた。連隊長不在の時は副官の大野大尉が万事手抜き無くやっていた。ソ連進攻の非常事態も大野大尉の明敏な判断で連隊麾下の各隊にはいち早く開戦が知らされたのだった。

金子正義

だが、師団隷下の諸部隊は、ハイラル・開嶺・新南興博克図と広く展開しているのに、鐵道沿線より奥深く入った前進基地や、守備隊には開戦が徹底していなかった。通信隊は六月から全力をあげて開嶺を中心とする各部隊には電話線を通し、奥地守備隊にも通信網を設置しようとして資材を担いで山野を駆け廻っていたが未だ完成していなかった。

だが前戦の駐屯部隊は師団司令部との連絡がつかなくとも、独自の判断で行動する関東軍独立守備隊の伝統があった。それは関東軍全体の特色であり癌でもあった。

塩沢師団長は、改めて師団隷下に日ソ開戦、番号作戦発動を徹底させようと

「開嶺の各部隊は戦闘体制に入っているが、前線の各部隊や、師団直属の前進基地の末端は未だソ連の進攻を知らない早く知らせよ」

と柳沢参謀に命じた。元より通信隊は総力をあげて奥

地の守備隊迄通告しようと思つて通信網を敷設していったが、途中でソ連戦車隊と遭遇して武装解除されたり、前進基地の戦闘に捲き込まれ全滅したりした。

番号作戦発動を受けた各部隊から、陸統として肉迫攻撃用爆雷受領のトラックや馬車が師団司令部にやって来た。車輛・馬匹の不足している隊などは、兵器係将校が下士官兵を率いて奄奄と担いでいった。

両手で胸に抱え戦車に体当たりして爆破する肉迫攻撃用爆雷は、非常に強力な黄色火薬を五軒も充填してあるので危険であるから、番号作戦発動までは各部隊には演習用を渡してあつて開戦と同時に実物を渡す手筈となつていた。

師団長より遅れてハイラルから司令部へ入った師団幕僚達は假眠の暇も無くそうした戦闘準備に大童であつた。前原大尉は、兵器弾薬の引き渡しの下士官達を指揮して、部隊編成表と一々引き合わせては爆雷を渡していた。愈々これを使用するに至つたかと、積まれて行く爆雷一個一個を祈るように見守っていた。

肉迫攻撃用爆雷は、ノモンハン事件当時のサイダー瓶にガソリンを詰めた火焰瓶のような手軽なものでない。地表に俯して戦車の進行を待ち、速力の疾いM四重戦車の斜め前から駆け込み、爆雷の信管を引いて戦車に体当たりして肉體諸共爆破する。正に肉迫攻撃人命散華の体当

り爆雷であつた。彼のレイテ・沖縄の特攻機に劣らない神風肉弾攻撃であるのだ。前原大尉の胸は熱く断腸の思ひであつた。

十日早朝濃い霧の籠る博克図駅に、汽罐車のライトだけをボンヤリと照らした列車が滑り込んだ。ホームに停車した列車は、軍用貨車四輛に二等・三等・四等客車と貨車・車掌車が不揃に連結されていた。直ぐ発車するのか汽罐車の煙突から戦火を潜つて来た熱気を吐き続けていた。

軍用貨車には、ハイラル防衛を八十旅団に任かせて百十九師団隷下の各隊へ転属する將兵が満ちていた。連結客車には着のみ着のままで戦火を逃がれて来た一般邦人や軍人軍属の家族が溢れていた。

列車が開嶺を通り越し次の新南興も通過して博克図に停つたのは、此処に第四軍の兵站部があり、今は開嶺の戦闘指揮所に司令部があるが、百十九師団司令部も此処にある。従つて軍用鉄道も何本か岐れ、森林鉄道もあつて奥地の開拓団からの引揚者の収容にも便利であつたからだつた。

列車は開嶺陣地へ向う將兵を降ろして、石炭、水等の積み込みが終れば一路昂昂溪へ向う予定であつたが、將兵が全部降りて駅前広場に出て仕舞つたのに発車しなかつた。

身重の林田夫人迄も蒼白な顔で

「私も一緒にいきます、連れて行ってください」

と岡部夫人の留めるのも訊かず手を振り切つて走り出した。幼い娘が啜り泣き乍ら纏いついて行つた。

乳飲みを抱えた若い女や、空腹を訴えて泣く幼子を両手に引いた母親達は氣丈に励まし合つて、

「ハイラルの兵隊さんが今頃はソ連軍を撃退しているよ、もうすぐお家に戻れるよ、」

と子供達を宥めていた。

男達の騒ぎは一応納得して収まつたが、何時迄待つても内陸部へ行く列車は入らず、人々の不安動揺が再び昂つて、軍人家族の夫人達は駅長室や兵担分哨に迄押し掛けて喚き出した。

駅長からの通報で駆けつけた守備隊長の高橋中尉は、騒ぎの中に岡部大佐夫人達が居るので説得出来ず、師団司令部へ状況を訴えた。

報告を受けた柳沢参謀は前原大尉に、

「ご苦労だが、馴れた処で行つて呉れ」

と言つた。前原大尉は数日来不眠不休で戦闘準備に奔走していたので、『ソ連軍邀撃の重大時期にわざわざ師団司令部から出向くとは本末転倒だ、それも、馴れた処でやつて呉れとは何事か』と憤然としたが、軍人家族の不安を思つて直ぐ安藤少尉と下士官を連れて車を飛ばした。

列車には老人や子供の中に病人も出た、蒸し苦しい密閉した車内で身動きも取れない程詰め込まれているので、医師の手当も受けられずにいた。列車の停車中に軍用車に幸いハイラル陸軍病院の患者や軍医看護婦等がいたので手当が受けられた。婦女子の殆んどが半病人であつたが、停車中に外気を吸い、駅の水道で手拭いを濡らして顔や手を拭つてやつと生気を取り戻していた。

ハイラル軍官舎から避難して来た若い夫人達は、いつ迄待つても列車は動かないので、夫の居る開嶺迄歩いて行こうと誘ひ合つていた。

二時間程丘陵を走って博克図駅に乗りつけると、駅前広場には未だ転属部隊との連絡がつかずに待っている将兵や、転属部隊そのものが何処かへ転出して仕舞って途方に暮れている兵隊達がいた。

一般邦人は空爆下、命からがら脱出して来た恐怖と疲労で、煤け顔に目ばかり炯からせて、もう騒ぐ力も無くホームや車内に坐り込んでいた。

前原大尉は車から飛び降りて守備隊長高橋中尉の報告を聞いたか、ソ連軍が直ぐ進攻して来るというのに、漫然と転属部隊からの迎えを待っている将兵に憤然として「駅周辺に留まっている兵隊の処置が先決だ」と叱りつけて、直ぐ駅前に集合させた。

高橋中尉と安藤少尉は待っていた将兵の転属先を一々訊いては指示して出発させた、所属部隊不明の兵隊達は安藤少尉に官姓名を記録させて、博克図北方に駐屯している捜索遊撃隊に転属を命じた。兵隊の処置をしてから高橋中尉と駅長室に行き、昂昂溪に向け列車を直ぐ出すように乗務員に厳命して、ホームや駅前に溢れ出ている引揚邦人を呼び戻した。

それでも開嶺陣地にいる夫の宿舍に行くと言わない若い将校夫人は、重いトランクやリックを背負って先に出発した将兵の後を追って、二十軒の道程を歩いて行く構外に出て行った。

無謀を思い止まらせようと大声で説得している前原大

尉の横に三人の女が立った。

「大尉さん暫く」

前原大尉は不審に思っで見直すと、土埃に塗れ化粧の消えた顔が微笑んでいる。ハイラルの銀鈴のマダム梅子であった。シャツのような筒袖にモンペを穿いているので、ネッカチーフを被っていないければ判らない変りようであった。

「やア、よく乗って来られたなア、早く列車に乗り込め、少しでも早く内陸部へ避難するんだ」

と、将校夫人達を説得していた同じことを乱暴な言葉で言ったが、それだけ真実味を含めたのだった。

「でもあの奥さん達開嶺へ行けば将校官舎に入れるんでしょう」

「莫迦言え、ハイラルのような官舎なんか無い、山の洞窟だ、直ぐ砲弾の雨だ！」

「それでも旦那さんの処が良いのでしょう」

梅子は広大な草原に続いて緩やかに膨らみ高まる開嶺の方向の山々に目を細めて眺めた。

「あの山の中に反田中尉さんも居るんでしょう。それに何んと言ったって、あの音楽好きの少尉さん」

「官坂少尉さんよ」

黙って前原大尉との遣り取りを見ていた小柄の娘がハッキリとした声で言った。

「そうそう、京子はあの人が好きだったのね」

と梅子は呟くように言って羞恥を隠して捨て鉢のように顔を顰めた京子を流し目で見て、

「行っって見ようか、歩いて、」

と午後の明かるい日の射す草原に続く緩やかなスロープの高原を、小さな豆粒のように登って行く隊列を展望した。

その隊列を追ってずっと後から細い帯のような径を十二、三名の女達が砂埃りを被り乍ら続いていた。

「ママ、莫迦ね、」

京子は連葉に言ってもう一人の若い娘の手を引っ張って列車に走り込んだ。

「じゃあ大尉さん、友田さんや宮坂さんに銀鈴のママが宜敷くと伝えてね、あんたも死んじゃ駄目よ」

と、マダムに戻った目で睨むともう一度北方の山に視線を向けた。

「外人部隊の後を追う女達じゃあるまいし」

と呟いたが涙が溢れて頬に流れた。

「だけど、今更、ハルピン、新京へ戻った処で何にがあるの、内地へ帰ったって誰も待ってはいやしない、山へ登って軍国の乙女、白衣の天使にでもなろうかしら……」

とニヒルカルに言い乍らくると背を向けて列車に向かった。

山の稜線に兵隊の列も消え、やっと発車した列車の最後尾の車輛が原野の彼方に小さくなると、駅構内は無気味な程の静かさに戻った。

前原大尉は、気骨の折れる仕事を終えてホッとして市街地を望見した。駅前の広場や市街には人影も無く商店の扉は固く閉ざされていた。市内の邦人商社や居留民は既に内陸部へ引揚げていた。付近の満人達も一早く開戦前から姿を消して何処も殆んど無人であった。

「これで終った訳では無い、浜洲線沿線や免渡河の奥地の開拓団が開戦を知って子女を避難させ始めたら、博克図や、鉄道各駅は大混乱となる。だが軍はもう手を貸す余裕は無い」

無然として、下士官の運転する車に乗った。深く腰を落とす疲労が出て直ぐ睡った。悪夢が幻灯のように次々に点滅した。彼が北支、中支に転戦して無辜の民衆を戦乱に巻き込んだ修羅の情景であった。

(四)

南昌作戦で江西省德安付近の山岳戦一ヶ月、多くの死傷者を出し中隊の半数はマラリアや大腸炎で戦力を失なっていた。妙義山のように險阻な山岳地帯の戦闘に前原少尉も倒れんばかりであった。漸く樂安江の望見する平野部へ出てホッとすると、前方を難民の群が横切っていた。饒州、南昌付近の戦火を逃がれる農民達であった。

難民の群は、前原少尉の中隊がこれから攻略しようとする県城方面へ動いていた。藁苞のようなものをいくつも頸や腰に括りつけた髪を振り乱した女達や、籠を両手で抱えた跌の子供、大きな皮袋を担いだ男や、竹箆を背担った老人達が戦火を逃がれて濁流のように流浪している。

家財や鶏から豚まで積み込んだ馬車が群集に割り込んで若い男が奇声をあげては鞭を振っている。遙かに遅れて動きの悪い木製車輪を軋ませた牛車ついて来る。鉛の流のように鈍い難民の列が、電気に衝撃されたように動き出した。忽ち前方から日本軍機が二機姿を現わしたと見る間に群集の上を低空で翔んで、一、二度旋回して機銃掃射を浴びせた。難民は悲鳴をあげて蜘蛛の子を散らすように四方に散った。家財を積んだ牛車はひっくりかえり、担いで来た荷物や食糧袋まで放り出して逃げた。暫く伏せていた難民は、日本軍機が去った間に一面に散乱した物品を拾い集め、濁った白眼を剥き血友吐を吐いて死んでいる牛馬と共に倒れている負傷者を助け起したり、仆れた親兄弟に縋りついて号叫していた。内には死体にならずに天を仰ぎ拳を上げて悲痛な叫びをあげている老人も見えた。

山麓の林に潜んで難民の通過を待っていると部隊本部から伝令が来た。蒋介石は南昌方面の主力戦を回避して一斉に退却したので、中隊は蠢動する遊撃隊や新四軍を

捕捉殲滅する為に臨江方面へ追撃することになった。

一面の表畑であった。逃げ遅れた農民の姿が表畑の中に動くとき日本軍は兵士、農民を見定める余裕を持たず動くものは何んでも銃火を浴びせた。今迄に住民と見て構わずに進むと忽ち後方から狙撃された。夜になると正規兵と一緒に勇敢に夜襲して来るのだった。

畑の畦に朽ち倒れた作業小屋があった、蔭に女子供が一塊となって震えていた。山崎上等兵は逃げようとする娘を抑えつけて、衣服を引き裂いて下半身を露にさせる。軍袴を摺り下げてのしかかった。巻脚絆をつけた軍靴が乾いた土を蹴り、背負囊が上下に動いていた。頭上に彼我の弾丸が不気味に空気を引き裂いて飛んでいた。

夕刻、大梁山付近の童家坊の小屯に入った。部落の土壁には抗日ポスターが貼りつけられてあった。「日軍実小的消耗代価一民焦土比於拳」と読めた。横に日本軍の骸骨の山の絵まであった。戦火に崩れた土造りの民家が半ば崩れて残っていた、中隊本部の宿舎は先刻まで将校の宿舎だったらしく、煖炉に新しい灰が残り戦帽やグレート、弾薬、拳銃のサック、靴下、青竜刀などが散乱していた。

朝になると何処に隠れていたのか黒豚や家鴨が出て来て何事も無かったように、黒豚は鼻穴を鳴らして土を嗅ぎ廻り、家鴨は群をなして尾を振り乍ら泥水を吸っては咽喉を伸ばしていた。水辺の楊柳の梢に鵲が戻って砲声

に驚いて止めていた果作りを始めた。豊かな農村らしく餓えた日本兵の糧には有り余る程の食物があった。

古い土壁に囲まれた家の入口の泥土を固く塗りこめた敷居に老婆が腰を下していた。黒黴の生えたような皺だらけの顔は憂愁に満ちていたが、幾度かの兵火や天災、動乱を潜り抜けた不死身を誇っているようでもあった。老婆の肩に隠れて半裸体の子供が辺りを歩き廻る日本兵の動きを擬々と見ていた。澄んだ子供の黒い瞳に惹かれた内田一等兵が雑囊から乾パンの袋を出して子供の手に押し付けた。子供は、怖れて老婆にしがみ付いた。乾パンの袋は乾いた音を立てて土に落ちた。老婆は

「謝々」

と囁れ声で言って拾い上げると、未だ手を引っこめている子供に押し付けた。

午後、大西中隊長が

「おい、前原少尉、便衣の捕虜が恰度三人いる試斬しろ」

と睨んだ。南昌作戦の始まる前に士官候補生から任官して中隊に配属された前原少尉は、未だ白兵戦の経験が無かった。然し捕虜を試斬することは出来ないと言を噛んだ。

日本軍には如何なる場合でも敵に投降するなど考えなかったが、敵意を喪失した中国兵は直ぐ武器を投げ捨て、いとも軽々しく投降して来た。兵站線があるとか、

鐵路があれば後方へ送ったが、最前線では処置に困って片付けるのだった。

前原少尉が前線の部隊に着任の途中、日本軍に降った捕虜を使って正規軍や便衣の死体を大発に積んで、楊子江に投げ込ませるのを目撃して驚いた。多くの死体は緩い流れの濁流の汚物のように浮び漂っていた。死体は大発で楊子江の中流まで持って行かせて投げ込むのに、どういふ訳か岸辺に漂着するのであった。瘦せこけた中国兵捕虜は無表情に黙々として長い竹竿で浮遊する死体を押し流したり、舟で引き寄せて中流の流れにのせたりしていた。一体中国兵捕虜は何を考え、どんな思いであろうかと胸にうたれたのだった。

捕虜は井戸の側に捕縛されたままアンペラの上に坐っていた。三人共便衣で投降兵ではなかった。昨夜半部落に潜入しようと徘徊中分哨に発見され捕えられた。相当の拷問にも屈せず唯「不知、不知」と言うのみだった。村に帰ろうとした農夫が、便衣の斥候か定かでないまま処刑するのは国際法上問題であるが、年嵩の男は捕えられ時、激しく逆らい歩哨の銃剣を奪って日本兵を傷つけ、二人の若者は手榴弾を隠し持っていた。

若い二人の捕虜が先ず引き立てられて、建物裏手の立木に目隠しのまま結びつかれた。

山崎上等兵が初年兵を整列させて銃剣で処刑しろと命じた。銃剣刺殺は初年兵教育の絶好の機会と、始めの頃

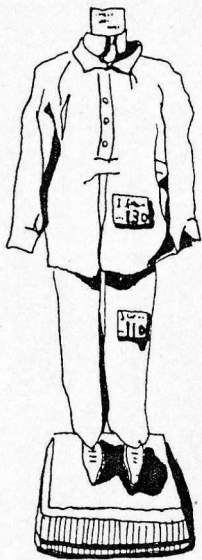
は鬼軍曹の鎌田軍曹が手本を示したが、此の頃は、その残忍野蛮さに嫌気がさしたか、此んな時には酒を喰って廃屋に寝転んでいた。

初年兵は砲声や頭上を掠すめる弾丸には余り怖がらなくなっていたが、無抵抗の捕虜を刺すときは顔面蒼白となり、ガチガチと歯の根が合わず冷汗を脇の下に垂らし、腰をふらつかせて自暴自棄となって驅ごとぶつかっているのだった。

内田一等兵の二十六名の同年兵は、死傷者や戦病の後送者も多く出て半数になっていた。その内未だ銃剣刺殺を経験していない者は五名だった。運悪く、立哨や使役も無くボサーとしていた内田一等兵は目隠しされた捕虜の前に立たされた。

内田一等兵は、初年兵教育もそこそこに戦野を駆け廻ったが、秘かに『俺は戦場であっても敵を斃さず、人を殺さず』と自からに誓っていた。彼にとっては戦闘は唯駆けては伏し、伏しては小銃を鳴らすだけであつた。敵に向けて銃火を発し乍ら決して弾丸は敵に当たらないと思つていた。敵の姿を見て撃つたことは一度も無かつた。いつも敵に向つて空間を撃つて射撃音を響かせるだけだつた。

彼は、戦争はいくら兵器が発達しても相互に虚勢を張り合えば良いと思つていた。唯、彼は信念をもつてそう主張しているのではなかつた。彼は臆病者であつたから



彼は内田一等兵のように失神する訳にはいかなかつた。苟も士官候補生出の帝国軍人である。武人の面目にかけてその本分を尽すのみと意を決した。戦いは敵も味方もお互いに相手を斃すことを終局の目的とする。敵も銃弾や空爆によらず古来武人の精神に則つた日本刀の一斬によつて首を撥ねられることは満足であろう。前原少尉は捕虜とは言え、礼を以て死を与えようと目算を取つて坐わらせ、切腹の武士を介錯するように一礼すると日本刀の背を見せて後に廻わり一閃の裡に首を撥ねた。大西中隊長と居並ぶ将兵も息を呑んで聲も無かつた。だが前原少尉は貧血したように蒼白となり腥い胃液の反吐を覚えた。

人を殺すことなど、正義の為とか、平和の為とかいくら飾り立てても出来なかつた。彼は自分が死ぬことには好奇心があつたが、他人を殺すなど出来るものでなかつた。正常な人間は誰でもそうであろうが、日本の軍隊教育の妻さは、入隊以来の日々の訓練で人を殺して平然たる人間に変えて仕舞うことであつた。だが彼は心の底から神経が弱かつた。未だ日本の兵隊になつていなかった。彼は十米程前方に立っている捕虜に対して、逆に自分が刺殺されるんだと、電撃のような痛みを心臓に受けた。呼吸が詰まり、構え持った銃剣が万力のように重く彼を押し潰しそうになつた。

土埃を被つて後の土壁の黄土と同じような土人形に見える捕虜の目隠しがずり落ちた。捕虜の冷たく灼る目がビタリと内田一等兵を見た。

山崎上等兵の怒号がガンガンと響いた。並んでいる初年兵は異様な叫び声をあげて捕虜に体当たりするようにして刺殺を一度、二度と繰返した。

「この野郎！」

罵声が内田一等兵の耳朵に熱風のように響いたかと思つと、鉄帽の真後からガンと床尾板で殴りつけられた。首筋が胴体に減り込むような衝撃を覚えて内田一等兵は前のめりに倒れて氣を失つた。

最後に年嵩の捕虜が自分で掘らせられた墓穴の前に引き据えられ、前原少尉が斬殺する番となつた。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になつて頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

男たちの藩（三）

第二章 春の土

三戸岡 道 夫

〔一〕

修身が領国の美春へ入ったのは、それから約一年後、翌年の春であった。

江戸と国元を往復する行列にはうるさい格式があり、それに要する人数と費用には莫大なものがあつた。これまでは財政窮乏といひながらもこのしきたりは守つていた。しかし今度は修身のお国入りである。行列も乗物も質素なものとした。

美春難に面した温暖な国元は、梅と桃はすでに散り、折りしも桜が満開であつた。

領国境の顔振峠から少し下つた善福院という寺に着くと、ことさら山桜は満開で、そこに家老をはじめ、大勢の家臣たちが修身の駕籠を出迎えていた。修身はひとまず花吹雪の下で休息した。

山腹の高みからは美春の春景色が一望に見下され、緑

色の田畑や菜の花、蓮華草があざやかに燃えあがり、美春難の彼方までつづいていた。それを見たときはじめて修身は

『ああ、自分が美春藩の藩主なのだ』と肌で実感した。

「道中つつがなく、無事のご入国、おめでとうございます。一同ここに揃つてお出迎えに参上いたしました」代表して修身の前にひれ伏したのは、最長老の松前久信であつた。国元の次席家老である。その後には秋元重丸や片桐五郎太など重要な家老や家臣が並び、代わる代わる祝いの言葉をのべた。

「出迎え、ご苦労であつた」

修身はそれぞれに声をかけたが、しかしその中には高柳玄宰の姿がないのだった。藩主初入国ともなれば、まずまづ先に出迎えて、挨拶をのべねばならない立場の人物なのに

猥

『やはり……』

と長尾真十郎の全身から血の気が失せ

「高柳殿の姿が見えぬようだが……」

その非礼をなじると、松前久信があわてて

「高柳殿は病気でふせておりますので、ご無礼のほど、くれぐれもお詫び申し上げます」

そうとりなしたが、狼狽は隠せなかった。

修身も一瞬眉を寄せた。しかしすぐもとの表情に戻つた。最初の入国の玄関口から騒々しいことがあつてはならないと、意識して不快さを表に現わすまいとしているのがわかつた。

行列は山を降り、美春の町に入った。町人たちは道の両側に土下座して新しい藩主を迎えた。

と、行手の小高い丘の上に、美春城の天守閣がそそり立つのが見えた。桜が満開だった。

修身は城に入ると、まず先代光寧のご気嫌をうかがい、それから美春神社に参詣した。

神社の石鳥居には『美春神社』と刻んだ石額がかかり、参道には石灯籠が並び、その立派な境内は名園としても知られていた。修身は神前にぬかずき、昨年長尾真十郎を使者として祈願した財政再建の達成を、改めて自らも祈つた。

祈願の記念として茶の木五本を拝殿右手の空地に、密柑の木五本を拝殿の左手にそれぞれ植えた。十五年の長

期再建計画が達成された晩に、これらの木はどのくらいに生長しているであろうかと、その大きさを修身は晩の裏に描いてみるのだった。

翌日。

修身は江戸藩邸で同じように家臣たちを大広間に集め、儉約令の徹底と再建計画のあらましを改めて伝えた。家臣だけでなく、名主、庄屋、代官、それに各村からの百姓の代表者たちをも加わつたので、さしもの大広間も満員、廊下や庭にこぼれる始末であつた。

高柳玄宰も今日の大集合には出席していた。いくらへそを曲げたとはいへ、修身が召集した大集合に筆頭家老が出ないわけにはいかなからであつた。しかし挨拶のほかは一言も口を開かなかつた。

修身は一時間以上にわたつて大儉約令を熱心に説き、大集合は終わった。しかし大儉約令を出してほぼ一年余になるが、国元ではあまり守られていないことを改めて知つた。家臣たちも平気で絹の衣服を着て現われるし、隠居している光寧自身も従来同様の贅沢な暮らしをしていた。やはり江戸でと同じように修身自らが範を垂れていくよりほかに方法はないと思つた。ただそうした中であつて長尾真十郎の家族や一門の者たちだけは必死に儉約令を守り、質素な生活を守りつづけていることが、ともすれば絶望と焦りに陥りがちな修身の気持を救つた。

修身は絹の衣服をいっさい拒否して、江戸から持ってきた木綿を着た。食事は一汁一菜、身のまわりの経費も削減すると同時に、奥女中たちの数も減らした。藩主自らがやるのであるから、反対するわけにはいかない。こうした修身の誠意が通じたのか、やがて城中においても、領民の間においても、儉約令は徐々に浸透しはじめていった。

しかし儉約令は出費を制限するだけである。あくまで消極策である。儉約令だけでは財政は再建できない。

次に早くやりたいことがある。それは赤字財政を黒字へ転換さす決め手となる殖産振興策である。そう思うと若い修身は矢も楯もたまらず

『早く領内を隅々まで見てみたい』

熱い衝動が湯のように体内に溢れてくるのだった。

空がよく晴れていた。

そろそろ初夏を思わせる。

そんなある日、修身は長尾真十郎と側近の若い武士数名をつれただけで、馬で大手門を走り出た。

城の南を美春川が草を茂らせて流れている。その堤を東に走り、南に曲って郊外に出ると、緑が気の遠くなるほどひろがった田園地帯であった。

南へ一直線にのびた美春街道を、修身を中心とした騎馬の群は駆けぬけていった。

遠い雑木林の梢からしきりに小鳥の鳴き声が聞えてきた。

すすき野は南北に長い広大な台地で、北の端はずっと遠く領地境の顔振峠の方にまで伸びている。

修身は騎馬の先頭にたって東西に走り、南北に駆けて、地形や、土質、開拓の可能性などを観察した。広大な台地にはすすきや灌木が密生し、地味は肥えていると見た。

修身は馬から降り、かがんで土を掘ってみた。表面は乾いて痩せ土のように見えるが、底の土は湿って黒々としている。

「肥えた土ではないか」

修身は土をしっかりと手に握ってみた。掌にじっとりとした土の触感がつたわってくる。

「春の土だ」

そう思った。

春の土。春の息吹き。生命の息吹きがその中にある。この土の中に美春藩の財政再建の源がひそんでいる。そう思うと修身にはこの土がいとおしく、土の中に吸い込まれていくような気がするのだった。

なぜこんないい土地があるのに開墾しないのか。ここを畑にするのだ。そして村をすてて放浪したり、江戸へ出ていってしまった百姓を村に呼びもどすのだ。

「やはりここへは茶の木と密柑を植えようと思う」

馬上から修身は注意深くまわりの土地に眼を注いだ。田畑にはどんなものが栽培され、出来工合はどうなのか、どんな所に荒れ地が残っているか、山や森や林や、池や沼は荒れていないかなどを観察し、

『なにを植えたらいのだろう』

たえずそのことを考えていた。

馬に一鞭をくくると、スピードをあげた。大地の固い反応が馬の蹄を通して修身の身体に伝わってくる。生れてはじめて大地の上を走っているという実感に身体が酔った。

初夏の暑さだった。

「あの、すすき野へ行ってみよう」

左手に大きく広がる台地を見上げた。かつて単身おしのびで美春を訪れたとき、その上から美春領内を見下した台地である。その時から修身の頭の中には、台地に茶の木を栽培させ、製茶業を経済復興の策にしたらどうかという思いがある。そのときが今やってきているのだと思った。

騎馬の一行は斜面の細い道を駆けあがった。踏みしめられた雑草の臭いが新鮮に飛び散った。

眼にしみるような若葉の林をぐぐり抜けると、そこはもう頂だった。

人も馬も汗でびっしょりになっている。

もろ肌ぬいで汗をぬぐった。

そう言って長尾真十郎をふり返ると

「大賛成です」

真十郎も片手に黒土を握っていたが、それを修身の方に突き出しながら

「百姓たちははじめから荒れ地だとあきらめているのです。しかし違います。ごらんください。こんなに黒い。茶の木も密柑もきつとよく育ちます。この辺の百姓はよく茶の木や密柑を畑の隅や山の斜面に植えています。部落によっては共同の製茶所を作っている所もあるくらいで、茶の栽培には適した土地です。この広いすすき野が茶畑になれば、きっと財政再建の有力な武器になりますよ」

午後の日はいよいよ傾いていた。

一行は台地を降りると、近くの共同製茶場を見に行きた。

よく気をつけて見ると、農家の庭や裏山を利用して茶の木が植えてある。

山藪には思いなしか夕暮れの気配いがただよいはじめていた。今日一日の領内巡視に修身が満足しながら帰途についていると、ふと藪かげに異様な人の群を見た。

十五・六人もいようか。百姓であった。老人もいれば若者もいる。中に女も混っていた。いずれも両手を後に廻して、それが後手に縛りあげられ、腰縄で数珠つなぎ

にされているのであった。その端を役人が握っている。

「あれは何じゃ、罪人か……」

修身は馬上から長尾真十郎にふり返って聞いた。

「そのようでございます」

だが、とは言ったものの、様子がなんとなく変である。一人や二人の罪人なら話もわかるが、十五・六人も一度に捕えられるとは、いったいどんな罪を犯したというのか。

「何の罪か……」

すると若い近習が進み出て

「年貢の未納でございます。年貢を完納しない者をあへて捕えて郡奉行所へ連れていくのです」

「連れていって、どうする……」

「御法を犯し不埒千万ですから嚴重に取調べ叱責いたします。悪質な者は水牢に入れて処罰いたします」

破れ布子に縄の帯の百姓たちは、恐れて唇をまっ青にし、夕方の風にふるえている。修身は一瞬いやなものを見たと思った。昨年は雨がにつき凶作だった。しかし凶作だからといって年貢の減免は許されない。百姓たちは難儀し、年貢の納入がおくれ、年を越しても完納してない者はあへて奉行所へ捕えられていくのであった。だが奉行所で処罰され、水牢に入れられても、年貢がどうなるものでもないだろう。無い米は、無い。強いて完納しようと思えば、娘を売って金を納めるか、田畑をすて

て他国へ逃げていくほかないだろう……、そんな思いにかられていると、さわめきが起った。

中の一人が修身たち一行を見つけ、救いを求めて急に走り出してきたのである。

「お助けください。お願いでございます」

若い男だった。修身と同じくらいの年令だろう。ほろをまとってはいしたが、畑仕事の日に焼けた顔は精悍だった。だが縄で数珠つなぎにされているから、遠くまでは走れない。たちまち縄の連縛に足をとられて、つんのめって倒れた。後手に縛られているので地面に顔をもちにぶつけ、顎のあたりに血をにじませた。しかし若者は必死に顔をあげて

「お願いでございます。このままおらが連れていかれてしまえば、家にいるおばばが飢え死にします。お慈悲でございます……」

一瞬の出来ごとは下役人を驚かせた。あわてて走り寄ると

「何をする！この馬鹿者め！」

倒れた若者を足で二、三回、手荒くけとばすと

「さあ、立て。立って、さっさと歩くのだ」

若者はのろのろと立ち上った。そしてもとの数珠つなぎの列に戻ると、再び引き立てられていった。

修身は馬をとめたまま、百姓たちがよろめきながら次第に遠ざかっていくのをじっと見つめていた。

「お慈悲でござえます……」

若者の声がまだ耳に残っている。馬に乗った一行が藩主であろうなどとはもちろん知った上での行動ではないだろうが、それに対して修身は何もしてやれなかった。ただ、黙って眺め、見送ってやるしかない。それだけに顎から血を流し、助けを求めた若者の必死の眼の輝きが、突きささるように修身の中にはいつまでも残った。

(二)

十日ばかりかけて領内二百八十三カ村の視察を終り、田畑、原野、山林、池川の状況から、百姓たちの仕事ぶり、暮しぶりをつぶさに見て帰ってくると、すでに修身の頭の中には美春の山野が広大な茶畑と密柑畑に変身して、新緑にもえ上っているのであった。

修身の胸は躍った。

自分なりに納得のいく構想ができあがると修身は家老たちを集め、国元における第一回の再建計画会議を開いた。

集合したのは筆頭家老の高柳玄宰、次席家老の松前久信、それに秋元重丸、片松十郎兵衛、勘定奉行の片桐五郎太、それに長尾真十郎であった。高柳玄宰は修身お国入りの日、顔振峠の茶屋にも出迎えず反抗的な態度を示していたが、筆頭家老という立場上いつまでもそうした態度をとっているわけにもいかず、今日の席には一応姿

を現わしてはいたが、しかし殆んど口をきこうとはしなかった。他の家老たちも高柳ほど露骨な態度はさすがにとらなかつたが、心の中はいずれ同じにちがいない。しかし事、ここに至っては、家老たちの気持をいちいち忖度しているひまはなかった。

修身は一方的に押し切るように説明を始めた。

「先般の計画でも申したように、いまさら昔の百二十万石を願っても、実現するわけがないが、しかし領地はそのまま収入を二倍にする、これはやり方によっては出来ないことではない。現在の二十万石を、二倍の、実質四十万石に高めたいと思うのだ」

高柳玄宰をはじめ家老たちの顔は、何を言いだすのかと、修身の方をうかがって、動かない。

「その方法は一つしかない。同じ土地で倍の生産をあげるのだ。殖産を振興し、生産性を向上させる。まず米麦の生産量をふやすために作り方を工夫する。次に荒地を開墾して田畑をふやす。しかしこれだけでは限界がある。そこで必要なのが副業の導入である。副収入があれば農民の生活は安定するので、高率の貢租収納を期待することもできる。他の藩でも副収入を藩の財政に役立てている例は多い。木材を売ったり、魚を売ったり、あるいは養蚕、紅花、木工芸品など……、藩によっては海外貿易で儲けているところもあると聞く」

江戸で見聞を集めているだけあって修身の知識はひろ

かった。

最長老の松前久信が質問をした。

「殿はその副業として何をお考えか」

「製茶と密柑はどうかと思う」

修身は直ちに答えた。

入国以来修身が近習を引きつれて領内視察にかけまわっているという情報は家老たちの耳にも入っている。だが最初のうちは江戸育ちの若い藩主に何ができるかという眼で見ていた。しかし視察が一日だけで終らずに二日にも三日にも及び、十日もかけて殆んど村々を見終ったと聞いたとき、老いた松前久信の気持の中には実はこの若い藩主を受け入れようとする気持が少しずつ動きはじめてきているのであった。七十才をとうに越した彼は高柳玄宰たちのように立場や権威にこだわる心境をすでに卒業していたのかもしれない。だから彼から見ると修身を中心とする若者の集団は、ライバルではなかった。むしろ自分の孫たちのように眼に映る。その若者たちの再建計画へのひたむきな姿を見てみると、老いた松前久信の中にはこれを助けて成功させてやりたいという、人生最後の老いの情熱が湧きあがってきているのであった。修身は国元に入るとすぐ、近習の中から若い仕置家老を二人新しく任命していた。坂東孫三郎と各務伊織の二人である。国元のこととは国元にいる者に任せないとうまくいかない。しかし高柳玄宰たちが反抗的な態度を示し

ているのでは別の人間を登用するより外なかったからである。

したがって茶の木の栽培の具体的計画案の作成に当っては、長尾真十郎の他にこの若い仕置家老二人が加わっていたのであるが、それに更に最長老の家老松前久信がこうして接近してきてくれたことは、なんといっても心強かった。修身は

「見たところ美春の土は、黒くて、肥えていて、茶と密柑に適している。それに美春は温暖じゃ。日光は降るように豊かで、おびただしい……」

「そうでございますとも……」

松前久信は他の家老の手前明確な即答はされたが、言葉の調子は明らかに修身の意向を肯定していた。その松前久信を高柳玄宰は

「余計なことを言う爺いだ……」

と言わんばかりの視線で睨んでいたが、しかし沈黙を守ったままだった。

いろいろな紆余曲折はあったが、とにかく美春藩の殖産振興の第一歩はこうして踏み出されたのであった。

今後十五年間の収益予定が綿密にたてられた。

一、茶の木 二〇〇万本

その利益 三万六五五両

一、密柑柑 五〇万本

その利益 六三〇〇両

茶の木を二百万本植え、それを製茶して売れば十五年後には利益が三万六五五両あがり、密柑を五十万本植えてその果実を売れば、六三〇〇両の利益があがる。これを合計すると十五年後には茶と密柑で四万二千八百六十五両の利益があがるわけで、これを二十両を百石の割合で換算してみると約二十万石になる。現在の知行二十万石にこの茶と密柑の収益二十万石を加えれば、これを実質四十万石になる計算である。

「茶の木二百万本の大きい割り振りであるが、二百万本を二つに大別する。百万本はすすきが原を開墾してここに植え、できたら日本一の茶園にしたい。あと残り百万本は既存の畑や空き地に植えたらどうだろうと思う」修身が大まかな考えをのべると

「結構な割り振りでございましょう」

松前久信が答え、その言葉を受けるように若い各務伊織が

「その土地につきましてはすでに調査して細かな計算ができております。まず百姓たちの土地に植えさせます。植えるところは畑でも、庭でも、空地でも、どこでもかまいません。一戸に四十本ずつ植えさせます。茶の木は灌木でそれほど大きい木ではありませんから、四十本ぐ

らいどの百姓だって植えられます。百姓は一万六千戸ありますから、これだけでも六十四万本が植ええられる勘定になります」

明確な説明であった。百万本の茶の木と言い出してはみたものの、どこにどうやって植えるのかと修身には見当もつかなかったが、こうして合理的な数字を聞くと「なるほど、塵も積れば山と言うが、四十本は僅かでも、数が集まるとたいしたものになるのだな」修身の中に実現への自信が湧いてきた。

「同じようにして領内の空き地へ二十六万五千本を植えます。空き地の広さは八百二十三町と調べてありますから充分この本数が植えられます。次に家中藩土のお屋敷へ十五本ずつ植えてこれが七万五千本、また町人たちの屋敷へも十本ずつ植えさせて一万本、それに神社仏閣の境内へも一万本植わります。これらを合計いたしますと、ちょうど百万本。すすきが原の百万本と合すれば、二百万本でございます」

家中藩土や町人の屋敷、それに神社仏閣の境内にまで細かく植えるというような考え方は、裏で松前久信の知恵が働いていなければおそらく考えつかない策であった。なるほど、土地はいろいろな所にあるものだ。

だが修身は

「そう、うまくいくかな」

一旦わざと意地悪にそう聞いてみた。すると松前久信

がすかさず

「うまくいなくて、どういたしましょう。いや、絶対うまくいかせます」

老いた顔に青筋をたてて、力みかえるのであった。

「わかった、よろしく頼むぞ」

「お言葉、おそれ多いかぎりでございます。だがこれを成功させるのには、一つ条件がございます」

「なんだ、それは……？」

「それは百姓たちが自発的に木を植え、本気になって育てていくことでございます。本気で百姓たちがやらないう限り、成功いたしません」

〔三〕

「百姓が本気で木を植えない限り成功しません」

という言葉聞いたとき、修身はある光景を思い出していた。すずきが原からの帰りみち、数珠つなぎになって郡奉行所へ連れていかれる百姓たちのあわれな姿であった。その列からとび出してきて

『お願いでございます。お助けください』

必死で哀願した若者の姿、いまだに修身の両眼に焼きついていて離れない。修身を見上げた射るような視線は、自分が罪をのがれたいというのではない、年貢が納められないということだけで水牢に抛りこまれる非を訴えているひたむきな眼であった。

修身は水牢というものを直接見たことはない。しかし想像はできた。格子のはまった狭く暗い牢屋の中に、腹まで水につかって一日も二日も投げこまれているのは、身の毛もよだつ責苦にちがいない。たとえ春だとはいえ、身体は芯の芯まで冷えきってしまうであろう。百姓たちにこんな仕打ちをしておいて、自発性が生れるはずがない。本気になるはずがない。

「水牢の罰をやめよう」

修身は決心した。

「えっ、何とおおせられました」

松前久信は耳を疑い

「そんなことは許されません」

即座に強く否定した。

「百姓を甘やかすばかりでございます。奴らはますますいい気になって納税の義務を怠ります」

松前久信は淡紙色の四角な顔を修身の方に突き出し、自分がこれに反対しなければ美春藩の秩序は総崩れになってしまうといわんばかりの勢いで言った。

「でも百姓だって人間ではないか。水牢に入れば、年貢を納めようという気が起こってくるのか」

「百姓はもともと、ずるくて、こすっからく、年貢を値切ることばかりを考えているものです」

「そう仕向けてきたから、そうなったのだ」

「いえ、それが百姓の本性です。だから百姓は絞れば

絞るほど、いいのです」

長年美春藩はそうした考え方でやってきた、その方法が一番成績をあげてきたという確信がある、殿は江戸にいて国元の実態がわからないからそんなことを考えるのだ——松前久信はそう言おうとしたが、しかし修身の決心の固さの前に、そのまま言葉をつぐんでしまった。

修身は領内視察の日のことを更に思いつづけていた。数珠つなぎの百姓たちと別れてから、ある一軒の農家に立寄った。土間で腰の曲った老婆が一人、夕餉の仕度しに竈の火をくべていたが、田畑の様子や年貢のことなどを聞くと

「お代官さまはきびしい方でござえますので、年貢の取り立てがやかましくて難儀しております。今日もこの部落から爺が泣き叫びながら水牢に引っぱられていったばかりでござえます。だが百姓を水牢に入れたって米がたくさんとれるようになるわけではなし、百姓は怠けて年貢を納めないのでは決してござえませぬ」

老婆はやに目をしばたかせ

「けれど百姓は信用してもらえませぬ。ただ絞られるだけでござえます。だがそれでは百姓は動きませぬ。百姓は働くのが嫌ではありませぬ。働きたいのです。しかし働き甲斐のあるように働きたい。若い者だって年寄りだって同じことですじゃ……」

老婆は相手は藩主であるなどと、つゆ知らない。欠け

茶碗で茶を出しながら、ぼつり、ぼつりと喋ったのであった。

修身の決意は固かった。百姓に本気で茶の木を植えてもらうためには、百姓を信用するほかに手はない。

植樹計画ができ上ると直ちに領民に発表した。なにせ二百万本の茶の木と、五十万本の密柑という、龐大な木を植えるのである。それも百姓だけが植えるのではない。武士も町人も、神主も僧侶も植えるのである。植樹計画を領内の隅々にまで徹底させなければならない。

村の辻々に立札を立てて大綱を示すと同時に、細かい計画内容を文書で、郡奉行、代官、名主などに送り、領民に伝えさせた。

それのみか郡奉行所での説明会には修身自らも出掛けていったのである。百姓たちへの説明に藩主自身が出向くなどということは前代未聞のことである。しかしその前代未聞のことをやらなければ計画は達成できないのである。

郡奉行からの説明が終ると、引きつづいて修身が

「茶の木、密柑の木を植えれば、一本につき二十文の奨励金を与える」

と発表した。植樹がいくら百姓の利益になるといって、当座の収入になるのではない。したがって五年、十年先の利益では意欲も鈍ろうと、わずかではあるが奨励金を

編集後記

本誌を主宰する大和禎人氏の「雲南のピエロ」出版記念会が去る九月二十九日、池袋のバンケットホールで開かれた。同書は氏の九冊目の選集である。

当日は装幀者の牧野宗則氏、栄光出版の石澤三郎氏はじめ、氏の旧友、教え子、本誌同人、維持会員などに出席していただき盛会であった。

五年まえに、やはり大和氏の出版記念会があった。散会后数人で立ち寄ったコーヒー店で、もう一度同人誌をやろうという話が出た。「作家群」の残党に新メンバーを加えての企画で、「まんじ」と誌名が決ったのはだいぶあとであった。

創刊号より数えて十七号である。本誌もやがて五周年を迎えようとしている。そして「まんじだより」は五十号が発行されている。

私は同人誌発行の意義とか、自分とのかかわりについて、ふと考える時がある。私は「まんじ」にいい作品を掲載して、残していきたいなあ、と絶えず想っている。

その想いはたいへん深く、しかも継続的である。「まんじ」の存在意義はこのあたりにあろうと感じている。

「原稿締切り」は、ともすれば逃避的で、怠惰に流され易いわれわれの心境に、厳しく警鐘を打ちならしているのだと考えたい。

(も)

「まんじ」第十七号

昭和六十年十一月一日発行 (非売)

編集 大和 禎人

印刷 (有) 加藤 清耕 社
千代田区神田神保町三十一
〒100-5743

発行 「作家群」 編集部
(まんじ)

〒100-1019 東京・千代田区神田駿河台二丁目九
番〇三(二九三) 〇〇九四 柴田方
郵便振替口座 東京二一九〇八一五